

2021年4月 関西大学審査学位論文

# 『三国志演義』二十四卷系諸本の研究

関西大学大学院

文学研究科

陳駿千

# 目次

序章	2
第1節 系統分けの研究史	2
第2節 二十四卷系諸本	5
第3節 「誤り」から見る版本関係	7
第一章 夏振宇本	11
第1節 基本情報・保存状態	11
第2節 夏振宇本の成立時期	12
第3節 吉田意安と夏振宇本	15
第4節 夏振宇本と周曰校本との関係	20
付考 陳翔華編『日本蔵夏振宇本三国志傳通俗演義』影印本について	31
付表1 「吉家氏蔵」印の使用状況	34
付表2 夏振宇本正誤表	37
第二章 夷白堂本	52
第1節 基本情報・保存状態	52
第2節 旧蔵者小野清について	54
第3節 日本に於ける夷白堂の流伝	78
第4節 二十四卷系における夷白堂本の位置づけ	88
付表1 夷白堂本正誤表	98
付表2 夷白堂本頁数一覧表	123
第三章 朝鮮銅活字本	153
第1節 基本状況	153
第2節 朝鮮銅活字本の誤りの全体像	154
第3節 「四家寨」と「呉起」の検証	156
第4節 銅活字本の成立過程	159
付表 朝鮮銅活字本正誤表	163
第四章 いわゆる嘉靖壬午本の成立時期に関する疑問点	165
第1節 嘉靖本の独自修正	165
第2節 関羽信仰をめぐる問題点	170
結論	173
参考文献	178
初出一覧	182

## 序章

長編白話小説『三国志演義』(以下、『演義』)は、元末明初の羅貫中の作とされているが、その原本は現存しておらず、現在見られるテキストはすべて明代中後期以降のものである。『演義』は、成立してからの数百年間、広く愛読され、多くの書坊によって様々な「版本」<sup>1</sup>が出版され、現存しているものだけでも四十種類以上に及ぶ。

清朝以降、毛宗崗批評本は次第に主流となり、現在では通行本となっている。一方、『演義』版本の進化は毛宗崗本にとどまらず、近年では、周文業氏の文史対照本(中州古籍出版社、2013年)、許盤星氏の地図本(北方文芸出版社、2013年)、沈伯俊氏の批評本(東方出版中心、2018年)、新彙校本(三秦出版社、2020年)なども世に問われる<sup>2</sup>。これらの新版本は、毛宗崗本のみならず、それ以前の諸版本をも参照して校勘作業を行ったものである。

『演義』版本の研究においては、明刊諸本を分類し、それぞれの相互関係を検証した上で、その系譜図を描くため、数多くの研究が行われてきたが<sup>3</sup>、現在に至るまで、定説にたどり着くものが少ない。近年、中川諭《1998》が唱える二十四卷系、二十卷繁本系、二十卷簡本系という三系統分類<sup>4</sup>は広く受け入れられ、通説となりつつあるが、三系統間の相互関係や、同じ系統に属する諸本の相互関係などをめぐっては、未だ解決されていない問題が多く残されている。本研究では、三系統の一つである「二十四卷系」に属する「夏振宇本」、「夷白堂本」、「朝鮮銅活字本」を研究対象とし、これら諸本の版本学上の価値を確認し、二十四卷系諸本の系譜図に関する説を提起する。

### 第1節 系統分けの研究史

『演義』版本の研究は、鄭振鐸(1934)に発端する。鄭氏は、『演義』には複数種の版本が存在することを指摘し、嘉靖壬午序本をすべての版本の総祖本としている。

鄭説への反発として、小川環樹(1964)・周紹良(1967)は、関羽の架空の息子である関索に注目し、柳存仁(1976)は福建省建陽の出版業を取り上げ、それぞれ『演義』の版本を論じている。本格的な『演義』版本の研究の始まりである<sup>5</sup>。

<sup>1</sup> 現存の『三国志演義』は、木刻本が主流であるものの、活字本や、石印本などの形態も存在している。便宜を図るため、本研究ではこれらの印刷形態に関わらず、一律にして「版本」と称す。したがって、本研究で使うの「版本」という語彙は、同じく作品を内容とする異なる書物のことを指す。すなわち、現代中国語の「版本(儿)」あるいは英語の「edition」に相当するもので、木刻本のみを指すものではない。

<sup>2</sup> 余談であるが、諸氏の成果を踏まえ、新たな批評本を作ることが、筆者の目標の一つである。

<sup>3</sup> その代表的な著書には、金文京《1993》、魏安《1996》、中川諭《1998》、劉世徳《2010》、井口千雪《2016》などが挙げられる。

<sup>4</sup> その命名の通り、二十四卷または十二卷から構成される版本は二十四卷系に、二十卷または十卷から構成される版本は二十卷系に属す。また、文章の繁簡や特定のプロットの有無などの特徴によって、二十卷系は二十卷繁本系と二十卷簡本系に分かれる。三系統及びその相互関係について、中川著書以外に、井口千雪《2016》にも詳しく論じられている。

<sup>5</sup> 詳しくは中川諭《1998》4～18頁参照。

金文京(1989)(1993)は、『演義』に見られる二種類の関索故事を指摘し、『花関索伝』と一致する部分を「花関索故事」、一致しない部分を「関索故事」と名付け、「花関索/関索」及び出版地の「江南/福建」を基準に、以下に示す五系統説を提起している。

- (1) 非関索・花関索系統(葉逢春本、嘉靖本): 関索故事・花関索故事のいずれも含まれていない版本。
- (2) 福建本花関索系統(余象斗本など): 花関索故事があつて関索故事がない、福建で出版された版本。
- (3) 福建本関索系統(熊清波本など): 関索故事があつて花関索故事がない、福建で出版された版本。
- (4) 江南本関索系統(周日校本など): 関索故事があつて花関索故事がない、江南地方で出版された版本。
- (5) 関索・花関索系統(三国水滸合刻本): 関索故事と花関索故事両方が含まれている版本。

金氏の五系統説は、現在通行の三系統説の基礎となっている。しかし、関索・花関索故事は『演義』成立した後に新たに挿入された物語であり、人為的に改変しやすいものである。そのため、関索・花関索故事の有無は必ずしも版本分類の基準にふさわしくない。また、(1)の葉逢春本・嘉靖本と(5)の合刻本は、実質的に分類されていないという課題も残る。

上田望(1990)は、字句の異同を比較し、六系統説を提起した<sup>6</sup>。

I、嘉靖本

II、周日校本、夷白堂本、夏振宇本

II'、呉観明本、緑蔭堂本、藜光楼本

III、楊美生本、天理本、喬山堂本、笈郵齋本、朱鼎臣本、誠徳堂本、忠正堂本、黄正甫本

IV、種徳堂本、余象斗本、評林本、聯輝堂本、楊閩齋本、鄭世容本、湯賓尹本

V、雄飛館本

VI、毛宗崗本

上田氏の六系統は、金氏の五系統とは着目点から分類基準まで全く異なっているものの、結論には大差がない。言い換えれば、両者の分類法は互いに補って、より確固たるものとなっている。ただし、金氏の五系統と似たように、上田氏の六系統の内、I・V・VIの版本は実質的に分類されていない。また、葉逢春本を扱っていないという点も目立つ。

上田氏の説を受け、魏安(1996)は、34種類の版本を調査し、特定の脱文の有無を依拠に、極めて複雑な四系統説を提起した<sup>7</sup>。

AB 系統

<sup>6</sup> 上田望(1990)153～154頁より抜粋。

<sup>7</sup> 魏安(1996)68～70頁の分類図により、一部省略している。

- 上海殘葉
- A 支
  - 嘉靖本
  - 滿譯本
- B 支
  - B0 分支
    - 夏振宇本
    - B0a
      - 周曰校本、鄭以禎本、夷白堂本
  - B1 分支
    - B1a
      - 英雄譜本
    - B1b
      - 李卓吾本、寶翰樓本、鐘伯敬本
      - B1b'
        - 遺香堂本、李笠翁本
      - B1b''
        - 毛宗崗本
- CD 系統
- C 支
  - C0 分支
    - 葉逢春本
  - C1 分支
    - 雙峰堂本、評林本、種德堂本
    - C1a
      - 楊閩齋本、聯輝堂本
    - C1b
      - 湯賓尹本
- D 支
  - D0 分支
  - D1 分支
    - 朱鼎臣本、黃正甫本、誠德堂本、喬山堂本、忠正堂本、天理本
    - D1a
      - 藜光堂本、二酉堂本、哈佛本、楊美生本、魏氏本、魏瑪本、北京本

魏氏の四系統は、金氏の五系統や上田氏の六系統とはまた異なる分類基準に従うが、結論としては、分類の結果はほぼ一致している。また、葉逢春本、英雄譜本、毛宗崗本を分類することによって、まだ分類されていない版本は、嘉靖本(及びその満洲語訳本)のみとなる。

上記の三氏は、それぞれ異なる分類基準に従って系統分けを試みたが、その結論の相似性は驚異的に高い。すなわち、どのような基準を採っても、『演義』諸本にはいくつかの系統が確実に存在している。そこで、中川論《1998》は、諸氏の説を取り入れつつ、最もシンプルで直観的な分類法によって、三系統説を提起する。

周知の通り、『演義』は240の「則」<sup>8</sup>から構成されており、それぞれにタイトルである「則題」がついている。三系統では、これらの則が何巻に分けられるかによって、諸本を分類する。具体的には、240則を12巻または24巻に分ける版本を「二十四巻系」、10巻または20巻に分ける版本を「二十巻系」とする。李卓吾本や毛宗崗本などの、240則が120回に合併され、巻に分けられていない版本については、その祖本が属する「二十四巻系」に分類する。また、文章の繁簡によって、「二十巻系」を「二十巻繁本系」と「二十巻簡本系」に分ける。中川氏は進んで、二十巻簡本系は、二十巻繁本系の文章を簡略化したものではなく、二十巻繁本系と別々に成立した独立の系統であることを説く。したがって、二十四巻系、二十巻繁本系、二十巻簡本系は互いに並行する三系統となっている。

三系統と先行諸説との関係は以下のとおりである。

三系統(中川)	二十四巻系	二十巻繁本系	二十巻簡本系
五系統(金)	江南本花関索系統、 関索・花関索系統、 嘉靖本	福建本関索系統、 葉逢春本	福建本花関索系統
六系統(上田)	I、II、II'、V、VI	IV	III
四系統(魏)	AB 系統	C 支	D 支

三系統は、その簡潔さ、分類の便利さによって、多くの研究者に取り入れられ、通説となりつつある。本研究では、三系統の内の一つ、二十四巻系を研究対象とする。

## 第2節 二十四巻系諸本

二十四巻系は、主に明代中後期、特に万暦年間、江南地方で出版された版本群である。周知の通り、明代には、南京と建陽は出版業の二大中心であり、書籍印刷・販売で競争を繰り返していた。『三国志演義』の出版に関しては、建陽は量、南京は質に、それぞれ力を注いでいた<sup>9</sup>。南京を中心とした江南地方で出版された『演義』二十四巻系諸本は、版型が大きく<sup>10</sup>、印刷の質が高い。また、建陽本の「上図下文」の形式に対し、江南本には挿絵のない版本が多く<sup>11</sup>、または見開き一枚の大きな挿絵を入れる版本もある<sup>12</sup>。

二十四巻系諸本には、240則を12巻または24巻に分ける前期型(狭義的二十四巻系)と、巻を分けず、2則を1回に合併して120回にする後期型(百二十回系)がある。本研究で扱う「二十四巻系諸本」は、前期型すなわち狭義的二十四巻系を指す。以下、諸本の概要を紹介する

<sup>8</sup> または「段」。ちなみに、夷白堂本では、いくつかの則が合併され、240則ではない。金文京(2020)参照。

<sup>9</sup> 塗秀虹《2017》参照。

<sup>10</sup> 袖珍本である夷白堂本を除く。

<sup>11</sup> 嘉靖本、夏振宇本、夷白堂本など。

<sup>12</sup> 周日校諸本、李卓吾諸本など。

## 【嘉靖本】『三國志通俗演義』24卷

嘉靖壬午(元年、1522)序刊本 半葉9行 行17字

所蔵: 国立北京図書館(現台北故宮博物院か)・上海図書館・甘肅省図書館・天津市図書館・天津市人民図書館・南京図書館・蘭州図書館・御茶ノ水図書館成篋堂文庫(徳富蘇峰旧蔵)・アメリカ国会図書館・イエール大学

影印: 『古本小説集成』第3集(上海古籍出版社、1992年)

## 【周日校本】『新刊校正古本大字音釋三國志通俗演義』12卷

万曆辛卯(十九年、1591)序刊本(乙本・丙本) 半葉13行 行26字(朝鮮本は24字)

所蔵: (甲本)中国社会科学院(巻6, 7, 9)

(乙本)イエール大学、北京大学(巻1, 2, 6, 9-12)

(丙本)名古屋市蓬左文庫(駿河御本・尾張徳川家旧蔵)、宮城県図書館伊達文庫(巻9-12)、京都産業大学小川文庫(巻1, 2, 4)、内閣文庫

(朝鮮覆刻甲本)鮮文大学中韓翻訳文献研究所(巻1-4, 8, 9, 11, 12)、ソール大学奎章閣(巻2-20)、嶺南大学(巻6, 11)、東国大学(巻5)、林熒澤氏(巻4)、山氣李謙魯氏(巻12)、金榮鎮氏(巻12)

影印: (丙本)『古本小説集成』第3集(上海古籍出版社、1994年)、『明清善本小説叢刊』(天一出版社、1985)<sup>14</sup>、陳翔華主編『三國志演義古版叢刊続輯』(中華全国図書館文献微縮複製中心、2005年)

(朝鮮本)朴在淵・金敏智編『新刊校正古本大字音釋三國志通俗演義』(学古房、2010年)、孫遜・朴在淵・潘建國編『朝鮮所刊中國珍本小説叢刊』(上海古籍出版社、2014年)

## 【夏振宇本】『新刻校正古本大字音釋三國志通俗演義』12卷

刊行年不明 半葉12行 行25字

所蔵: 名古屋市蓬左文庫(尾張徳川家旧蔵)

影印: 陳翔華主編『三國志演義古版叢刊続輯』(中華全国図書館文献微縮複製中心、2005年)、陳翔華主編『三國志演義古版匯集』(中国国家図書館出版社、2010年)

## 【夷白堂本】『新鐫通俗演義三國志傳』24卷

刊行年不明 半葉9行 行17字

<sup>13</sup> 中川諭《1998》19～20頁より抜粋の上、近年の新情報を補ったもの。

<sup>14</sup> 天一影印本では、周日校本の書名の「新刊校正古本大字音釋三國志通俗演義」が「新刻」にされており、たまたま夏振宇本の書名になっているが、誤植である。

所蔵:慶應義塾大学(巻2, 4, 5-11, 14-24、小野清旧蔵)

影印:慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション<sup>15</sup>

【朝鮮銅活字本】『三國志通俗演義』残1巻

刊行年不明 半葉11行 行20字

所蔵:李亮氏

影印:朴在淵・金瑛校注『三國志通俗演義(銅活字本)』(学古房、2010年)、孫遜・朴在淵・潘建國編『朝鮮所刊中國珍本小説叢刊』(上海古籍出版社、2014年)

諸本の版本的価値について、鄭振鐸(1934)の影響を受け、嘉靖本が最も重要視され、総祖本としての位置づけが疑われるつつも、二十四巻系の代表格とされている。

「万曆辛卯(十九年、1591)」序のある周日校本は、二十四巻系において唯一刊行年が確定されている版本として、重要な位置を占めている。近年、甲・乙・丙・朝鮮本という四種類の周日校本に関する議論が盛んになり、万曆十九年に成立した周日校本は乙本であると判明され、甲本はその先の万曆十年代、丙本はその後の万曆二十年代のものであろうと推定されている<sup>16</sup>。この結論を受け、既存説への修正を図る研究も発表されている<sup>17</sup>。

一方、夏振宇本・夷白堂本は特に注目されず、嘉靖本や周日校本ほどの価値はないとされている。また、近年新発見の朝鮮銅活字本も、一時注目を浴びたが、十分に検証されずに放置されてきた<sup>18</sup>。本研究は、この3つの比較的マイナーな版本を研究対象とし、それぞれの版本学上の価値の再認識を図る。

夏振宇本と夷白堂本は明刊本でありながら、前者は名古屋市蓬左文庫、後者は慶應義塾大学にのみ所蔵されている。本研究では、それぞれの旧蔵者および日本における流伝の経緯についても検証を行う。

### 第3節 「誤り」から見る版本関係

『三國志演義』という百万字にも及ぶ長編作品を検証するのに、少数の個例では信憑性のある結論に導くことができない。複数の版本の全体に対する比較を行い、ある程度全体像をつかんだ後、さらに相当数の個例を細かく検討することによって、より正確な結論に辿り着くことができるであろう。

しかし、全体に対する対照と言っても、むやみに全ての字句を対照すれば、莫大な時間と労力を費やすだけでなく、大量の「意味のない相違点」に呑み込まれ、価値のある手がかりが却

<sup>15</sup> <https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/kanseki/17-27-10-9>

<sup>16</sup> 劉世徳(2002)、中川論(2011b)(2012)、上原究一(2011)参照。

<sup>17</sup> 中川論(2011a)(2013)など。

<sup>18</sup> 夏振宇本・夷白堂本・朝鮮銅活字本に関する研究史は、各章初頭に詳述する。

って見にくくなる恐れもある。例えば、第1則「祭天地桃園結義」には、以下の文がある。

夏	竇武陳蕃預謀誅之，機事不密，反被曹節王甫所害。
周朝	○○○○○○○○○，○謀○○，○○○○○○○○○。

周朝本では「機謀」に作るところを、夏振宇本では「機事」に作る。しかし、「機謀」と「機事」とは同義語であり、どちらにしても意味が通る。たとえ二つの版本ともに「機謀」に作るとしても、版本上近い関係にあるとはいえない。

このような、抄写或いは製版の際に、職人が、自身の習慣によって、ある言葉を同義の他の言葉に変えることは、むしろ日常茶飯事である<sup>19</sup>。たとえば、夏振宇本・周朝本・嘉靖本それぞれの「祭天地桃園結義」則を対照すると、相違点を42箇所発見でき、その大部分は「意味のない相違点」と言わざるをえない。単純計算をすると、夏振宇本・周朝本・嘉靖本のみでも、相違点の数は一万を超える。現存する『三国志演義』の版本は40種近くあり、その組み合わせを計算すれば、相違点の数は天文学的数字となる<sup>20</sup>。何らかの方法で、そのなかから「意味のある相違点」を見出し、それ以外を排除することができなければ、やがて情報に溺れ、真実から遠ざかる一方であろう。

さて、どのようなものが「意味のある相違点」と言えるか。一つの試みとして、「誤りに関わる相違点」が考えられよう。例えば、二つの版本のうち、一つの版本のテキストには誤りが認められ、もう一方は正確である場合、正確なほうが修正後のテキストであるか、あるいは二つの版本がそれぞれ異なるルーツを継承しているか、様々な可能性が考えられる。また、二つの版本に同じような誤りが認められる場合、同じ祖本の誤りを継承していると考えられ、版本上近い関係にある可能性が高くなる。その意味では、誤りを統計して分析すれば、「意味のある相違点」を多く発見できるはずである。

周知の通り、『三国志演義』諸本には、誤字・脱字・衍字などの誤りが多く混入されている。

金文京(2012)は朝鮮銅活字本を検証する際、「刊本以前の写本の段階においては、言うまでもなく、書写のたびごとに、無意識の書き間違いや恣意的な書き改めによって、無意味な文字の異同が発生する。そのため刊行される段階でも、底本として使用する写本がまちまちであるため、テキスト間に内容とは無関係な文字の異同が生じることになるのである。内容の異同については、このようなバラバラな現象は生じないのである」と指摘しているが、このような現象は銅活字本に限るものではなく、いずれの版本においても存在するのであろう。これらの「無意味な文字の異同」は、翻刻者の意識的な改変によるものではなく、翻刻者の不注意か誤解に基づいて発生したものであり、それらが混入された経緯を分析することが、版本関係を探る糸口になりう

<sup>19</sup> この点について、筆者には実体験がある。2017年、筆者は慶應義塾大学図書館において、夷白堂本を調査し、約2万字を抄写した。抄写の際、必ず原文と同じように書くように細心の注意を払っていたが、後に確認したところ、やはり自身の習慣によって、数文字を無意識に書き換えた箇所が発見された。ましてや、明代の抄写工・製版工には、原文のまま複製することを追求する意味は特になく、むしろ恣意的に文章を書き換えることはそれほど不思議ではなかったはず。

<sup>20</sup> 単純計算すると、千億単位となり、人力で検証することは不可能である。

る。

今回用いる方法を簡潔にまとめると、以下のようになる。まず、版本のテキストを点検し、誤りを見出す。つづいて、それらを他の版本のテキストと対照することによって、誤りがどの段階で、どのように混入されたかを推測する。さらに、他の版本には同じ誤りが存在するか否かを確認し、これらの版本の成立と、誤り混入との前後関係を探る。これらを手がかりにして、各版本の系統づけや成立の先後を推定する。

まず、本研究の主旨から少し離れるが、この方法論を説明するために、典型的な例を一つ挙げたい。

第一九二則「陸遜石亭破曹休」

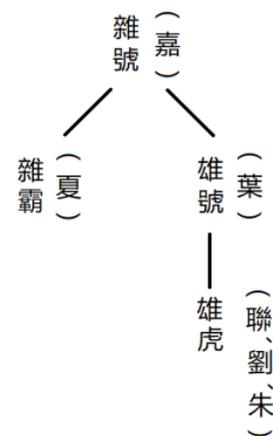
系統	版本	テキスト
二十四卷系	夏振宇	乃太原人 姓郝名昭字伯道 也 見為 <b>雜霸</b> 將軍
	嘉靖	乃太原人 姓霍名昭字伯道 也 見為 <b>雜號</b> 將軍
二十卷簡本系	朱鼎臣	乃太宗人 姓郝名昭字伯道 見為 <b>雄虎</b> 將軍
	劉龍田	乃太原人 姓郝名昭字伯道 見為 <b>雄虎</b> 將軍
二十卷繁本系	聯輝堂	乃太原人也姓郝名昭字伯道 長七尺善射見為 <b>雄虎</b> 將軍
	葉逢春	乃太原人也姓郝名昭字伯道是也 尺善射見為 <b>雄號</b> 將軍

このテキストにおいては、金文京氏が指摘する「無意味な文字の異同」がいくつか見られる。ここで注目したいのは、郝昭の官職名の表記である。葉逢春本には「**雄號**將軍」、聯輝堂本・劉龍田本・朱鼎臣本には「**雄虎**將軍」、嘉靖本には「**雜號**將軍」、夏振宇本には「**雜霸**將軍」と、4つのグループに分かれるが、そのグループ分けは「二十四卷系、二十卷繁本系、二十卷簡本系」という三系統には一致しない。

正史『三国志』卷三「魏書・明帝紀」裴松之注には、郝昭について、以下の記述がある。

昭字伯道、太原人、為人雄壯、少入軍為部曲督、數有戰功、為**雜號**將軍、遂鎮守河西十餘年、民夷畏服。

すなわち、「雜號將軍」に作る嘉靖本の表記が正史に一致するものであり、他の3つのグループがそれぞれ似たような字になっている。詳しく言うと、「雄」は「雜」の誤り、「虎」と「霸」はともに「號」の誤り<sup>21</sup>である。それぞれの誤りの混入した過程を整理すると、右の図になる。



<sup>21</sup> ちなみに、「霸」と「號」の字形は似ていない。「號」が「霸」となる経緯については、さらなる考証を要すると思われる。

このように、誤りの生じた経緯をたどることによって、版本関係を推定するための手がかりを得ることができる。ただし、誤りの混入は偶発的な可能性も含む以上、一箇所だけの例をもって結論を下すべきものではない。諸本における一つの版本の位置づけを推定するには、その版本に混入されたすべての誤りを検証しなければならない。その中から代表的な例を選び出し、その共通性を帰納することによって、より確実性のある結論へたどり着くことができるのであろう。

本研究で使う『演義』諸本は、以下に記す。

#### 二十四卷系

【嘉靖本】古本小説集成編輯委員会編『古本小説集成』第三輯(上海古籍出版社、1992年)影印本

【周朝本】朴在淵・金敏智編『新刊校正古本大字音釋三國志通俗演義』(学古房、2010年)影印本

【周蓬本】名古屋市蓬左文庫蔵本

【夏振宇本】名古屋市蓬左文庫蔵本

【夷白堂本】慶應義塾大学蔵本

【朝鮮銅活字本】孫遜・朴在淵・潘建國編『朝鮮所刊中國珍本小説叢刊』(上海古籍出版社、2014年)影印本

#### 二十卷繁本系

【葉逢春本】井上泰山編『三国志通俗演義史傳』(関西大学出版部、1997・1998年)影印本

【余象斗本】陳翔華編『日徳英蔵余象斗刊本批評三国志傳』(中国国家図書館出版社、2013年)影印本

【聯輝堂本】名古屋市蓬左文庫蔵本

#### 二十卷簡本系

【劉龍田本】東奥義塾高等学校蔵本<sup>22</sup>

【楊美生本】大谷大学神田コレクション蔵本

---

<sup>22</sup>この版本に使われていた版木は、書肆の喬山堂を経営していた劉龍田によって作られたものであり、後に部分的に改変され、「笈郵齋本」の出版にも使われていた。すなわち、笈郵齋本は、厳密的に言うと劉龍田本とはまた異なる版本である。このような、既存の版木を部分的に改刻するような現象は、大塚秀高(2014)で論じられている。また、劉世徳・陳慶浩・石昌渝編『古本小説叢刊』第二輯(中華書局、一九九一年)所収影印本は笈郵齋本である。筆者は、2019年10月27日～11月1日に、東奥義塾高等学校(青森県弘前市)所蔵の劉龍田本を調査し、全ページを撮影した。本研究で扱う劉龍田本は、東奥義塾蔵本による。

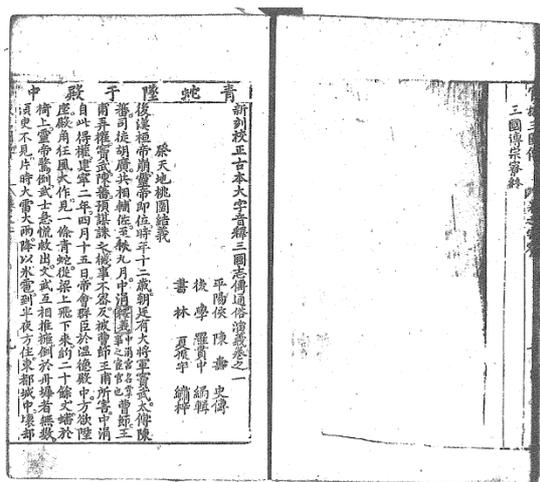
# 第一章 夏振宇本

本章では、夏振宇本について検証する。夏振宇本は、本研究の主な研究対象である3つの版本の内、書物としての質が最も精巧で、保存状況が最もよい版本である。また、この本は日本において、大大名家や高級知識人に収蔵されていた経緯も興味深いものである。

## 第1節 基本情報・保存状態

まずは、夏振宇本の基本状況及び保存状態を確認する。明夏振宇刊『新刻校正古本大字音釈三国志伝通俗演義』十二巻、現在知られる所蔵先は、名古屋市蓬左文庫のみで、天下の孤本である。十二巻はすべて現存しており、一卷一冊、計12冊となっている。

夏振宇本は、半葉約216mm×122mm、版框約169mm×111mm という大型本である。版式は、半葉に12行、行に25字、版心に「官板三國傳」、単黒魚尾(たまに単白魚尾)である。



夏振宇本には、挿絵がなく、上部に数文字の提要がある。上部に提要が付いている形式は、二十四巻系諸本においては夏振宇本のみである。その背景には、主に福建で出版されていた二十巻系諸本によく見られる「上図下文」の形式に影響されていた可能性は否定できない。

また、この提要は、本来、半葉の内容全体を統括するべきものの、各半葉の最初の二行からキーワードを抽出するだけという杜撰なものが多く見られる。この点から見ると、版心では「官板」と記されているものの、夏振宇本自体はやはり坊刻本であり、官刻本ではない<sup>23</sup>。

巻首には、嘉靖壬子(三十一年、1552)修髯子序、弘治甲寅(七年、1494)庸愚子序、「三国志伝宗僚姓氏総目」がある。巻一首葉には、白文方印「吉家氏蔵」、朱文方印「張府内庫図書」、朱文方印「蓬左文庫」が捺され、巻二～十二首葉には、「張府内庫図書」、「蓬左文庫」の印がある。

刊行者について、諸巻巻首に「書林 夏振宇 繡梓」とあり、巻三のみ「書林 前溪堂 繡梓」とある。夏振宇という人物に関する資料が少ないため、出版の経緯、または前溪堂との関係についてはわかっていない<sup>24</sup>。ただ、版式・分巻形式・序文などの点から見ると、江南地方に出版された周日校本などに近いことから、「江南本」の一種ではないかと推測される。

<sup>23</sup> そもそも、夏振宇本の掲げる「官板」という文字は、事実というより、上質さをアピールするための宣伝文句と理解したほうがふさわしいかもしれない。

<sup>24</sup> ちなみに、陳翔華氏は、「夏振宇繡梓」挖改作「前溪堂繡梓」(『日本蔵夏振宇本三国志傳通俗演義』解説部分、国家図書館出版社、2010年)と、夏振宇が版木を前溪堂に譲ったという印象を与えるように解説している。

夏振宇本は、現在名古屋市蓬左文庫に所蔵されており、かつては尾張藩主徳川家の蔵書であった。そのため、保存状況は非常によく、破損も少ない。破損があったとしても、一文字分程度のものである。以下、字が判読しにくい破損が確認される頁数を記す(陳翔華氏主編影印本の頁数を借用)。

36, 60, 154, 193, 206, 225, 235, 274, 299, 306, 307, 308, 314, 333, 338, 349, 424, 475, 505, 544, 549, 553, 641, 723, 724, 747, 812, 872, 916, 1010, 1014, 1036, 1116, 1130, 1132, 1170, 1250, 1257, 1273, 1420, 1446, 1448, 1542, 1610, 1632, 1646, 1664, 1677, 1749, 1750, 1797, 1972, 1992, 1997, 2044, 2058, 2074。

以上、夏振宇本の基本状況を紹介した。次節では、夏振宇本の成立時期を検証する。

## 第2節 夏振宇本の成立時期

夏振宇本の実態を知るべく、筆者は2017年8月及び10月に蓬左文庫へ出向き、夏振宇本をはじめ、蓬左文庫所蔵『三国志演義』四種を調査した。その調査の結果に基づき、夏振宇本の成立や、日本での流伝などの点について、いくつかの私見を示したい。

『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』によると、蓬左文庫が所蔵する明刊本『三国志演義』四種の書誌は以下のごとくである<sup>25</sup>。

- 新刊校正古本出像大字音釋三国志傳通俗演義十二卷 六冊 元・羅本撰 明覆万曆十九年金陵周日校刊本 附圖 有御本印記 駿河御讓本
- 新刻校正古本大字音釋三国志傳通俗演義十二卷 十二冊 元・羅本撰 万曆中夏振宇刊 無圖本 有張府内庫圖書印記
- 新鏤京本校正通俗演義准按鑑全像三国志傳二十卷 十冊 元・羅本撰 万曆三十三年閩書林鄭少垣刊五行本 附圖 有御本印記 駿河御讓本
- 李卓吾先生批評三國志一百二十回 十六冊 明・羅本撰 李贄批評 明建陽刊本 首冊繪圖

以下、順に「周蓬本」「夏振宇本」「聯輝堂本」「李卓吾本」と称す。周蓬本と聯輝堂本には、尾張藩初代藩主徳川義直の蔵書印「御本」が捺され、目録には「駿河御讓本」と記されている。すなわち、この二種の『三国志演義』は、「御文庫」成立当初、駿河御讓本として尾張藩に渡ったものであることが分かる。

その後、寛永年間(1624～1644)及び慶安四年(1651)に編纂された「御書籍目録」<sup>26</sup>のい

<sup>25</sup> 『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』(名古屋市教育委員会、1975年、138頁)。

<sup>26</sup> 蓬左文庫蔵。

ずれも、六冊と十冊の『三国志傳』が記されている。冊数から推測すると、これはおそらく駿河御讓本である周蓬本と聯輝堂本であろう。

一方、夏振宇本に関する記録は、江戸時代に編纂された尾張藩の各種蔵書目録に見当たらず、大正二年(1913)の「蓬左文庫書籍目録」に至って、ようやく十二冊の『三国志演義』の記載が確認できる<sup>27</sup>。また、李卓吾本の情報は昭和十年(1925)の「蓬左文庫善本書目」において、初めて記されることとなる<sup>28</sup>。

以上、蓬左文庫蔵『三国志演義』四種に関する目録の記載情報を述べたが、夏振宇本については、特に価値のある手がかりはなかった。次に、他の角度から手がかりを探し、夏振宇本の成立について考察してみたい。

手がかりの一つとして、夏振宇本の中で「引用された書物」が挙げられる。夏振宇本のテキスト、特に注釈には、他の書物からの引用や、他の書物への言及が多く見られる。改刻や補版などがない限り、夏振宇本の成立は、テキストに引かれる全ての書物より遅れるはずである。それらの書物の刊行年代は、夏振宇本の成立時期を推定する手がかりとなる。

例えば、巻十「孔明秋夜祭瀘水」則に、南蛮征伐に成功して凱旋しようとしている諸葛亮が、瀘水に現れた戦死者の亡霊をとむらい、人間の首の代わりに饅頭を作らせるシーンに、『事物原始』という書物を引用した注釈が見られる。

孔明曰、吾班師回國、安可妄殺一人？吾自有主見。喚行廚宰殺牛馬、和麵為劑、塑成人頭、内以牛羊等肉代之、名曰饅頭。[考證]傳至今日、出『事物原始』。

この注釈は周蓬本にも見られるが<sup>29</sup>、引用されている書名は異なる。

[考證]傳至今日、出『事物紀原』。

『事物紀原』は、宋代の高承によって編纂された、いわば百科事典の類に属する書物であるが、一方『事物原始』は、明代の徐炬によって編纂された書物である。その形式、内容ともに『事物紀原』とよく似ており、『事物紀原』をモデルに作られたものと考えられる。では、諸葛亮が饅頭を発明したという記述の出典は、果たして両者のいずれであろうか。

まずは、『事物紀原』の原文を見てみよう。巻九「饅頭」条に、以下の記述がある<sup>30</sup>。

<sup>27</sup>大正目録97頁に、「四一四 三國志演義 一二 東上 三三六」と、簡単な記述しかない。

<sup>28</sup> 126頁。

<sup>29</sup> 本来であれば、中国社会科学院所蔵の周日校甲本、あるいは朝鮮翻刻本を引用すべきであるが、甲本が欠巻、朝鮮本が欠葉のため、ここでは周蓬本による。

<sup>30</sup> 宋・高承撰、明・李果訂『事物紀原』(中華書局、1985年)排印本、332頁。また、比較の便を図るため、両方でテキストが重複している部分に下線を施した。

饅頭 稗官小説云、諸葛武侯之征孟獲。人曰、蠻地多邪術、須禱於神、假陰兵一以助之。然蠻俗、必殺人以其首祭之、神則嚮之、為出兵也。武侯不從、因雜用羊豕之肉、而包之以麩、象人頭以祠。神亦嚮焉、而為出兵。後人由此為饅頭。至晉盧諶祭法、春祠用饅頭、始列於祭祀之品。而束皙餅賦亦有其說。則饅頭疑自武侯始也。

一方、『事物原始』卷十八「饅頭」条には、やや簡略化された記述が見られる<sup>31</sup>。

饅頭 稗官小説云、孔明征孟獲。人曰、蠻地多邪、殺人首祭神、則出兵利。孔明雜以羊豕之肉、以麵包之、以像人頭、後人由此為饅頭之始。至晉盧諶祭法、用饅頭列於祭祀之品、而束皙餅賦亦有其說。

両者のテキストを比較すると、『事物原始』に見られる「饅頭」に関する記述は、若干簡略化されているものの、ほとんど『事物紀原』の記述を踏襲していることがわかる。

明代に刊行された『三国志演義』として、周蓬本が、宋代にすでに刊行され、明代に流布していた<sup>32</sup>『事物紀原』を引用することは全く問題ないが、夏振宇本が同時代の『事物原始』を引用していることは、その成立時期を探るための大きな手がかりになる。つまり、夏振宇本に『事物原始』という書名が現れる以上、その成立は『事物原始』より遅れるはずである。では、『事物原始』はいつ成立したのか。

『事物原始』巻首には、万暦癸巳(二十一年、1593)張瀚(1510~1593)の撰と題された序文がある。その序文には、『事物原始』の刊行について、

或謂徐君終不可秘、懸藜火齊与世共珍<sup>33</sup>、不愈怀褐<sup>34</sup>乎？迺謀以付剞劂而属序於余<sup>35</sup>。

<sup>31</sup> 明・徐炬輯『新鐫古今事物原始全書』(『四庫全書存目全書』子224所収、莊嚴文化事業有限公司、1995年)影印本、720頁。

<sup>32</sup> 『事物紀原』は宋代に成立した書物であるが、南宋の陳振孫が「凡二百七十事、今此書多十卷且數百事、當是後人廣之耳」(『直齋書錄解題』卷十)と述べているように、少なくとも南宋までにはすでに増補されていた。また、明正統年戊辰(十三年、1448)の閻敬序刊本や、成化八年(1472)李果序刊本などの段階を経て、「較振孫所見更數倍之」(『四庫全書總目提要』卷135)と、更に変貌と遂げた。度重なる修訂が行われていたことから、明代における『事物紀原』の人気が見て取れる。

<sup>33</sup> 「懸藜火齊与世共珍」について、①「火齊」が「火齊珠」を指すとすれば、「懸藜火齊」は「松明をかけて火齊珠を照らす」=「宝物の存在を世間に示す」を意味する、②「懸藜」が即ち「頗藜」=「玻璃」であれば、「火齊」と同様、宝物の代名詞となる、③「懸藜火、齊与世共珍」(松明をかけて(その存在を示し)、世人とともに重宝する)とも読める、といったいくつかの解釈案があるが、どれを取るか判断しかねるため、ここで併記する。

<sup>34</sup> 「怀褐」は「被褐懷玉」の略であると考えられる。その語は『老子』七十「吾言甚易知、甚易行。天下莫能知、莫能行。言有宗、事有君。夫唯無知、是以不我知。知我者希、則我者貴。是以聖人被褐懷玉」とにられる。老子はそこで、自分の貴重な主張は世間に受け入れられず、一人で抱えるしかないという感慨をあらわにしている。ここでは、張瀚はこの典故を用い、『事物原始』を世間に広めずに一人で抱えることを「怀褐」に譬えるとして、「一人で持ち腐れる」と意識する。

<sup>35</sup> 訳:ある人が、徐炬に「『事物原始』は永遠に隠し持つべきではない。これほどの貴重なものであれば、世人とともに重宝するほうが、一人で持ち腐れるよりましではないか」と言い、そこで刊行する計画を立て、私に序文を

と記されている<sup>36</sup>。文脈を察すると、張瀚がこの序文を書くように依頼されたのは、『事物原始』の刊行前であり、万暦二十一年(1593)序刊本は『事物原始』の初版であろう。即ち、少なくとも万暦二十一年以前には、『事物原始』という書物を目にすることができない。そうすると、『事物原始』という書名が見られる夏振宇本は、万暦二十一年以降に刊行されたものであろう<sup>37</sup>。

ちなみに、「事物紀原」が「事物原始」に書き換えられた原因は検証し難い。そもそも、諸葛亮が瀘水の亡霊を祀る場面に、「饅頭」の起源に関する細かい考証はそれほどの必要性がなく、単なる面白いエピソードとして軽く触れただけのものであろう。縦しんば本当に考証したとしても、わざわざ元の出典である『事物紀原』を新出の『事物原始』に書き換えるには、それなり特殊の理由<sup>38</sup>がなければ考えにくい。あるいは、書き換えられたというより、両書は書名から内容まで酷似しているため、『三国志演義』の刊行者に混同されたという可能性も考えられる。

### 第3節 吉田意安と夏振宇本

夏振宇本の成立や流伝に関わるもう一つの手がかりは蔵書印である。夏振宇本には、三種の蔵書印が見られる。それらはいずれも日本の蔵書印であり、夏振宇本が日本に渡ってから、歴代の所有者に捺されたものである。巻一巻首右上に「吉家氏蔵」<sup>39</sup>、その下に「張府内庫図書」<sup>40</sup>、「蓬左文庫」<sup>41</sup>、巻二～巻十二巻首の右上に「張府内庫図書」、その下に「蓬左文庫」の蔵書印が見られる。すなわち、巻一では、はじめに「吉家氏蔵」印が捺され、後にその下に「張府内庫図書」、「蓬左文庫」印が捺され、一方、巻二～巻十二では、「吉家氏蔵」が捺されていないため、「張府内庫図書」印が右上に捺されることになったと想定される。つまり、三つの蔵書印のなか、「吉家氏蔵」が一番古い蔵書印であり、その持ち主が現在知りうる限り、夏振宇本の最初の持ち主であろう。

さて、「吉家氏蔵」印の持ち主は誰なのか。『改訂増補内閣文庫蔵書印譜』には、この蔵書印

---

書くよう依頼した。

<sup>36</sup> 影印本530頁。

<sup>37</sup> 『事物原始』が世間に広まり、そして夏振宇本の編者が『事物原始』を目にし、それによって夏振宇本の本文を書き換え、また夏振宇本の版木を作ってから始めて、「出事物原始」というテキストが完成することになる。以上の過程を考えると、夏振宇本の成立は万暦二十一年よりさらに遅れるかもしれない。

<sup>38</sup> 例えば、『事物原始』の序の作者である張瀚は、この序を書いた同年に没した。張瀚は嘉靖十四年の進士で、各地に歴任したのち南京工部尚書となった人物であり、張居正とのわだかまりなども広く知られている(『明史』巻225)。著名人である張瀚の死を受け、彼の序が付されている書物を広めようと、わざと書き換えた可能性は考えられなくもない。しかし、張瀚と『事物原始』の作者である徐炬と書坊主の夏振宇との間の関連性はよくわからない。

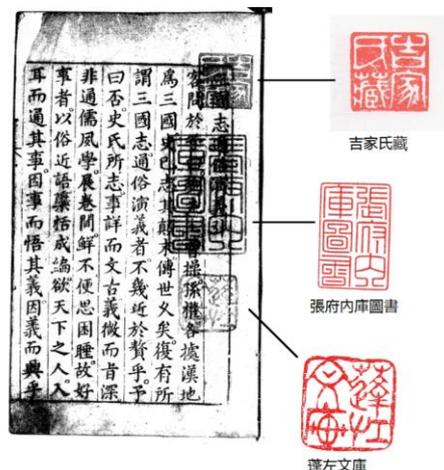
<sup>39</sup> 「吉家氏蔵」について本節で詳しく考証するが、一言で言うと、江戸時代の医師・吉田意安一族の蔵書印である(『改訂増補内閣文庫蔵書印譜』、国立公文書館、1969年、16頁を参照)。ちなみに、「吉氏家蔵」と読むべきという、下浦康邦(1999)の見解もある(167頁)。

<sup>40</sup> 「張府内庫図書」は江戸時代中期以降、名古屋城二の丸に位置する尾張藩藩主の書庫の印記である。名古屋市蓬左文庫編『蓬左文庫図録』(名古屋市教育委員会、1989年、101頁)を参照。

<sup>41</sup> 「蓬左文庫」は明治以降、財団法人尾張徳川黎明会によって運営されていた蓬左文庫(現在は名古屋市蓬左文庫)の蔵書印である。『蓬左文庫図録』103頁を参照。

について以下の解説がある<sup>42</sup>。

「吉家氏蔵」(あるいは「吉氏家蔵」)の白文方印は医家吉田意安の蔵書印と伝える。意庵は吉田宗桂以後、宗恂、宗達など歴代の号である。この印を捺してある書物は、おおむね明刊本や江戸初期写本などの善本医書で、朱の色も古雅であり、その点は宗恂(永禄元一慶長十五年)の旧儲らしいが、また別に、この印を宝永五年刊本に捺した例もあるから、おそらく宗恂以後吉田家累代の使用したものであろう。当文庫に三十七部を所蔵する。その大部分は漢籍で、多紀家・医学館を経て伝来したものである。毎冊上端に押ししてある。



更に、『増訂新編蔵書印譜』にも、この蔵書印に関する解説がある。<sup>43</sup>

吉田意安 医者 名宗恂 称意庵(以後代々ノ通称)

永禄1一慶長15 角倉了意弟 宗達父

また、『日本近世人名辞典』<sup>44</sup>の「吉田宗恂」の項目では、挿絵にこの蔵書印を掲げ、「『吉家氏蔵』、吉田宗恂蔵書印」と記す。

つまり、「吉家氏蔵」は吉田意安<sup>45</sup>という医者の家系に使われた印であり、そのうち特に吉田宗恂の代で多く使われていた。さて、吉田意安とはどのような家系であろうか。

まずは宗恂の父である、初代意安・吉田宗桂から検討したい。

『寛政重修諸家譜』卷四百二十七「宇多源氏・佐々木庶流・吉田」に、吉田家の家譜が記されている。そのうち、宗桂の伝が見られる<sup>46</sup>。

<sup>42</sup> 『改訂増補内閣文庫蔵書印譜』16頁。

<sup>43</sup> 渡辺守邦、後藤憲二編『日本書誌学大系103-2 増訂新編蔵書印譜(中)』(青裳堂書店、2014年)1060頁。

<sup>44</sup> 竹内誠、深井雅海編、吉川弘文館、2005年、1111頁。

<sup>45</sup> 厳密に言えば、意庵とは宗恂の父である吉田宗桂の号であり、宗恂に受け継がれ、後に後陽成天皇の勅命によって、意安と改められた。つまり、「意庵」と名乗ったのは初代宗桂と二代宗恂のみで、「意安」と名乗ったのは宗恂以降であり、宗桂は「意安」と名乗ったことはなかった。実際、『内閣文庫蔵書印譜』及び『増訂新編蔵書印譜』などには、「意庵」と「意安」を混用する現象が見られる。本研究では便宜を図り、あえて使い分けずに「意安」に統一する。

<sup>46</sup> 林述斎原編、高柳光寿、岡谷泰四、斎木一馬編集顧問『新訂寛政重修諸家譜』(続群書会要完成会、1996年)第七卷、第227頁。句読点は排印本による。以下同じ。

宗桂 與次 宮内卿 意安<sup>今の呈  
譜意庵</sup> 号日華子。

天文元年家を継、萬松院義晴につかへ侍医たり。本草に通じ、よく和薬を辨知せしにより、世人これを五代の陳日華に擬して日華と号す。八年天龍寺の長老策彦明国に使うるとき伴はれてかの地に渡る。明人宗桂の診治の神察あるを賞し、意安<sup>今の呈  
譜意庵</sup>に作ると称す。これ医は意なりといふ義をとりてなり。また芳梅崖といふ人称意の二大字を書してをくる。十六年ふたたび策彦とともに明国にいたる。ときに明帝病ありて宗桂が薬をもちひ平癒せしかば、恩賞として顔輝が筆の扁鵲の画幅、花梨の薬笥、螺鈿の薬笥、元板の聖濟総録、薫、墨等をあたへらる。ここにをいて名を異域にあらはす。十九年帰朝のとき多く医書を携へ来る。これよりこのかた門人ますますすみ、をのづから一家をなす。元龜三年十月二十日死す。年六十一。法名日華。

この資料によると、宗桂はかつて二度明に渡り、明人と深く交わり、皇帝の病を診たことまであった。しかも、「多く医書を携へ来る」という記述は、「吉家氏蔵」印が押されてある書物が「おおむね明刊本や江戸初期写本などの善本医書」という、『内閣文庫蔵書印譜』の記述と一致している。つまり、現在内閣文庫所蔵の、「吉家氏蔵」印が押されてある書物には、宗桂が明からもたらしたものが多いかもしれない。

しかし、宗桂が明に渡ったのは天文八年(1538、嘉靖十八)と天文十六年(1547、嘉靖二十六年)であり、宗桂自身は元龜三年(1572、隆慶六)に没した。前節の考証によると、夏振宇本は万曆二十一年(1593)以降に刊行されたものであり、宗桂に収蔵されることは不可能である。

宗桂の可能性を排除すれば、次は子の宗恂について検証しよう。吉田宗恂については、『寛政重修諸家譜』<sup>47</sup>にその伝がある。

宗恂 初光政 孫次郎 民部卿 意庵<sup>今の呈譜初意庵後意  
安にあらたむといふ</sup> 法眼 号又玄子 母は中村氏。

父が遺跡をよびその業を継で名をしらる。かつ経学をしたひ、<sup>(藤原)</sup>惺窩と友としよし。わかりしとき豊臣秀次につかへ、旧領を宛行はる。慶長五年後陽成院御惱のとき御薬を献じ、すみやかに御平癒ありしかば御感をかうぶる。<sup>今の呈譜このとき意庵を称せしを、意  
安にあらたむべきよし論言ありしといふ</sup>東照宮にまみえたてまつり、めされて御側に勤仕し、本領山城国紀伊綴喜両郡のうちをいて采地五百石をたまふ。東照宮かつて光明朱をたづねもとめたまふ。諸家多くこれを献ず。しかれども其品よからず。ときに宗恂が父明国よりもち来るところの朱を献ぜしかば、御感ありて汝が家の名空しからずとの仰をかうぶる。これより来舶ごとにかくのごとき朱を齎すべきむね命ぜらる。のちまた御旨をうけて紫雪を製したてまつりしより、諸医の製するところみなこの法に倣ふ。あるちき南蛮の船薄石の方一尺余にして、側柏のごとくなるを献ず。

<sup>47</sup> 排印本第七巻、228頁。

これをみるに木賊柏葉のあひつらなりたるものに似たり。東照宮これを奇なりとしまひ、諸医に命じて鑑定せしめたまふといへども、これをしるものなし。ときに宗恂つらつらこれを見ていはく、これ瑪瑙の花なるべしと。これを本草綱目に考れば、果たしてそのいふところに似たり。そののち異国より珊瑚枝を献ず。そのころいまだ本朝にこのもの多からず。其名をしるもの稀なりしに、宗恂また其産するところをよびとりうるやうを詳に言上せしかば、これを賞したまひ、すなはち其珊瑚枝一箇をたまはる。東照宮御てつから鍊鏝をたまひ、またあるひは呉服、金銀、薬種等のたまものあることしばしばなり。かつて仰をかうぶり、隔年に江戸に候し、また常に駿府に陪侍す。これよりさき古今医案三十三巻をあらはす。惺窩これに序していはく、宗恂父師の箕裘を紹續して、竈に跨藍より出、当世の司命なり。学かならず古を稽へ其理を知其実を踐、奇功靈驗ここに尽すべからずといへり。また名医伝略二巻を撰す。朝鮮国刑部員外郎姜沆序をつくりていはく其道をもつて鳴もの代々人を乏しからず。のちに継で前を光し、諸師の大成を集るものは今の法眼意安これなり。其術たること直に長桑岐伯一頭の地を数千百載の上にあらそふ。倉公より以下はこれをかぞへずして猶みづからをらずといへり。世のために貴重せらるること略かくのごとし。其余著述するところ、薬性纂類十八巻、増補医経小学十二巻、本草序例抄七巻、素問講義六巻、難経註疏四巻、医方大成論抄一卷等なり。また運氣にくはしくして、運氣諸論の図をよび枢要の図漏刻の図等をつくる。十五年病によりて京師にかへり、四月十七日かの地にをいて死す。年五十三。法名又玄。妻は堀氏の女。

宗恂は、名医であったと同時に、経学の造詣も深く、江戸漢学史において名を知られる藤原惺窩や姜沆らと親交を結んでいた。吉田意安家の代表的な人物として、『寛政重修諸家譜』に記された歴代意安の中で、宗恂の伝記は最も詳細であり、漢学に関する記述は宗恂の伝記のみ見られる。つまり、宗恂は歴代意安の中で漢学の造詣が最も深く、医者であったと同時に、儒者としての一面もあったのであろう。「吉家氏蔵」印においても、「吉田」を「吉家」あるいは「吉氏」と称するのは、どちらかという漢学者の趣味が込められている。この点は、『内閣文庫蔵書印譜』で「宗恂の旧儲らしい」と判断された理由の一つであろう。

しかし、『内閣文庫蔵書印譜』の指摘通り、この印は宗恂以後、吉田意安家代々に伝わり、宗恂没後の書物に捺された例も見られる。ここでは、この蔵書印の使用状況についてもっと詳しく調べる必要がある。

吉田意安家旧蔵書については、下浦康邦氏の「吉田称意館旧蔵書目録」<sup>48</sup>がある。以下、下浦目録から「吉家氏蔵」印が捺されてある書物を抽出し、それぞれの成立時期<sup>49</sup>と吉田宗恂の没

<sup>48</sup> 下浦康邦《1999》、156～171頁。

<sup>49</sup> 下浦目録は、収録される書物のそれぞれの所蔵先が編纂した蔵書目録から該当項目を抽出して作成されたものである。付表1で示す「成立時期」は、下浦氏の引用元である各蔵書目録の記載に従う。

年である慶長十五年(1610)との前後を対照する<sup>50</sup>(付表1を参照)。

統計すると、「吉家氏蔵」印が捺されてある書物は全部で45件、そのうち宗恂の没年「以前」のものが26件、「以後」のものが6件、「不明」のものが13件となった。

「吉家氏蔵」印の使用された傾向を見ると、宗恂生前に捺されたものは唐本の漢籍が多く<sup>51</sup>、医学書<sup>52</sup>以外のものも多く含まれる。また、宗恂本人の著作である『修製纂類』以外、和書は見当たらない。一方、宗恂没後に捺されたものには、多紀家による漢籍医書の鈔本を2件<sup>53</sup>、和書を4件<sup>54</sup>認められる。

この傾向は、漢学の造詣が深い宗恂がかつて熱心に漢籍を蒐集していたことを想起させる。『寛政重修諸家譜』で記されている宗恂のイメージと一致する。

一方、その子孫については、漢籍を蒐集するどころか、医学書以外の書籍を多く手放した<sup>55</sup>。本論で考察する夏振宇本について言えば、子孫らがわざわざ医学と全く関係のない本書を入手し、宗恂が愛用した「吉家氏蔵」印を捺したという可能性と、漢籍好きの宗恂本人がこれを入手し、自ら自身の蔵書印を捺したという可能性の二通りあるが、両者を比較すれば、後者のほうがより自然な考えかたであろう。つまり、夏振宇本『三国志演義』が吉田宗恂の旧蔵書であるという可能性は十分に考えられる。

ちなみに、夏振宇本『三国志演義』の成立時期に関する論考は極めて少ないが、蓬左文庫は早くも昭和十年に、「蓬左文庫善本書目」において「明、萬曆中刊」と判断している。後の『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』もそれを踏襲している。もし夏振宇本が吉田宗恂の旧蔵書であれば、その成立は宗恂の没年である1610年(慶長十五、萬曆三十八)以前となる。蓬左文庫がそう判断した根拠は明記されていないが、「吉家氏蔵」という蔵書印がその一つであったのだろうか。

また、夏振宇本は吉田家が手放した後、どのような経緯で尾張藩主の蔵書となったのか。吉田宗恂は「かつて仰をかうぶり、隔年に江戸に候し、また常に駿府に陪侍」とされているが、晩年故郷である京都に定住し、最期を迎えた。その子である宗達<sup>56</sup>も「侍医となり駿府にをいて仕へたてまつり、「のちまた京師に住し隔年に参勤」していた。その子の宗恪の代になると、「寛

<sup>50</sup> 「所蔵不明分」を除く。なお、下浦目録には誤字や引用ミスが多く見られるため、各所蔵先の蔵書目録を参照しつつ統計作業を行った。また、そのうち『改定内閣文庫漢籍分類目録』には蔵書印に関する記載がないため、現地調査によって情報を入手した。

<sup>51</sup> 付表1-1, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 18, 19, 21, 22, 26, 28, 29, 31, 32, 35, 37がそれにあたる。すなわち、宗恂生前に印を捺した書物のうち、39, 45の二項を除いて、すべて唐本漢籍である。

<sup>52</sup> 26点のうち、9, 10, 11, 12, 13, 18, 19, 21, 22, 26, 28, 29, 31, 39の計14点が医学書で、それ以外の書物は12点を数える。

<sup>53</sup> 付表1-16, 。

<sup>54</sup> 付表1-40, 42, 43, 44。

<sup>55</sup> 例えば、渋江抽斎・森立之著『経籍訪古誌』には、吉田家の旧蔵書を多く著録しており、そのうち大半が儒学書である。また、下浦康邦氏も、吉田家の旧蔵書について、「それらに捺された印記から判断して、相当はやくに流出したとみえる」と述べている(『1999』155頁)。

<sup>56</sup> 1582~1622。後に吉皓と名を改めた。

永十年奥医となり、これより江戸にうつり住むこととなった<sup>57</sup>。夏振宇本は、その度重なる転居の途中に手放されたのか、あるいは『経籍訪古誌』に記されている多くの漢籍と同じように、江戸の蔵書家あるいは古書籍商を経て尾張藩の屋敷に入ったのか、またあるいは吉田家から尾張徳川家へ直接譲渡されたか。この問題については、いまだ有力な手がかりをつかめていないため、憶測は控えておくことにする。

以上、蓬左文庫蔵夏振宇本『三国志演義』に関するいくつかの考察を述べた。夏振宇本は、万暦二十一(1593)年以降に出版され、吉田宗恂あるいはその子孫に収蔵され、後に尾張藩の蔵書となった<sup>58</sup>。また、蓬左文庫の「明萬曆中刊」の判断に従えば、夏振宇本の成立時期は1593～1602年前後に絞ることができる。

この時期は、様々な版本の『三国志演義』が集中的に世に出た時期であり、『演義』の変遷史における重要な時期だと言えよう。そのような時期に位置する夏振宇本には、『事物原始』のような未だ発見されていない重要な手がかりがまだ隠されているかもしれない。

また、近世近代の日本社会においても、夏振宇本は興味深い履歴を持つ。この本は中国より渡来し、京都ゆかりの儒者の家系に収蔵され、江戸時代に有力大家に渡り、明治以降に華族の財産となり、後に財団が運営する図書館に入り、最終的に公立図書館の蔵書となった<sup>59</sup>。漢学を重んじる傾向があった時代、貴重な漢籍は文化事業の重要な支え手たちの元を集まっていった。日本における夏振宇本流伝の背景には、そういった文化事業の支え手たちの変遷も見て取れる。

#### 第4節 夏振宇本と周日校本との関係

##### 1、先行研究

本節では、二十四巻系における夏振宇本の位置づけ、特に夏振宇本と周日校本との関係を検証する。まずは、先行研究を以下に整理する。

夏振宇本の版本学上の位置づけについて、孫楷第《1982》は「内容文字、并同周日校本、當從周日校本出」と判断している。長きに渡って、夏振宇本の版本的価値は高く評価されず、本格的な検証も行われていなかった。そのため、孫氏の判断は根拠を欠けているものの、広く受け入れられていた。

しかし、上田望(1990)は、「従来周日校本の焼き直しと見なされていた夏振宇本が周日校本とは異本であり、しかも多少Ⅲ・Ⅳ群の『三国志伝』諸本に近いことが確かめられた。そして後の李卓吾批評本や毛宗崗本は夏振宇本か、もしくはそれとよく似た性格を持つテキストから発展

<sup>57</sup> 『新訂寛政重修諸家譜』第七卷229頁。

<sup>58</sup> 余談であるが、明治三年(1870)、末代意安である吉田宗悌氏が没し、その子孫に再び意安を名乗る人物はいなかった。初代の吉田宗桂から、三百余年続いた吉田意安家の伝承はこれを以って終焉を迎えた。翌年、明治政府の廃藩政策の施行に伴い、尾張藩はその二百余年の歴史に終止符を打ち、名古屋県となった。こうして、吉田意安家と尾張藩は、維新の黎明の訪れとともに、ほぼ時を同じくして歴史に消えていった。

<sup>59</sup> 明治以降の旧尾張藩蔵書については、『蓬左文庫、歴史と蔵書』(名古屋市蓬左文庫、2004年)を参照。

していったと考えられよう」と述べ(Ⅲ・Ⅳ群とは、それぞれ二十卷簡本系統・二十卷繁本系統を指す)、新たな可能性を提示している。

その説を受け、魏安(A. West)《1998》は、「周日校刊本(或周日校刊本的祖本)的底本为B0分支的一个本子(略同于夏振宇本而非夏振宇本)」と主張している<sup>60</sup>(「B0分支」とは、夏振宇本・周日校本・夷白堂本・鄭以禎本といった版本群を指す)。中川論《1998》も、「嘉靖本・周日校本・夏振宇本の三本はどれかがどれかの底本となるというのではなく、横にならぶ関係にある。そして周日校本と夏振宇本がより密接な関係にあるのであるが、夏振宇本は周日校本よりも遅れる版本なのである」<sup>61</sup>と論じている(本研究では、「中川旧説」)。

また、中川論(2013a)は「これまでの夏振宇本についての研究は、三種類の周日校本の存在が知られるようになったり、朝鮮覆刻本・活字本が発見されたりする以前のものであったため、それらとの関わりの中で考察されたものではない」と<sup>62</sup>指摘し、「その底本は周日校乙本より古い版本、すなわち周日校甲本かそれにきわめて近い版本であろうと考えられる」と、周日校が刊行した三種の版本を一概に「周日校本」にせず、それぞれの特徴を捉えるべきと説き、新たな見解を示した(本研究では、「中川新説」)。

このように、「夏振宇本は周日校本の翻刻である」と主張する孫説・中川新説と、「夏振宇本と周日校本とは異本である」と主張する上田説・魏説・中川旧説と、二つの相反する説がそれぞれ唱えられている。この問題を再考するために、まず双方の代表的な例証をもう一度確認しておく。

まずは、上田説の主要な例証を見てみよう<sup>63</sup>。

【例1-1】 第74則「玄德風雪訪孔明」

二度目に諸葛亮を訪れたがまた会えなかった劉備が帰ろうとすると、偶然諸葛亮の岳父である黄承彦に出会う。黄承彦は、以下の詩を詠んでいた。

嘉	空中乱雪飄	白髮銀系翁、豈懼皇天漏、騎驢過小橋、獨嘆梅花瘦。
周	○○○○○	○○○○○、○○○○祐、○○○○○、○○○○○。【考証】古本作盛感皇天祐。
夏	長空雪乱○	○○老衰○、盡感○○祐、○○○○○、○○○○○。
笈	長空雪乱○	○○老衰○、盛感○○祐、×××××、×××××。

<sup>60</sup> 101 頁。

<sup>61</sup> 75 頁。

<sup>62</sup> 「三種の周日校刊本」について、「周日校甲本」は中国社会科学院蔵本及びその朝鮮覆刻本、「周日校乙本」はイェール大学及び北京大学蔵本、「周日校丙本」は上記以外、内閣文庫・蓬左文庫・伊達文庫などの蔵本のことを指す。詳細は、劉世徳(2002)、中川論(2011b)、中川論(2012)などを参照。

<sup>63</sup>【例1】は、上田望(1990)から引用。ただし、上田氏は24種もの版本を引用したが、本研究の目的はこれら全ての版本の検証ではないため、ここではその代表的な版本のみを引用する。また、この論文が著された1990年に、現在大いに注目されている葉逢春本や周朝本はまだ広く取り上げられていなかったため、引用されていないが、二書を調べると、本研究で取り上げる上田氏の論点に相反する例証がないため、論証自体に特に差し支えないことを断っておく。

余	長空雪乱〇	〇〇老衰〇、盛感〇〇祐、×××××、×××××。
---	-------	--------------------------

上田氏は、「「盡」は「盛」と字形が似ているために誤刻された可能性があり、夏振宇本の方が実は周日校本注の言う「古本」に近いのではないか」、「夏振宇本は二十巻本に近い要素をもっているのだが、それは後補によるものではない」とし、夏振宇本の本文は周日校本より古いと主張している。

続いて、中川新説の主要な例証は以下のとおりである<sup>64</sup>。

【例1-2】第163則「吳臣趙咨說曹丕」

劉備のもとへ使者として旅立った諸葛瑾の忠誠心を疑う張昭に対して、孫権は諸葛瑾への信頼を語る。

嘉靖本	却説、張昭入見孫權曰「諸葛子瑜知蜀兵勢大、故推作使而去、必降玄德矣。」權曰「不然。孤與子瑜有生死不易之盟。子瑜不負於孤、孤不負於子瑜也。昔日子瑜在柴桑時、孔明來吳、孤與子瑜曰……」
朝鮮覆刻本	却説、張昭入見孫權曰「諸葛子瑜知蜀兵勢大、有生死不易之盟。子瑜不負於孤、孤不負於子瑜也。昔日子瑜在柴桑時、孔明來吳、孤語子瑜曰……」
周日校乙本	却説、張昭入見孫權曰「諸葛子瑜知蜀兵勢大、有生死不易之盟。子瑜不負於孤、孤不負於子瑜也。昔日子瑜在柴桑時、孔明來吳、孤與子瑜曰……」
夏振宇本	却説、張昭入見孫權曰「諸葛子瑜知蜀兵勢大、故假以講和為詞、欲背吳入蜀。此去比不回矣。」權曰「孤與子瑜有生死不易之盟。子瑜不負於孤、孤不負於子瑜也。昔日子瑜在柴桑時、孔明來吳、孤語子瑜曰……」
葉逢春本	却説張昭等見孫權而言曰「諸葛瑾听知蜀兵勢大、故推作使而行、必降劉備矣。」權曰「子瑜決不負孤。彼與孤有生死之交、不易之誓。子瑜之不負孤、猶孤之不負子瑜也。昔者子瑜在柴桑時、孔明至吳、孤與子瑜曰……」

中川氏は、以下のように述べている。

嘉靖本は卷十七、葉逢春本は卷七。嘉靖本では、劉備のもとに使いに行った諸葛瑾について、張昭が孫権に「諸葛瑾は使いにかこつけて蜀に行ったので、きっと劉備に降るだろう」と言うと、孫権は「自分と諸葛瑾には死んでも変わらない絆がある」と述べる。これに対し朝鮮覆刻本・周日校乙本では、嘉靖本の「故推作使而去、必降玄德矣。權曰、不然。孤與子瑜」の十九字が脱落して、本来張昭のセリフであったところが直接孫権のセリフにつながって、文章が読めなくなっている。系統を異にする葉逢春本では、多少の文字の異同が見られるけれど

<sup>64</sup> 【例2】及びその解説は、前掲中川論文(2013)から引用するが、便宜を図り、引用される原文の書式を変えている。なお、解説部分の下線は筆者が添加したものである。

も、おおよそ嘉靖本に一致していることから、嘉靖本のような文章がもとの形であろうと考えられる。そして夏振宇本を見ると、朝鮮覆刻本・周日校乙本で脱落があった箇所「故假以講和為詞、欲背吳入蜀。此去比不回矣。權曰、孤與子瑜」の二十四字を補っている。夏振宇本で補われていた文字は、内容こそ嘉靖本と大きく変わらないが、そこに用いられている語句には違いがある。このように、夏振宇本では周日校本の脱誤を独自に修正しているのである。この例は、夏振宇本が嘉靖本の文章を直接修正したものではなく、朝鮮覆刻本や周日校乙本のように脱誤のある文章を修正した結果であろう。すなわち夏振宇本は、周日校刊行の版本を元に成立したと考えられる。

中川新説には、どうしても腑に落ちないところが幾つかある。

1) 周日校甲本は現在残本しか残っていない。中川氏が参照しているのはその朝鮮覆刻本であり、その内容は甲本と完全に一致しているとは限らない。周日校甲本全体に対する検証が不可能であるという状況において、たった一箇所の脱文を根拠に、夏振宇本は周日校甲本の翻刻であると断言するのは、早計の誇りを免れないであろう。

2) 【例1-2】に見られる脱誤の箇所について、脱落が生じたのは周日校本の段階であり、それ以前の段階ではない、と断定できる証拠は述べられていない。もし周日校本に先立つとある版本にもこのような脱文があるとすれば、夏振宇本の編者が本文を補う際に使っていた底本がその版本である可能性は十分にある。例えば、既に散逸している、周日校本と夏振宇本の共通する祖本には脱文が既に生じており、夏振宇が独自にそれを補完する一方、周日校本が祖本を脱字のまま継承した、という可能性もある。中川新説の考証ではそれを排除することができない。

3) 中川新説は、【例1-1】を解釈することができない。もし夏振宇本が周日校本の翻刻であれば、なぜ夏振宇本に見られる「梁父吟」の字句が、周日校本の言う「古本」と一致しているのか。そもそも、周日校本の「豈懼皇天祐」＝「どうして天のご加護を恐れるのか」というテキスト自体は意味が通っておらず、むしろ嘉靖本の「豈懼皇天漏」＝「どうして天が漏れる(ように大降りする)のを恐れるのか」と夏振宇本の「盡感皇天祐」＝「天のご加護をつくづく感謝する」を誤って混合されたものに見える。そうすると、周日校本は夏振宇本と嘉靖本の間段階にあり、逆に夏振宇本の翻刻ではないかと疑われる<sup>65</sup>。

『三国志演義』という百万字規模の長編作品の版本関係を検証するには、少数の個例だけでは信憑性がある結論を出すことは難しいものである。より広い視点を以て作品全体を俯瞰したうえで、相当な数にのぼる個例を検証することによって、版本関係について論ずることが可能になるであろう。本節では、全体に対する分析と個例に対する検証を併用し、夏振宇本と周日校本との関係を再考する。すでに述べたように、周日校本には数種類の版本があり、以下、甲本に分類される朝鮮覆刻本(「周朝本」)を代表とする。

<sup>65</sup> この点は、魏安(1998)の観点に近いが、逆に【例1-2】を解釈できなくなるため、おそらくやはり上田説・中川旧説のように、夏振宇本と周日校本とは平行関係にあると考えたほうが妥当であろう。

## 2、誤りから見る版本関係

序論で述べたように、本研究では、テキストに見られる誤字・脱字・衍字などの誤りを統計し、それぞれの生じる経緯を辿ることによって、版本関係を検証する。「誤り」かどうかを判断する際、以下の基準に従う。

1) 字形・発音が近い他の文字に作り、意味が通らなくなる箇所を「誤り」とする。ただし、通仮字と認められるものは例外とする。

2) 明らかな脱字・衍字などによって意味が通らなくなる箇所を「誤り」とする。

3) 舞台である後漢・三国時代に明らかに存在しない固有名詞(人名・地名・役職名など)を「誤り」とする。ただし、もともとの架空の人名や地名(関索、鮑家莊など)や、意図的に加工されたもの(張翼徳など)は例外とする<sup>66</sup>。

以上の基準で、夏振宇本から誤りを463箇所統計し、それを一箇所ずつ、周日校本、葉逢春本、劉龍田本と対照した。以下、その統計データに基づき、夏振宇本と他の三つの版本の関係について検証する。

まずは、夏振宇本の誤りが、三つの版本と一致する状況は下の表の示す通りである。

	同じく誤	誤にして不一致	比較不可
周	41.3%	0.9%	0.9%
葉	22.5%	4.8%	22.7%
劉	13.4%	3.0%	38.0%

※「同じく誤」: 対照本の同箇所は夏振宇本と同じように誤る。

「誤にして不一致」: 対照本の同箇所は誤るが、夏振宇本とは異なる。

「比較不可」: 対照本のテキストが改変されたため、同箇所は見当たらない。

まず、夏振宇本と周日校本について、「比較不可」の比率が極めて低い。つまり両者は、テキスト改変の箇所がほとんどなく、非常に近い関係にある。同じく二十四巻系統に属している事実から考えると、当然の結果である。さらに、「同じく誤」の比率が四割以上に達し、計191箇所ある。この一致率は両者の親縁関係を物語っているものの、直接の継承関係があることを裏付けるには、些か低すぎる気がする。夏振宇本と周日校本とは極めて近い関係にあることは間違いないが、仮に夏振宇本が周日校本の翻刻であれば、残りの六割近く、計272箇所の誤りは全て、翻刻時に独自に発生したものと見なさざるをえない。その強引な解釈より、両者は「親子」より、「兄弟」あるいは「従兄弟」のような関係にあると考えたほうが自然であろう。

続いて、夏振宇本と葉逢春本について、「比較不可」の箇所は二割以上ある。つまり、夏振宇

<sup>66</sup> なお、第104則「趙子龍智取桂陽城」に登場する架空人物である鮑隆については、「龍」に作る箇所もあるが、諸版本に通してほとんど「隆」に作るため、「龍」を誤りとする。

本の誤りのうち、105箇所の記事自体が葉逢春本に存在していない。系統が異なるとはいえ、葉逢春本は夏振宇本の先行本、いわば「伯父」か「叔祖父」のような位置にあることから考えれば、この105箇所の誤りは、二十四巻系統内部から発生した誤りであり、二十巻系統から受け継がれたものではない。なお、「同じく誤」の比率は、周日校本より半分くらい低い。これまでの研究によって、夏振宇本に二十巻系統に近い部分があると指摘されているが<sup>67</sup>、その相似性よりも系統間のギャップのほうが大きい。夏振宇本は異系統の葉逢春本より、同系統の周日校本に近いという事実が改めて証明されたことになる。

つぎに、夏振宇本と劉龍田本について、「比較不可」の比率が高く、四割近くになっているが、劉龍田本は簡略本であり、一部の字句が省略されていることを考えると、葉逢春本との差は数値が示すものより小さいかも知れない。しかし、簡略本とは言え、劉龍田本と葉逢春本と比べると、「同じく誤」の比率が大幅に下る。簡略化される際に、もともと誤りが含まれていた字句が大量に省略されていた、という印象を受ける。いずれにせよ、劉龍田本の「同じく誤」の比率が一番低く、夏振宇本との関係はより遠いと考えられる。

以上、誤りに対する統計データを手がかりとして、夏振宇本と他の三つの版本との関係について概観した。データから見ると、夏振宇本は周日校本と極めて近い関係にあるが、おそらく周日校本の単なる翻刻ではない。一方、葉逢春本と劉龍田本は夏振宇本との相似性が一段と低く、より遠い関係にあるであろう。

しかし、上述の観点は、統計データを見た上の印象にすぎず、さらに具体的に検証をしなければならぬ。以下、個例に対する検証によって、更なる証拠を求める。

### 3、個例の検証

本節では、個例の検証によって、夏振宇本と周日校本との関係について検証する。前節では、両者が極めて近い関係にあることが明らかになったが、本節では、①両者には直接的な継承関係が存在しているか、②より古いテキストを持つのはどれか、という二点を問題とする。

前掲中川新説は、【例1-2】によって、夏振宇本は周日校本の翻刻であると主張している。それはすなわち、周日校本には脱文があり、夏振宇本と嘉靖本においてその部分のテキストが異なる。これは、周日校本には脱文が生じ、夏振宇本の編者は嘉靖本を参照せずに独自にそれを補ったからであり、つまり夏振宇本の底本は周日校本である。

しかし、前述したように、【例1-2】に相反する例証も確認できる。まずはこれらの例証を検証していく。

#### 【例1-3】 第81則 「劉玄德敗走江陵」

劉琮は曹操に降り、青州刺史の任に赴くが、曹操は後顧の憂いを断つため、劉琮の暗殺を企てる。

---

<sup>67</sup> 前掲上田(1990)参照。

夏	操喚于禁囑付曰、你可引五 騎趕上劉琮、全家殺之、以絕後患。
周	〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇萬 〇〇〇〇〇、〇〇〇〇、〇〇〇〇。
嘉	〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇百 〇〇〇〇〇、〇〇〇〇、〇〇〇〇。
葉	〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇百輕〇〇〇〇〇、〇〇〇了、〇〇〇〇。
劉	〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇百輕〇〇〇〇〇、〇〇〇了、〇〇〇〇。

于禁は曹操の命令により劉琮一家を殺すために、どのくらいの軍勢を連れて行ったのか。まず、夏振宇本の「五騎」は明らかに誤りであり、「五」と「騎」の間に一字が脱落している。一方、周日校本は「五萬」、嘉靖本・葉逢春本・劉龍田本は「五百」になっている。

常識から考えると、劉琮一家にはただ王威がついており、兵士や従者がいたとしてもさほどの数ではない。それを殺すのに「五萬騎」はさすがに多すぎる。ちなみに、曹操が何進を宮中に見送るときには「選精兵五百」<sup>68</sup>、伏完の屋敷に討ち入りする時には「連夜點起甲兵三千」<sup>69</sup>、左慈を追うときには「令許褚引鉄甲兵五百人追趕」<sup>70</sup>、曹丕が曹植を捉える時には「即令許褚領三千虎衛軍火速擒來」<sup>71</sup>など、数百から数千人のほうが一般的であると考えられる。また、曹操が直ちに劉琮を殺さず、わざわざ彼に役職を与え、赴任の途中を狙って殺すのは、人目を避けるためである。にもかかわらず、「五萬騎」を派遣するとは、やはり考えにくい。

そのため、周日校本の編者が意図的に「五百騎」を「五萬騎」に書き換えたとは考えにくく、おそらく「五騎」を見て違和感を感じ、他の版本を参照せずに「萬」字を補ったと推測される。

#### 【例1-4】 第94則 「龐統詐獻連環計」

曹操に軍船を互いに結ばせるため、龐統が曹操の元を訪れる。その龐統に、曹操は謙虚に意見を尋ねる(小字註を省略)。

夏	操曰、某知士元 _____、望賜指示、勿吝見教。
周	〇〇、〇聞〇〇乃吾師也、〇〇〇〇、〇〇〇〇。
嘉	〇〇、××先生乃吾師也、〇〇〇〇、〇〇〇〇。
葉	〇〇、弟聞吾言非×師也、〇〇〇迷、〇〇〇〇。
劉	〇〇、××先生×××× 〇〇〇迷、〇〇〇〇。

葉逢春本のテキストの意味は全く読み取れず、おそらく誤りを何度も重ねた結果であろう。しかし、葉逢春本には「師也」の二文字があり、元のテキストが周日校本や嘉靖本に近いであろうと推測される。劉龍田本は問題の箇所をほとんど省略しており、参考にはならない。一方夏振宇本では、「某知士元」と、話の途中で切れており、脱文があると思われる。周日校本と嘉靖本はいずれも意味が通るが、周日校本のテキストは夏振宇本の脱字の前の部分とおおよそ一致している

<sup>68</sup> 第5則「董卓議立陳留王」。

<sup>69</sup> 第133則「曹操杖殺伏皇后」。

<sup>70</sup> 第135則「魏王宮左慈擲盃」。

<sup>71</sup> 第157則「曹子建七步成章」。

のに対し、嘉靖本のほうは夏振宇本と全く違う<sup>72</sup>。

以上、【例1-2】に対し、相反する【例1-3】と【例1-4】を分析した。三つの例を総合的に見れば、周日校本と夏振宇本の間には継承関係が見られない。むしろ、3つの版本には共通の祖本より派生したものであり、脱文は祖本の段階から既に存在し、夏振宇本あるいは周日校本の編者が祖本を翻刻した際に独自に修正を入れた、という解釈のほうが自然である。すなわち、【例1-2】、【例1-3】、【例1-4】に見られる脱文は、全て祖本の段階に存在していたものであり、夏振宇本は【例1-2】を独自に修正し、【例1-3】と【例1-4】を脱文のまま継承した。一方周日校本は、【例1-3】、【例1-4】を独自に修正し、【例1-2】を脱文のまま継承した。言い換えれば、夏振宇本と周日校本は同じ祖本を継承し、それぞれ独自に校訂を入れた、いわば「兄弟」の関係にある。

しかし、前文で述べたように、百万字規模に及ぶ『三国志演義』の版本を検証するのに、少数の例証では、信憑性のある結論に導くことができない。以下、自説を補強するために、さらにいくつかの例証を挙げておく。

#### 【例1-5】 第31則 「呂奉先轅門射戟」

袁術の将・紀靈は、劉備を討つべく、軍勢を率い徐州に赴く。

夏	紀靈起兵長驅大進、已到沛縣 東南札下營寨。
周	○○○○○駟○○、○○○○ ○○割○○○。
嘉	○○○○○○○○○、○○○○ ○○割下營寨。
葉	○○軍馬○○○○、○○○○於○○下住寨柵。
劉	○灵×××××××× ○○○○ ○○×○×○。

夏振宇本は、誤って「札」を「札」に作る。木偏と手偏を混同する誤りはよくあるが、ここで注目したいのは、周日校本と嘉靖本が、「札」と相通じる「割」に作ることである。「札」は「割」の異体字であると考えてもよいが、夏振宇本の「札」の元の字は「札」であり、「割」ではない。つまり、夏振宇本の底本は「札」でなければ説明がつかない<sup>73</sup>。一方、周日校本と嘉靖本が「割」に統一しているところを考えると、やはり両者の共通の祖本は「割」になっていたと推定される。とすると、夏振宇本の底本と、周日校本・嘉靖本共通の祖本とは異本である可能性も考えられる。

#### 【例1-6】 第82則 「長坂坡趙雲救主」

趙雲は阿斗を抱え、敵陣を突破しようとする、四人の将に囲まれる。

<sup>72</sup>その原因として、嘉靖本の編者がより古い版本を参照し、意味がわからない夏振宇本のテキストを書き換えたと考えられなくもないが、当面有力な証拠がないし、本研究で扱う問題ではないため、それについては場を改めて討論しよう。

<sup>73</sup>「製版者が「札」の方こそ正しいと思ってわざと書き換えた」や、「製版者が理由もなく「割」を「札」に書き換えようとしたが、誤って「札」と彫った」など、可能性が極めて低い考え方を排除する。

夏	後面趕的是馬延張覲、前面阻的是焦觸張南、皆是袁紹手下降將。
周	○○趕○○○○○鎧、○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○。
嘉	○○××○○○○○鎧、○○×××○○○○、○○○○○○○×將。
葉	背後×○○○○○○○、○○×○○張尚墨觴、○○○○○○○×○。
劉	背後×××○○○○趕來、○○×××張尚墨觴 ×××××××× 攔擋。

この四人の姓名は正確に何であろうか。『三国志』によると、四人とも実在の人物である。『三国志』卷一「魏書・武帝紀」には、「(袁)尚夜遁，保祁山，追擊之。其將馬延、張覲等臨陳降，衆大潰」とあり、さらに、卷六「袁紹伝」には、「(袁)熙、尚為其將焦觸、張南所攻，奔遼西烏丸」とある。つまり、四人の姓名について、夏振宇本は全て正確で、周日校本・嘉靖本には「張鎧」の一箇所の誤りがあり、葉逢春本・劉龍田本には「張尚墨觴」の二箇所ある。

周日校本と嘉靖本は「同じく誤」であり、共通の祖本の段階で既に「張鎧」となっていたのであろう。一方夏振宇本の正しいテキストは、他に「張覲」に作る版本を継承してるのか、それとも独自に修正したのか。いずれにせよ、【例1-5】と同じように、夏振宇本と周日校本・嘉靖本との間には隔たりがあり、夏振宇本のテキストは、より古い葉逢春本と一致している。

【例1-7】 第127則 「孔明定計捉張任」

劉備は、まもなく張飛と諸葛亮という二つの援軍が来ると知り、再び雒城を攻める計画を立てる。

夏	……南門二帶是山路、北門 有涪 <small>音浮</small> 水、因此不圍。
周	……○○××○○○、○○ ○○○○、○○○○。
嘉	……○○××○○○、○○ ○○×○、○○○○。
葉	……○○××○○○、○○是水路×○×○、○○○○。
劉	……××××××××、○○是水路××××、××○○。

夏振宇本の「二帶」という言葉は明らかに「一帶」の誤りである。一方、周日校本・嘉靖本にはこの二文字が見られない。以下の理由により、「二帶」は夏振宇本の編者が独自に入れたものとは考えにくい。

①「南門是山路、北門有涪水」という表現はもともと意味が通っており、言葉のリズムもよい。「一帶」を入れることは全く意味がないし、言葉のリズムを崩すことにもなる。

②夏振宇本の編者が①を顧みずに、あえて「一帶」を入れたとしても、わざわざ入れた表現なのに、よりによってそこで「二帶」という筆の誤りを犯したとは考えにくい。

「二帶」は夏振宇本の編者が添加したものでないとするれば、夏振宇本の底本には「一帶」という言葉が存在し、夏振宇本がそれを継承する時に誤って「二帶」にしたと考えられる。すなわち、夏振宇本の底本は、周日校本・嘉靖本の共通の底本とは異なる版本であろう。

【例1-8】 第138則 「耿紀韋晃討曹操」

許昌で起きた政変を鎮圧した後、曹操は自分に反対する者を根絶するため、官僚全員を自分の本拠地である鄴郡に連行する。

夏	夏侯惇將五家老小宗族皆斬於市。王必箭瘡發 而死。 將百官起 赴鄴群。
周	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○鎗○ ○○。 ○○○○ ○○那。
嘉	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○ ○○。 ○○○○ ○○郡。
葉	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○ ○○。惇○○○○發○○×
劉	××××××××××××××××。○○○○迸裂○○。惇○○○解 ○○郡。

ここで問題になるのは、曹操の本拠地である鄴について、夏振宇本で「鄴群」、周日校本で「鄴那」と、それぞれ誤っていることである。「群」は、「郡」の誤りであり、「那」の誤りでないことは明らかである。そうすると、「群」に作る夏振宇本の底本は、「那」に作る周日校本でなく、やはり「郡」に作る別の版本であると考えたほうが自然であろう。

【例1-9】 第148則 「關雲長水淹七軍」

関羽の水攻めを受け、小舟に乗って逃げようとする龐徳の目の前に、関羽の将・周倉が現れる。

夏	上流頭一將撐 船持大筏而至、 將小船撞翻。
周	○○○○○○○一大○×××○○、 ○○舡○○。
嘉	○○○○○○○一大○×××○○、 ○○舡○○。
葉	○○○○○驅××××○○○來、當頭一衝、把○○衝○。
劉	×××周倉驅××××○○○來、當頭一衝、把○舟○番。

ここで問題となるのは、周倉が何に乗って龐徳が乗る小舟を突き倒したのか、という点である。周日校本と嘉靖本では「大船」、葉逢春本と劉龍田本では「大筏」にそれぞれ作り、どれも意味が通っている。しかし夏振宇本の「撐船持大筏」は全く理解できない。周倉は同時に「撐船」しかなら「持大筏」することは勿論できない。夏振宇本のテキストは、むしろ「大船」と「大筏」を何らかの理由で混同したように見える。とすると、夏振宇本は二十卷系統と二十四卷系統の中間段階の特徴を帯びていることになる。

【例1-10】 第237則 「姜維一計害三賢」

蜀での反乱で姜維と鐘会が殺害された後、鄧艾父子もやがて殺されることになる。(葉逢春本欠巻のため、余象斗本を引用する)

夏	被田犢一刀 、鄧艾父子死於亂軍之中。
周	○○○○指 、○○××○○○○○○。
嘉	○○○○指 、×○○○○○○○○○○。

余	○○續○○斬之、×××××××××× 其子鄧忠亦 被亂軍所殺○
劉	○○○○○砍死、×○○○○○○○○○。

この人物の姓名は、「田續」である<sup>74</sup>。余象斗本以外の諸本はすべて「田犢」に作り、おそらく相当早い段階で誤っていたであろう。鄧艾を殺したのは、余象斗本では田續本人で、周日校本・嘉靖本では田續部下の兵士であり、どれも意味が通る。しかし、夏振宇本と劉龍田本では、田續が鄧艾を刀で斬り殺した後に、「鄧艾父子死於亂軍之中」という表現があり、つまり鄧艾が二回殺されることになる。【例1-9】と同じように、夏振宇本は、二十巻系統と二十四巻系統の中間段階の特徴を帯びていると考えられる<sup>75</sup>。

以上、データ統計と個例分析を併用し、夏振宇本と周日校本との関係をはじめ、夏振宇本が二十四巻系統に占める位置づけを検証した。その検証によって、以下の事実が明らかになる。

- 1) 夏振宇本には、周日校本の誤りとは異なるものが多く見られる。つまり、夏振宇本は周日校本の翻刻ではない。
- 2) 夏振宇本には、二十巻系統と二十四巻系統のテキストを混同したテキストが見られる。その底本は現存していない、二十巻系統と二十四巻系統の中間段階の特徴をもつ版本であると想定される。
- 3) 夏振宇本には、周日校本・嘉靖本より古い特徴が多く見られる。それによって、夏振宇本の底本は、周日校本・嘉靖本の共通の祖本より古いものであると推定される。

以上、先行研究を踏まえ、『三国志演義』夏振宇本が周日校本の翻刻であるかどうかという問題を再考した。夏振宇本の底本は周日校本ではなく、二十巻系統と二十四巻系統の中間段階の特徴を持つより古い版本であり、そのため、書物としての成立時期が遅いものの、周日校本より古い部分がある。二十四巻系諸本における夏振宇本の位置づけを再考することによって、今まで十分に認識されていない夏振宇本の版本学上の価値を改めて評価されるであろう。

<sup>74</sup> 『三国志』巻28「魏書・鄧艾伝」。

<sup>75</sup> その特徴は、劉龍田本にも見えることによって、劉龍田本を代表とする二十巻簡本系も、二十巻系統と二十四巻系統の中間段階にあるのではないかと考えられる。井口千雪《2016》参照。

付考 陳翔華編『日本蔵夏振宇本三国志傳通俗演義』影印本について

夏振宇本『三国志演義』の影印本には、陳翔華氏主編『日本蔵夏振宇本三国志傳通俗演義』(国家図書館出版社、2010年)がある。陳影印本は、判読しにくい箇所加工を施し、文字の検証をよりしやすくした。しかし、その過程で、人為的なミスが生じ、新たな誤植を生じている。ここでは、蓬左文庫蔵夏振宇本の原本と陳影印本を比較し、「影印の段階で生じた誤植」を洗い出し、影印本の補充として掲げることとする。

各種の表記は以下の通りである。

- 1)「頁」「行」「字」は、誤植所在の影印本の頁数、行数、字数を示す。
- 2)原文には、行の最初や、行の中にスペースを設ける箇所もあるが、そのスペースも相応の字数とみなす。
- 3)双行の小字注の行数については、小字注二行を一行とみなし、「左／右」で区別する。
- 4)「備考」については、誤植の成因と考えられる理由を示す。使用した記号の意味するところは以下の通り。

A＝原本の軽微破損、あるいは影印の際に一部のもともとも薄い字画が写らなくなることによって、他の字に見える。

B＝原本にある汚れや、透けて見える裏の字画などが本文の字に重なり、他の字に見える。

C＝編集者が影印画像を修正した際、もともとあった字画を誤って消してしまい、他の字に見える。

D＝編集者が影印画像を修正した際、もともとなかった字画を誤って追加してしまい、他の字に見える。

No.	頁	行	字	誤	正	備考
1	148	5	22	天	矢	A
2	175	1	25	其	與	C
3	176	8	25	由	曰	B
4	181	1	25	三	王	A
5	193	2(注右)	15	?	(破損)	B
6	258	11	1	(空白)	一	A
7	286	12	22	元	兄	A
8	275	7	7	玉	王	B
9	289	1	21	筒	箇	A
10	291	4	1	士	十	B
11	296	11	18	因	困	C
12	305	10	7	合	今	B
13	307	9	2	九	札	CD

14	326	11	25	于	手	A
15	331	7	20	王	玉	A
16	336	1	10	于	干	B
17	357	6	8	今	令	A
18	371	8	1	此	飛	C
19	464	9	1	人	大	A
20	477	11	24	土	上	B
21	543	7	3	太	大	B
22	562	11	1	告	喜	C
23	602	11(注右)	1	未	去	BC
24	603	6	23	曰	田	C
25	605	12	8	比	北	C
26	686	1	7	玉	王	B
27	687	11	14	目	日	B
28	819	6	1	改	敢	A
29	822	3	15	馬	馮	C
30	832	1	7	伏	仗	A
31	911	2	8	一	二	A
32	993	5	7	仁	位	C
33	1042	11	25	一	二	A
34	1077	6	15	今	令	A
35	1097	10	25	廷	延	A
36	1131	11	4	已	巴	C
37	1162	10	3	人	大	A
38	1165	2	6	千	平	A
39	1167	4	2	全	全	A
40	1171	7	19	此	些	A
41	1184	6	4	目	自	C
42	1201	3	15	工	王	A
43	1201	7	19	三	王	AC
44	1202	7	8	工	王	A
45	1219	6	22	甲	申	C
46	1220	11	1	什	保	C
47	1220	12	23	目	自	C

48	1221	5	16	情	精	A
49	1257	12	3	[木逮]	捷	B
50	1262	8	13	未	朱	C
51	1265	6	9	水	氷	C
52	1270	11	5	追	遣	CD
53	1275	1	7	八	六	C
54	1306	10	23	(空白)	一	A
55	1345	9	23	柯	祠	D
56	1362	12	1	土	王	A
57	1364	2	25	不	丕	C
58	1364	10	3	目	自	C
59	1371	5	17	日	白	A
60	1384	4	19	人	大	A
61	1422	8	10	包	苞	A
62	1441	10	14	上	主	AC
63	1449	7	4	人	大	AC
64	1453	12	19	包	苞	C
65	1467	12	13	工	王	AC
66	1470	5	17	土	上	B
67	1481	7	20	之	芝	C
68	1649	12	21	伯	拍	C
69	1660	7(注左)	13	不	公	BC
70	1675	5	18	折	拆	A
71	1709	12	1	上	生	D
72	1710	5	1	發	潑	C
73	1790	5	21	各	谷	BC
74	1838	11	14	杠	柱	A
75	1852	1	21	三	立	C
76	1886	12	3	儉	儉	C
77	1924	11	3	文	艾	AC
78	1949	9	14	一	二	A
79	2011	12	6	王	玉	A
80	2047	12	3	不	木	A

付表1 「吉家氏蔵」印の使用状況

No.	書名	成立時期等	目録	目録掲載頁	宗恂没年
1	論語通	元刊	内閣	32	前
2	宋史節要	朝鮮刊古活字	内閣	78	不明
3	宋史闡幽	明弘治九年序刊	内閣	100	前
4	己卯録	朝鮮萬曆十一年刊	内閣	103	前
5	一統路程圖記	明隆慶四年序刊	内閣	105	前
6	新刊校正京本孫武子兵法	明嘉靖刊	内閣	178	前
7	孫武子十三篇講意	明嘉靖刊	内閣	178	前
8	孫子集註	明萬曆十七年序刊	内閣	178	前
9	素問鈔補正	明萬曆十二年刊	内閣	189	前
10	新刻素問心得	明萬曆二十四年序刊	内閣	190	前
11	圖註八十一難經	明嘉靖刊	内閣	190	前
12	新刊銅人鍼灸經	明嘉靖刊	内閣	191	前
13	圖註王叔和脈訣	明正德五年刊	内閣	193	前
14	脈證傳授心法	江戸初寫	内閣	193	不明
15	新刻太素心要	明刊	内閣	193	不明
16	三因極一病證方論	江戸寫 多紀元簡手 跋	内閣	195	後
17	新刻心印紺珠經	明萬曆刊	内閣	195	不明
18	新刊明醫雜著	明弘治十六年序刊	内閣	199	前
19	程齋醫抄撮要	明嘉靖十二年刊	内閣	200	前
20	活人心統	江戸初寫	内閣	201	不明
21	新編傷寒類證便覽	明弘治十二年刊	内閣	205	前
22	重編傷寒必用運氣全書	明正德八年刊	内閣	205	前
23	嬰童類萃	江戸寫	内閣	212	不明
24	新刊太乙祕傳急救小兒推拿法	明萬曆刊	内閣	212	不明
25	痘疹心書	江戸初寫 多紀元胤 手跋	内閣	215	後
26	程氏釋方	明嘉靖三十年序刊	内閣	222	前
27	新刻恠證奇方	江戸初寫	内閣	223	不明
28	保生餘録	明嘉靖十三年序刊	内閣	226	前
29	本草權度	明嘉靖十四年跋刊	内閣	228	前

30	新刊太醫院校正京本珍珠囊藥性賦	明萬曆刊	内閣	229	不明
31	新刻藥鑑	明萬曆二十六年刊	内閣	229	前
32	新刊博覽古今經史皇極經世書說	明嘉靖十四年刊	内閣	243	前
33	自警編	朝鮮刊古活字	内閣	263	不明
34	自得語 <sup>76</sup>	明刊	内閣	263	不明
35	潛溪集	元至正刊	内閣	344	前
36	大明一統賦	朝鮮刊古活字	内閣	351	不明
37	襟日樓草	明萬曆十九年序刊	内閣	362	前
38	赤城詩集	明弘治十五年跋刊	内閣	424	前
39	修製纂類	吉田宗恂寫本	富士川	68	前
40	本草序例抄	寛永十八年版	上野	85	後
41	本草和名私記 <sup>77</sup>	寫本	上野	87	不明
42	大坂物語	元和元年刊	国立	42	後
43	由願文稿	吉田由願自筆草稿	天理	244	後
44	經驗小品方不分卷即家祕小品方	吉田如雲 <sup>78</sup> 著 子息 由願 <sup>79</sup> 補 子息如春 <sup>80</sup> 再補 自筆稿本	杏雨	231	後
45	二十四孝	慶長頃刊 嵯峨本	成實堂	533	前

※蔵書目録の記号について

「内閣」=『改訂内閣文庫漢籍分類目録』(内閣文庫、1971年)

<sup>76</sup> 卷首に作者の朱懷吳とその同僚と思しき何望海の序文があり、両序共に「樵川の役所にて」との旨の内容が記されている。樵川とは、福建の邵武県に流れる川であり、すなわち朱懷吳がこの『自得語』を著した時期に、邵武県の県治につとめていたことがわかる。朱懷吳については「錢塘人、天啓間任」(文淵閣四庫全書本乾隆『福建通志』卷25)とあり、その前任者の蘇萬傑については「餘姚人、萬曆末由舉人任同知」(光緒『重纂邵武府志』卷15)とある。また、崇禎元年(1628)の奏摺に「邵武県署印同知朱懷吳」という署名が見られる。以上の情報から見れば、朱懷吳が邵武県同知を務めていた時期、すなわち『自得語』の刊行時期は、およそ万曆末期から崇禎初期(言い換えれば、吉田宗恂没後)にあると推定される。

<sup>77</sup> 表紙に「法印如見先生著」と記されている。如見とは宗恂の子である吉皓の法名である。

<sup>78</sup> 如雲は吉田宗恬(1657~1720)の法名である。宗恬は第5代意安で、宗恂のひ孫に当たる(『新訂寛政重修諸家譜』第七卷229-230頁)。

<sup>79</sup> 『新訂寛政重修諸家譜』には「吉田由願」なる人物が見当たらないが、「吉田如雲著、子息由願補、子息如春再補」という記述から見ると、由願は宗恬の子、宗愉の父に当たるはずである。宗恬の子には宗怡(1689~1724)と宗恂(1697~1723)がいたが、兄弟ともに早死したため、親族の子である宗愉が宗恂の養子として迎え入れられて第7代意安となった(『新訂寛政重修諸家譜』第七卷230頁)。由願は宗愉の父であれば、宗恂であろうと思われる。しかし、その兄の宗怡の著書に、『韓客筆語由願餘稿』という書名が見られる。また、京都大学富士川文庫蔵の如見子(吉皓)編・由願子補編『重編本草和名』序には「由願子田怡」と署されている。「田怡」はすなわち「吉田宗怡」であると考えられる。いずれにせよ、由願は吉田意安の一族で、宗恂の玄孫に当たることは確かである。

<sup>80</sup> 如春は吉田宗愉(1702~1774)の法名である。宗愉は第7代意安で、宗恂の養子(『新訂寛政重修諸家譜』第七卷230頁)。

「富士川」=『京都帝国大学富士川本目録』(京都帝国大学附属図書館、1942年)

「上野」=『改定増補国立国会図書館支部上野図書館所蔵本草関係図書目録』(つかさ書房、1976年)

「国立」=『国立国会図書館所蔵古活字版図録』(汲古書院、1989年)

「天理」=『天理図書館稀書目録』和漢書之部第三(天理図書館、1960年)

「杏雨」=『杏雨書屋蔵書目録』(武田科学振興財団、1982年)

「成簀堂」=『お茶の水図書館蔵新修成簀堂文庫善本書目』(お茶の水図書館、1992年)

附表2 夏振宇本正誤表

○=「同じく誤」 △=「誤にして不一致」 ×=「比較不可」

	則	則題	頁	行	誤	正	周	葉	劉
1		修序	4	4	噓	噓		×	×
2			5	5	手	首	○	×	×
3		庸序	11	6	()魯史也	春秋魯史也	○	×	×
4			13	1	詔	昭		×	×
5	1	祭天地桃園結義	43	2	曉	曉			
6			43	9	楊	楊		○	○
7			47	4	珠	硃			×
8	2	劉玄德斬寇立功	54	9	捧	棒	○	○	
9	3	安喜縣張飛鞭督郵	59	4	三	王			
10			63	1	欄	攔	○	○	
11	5	董卓議立陳留王	84	4	坡	披			×
12	7	廢漢帝董卓弄權	99	4	特不	待不	○		△不待
13	8	曹孟德謀殺董卓	104	2	羸	羸	○	×	×
14	9	曹操起兵伐董卓	109	3	到	倒	○	×	×
15			113	1	烏程侯() 太守	烏程侯長 沙太守	○		
16			114	11	(空白)	互相			
17			116	10	枕	枕			
18	10	虎牢關三戰呂布	126	7	捌	槩		○	○
19	12	袁紹孫堅奪玉璽	136	4	住	往			
20			136	8	薇	微			
21			137	1	箱	鑲	○	○	○
22			137	12	箱	鑲	○	○	○
23			140	7	楊	揚		○	○
24			141	4	劉勝	劉叡	○	×	×
25			141	8	英度	異度	○	○	○
26	13	趙子龍磐河大戰	148	7	墻	/	○		×

27	15	司徒王允說貂蟬	159	1	歷	理	○	○	○
28			166	7	車	卓			
29	17	王允定計誅董卓	180	2	黃	皇			
30			180	7	十日下猶 不生	十日卜不 得生	○	△十日分 龍不生	△十日分 龍不生
31	18	李傕郭汜寇長安	192	2	馬	焉		×	×
32	19	李傕郭汜殺樊稠	195	7	欄	攔			×
33			197	9	力	立	×	×	×
34	21	劉玄德北海解圍	218	8	楊	揚	○		○
35			218	10	楊	揚	○		
36	22	呂溫侯濮陽大戰	223	6	潛住	僭任	○	△僭住	△僭住
37	23	陶恭祖三讓徐州	236	4	悟	誤			
38	24	曹操定陶破呂布	242	10	賊驅牛至 塢中	賊驅牛至 塢外	○	○	×
39			243	11	欄	攔		×	×
40	25	李傕郭汜亂長安	247	7	累及關張	累及張邈	○		
41	26	楊奉董承雙救駕	262	5	皆	/	○	×	×
42	28	呂布月夜奪徐州	276	1	競	競			
43			276	2	競	競		×	×
44			276	5	競	競			
45			276	6	正	鎮			
46			280	12	昌	暢			
47	29	孫策大戰太史慈	285	8	河	阿	○	○	○
48			286	12	楊	揚	○		
49			286	12	河	阿	○		○
50			288	10	楊	揚		○	×
51			288	12	河	阿	○		○
52	30	孫策大戰嚴白虎	294	5	河	阿	○		○
53			294	9	河曲	曲阿	△曲河	△曲河	△曲河
54			298	10	河	阿	○	○	○
55	31	呂奉先轅門射戟	307	9	札	扎		×	×
56			307	12	折	拆		×	×
57			314	11	未	/	○	×	×
58	32	曹操興兵擊張繡	326	11	致	秩	○	×	×

59	33	袁術七路下徐州	329	3	土	上			×
60			337	2	疆	疆			×
61	34	曹操會兵擊袁術	339	3	一	二			
62			339	3	楊	揚	○	×	×
63			341	3	白	自		×	×
64			342	2	公	宮			
65			342	8	目	日			×
66	36	夏侯惇拔矢啖睛	357	9	下邳	小沛	○	×	×
67	37	呂布敗走下邳城	362	5	欄	攔			
68			363	4	沛	邳	○		
69			365	5	欄	攔			
70	38	白門樓曹操斬呂布	370	2	范	許		×	×
71			371	9	第	弟			×
72			372	4	欄	攔			×
73			376	2	操坐在() 門樓上	操坐在白 門樓上	○	×	×
74	39	曹孟德許田射鹿	382	6	州	川			
75	40	董承密受衣帶詔	391	10	到	倒	○	×	×
76	41	青梅煮酒論英雄	400	5	知()變化 否	知龍之變 化否	○	×	×
77	43	曹公分兵拒袁紹	415	12	受	授	○	○	○
78			417	2	受	授		○	○
79			418	3	受	授		○	○
80	44	關張擒劉岱王忠	424	7	捧	棒	○	○	×
81			424	7	欄	攔			
82	46	曹孟德三勸吉平	438	2	枷	枷	○		
83	47	曹操勒死董貴妃	444	5	受	授		○	○
84	49	張遼義說關雲長	451	11	公與惇	惇與公	○		
85	50	雲長策馬刺顏良	460	3	厚	腹			
86			463	9	受	授		○	
87			468	6	受	授		○	
88	51	雲長延津誅文醜	469	1	受	授			
89			469	9	受	授			

90	54	關雲長五關斬將	496	12	榮	榮		△熒	○2
91			497	1	榮	榮		△熒	○
92			498	4	榮	榮		△熒	○
93	55	雲長擂鼓斬蔡陽	506	9	欄	欄			
94			510	12	禮	理	○		
95			511	5	二	上			
96	59	曹操官渡戰袁紹	543	8	榮	榮	○	△熒	○
97	62	劉玄德敗走荊州	574	6	欄	欄		×	×
98			576	3	胃	胄			
99	63	袁譚袁尚爭冀州	579	2	欄	欄		×	×
100	65	曹操引兵取壺關	598	10	兢	競			×
101			602	1	蒸	烝	○	○	○
102			606	10	一	二			
103	67	劉玄德襄陽赴會	618	2	或	彀			
104			624	6	因	困			
105	68	玄德躍馬跳檀溪	628	9	欄	欄			
106	69	劉玄德遇司馬徽	634	3	裁	栽		×	×
107	71	徐庶定計取樊城	643	3	有	在	○		
108	73	劉玄德三顧茅廬	657	1	胃	胄			
109	74	玄德風雪訪孔明	667	2	材	村			
110			672	8	欄	欄			
111	75	定三分諸葛出茅廬	679	10	非	飛	○	×	×
112			679	12	非	飛	○	×	×
113	76	孫權跨江破黃祖	682	10	遜	績			
114			682	11	凌	駱			
115			682	11	吳	吾	○	×	×
116			685	2	王	主	○		
117			686	1	吳王	吳主	○	△吾王	
118	77	孔明遺計救劉琦	693	7	欄	欄		○	
119	78	諸葛亮博望燒屯	707	8	欄	欄		×	×
120			708	3	欄	欄			
121	79	獻荊州王粲說劉琮	714	8	令	今			
122			714	8	盲	育	○	×	×
123	80	諸葛亮火燒新野	727	1	者	楮		×	×

124			733	1	非為人也	？	○	○	○
125	81	劉玄德敗走江陵	739	8	引五()騎	引五百騎	△萬		
126			742	9	欄	攔			
127			744	12	皆	背			
128			746	1	插	綽			
129	82	長坂坡趙雲救主	747	2	持	恃		△是	△是
130			750	9	搨	棚		○	○
131	83	張益德據水斷橋	755	4	軍	操			
132			761	1	搆	構		×	
133			761	10	欄	攔		×	×
134	84	劉玄德敗走夏口	763	7	人	八			
135			763	7	面	而	○		
136			774	6	度	夏			×
137	85	諸葛亮舌戰群儒	775	8	約	紂			
138			775	10	卯	卯	○		○
139			786	12	肱	紘		△紘	△紘
140	87	諸葛亮智說周瑜	792	10	疆	疆		○	
141			793	7	辨	辯		○	○
142	89	周瑜三江戰曹操	806	9	臂	背	○		
143	91	諸葛亮計伏周瑜	823	2	敬	散			
144			826	3	措	措		×	×
145	92	黃蓋獻計破曹操	827	5	全	前			
146			836	8	辨	辯		○	○
147	93	關澤密獻詐降書	837	4	投	拔			
148	94	龐統詐獻連環計	841	10	某知士元	？		△弟聞吾言非師也	×
149			860	3	用船一隻 ()隨徐盛	用船一隻 一百人隨 徐盛	○		
150	97	七星壇諸葛祭風	862	11	若不	不若	○	×	×
151	99	曹操敗走華容道	874	3	公義	義公		○	×
152			879	11	全	前			
153	100	關雲長義釋曹操	880	4	沿淺	踏踐？			×
154			880	9	加	？	○	×	×

155			880	9	門	問			×
156			883	8	欄	攔		○	×
157			892	7	合	會	○		×
158			894	2	欄	攔			
159	101	周瑜南郡戰曹仁	894	3	欄	攔		○	
160			895	5	續	績	○		
161			895	6	續	績	○		
162	102	諸葛亮一氣周瑜	900	8	苦無	並無	○	○	
163	103	諸葛亮傍略四郡	909	3	欄	攔	○	×	×
164			911	10	龍	隆			
165			914	11	龍	隆			
166	104	趙子龍智取桂陽城	915	1	此	些			×
167			915	7	龍	隆			
168	105	黃忠魏延獻長沙	923	1	欄	攔			×
169			926	12	邊	遼			
170	106	孫仲謀合肥大戰	928	4	太史慈入帳()	太史慈入帳云	○	×	×
171			930	10	亨	享	○		○
172			930	11	亨	享	○	×	×
173	107	周瑜定計取荊州	937	1	某詔	甚話			
174			939	8	喏	諾	○	×	×
175			939	11	郡	徐	○	×	
176			940	1	太	/	○		
177	108	劉玄德娶孫夫人	941	8	人	大		×	×
178			942	5	大	太			
179			945	6	听	所		×	×
180			950	3	折	拆	○		×
181			953	12	欄	攔			×
182	109	錦囊計趙雲救主	954	1	錯	措	○		
183			954	2	欄	攔			×
184			954	4	折	拆	○		
185	110	諸葛亮二氣周瑜	956	5	欄	攔			×
186			967	5	定	楚			
187	111	曹操大宴銅雀台	967	11	點	典			

188	113	諸葛亮大哭周瑜	983	12	濟	際	○	○	
189	114	來陽縣張飛薦龐統	985	9	來	未			
190	115	馬超興兵取潼關	997	6	枕	枕	○		
191			998	2	玩	玩			
192			998	5	名	明			×
193			1002	9	捧	棒	○	×	×
194	118	馬孟起步戰五將	1021	4	遷	選			
195			1021	9	欄	欄			
196			1027	3	棋	祺	○		
197	119	張永年反難楊修	1031	1	辨	辯		○	×
198			1032	8	辨	辯		○	×
199			1033	1	曰	田			
200			1033	12	名	明		○	○
201			1037	6	捧	棒	○		○
202			1040	4	松亦()朝 暮趨侍	松亦欲朝 暮趨侍	○		
203	120	龐統獻策取西川	1043	11	西閩中巴 人	巴西閩中 人	○	×	×
204			1049	8	矢	失			×
205			1051	9	沮	江	○		×
206			1053	11	父	母	○	×	×
207	121	趙雲截江奪幼主	1062	4	半	畔	○		
208			1062	7	缸	缸		×	×
209			1062	12	[日石]	昭			
210			1063	11	付	副	○		×
211	122	曹操興兵下江南	1066	3	諧	暗		×	×
212			1067	2	抹	秣			×
213			1067	4	不	百			
214			1067	5	假	暇	○	△穀	×
215			1067	10	銘	名		×	×
216	125	落鳳坡箭射龐統	1092	12	王	主			
217			1093	2	欄	攔			×

218			1098	9	報說關平 來到眾官 皆驚主公 有書	報說關平 來到主公 有書眾官 皆驚	○	×	×
219	127	孔明定計捉張任	1108	9	二帶	一帶	×		×
220			1115	6	捷	捷			
221	128	楊阜借兵破馬超	1118	8	三	主			
222			1123	2	子	事			
223	131	關雲長單刀赴會	1143	2	上	生			×
224	133	曹操漢中破張魯	1160	4	包	褒	○	△巴	
225			1160	7	包	褒	○	△巴	
226			1160	7	一	二			×
227	135	甘寧百騎劫曹營	1178	7	徐	往			×
228			1180	9	鉛	船			
229	136	魏王宮左慈擲盃	1191	8	人	羊	○		
230			1191	9	奂	喚			×
231	137	曹操試神卜管輅	1196	2	暗取()卵 蜂巢蜘蛛	暗取燕卵 蜂巢蜘蛛			×
232			1198	10	二	三			
233			1200	7	比	北			○
234			1200	12	辦	辨	○		△卞
235	138	耿紀韋晃討曹操	1203	9	金德禕	金德偉		△金偉	
236			1206	6	群	郡	△那	×	
237			1207	4	西	中	○	○	×
238			1207	8	辦	辨	○		×
239			1207	9	辦	辨	○		
240			1207	9	同	銅		○	○
241			1207	10	辦	辨	○		
242	139	瓦口關張飛戰張 郃	1209	4	同	銅		○2	○2
243			1209	5	同	銅		○	○
244			1209	9	同	銅		○	○
245			1209	12	同	銅		○2	○2
246			1210	1	同	銅		○	○
247			1210	2	同	銅		○	○

248			1211	3	同	銅		○	○
249			1211	7	大	蕩			
250			1212	2	同	銅		○	○
251			1212	6	到	倒	○		×
252			1212	9	同	銅		○2	○2
253			1213	1	同	銅		○	○
254			1213	3	同	銅		○	○
255	140	黃忠嚴顏雙建功	1221	8	幾	機			×
256			1227	12	辦	辨	○		
257			1231	1	齧()乃受 五辛之器	齧白乃受 五辛之器			
258	141	黃忠誠斬夏侯淵	1231	9	折	拆		×	×
259			1236	7	揮	揮			×
260			1237	1	武	式		×	
261			1237	6	欄	攔	○	×	
262			1237	11	自	黃			
263			1237	12	易	傷			
264	142	趙子龍漢水大戰	1239	5	我等	等我	○	×	×
265			1240	7	欄	攔			
266			1240	11	欄	攔			
267			1244	5	銅	鋼?	○		×
268	144	曹孟德忌殺楊修	1257	9	手	首			
269	145	劉備進位漢中王	1265	12	令	今			×
270	146	關雲長威震華夏	1272	2	安定	南安	○		×
271			1279	7	安南	南安	○		×
272			1280	1	起	超	○		
273	147	龐德抬櫬戰關公	1284	1	隋	隨		○	×
274			1284	3	安南	南安			×
275			1291	3	撐船持大 筏	?			
276	148	關雲長水淹七軍	1292	1	悵	帳			×
277			1292	6	悵	帳			
278			1303	7	毋	毋			×
279	150	呂蒙用智取荊州	1306	8	[木足]	捉			×

280			1308	11	折	浙		×	×
281			1309	6	下	命	○		
282	151	關雲長大戰徐晃	1312	5	來	乘	○	×	×
283	152	關雲長夜走麥城	1321	2	撞	撞	○	×	×
284			1324	10	理	瑾			
285	153	玉泉山關公顯聖	1332	3	鎮國()長 老	鎮國寺長 老	○	○	
286			1332	3	是()普靜	是時普靜			×
287	155	曹操殺神醫華佗	1344	4	第	弟			
288			1346	11	皇	王			×
289			1348	12	伺	何			
290			1349	3	天下無此 鼠輩()	天下無此 鼠輩之無 禮	○		
291	156	魏太子曹丕秉政	1352	8	林	休		×	×
292			1353	7	難	歎	○		
293	157	曹子建七步成章	1360	10	在	任			
294			1361	10	捧	棒	○		○
295			1361	10	十	千			×
296			1363	8	由	[土魁]	○	△凶	△凶
297	158	漢中王怒殺劉封	1369	5	文	獻	○	×	×
298			1369	6	扶	抉		×	×
299			1371	2	辨	辯		×	×
300			1376	4	州	川			×
301			1376	7	州	川			×
302	159	廢獻帝曹丕篡漢	1377	12	西	西			
303			1381	2	楷	階	○	○	○
304			1382	10	楷	階	○	○	○
305	164	關興斬將救張苞	1420	8	朱然()引 二萬五千 馬軍宜都 界口下寨	朱然引二 萬五千水 軍於大江 之中結營 孫桓引二 萬五千馬			

						軍宜都界 口下寨			
306			1420	12	一	二		×	×
307			1423	6	潭	譚	○		×
308	165	劉先主猊亭大戰	1431	6	干	千			
309			1434	11	第	等			×
310	166	陸遜定計破蜀兵	1444	6	符	苻	○	○	○
311	167	先主夜走白帝城	1450	12	欄	攔		×	×
312	169	白帝城先主托孤	1462	1	王	主	○		×
313			1463	8	曄	曄			×
314			1465	3	仁	休	○		
315			1469	3	鑲	驤			×
316	172	泛龍舟魏主伐吳	1487	7	王	主	○		×
317			1492	9	曄	曄			○
318	174	諸葛亮一擒孟獲	1510	4	廂	鑲	○	×	×
319	175	諸葛亮二擒孟獲	1514	11	兩	四			
320	176	諸葛亮三擒孟獲	1527	10	犍	健	○		
321	178	諸葛亮五擒孟獲	1534	1	坳	坦		×	
322			1538	5	吸	汲			
323	179	諸葛亮六擒孟獲	1548	5	欄	攔		×	×
324	180	諸葛亮七擒孟獲	1562	1	欄	攔	○		×
325	181	孔明秋夜祭瀘水	1570	10	岸	案	×		×
326			1571	6	皇	黃		×	×
327			1571	9	[彳衰]	猿			△狼
328	182	孔明初上出師表	1577	12	將軍大	大將軍	○		
329	183	趙子龍大破魏兵	1592	7	神武將() 董禧	神武將軍 董禧			
330	184	諸葛亮智取三郡	1600	11	欄	攔		×	×
331	185	孔明以智服姜維	1608	7	禮	理	○		
332	186	孔明祁山破曹真	1615	10	禮	理	○	×	×
333			1618	7	蜀	魏	○		×
334	188	司馬懿智擒孟達	1628	6	今	令		×	×

335	190	孔明智退司馬懿	1649	12	岸	案			
336			1650	6	然	說			×
337			1652	10	心	必		×	×
338			1656	7	王	主			
339	192	陸遜石亭破曹休	1665	1	雜霸	雜號	○	△雄號	△雄虎
340			1665	3	楊	揚		○	
341			1666	5	楊	揚	○	×	×
342	195	孔明遺計斬王雙	1690	7	人	日			
343	199	諸葛亮四出祁山	1721	12	退	追		×	×
344	201	諸葛亮五出祁山	1742	10	杖	杖			×
345	203	諸葛亮六出祁山	1762	9	雅	稚	○	○	×
346	205	孔明火燒木柵寨	1782	12	悄悄	悄悄	○	×	×
347	206	孔明秋夜祭北斗	1799	10	刀	刁			×
348	207	孔明秋風五丈原	1802	9	悵	帳		×	
349			1804	2	盲	盲			
350			1805	10	禱	偉			○
351			1805	11	晉平侯陳壽	晉平陽侯相陳壽	×	×	×
352			1806	11	徽	微	○	○	○
353	208	死諸葛走生仲達	1820	9	枕	枕			
354			1821	8	欄	攔		○	
355	209	武侯遺計斬魏延	1829	3	受	授	○		
356			1831	10	霽	濟		×	×
357			1832	4	候	侯		×	
358	210	魏折長安承露盤	1833	11	折	拆	○	○	
359			1833	12	卻說()東吳為使者	卻說欲往東吳為使者	○		×
360			1834	3	王	主			×
361			1834	12	王	主	○	×	×
362			1836	12	晃	冕			×
363			1842	10	枕	枕			×
364	211	司馬懿破公孫淵	1845	8	宴	晏	○		△安
365			1849	11	張	裴			

366			1853	11	欄	欄		×	×
367	214	姜維大戰牛頭山 一犯中原	1878	11	一	二			×
368	215	戰徐塘吳魏交兵	1884	7	王	主			×
369			1889	9	( )姜維進 兵	使/求姜維 進兵			
370	217	姜維計困司馬昭 二伐中原	1900	4	欄	欄		×	×
371	218	司馬師廢主立君	1911	8	大將( )司 馬師	大將軍司 馬師			×
372			1911	10	楊	揚		○	○
373	219	文鴛單騎退雄名	1911	12	名	兵			
374			1912	2	間	聞		△文	×
375			1916	8	一	二		×	
376	220	姜維洮西敗魏兵 三犯中原	1920	9	楊	揚		○	○
377	221	鄧艾段谷破姜維	1933	6	追	退	△迫	×	×
378	222	司馬昭破諸葛誕	1940	9	王	主		×	×
379			1941	4	楊	揚		×	○
380			1941	6	誕	使		×	
381			1942	6	楊	揚		○	○
382			1943	1	楊	揚		○	○
383			1943	2	灑	靚	○	△靚	
384	223	忠義士詮死節	1945	4	忠義士( ) 詮死節	忠義士于 詮死節			△銓
385			1948	11	淋	霖	○		
386			1949	1	比	北		△(脫字)	
387			1949	1	入	出		△(脫字)	
388	225	孫綝廢主立孫休	1960	9	琳	綝	○	○	
389			1961	2	琳	綝			
390			1961	3	琳	綝	○	○	
391			1961	5	琳	綝	○	○	
392			1961	6	琳	綝	○2	○2	
393			1961	8	琳	綝	○	○	

394			1961	11	琳	緜	○	○	
395			1962	3	琳	緜	○2	○2	
396			1962	8	琳	緜	○	○	
397			1962	10	琳	緜	○	○	
398			1963	4	琳	緜	○	○	
399			1963	6	琳	緜	○	○	
400			1963	7	琳	緜	○	○	
401			1963	8	琳	緜	○	○	
402			1963	10	琳	緜	○2	○2	
403			1964	1	琳	緜	○	○	
404			1964	3	琳	緜	○	○	
405			1964	7	琳	緜	○	○	
406			1964	9	琳	緜	○	○	
407			1964	10	琳	緜	○	○	
408			1964	12	琳	緜	○	○	
409			1965	1	琳	緜	○	○	
410			1965	2	琳	緜	○	○	
411			1965	3	琳	緜	○2	○2	
412			1965	5	琳	緜	○	○	
413			1965	6	琳	緜	○3	○3	
414			1965	7	琳	緜	○	○	
415			1965	8	琳	緜	○	○	
416			1965	9	琳	緜	○	○	
417			1965	10	琳	緜	○	○	
418			1965	11	琳	緜	○	○	
419			1966	3	琳	緜	○	○	
420	227	司馬昭南闕弑曹髦	1974	12	一	二		×	×
421	228	姜伯約棄車大戰	1983	9	王	主	○	×	×
422		七犯中原	1984	12	鄧將	鄧將軍		×	×
423	230	姜維避禍屯田計	1995	7	用	困/圍			
424			2000	6	楊	揚	○	○	○
425	231	鐘會鄧艾取漢中	2007	11	陽安門	陽安關			△陽平關

426	232	姜維大戰劍門關	2010	3	帳	帳	○	×	
427	234	諸葛瞻大戰鄧艾	2026	12	里	理	○		
428			2030	8	王	主	○	×	×
429			2030	9	王	主	○	×	×
430	235	蜀後主輿櫬出降	2041	9	婁桑	樓桑	○	○	△樓台
431	237	姜維一計害三賢	2050	8	艾	瓘			
432			2050	9	移	夷			
433			2053	2	捧	棒			
434			2053	4	捧	棒			×
435			2055	5	犢	續	○2		○
436			2055	6	犢	續	○		×
437			2055	8	犢	續	○		○
438			2057	2	辨	辯	○	×	×
439			2057	6	王	主		×	×
440			238	司馬氏復奪受禪 臺	2059	1	戈	弋	○
441	2059	2			戈	弋	○	×	×
442	2059	5			戈	弋	○2	×	×
443	2059	9			戈	弋	○	×	×
444	2059	11			戈	弋	○	×	×
445	239	羊祜病中薦杜預	2071	6	枯	祜		×	×
446			2078	8	王	主	○	×	×
447	240	王濬計取石頭城	2084	12	[𠂔張]	張			
448			2086	9	要	腰	○	×	×
449			2091	4	擢	權			
450			2091	7	州	川			
451			2091	10	丕叡芳髦	/			

## 第二章 夷白堂本

本章では、夷白堂本について検証する。夷白堂本は、二十四巻系唯一の小型本で、内容の面においても大幅に簡略化が施されている。内容の豊富さを特徴とする二十四巻系において、このような携帯に特化した版本は他に見ない。近年、『三国志演義』版本の研究においては、比較的後期で新型の版本として注目を集め、夷白堂本の価値も再認識されると考えられる。

### 第1節 基本情報・保存状態

まずは、夷白堂本の基本情報及び保存状態を確認する。明夷白堂刊『新鐫通俗演義三國志傳』二十四巻は、現在知られる限り、慶應義塾大学図書館蔵本のみ現存している。慶應蔵本は、巻 1・3・12・13 が欠けており、24巻のうち20巻が保存されており、10冊に再装丁されている。

右の表で示すとおり、現存しない四巻は、夷白堂本が再装丁された際にすでになくされており、現存の20巻がそのまま10冊に装丁されている。ちなみに、このような、二冊を一冊に装丁する作業は、慶應義塾大学図書館によるものではないらしく<sup>81</sup>、おそらく慶應に寄贈される前に、すでに再装丁されていたと推測される。

夷白堂本は、半葉約128mm×81mm、版框約 105mm×65mmと、現在知られる二十四巻本において最小である。本来であれば、二十四巻系は、内容が豊富で、紙幅が大きく、印刷の質が高いという点を特徴にしているが、このような小型本は非常に珍しいものである。

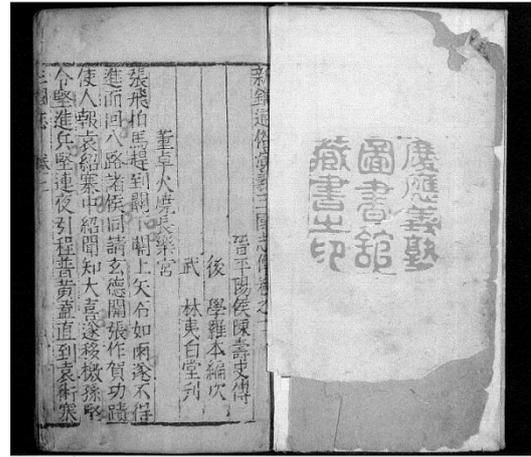
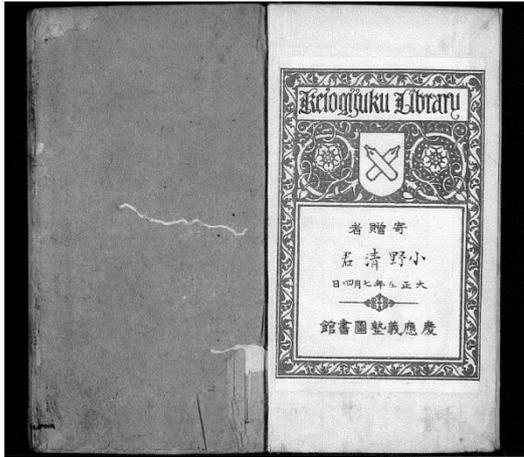
書名は、「新鐫通俗演義三國志傳」(巻二)、「新鐫通俗三國演義便覽」(巻四、五、十、十一、十七、十八、廿一、廿二、廿三、廿四)、「新鐫通俗演義三國便覽」(巻十六、廿)、「新鐫三國志傳通俗演義」(巻十九)である。また、巻九には書名が題されておらず、巻六、十四、十五は首葉が現存していないため、書名を確認できない。また、巻一が現存していないため、序文のありなしは確認できない。

中表紙に、「寄贈者 小野清君 大正五年七月四日 慶應義塾図書館」と書かれるシールが貼られており、裏には、「慶應義塾図書館蔵書之印」の朱文印が捺されている。

版式は、半葉に9行、行に17字(たまに18~19字)、版心に「三国志」としている。9行17字という形式は、嘉靖本に一致している。

冊	巻	冊	巻
1	2	6	15
	4		16
2	5	7	17
	6		18
3	7	8	19
	8		20
4	9	9	21
	10		22
5	11	10	23
	14		24

<sup>81</sup> 慶應義塾大学図書館・貴重書室の山田氏の談。



本書の刊行者である「武林夷白堂」について、中川諭(1995)は杜信孚「明代版刻綜録」を引用し、銭塘人楊爾曾(字は聖魯、号は雉衡山人、夷白主人)を紹介し、万暦三十年代に活躍した人物と説き、この夷白堂本『三国志演義』も万暦三十年後半頃に刊行されたと推測する。氏のこの説を採れば、夷白堂本の成立時期は、万暦二十年代頃に成立した周日校諸本・夏振宇本より遅れると考えられる。

また、卷廿一の卷首には、小字の「徽郡原版」と記されている。この点について、金文京(2020)は、「夷白堂楊爾曾は徽州の出版界と関係あり、かつ小説創作の経験あり、「徽州原版」を入手し、以上の措置を施したのは、楊爾曾の主意に出るか」と説く。

夷白堂本は、かつて悪い環境で保存されていたらしく、欠葉・破損などの現象は非常に激しい。以下、その状況を紹介する。

【欠葉】卷四(75b以降)、卷六(1~12)、卷一四(1a、78)、卷一五(1~14)、卷一九(86b)、卷廿(87以降)、卷廿一(72a、73b以降)、卷廿二(85以降)、卷廿三(63、69以降)。

【破損】破損して一部の文字が判読しにくい葉：

卷	葉
2	48、70、70、71
4	乙、又乙、5、27、57、65、74、75
5	1、70
6	13~23、61、75
7	1、15、37~40、51、67、76、77、78
8	34、35、50
9	1~8、14、66、67、68
10	1
11	1、2、59、78
14	3、16、18、22、57、72~79、77
15	15~29、65

16	36
17	8、56、64
18	69～70
19	1、18、20、42、46、84、85、86
20	1～3、13
21	1、2、67
22	1、4、14
23	8、14、48
24	28～36、42～51、49～55、62、64～75、76、77

夷白堂本は、所蔵元の慶応義塾大学によって修理・整理され、2020年に慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクションで公開されている。また、中国国家図書館出版社による影印本も出版される予定である。本研究の検証は、筆者が2017年に調査した際に入手した写真及び手写テキストによるものである。

慶応義塾大学が整理する際、一部乱丁の葉を入れ替えるなどの作業を行った。そのため、現在公開されている写真資料は、筆者が調査した際と異なる場合がある。ここではとりあえず、調査当時に作成した頁数一覧表を「付表2」に掲げる。

以上、夷白堂本の基本情報を紹介した。次節から、夷白堂本を慶應義塾に寄贈した小野清という人物について検証する。

## 第2節 旧蔵者小野清について

### 1、先行資料について

小野清の生涯を知るための手がかりの一つは、その著書に付されている序文・解説文である。小野の著書に『徳川制度史料』がある。この書は、昭和二年に、六合館による初版が発行され、昭和四三年に、人物往来社によって、『史料徳川幕府の制度』として再版された<sup>82</sup>。再版には、高柳金芳氏による解説があり、そのうち、「著者略歴」の一節では、小野の出生から死去までの人生が簡潔に記されている。本研究では、この「高柳解説」を原点に、時代を遡り、小野清の生涯を辿ることとする。

まずは、高柳解説を以下に抄録する。

著者小野清は仙台藩出身の篤学者で、弘化三年(一八四六)九月、仙台北五番町に生

<sup>82</sup> 本研究で引用する『徳川制度史料』の原文は、高柳金芳氏の解説文を除いて、全て昭和二年初版による。また、本研究では、諸資料の漢字表記を新字体にする。

まれ、幼名は勝次郎、通称伊右衛門、字は子肅、静修と号した。小野家は仙台藩の名門で、祖母は歌島と名乗り、藩主慶邦公(伊達家十三代)の内室に仕えて上席老女の要職にあった。

安政元年(一八五四)九歳にして藩校養賢堂に入り、十歳のとき早くも四書素読の優良者として、養賢堂蔵版の『小学』を、また五経素読優秀なりとして、同蔵版の『近思録』を藩主慶邦公から賞賜されたほどの秀才である。

また武術についても、九歳の九月重陽の日を期して、影山流居合術指南山田民之助善速の門に入り、安政四年(一八五七)十一月、年わずかに十二歳で、三千本を遣り終え、有段者となって師善速を驚嘆せしめた。

慶応元年(一八六五)祖母歌島の死に遭い喪に服したが、翌二年、二十歳のとき江戸に出て、当時馬場先御門前八重洲河岸にあった大学頭林学<sup>マ</sup>齊の揚溝塾に入り学を修めた。同時に揚溝塾から当時南八丁堀大富町、俗にあさり河岸にあった小野派一刀流の桃井左右八郎の士学館に通い剣の奥義をきわめた。

のち幕府の儒者として知られた芳野金陵が聖堂附儒官となったとき、ここに移り聖堂内の逢原塾に起居するとともに、神田お玉ヶ池の北辰一刀流千葉道三郎(周作の三男)の玄武館道場に通り、文武につとめ、いずれもその奥義に達した。

かくして文武の道をきわめた著者は、慶応四年(一八六八)正月、主君伊達慶邦公が命をうけて会津藩主松平容保を討つこととなったので、討会軍副参謀として出征した。

戊辰の役後は静岡にあって仏語を、また横浜に出て独語を修めたが、さらに慶應義塾に入って英語を学んだ。

明治八年(一八七五)福沢諭吉の推挙により衛生局に出仕し、時の内務卿大久保利通の知遇をうけ東京・横浜・大阪の司薬場(後の衛生試験場)を開設し、とくに大阪司薬場長時代には、その拡充強大に大いに努力した。のちに本局に移り、わが国最初の医師開業免許制度を樹立し、医療界に多大の貢献をした。

退官後は著述に専念し、本書『徳川制度史料』もその後二十余年の歳月を要した労作で、大正十五年八月、財団法人啓明会の補助を得て公刊するに至ったものである。

著者小野清は、本書のほか『日本城郭誌』『大阪城誌』『名古屋城誌』『伏見城誌』『開国紀要』『関所総覧』等、幾多の著述があり、とくに天文学については、印度、中国、日本の天文群書を収集して、大正四年『天文要覧』を完成し、天覧に供している。

かくして幾多の功績を残し、昭和七年八月五日、東京都根岸の僑居において歿した。時に年八十七歳、遺骸は多摩共同墓地に葬る。

この文には、理解に苦しむ点が多くある。例えば、戊辰戦争において、小野清が務めたと思われる「討会軍副参謀」という役職名は曖昧で、具体的にどのような地位にあったかはわからない。

また、小野が「東京・横浜・大阪の司薬場を開設し」、「大阪司薬場長」を経て、「本局に移り、わが国最初の医師開業免許制度を樹立し」たのは本当であれば、日本近代医療制度の父と称されても不思議ではないほどの人物であるはず。しかし、その名は現在ほとんど知られていない。このように、高柳解説には誤解や過大表現が含まれていると疑われる。

高柳解説は、主に以下の三つの資料を整合したものであると考えられる。

- (1) 小野清著『徳川制度史料』(初版)坂本鈺之助序(以下、「坂本序」)。
- (2) 小野清著『天文彙考』(六合館、大正十四年)大槻文彦序(以下、「大槻序」)。
- (3) 小野清著『昨夢瑣事』(『徳川制度史料』所収)。

坂本鈺之助は、大審院判事坂本政均の養子で、司法省・内務省などに勤務し、後に地方を転任し、福井県知事・鹿児島県知事・名古屋市長を歴任した<sup>83</sup>。坂本と小野は、内務省衛生局時代の同僚である。そのため、坂本序の内容は、主に衛生局時代の小野の業績を記したものである<sup>84</sup>。

大槻文彦は、国文学者で『言海』の編纂者として有名である。仙台藩校である明倫養賢堂を実質的に主宰していた大槻一族の出身であり、文久三年(1863)、17歳にして養賢堂に入って修業したのち、同年養賢堂の教員となった<sup>85</sup>。大槻は、小野清の一歳年下であり、養賢堂時代からの知り合いである。大槻序は、小野清の七十七歳までの人生を記したものであるが、そのうち仙台藩士時代の小野に関する記述はと特に詳細である。

『昨夢瑣事』は、『徳川制度史料』に付されている小野清の随筆集である。小野は一人の藩士として、自身が体験していた幕末の仙台・江戸について記している。この書は、小野の仙台藩士時代の人生を垣間見るための重要な資料となる。

次節より、高柳解説が掲げる時系列に従い、上記三資料を始めとする明治・大正時代の記録を整理し、小野清の人生の軌跡を辿る。

## 2、仙台藩士時代

### (1) 誕生・家系

【高柳解説】小野清は仙台藩出身の篤学者で、弘化三年(一八四六)九月、仙台北五番町に生まれ、幼名は勝次郎、通称伊右衛門、字は子肅、静修と号した。小野家は仙台藩の名門で、祖母は歌島と名乗り、藩主慶邦公(伊達家十三代)の内室に仕えて上席老女の要職にあった。

小野清の出生について、大槻序では、「弘化三年生る」、「子肅、余より長ずること一歳、今茲、七十七」とあるように、高柳解説と一致している。しかし、出生の月や場所に関しては、筆者の調

<sup>83</sup> 秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』(東京大学出版会、2013年、265頁)を参照

<sup>84</sup> 坂本序を参照。

<sup>85</sup> 「大槻文彦博士年譜」(『国語と国文学』第5巻第7号、1928年、至文堂)を参照。

べたかぎり、証左が見つからない。

小野が使用していた名前について、大槻序では、「小野君、名は清、字は子肅、旧通称を、伊右衛門と云ひ、静修と号す」とある。また、『昨夢瑣事』『表組型数試業之事』には、「小野勝次郎<sup>予ノ初名</sup><sup>86</sup>とある。この点も、高柳解説の記述と一致している。

小野家は仙台藩における地位について、大槻序では、「家は、世々、仙台藩の大番隊士なり」とある。この「大番隊士」の身分について、『昨夢瑣事』『仙台藩士其他班列』では、「大番組十組 三千六百人 千石以下百石内外<sup>87</sup>と説明されている。また、同条において、仙台藩士の屋敷について説明する際、「今百石内外平士の屋敷即ち姑ラク予ガ屋敷ニ就テ言ハン<sup>88</sup>とある。即ち、小野家は百石程度の平士の身分で、大番組においては下層にあたる。

また、幕末時代の仙台藩士の家系に関する資料には、『伊達世臣家譜続編<sup>89</sup>がある。この資料は、文政七年(1824)、田辺希績の編によるものであり、小野清の誕生が22年後のことである。少なくとも、小野清の祖父の代までの記録が収録されているはず。実際に、①編集時に存続していた、②仙台城下に居住していた、③百石程度の小野家は、『伊達世臣家譜続編』には1項目のみ見られる<sup>90</sup>。

### 三十六 小野

小野、姓藤原。不知其先、以小野十兵衛弘元為其祖。其裔広間番士而今保百三十四石余一斗六升之禄。弘元、義山公時寛永二年十二月始賜三十六石之田於国分莊小田原邑、以举広間番士。慶安三年三月、開墾野谷地、於同処因加賜二十九石八斗九升。寛文七年五月、再開墾野谷地于同処、以加賜十九石七升。十二年正月、亦開墾野谷地于江刺郡下門邑。是時加賜十石八斗九升、併前為九十五石八斗五升之禄。弘元嘗有弟、称作兵衛名不伝。天和三年八月、請官分与十八石六斗九升之田於小田原邑分与之云、別立家。其裔広間番士、保三十一石余六斗九升之禄。今称小野伊太夫某者是也。弘元子十蔵弘定。弘定子金八郎弘澄。弘澄子万右衛門弘影此間数世記載今不詳云。弘影子十太夫弘祐。元文二年三月請官、分与十三石之田於同姓小野伊太夫某、於是弘祐家為六十四石一斗六升之禄。弘祐子三郎右衛門名不詳、未兼家而死。於是以其子三郎左衛門初称文吉弘道為兼祖。弘道明和六年五月兼家、嘗歴遷代官及人足方横目、肴蔵役人、出入司留附俱年月不詳。享和元年十月、兼試作事奉行、屋敷奉行、給官資為二百石之分。二年四月、為真。三年正月、遷郡奉行、給官資為二百石之分。是時、勤弁勘定奉行及作事奉行、屋敷奉行之事。文化元年六月、遷出入司、給官資為五百石之分。六年十月、賞嘗与經營二丸有勞、賜

<sup>86</sup> 41頁。

<sup>87</sup> 53頁。

<sup>88</sup> 55頁。

<sup>89</sup> 平重道・斎藤鋭雄編集『仙台藩史料大成之二 伊達世臣家譜続編』(宝文堂、昭和53年影印本)。

<sup>90</sup> 『伊達世臣家譜続編』第四卷、影印本218～220頁。以下引用時、原文の訓点を省略し、適宜句読点を入れる。

時服及麻上下及白銀三十枚。是月、賞嘗為作事奉行時、与改革官法之事有勞、賜白銀三枚。十年二月、賞數年与諸務有勤勞、加賜七十石、併前為今之祿。文政五年十月、修關東水道時、為普請添奉行、幕下賞之、賜時服四領及白銀五十枚。其他在職之間拜賜、不暇枚挙云。弘道子貞蔵初稱文治弘毅。文政七年三月兼家。是歲四月、稱述父弘道為出入司時、与修關東水道之事竭心力、賜時服一領及白銀十枚于弘毅。五月、拜謁于今公、謝兼家之辱。七月奉広間番頭。嘗学影山流居合及真極流柔術于鹿又三太夫某、俱窮其伝。弘毅子立五郎弘行尚幼。

また、『宮城県姓氏家系大辞典』<sup>91</sup>にも、この小野家が収録されている。その内容はほぼ『伊達世臣家譜続編』の記述を採用したものであるが、最後には「弘行は明治四年には、仙台の小田原山本丁車通角から東へ三軒目南側に住み、父弘毅は嘉永四年に隠居、嫡子に弘業がいた」と、弘行以降の小野家に関する紹介が記載されている。そこには、やはり清という人名が見られない。そもそも、小野清が「勝次郎」と名乗っていたことから、彼はおそらく嫡男ではないと推測される。したがって、清は上記の小野家の末裔であるかについては確定し難い。しかし、すでに述べたとおり、『伊達世臣家譜続編』には、『昨夢瑣事』の記述と一致する小野家と一致する家系はこの項目しか見られないことから、とりあえず小野清の一族の可能性の一つとしてここに記す。

この小野一族は、弘道の代で栄え、奉行などの役職につき、五百石の祿高を受領することになった。弘毅の代になると、奉行を務めることはなく、祿高は百三十四石であった。この点は、大槻序の「世々、仙台藩の大番隊士なり」との記述と一致している。

前述のとおり、この記録は、清が誕生する22年前に編纂されたものであることから、当時「尚幼」い弘行が、清より二十数歳年上であると推測される。もし清はこの小野家の人間であれば、弘行の子あるいは甥で、弘業の弟または従弟に当たるのであろう。

小野清はこの一族の出身かどうかはともかく、仙台藩において三千六百もある大番組において下層にあたる家系から出た身であることは確かで、高柳解説の「仙台藩の名門」という表現は少し誇張の嫌いはある。

小野の祖母について、『昨夢瑣事』「表組型数試業之事」に、「慶応元年祖母の喪に居り、明年漢学研究の為に江戸に出づ」<sup>92</sup>とある以外、資料は見つからない。高柳解説の出典については不明である<sup>93</sup>。

<sup>91</sup> 『角川日本姓氏歴史人物大辞典4 宮城県姓氏家系大辞典』(角川書店、1994年、558頁)。

<sup>92</sup> 41頁。ちなみに、『昨夢瑣事』の文体は漢文調に近く、本文では漢字と片仮名で、注では漢字と平仮名が使われているが、この「表組型数試業之事」条以下、本文にも平仮名を使う箇所が見られる。その理由は不明である。

<sup>93</sup> ただし、『伊達世臣家譜続編』の記述を見る限り、主君から衣服や金品を賜ることまで細かく記録するにもかかわらず、一族に「藩主慶邦公の内室に仕えて上席老女の要職にあった」くらい出世した女性がいたなら記録されているはず。にもかかわらず、『伊達世臣家譜続編』に記されている数多くの「小野」家において、そのような女性に関する記述が見当たらない。あるいは、小野清の祖母が伊達家の女官として出仕したのはこの記録が編纂された後であろうか。

## (2) 幼少期～青年時代

【高柳解説】安政元年(一八五四)九歳にして藩校養賢堂に入り、十歳のとき早くも四書素読の優良者として、養賢堂蔵版の『小学』を、また五経素読優秀なりとして、同蔵版の『近思録』を藩主慶邦公から賞賜されたほどの秀才である。

また武術についても、九歳の九月重陽の日を期して、影山流居合術指南山田民之助善速の門に入り、安政四年(一八五七)十一月、年わずかに十二歳で、三千本を遣り終え、有段者となって師善速を驚嘆せしめた。

慶応元年(一八六五)祖母歌島の死に遭い喪に服したが、翌二年、二十歳のとき江戸に出て、当時馬場先御門前八重洲河岸にあった大学頭林学齋(ママ)の揚溝塾に入り学を修めた。同時に揚溝塾から当時南八丁堀大富町、俗にあさり河岸にあった小野派一刀流の桃井左右八郎の士学館に通い剣の奥義をきわめた。

のち幕府の儒者として知られた芳野金陵が聖堂附儒官となったとき、ここに移り聖堂内の逢原塾に起居するとともに、神田お玉ヶ池の北辰一刀流千葉道三郎(周作の三男)の玄武館道場に通り、文武につとめ、いずれもその奥義に達した。

この部分は、ほぼ大槻序を踏襲しているものである。まず、大槻序の同箇所を抄録する。

【大槻序】九歳にて、藩校養賢堂に入学し、十歳にして、四書の試問に及第し、十一歳にして、五経の試科に登第し、藩公、小学、及び、近思録を賜ひて賞せらる。

慶応二年、江戸に出でて、学齋大学頭林昇の揚溝塾に入り、又、幕府の儒官芳野金陵の逢原堂に学びて、造詣する所あり……

子肅、又、撃剣の術に長ぜり、九歳にして、藩の山田善速に就きて、影山流を学び、十二歳の時、暁天、寅の刻より、夜の戌の刻に至る、剣法三千本の修業を試みしに、子肅疲るるを知らず、對手高弟、十九人、却て、困憊を覚えたり、善速、激賞して免許入段せしむ、慶応中、江戸に出でし時、劍師桃井左右八郎の士学館に入りて、小野派一刀流を受け、更に、千葉周作の子、道三郎の玄武館に就きて、北辰一刀流を究め、その技、益々進めり。

また、『昨夢瑣事』においても、同じような記述が散見している。各件を大槻序の記載の順に従って、以下に抄録する。

【大藩君主藩士ヲ鼓舞シテ文武二道ヲ奨励セシ事】<sup>94</sup>

又年末ニハ、御改卜称シテ、教官ニ命ジテ各々其年度相当生徒ニ、四書ト五経トヲ素読セ

<sup>94</sup> 6～7頁。

シメテ、四書素読ノ優良者ニハ恩賞トシテ養賢堂蔵版ノ小学、五経素読ノ優良者ハ同蔵版ノ近思録ヲ與へ、筆道算術礼方等ノ生徒ニ対シテモ、各々相当の恩賞品ヲ與ヘタリ、武芸其他藩校ノ生徒ニ対シテモ、亦此ノ如シ。

【林大学頭へ入門之事】<sup>95</sup>

予慶応二年丙寅林大学頭へ入門、同ニ同邸内揚溝塾ニ入ル、入門之式左ノ如シ。

(以下、入門の儀式の説明)

【芳野金陵へ入門之事】<sup>96</sup>

後チ芳野金陵聖堂附儒官ト為リシ時予入門、同時ニ聖堂構内逢原堂塾舎ニ入ル、其入門之時又束脩トシテ扇子一對ヲ呈ス。

【山田民之助へ入門之事】<sup>97</sup>

予年九歳安政元年甲寅九月重陽日ヲ以テ、影山流居合指南山田民之助善速ノ門ニ入ル、入門ノ時、束脩トシテ扇子一對ヲ呈セシコト、前記江戸ニ於ケル入門ノ例ノ如シ。

【表組型数試業之事】<sup>98</sup>

予安政元年甲寅九月、年九歳、山田善速ニ入門セシ事前段ニ記スル所ノ如シ、同四年丁巳十一月十六日、年十二歳、当流居合組数ヅ試業ヲ為ス、当日暁七ツ時<sup>午前</sup><sub>四時</sub>ヨリ夜五ツ時<sup>午後</sup><sub>八時</sub>ニ至ル、其数惣而三千本ニシテ、当日ノ打方ハ、先ヅ諸高弟ニ始マリ、最後ノ三十二本ハ、師善速自身ニ打納ヲ為ス、時ニ師善速年三十九。

……

右三千本遣りて、師善速より即座に段入を談ぜらる、其免許状は即ち左の如し。

小野勝次郎<sup>予の</sup><sub>初名</sub>

御若年ニハ古来稀ナル数ヅ試業ニ付三千五百本已上モ被相遣見詰ニ候得共先以相控申候仍而直ニ段入御段致候事。

爾来、予は文学修業の傍に善速監督の下に居合抜刀を研鑽すること八年、慶応元年祖母の喪に居り、明年漢学研究の為に江戸に出づ。

【桃井左右八郎へ入門之事】<sup>99</sup>

<sup>95</sup> 18頁。

<sup>96</sup> 24頁。

<sup>97</sup> 27頁。

<sup>98</sup> 38～41頁。簡潔さを図り、居合術の型に関する説明の引用は省略する。また、この項目では、途中から平仮名を使用するようになっている。本研究ではできる限り原文のまま引用する。

<sup>99</sup> 22頁。

後予八丁堀小野派一刀流士学館桃井左右八郎父春三將軍に扈從し大阪に在り、  
左右八郎父に代わりて教授す、ニ入門林塾ヨリ通学ス、又束脩トシテ扇子一對ヲ呈ス。

【千葉道三郎へ入門ノ事】<sup>100</sup>

尋テ予神田於玉ヶ池北辰一刀流玄武館千葉道三郎故周作  
三男ニ入門聖堂構内ヨリ通学ス、又束脩トシテ扇子一對ヲ呈ス、其入門束脩、酒三献献酬之式、士学館桃井ノ例ノ如シ。

大槻文彦は、数代に渡って養賢堂の学頭を務めた大槻一族の出であり、小野清の養賢堂においての知り合いでもある。したがって、少年時代の小野の修業の様子については、大槻の記述は相当の信憑性がある。

小野は、四書五経素読の成績優良者に対して、養賢堂蔵版の『小学』『近思録』が与えられたことを記されている。一方大槻序は、小野自身も受賞したとしている<sup>101</sup>。このことは『昨夢瑣事』に見られず、当事者しか知り得ない事実である。また、大槻序は、小野が影山流居合術の試業を受ける部分の記述が特に詳細であり、「对手高弟、十九人、却て、困憊を覚えたり」など、『昨夢瑣事』で言及されていない事実も記されている。

ただし、大槻は仙台藩士の出身でありながら、生まれは江戸であり、養賢堂に入ったのは文久三年(1863、大槻17歳、小野18歳)である。すなわち、上記の事実に関しては、大槻は当事者や見学者ではなく、養賢堂の教員となったのち、養賢堂の記録または小野本人より知ったのであろう。

一方、江戸に出た後の小野について、大槻序の記述は甚だ簡略で、『昨夢瑣事』の内容の要約のようにみえる。この時期において、二人の交流が少なかったのであろうか。

以上、幼少期～青年時代の小野に関する資料を整理し、高柳解説の裏付けとした。ただし、高柳解説の「剣の奥義をきわめた」、「文武につとめ、いずれもその奥義に達した」などの評価については、やはり誇張の部分があると考えられる。特に剣術においては、「奥義をきわめた」、「奥義に達した」とは、免許皆伝となったことに等しいという印象を受ける表現であるが、小野の武芸は果たしてその境地に達していたのか。

『昨夢瑣事』「影山流居合術剣法写真図掲載ニ就テ」には、影山流の開祖である影山善賀入道清重以来、影山流の相伝者の名簿が掲げられている。そこには、小野の師である山田民之助善速や、同門の坂英力時秀・天野菊之助古弘の名が記されているが、小野自身の名が見られない。また、小野は『昨夢瑣事』の31～52頁において、およそ全書の三分の一の紙幅で、影山流居合術の型を説明し、多くの写真を掲載している。そのうち、技の説明文は天野古弘によるもので、写真のモデルは天野の弟子、及び坂英力の孫となっている。従って、影山流において、

<sup>100</sup> 24頁。

<sup>101</sup> もとより、小野は多くの科目のうち、四書素読・五経素読の二科目の賞品のみに記すことも、自身が受賞したからではないかと連想される。

小野はおそらく師範の立場ではないと推測される。

また、江戸滞在時代について、小野が桃井左右八郎・千葉道三郎両者の剣術道場に通い始めたのは慶応二年(1866)で、江戸を離れて戊辰戦争へ出征したのは明治元年(1868)のこと。わずか二年足らずで、小野派一刀流または北辰一刀流のいずれかを極めることも当然不可能である。

すなわち、小野は剣術に嗜んでたことには間違いないが、高柳解説の述べる「奥義にきわめた」までは達しなかったのであろう<sup>102</sup>。

### (3) 戊辰戦争及び蟄伏時期

【高柳解説】かくして文武の道をきわめた著者は、慶応四年(一八六八)正月、主君伊達慶邦公が命をうけて会津藩主松平容保を討つこととなったので、討会軍副参謀として出征した。

戊辰の役後は静岡にあって仏語を、また横浜に出て独語を修めたが、さらに慶應義塾に入って英語を学んだ。

すでに指摘したとおり、「討会軍副参謀」という役職の意味は曖昧であり、具体的にどのような地位にあったかも不明である。また、下級武士で当時わずか23歳の小野が、いきなり藩主より一軍の副参謀を拝命することも疑われる。このことについて、大槻序には詳しく記されている。

【大槻序】明治元年、仙台藩、討会の命を奉ず、伊達筑前、其手兵八百を率ゐて、先鋒となり、藩の参政和田織部、参謀たり、子肅、時に二十三歳、その副参謀に命ぜられ、兵を封境なる越河に駐む、既にして、子肅、単身にて、白河城下に趣き、形勢を視察し、会津国境、進軍の地点を定めて復命せり、尋で、別命を受けて、藩の汽船宮城丸に乗じて、江戸に出で、東海道より、京都に到り、朝家、並びに、諸藩の事情を探聞し、五月、江戸に還る、時に、上野の戦起らむとし、仙台藩論も、亦一変す、此間、江戸、関東、各地の形勢を探索す、此時、福沢諭吉を芝の新銭座の居に訪ひ、時局に関する意見を徴せしに、福澤云ふ、貴藩、早く兵を収めよ、一日後るれば、一日の損なり、幸に鄙見容れられれば、速に帰国して、当局の人に説かるべしと、子肅、頗る其の意を了し、上野の戦畢りて、五月廿四日、汽船長鯨丸に乗じて、帰藩す、時に、輪王寺宮、変装して同船せられ、会津に向はせらるるに会せり、人のこれを知る者なかりき、子肅、国に帰り、事、軍国の機密に属するを以て、独り、執政坂英力に、収兵の事を説けり、坂、頗る、此説に耳を傾けしかど、既に、奥羽諸藩の連盟成り、白河口の戦端、開かれたる後なりしかば、騎虎の勢となりて、如何ともすべきなし、子肅、退きて、窃かに嘆ずらく、誠に国の厄難なり、然れども、此危急に当りて、座視すべきにあらずとて、此時、

<sup>102</sup>高柳氏がこのような誤解を生じた理由の一つは、大槻序の「北辰一刀流を究め、その技、益々進めり」という表現ではないかと考えられる。

仙台藩封内にて、新たに農兵を募れる折衝隊と云ふあり、封内北部の郡宰、今泉孫四郎、これを率ゐるに加はりて、総取締役となり、胆沢郡の巨利永徳寺に屯して、日日、農兵を教練し、秋田進軍を期したりしかど、幾くもなくして、軍事罷みぬ。

大槻序によると、戊辰戦争における小野の行動は、主に①伊達筑前に従って会津へ出陣、②京都・江戸・仙台にて情報活動を展開の二点である。以下、それぞれの点に関する資料を補足する。

#### ①伊達筑前に従って会津へ出陣

伊達筑前(邦教、1841～1869)は、登米伊達家の第十三代当主で、伯父斉邦は仙台藩第12代藩主である<sup>103</sup>。その参謀を務めた和田織部(為泰、1832～1869)は、仙台藩の二番着座格にして千六百石の禄を保ち、後に仙台藩執政まで出世したが、翌年、罪を問われ死罪となった<sup>104</sup>。

大槻序によると、小野清はこのとき、伊達筑前の率いる討会先鋒隊の参謀である和田織部の副参謀を務めていた。高柳解説ではこのことを「討会軍副参謀」と略され、読者に誤解をもたらしている。

伊達筑前及び戊辰戦争における登米藩について、登米町史編纂委員会編『登米藩史稿』(登米町、1963年)「邦教君」項(159～182頁)には詳しい記述がある。そのうち、筑前・織部の出征について、以下のように記されている<sup>105</sup>。

(筑前は)岩沼より大河原、白石を<sup>マツ</sup>軽て(明治元年、1868)四月朔日越河へ進軍、此の日薩長藩四人本陣へ来る。加藤十三郎会見せるに行軍の遅引を責む。暫時君に対面して帰る。九日迄瀬ノ上藩陣、日々洋式調練を為す。

四月二十日郡山藩陣和田参謀より手頭以上酒を配せらる。又上下全般に酒代金一朱づゝを受く。

筑前の軍勢は、1868年4月1日に白石を越え、越河に駐屯していた。20日までに、参謀和田織部は、一足先に郡山へ進軍した。郡山より会津へは、二本松経由の二本松街道が近いが、白河を経て猪苗代湖の南側へ迂回する白河街道ルートもある。後に、「閏四月朔日只野村滞陣、会兵来たりて人家に火を放つ、我臣狙撃隊長佐藤雄助地理探索のため従士五人と共に派遣せられしが、御霊櫃の麓二本松関門の辺に会津の伏兵あり」<sup>106</sup>とあるように、筑前の本隊はやはり近道である二本松方面を選んだ。一方、大槻序によると、小野清は「単身にて、白河城下に趣き、

<sup>103</sup> 菊田定郷編、『仙台人名大辞書』(仙台人名大辞書刊行会、1933年、671頁)を参照。

<sup>104</sup> 『仙台人名大辞書』1132～1133頁。

<sup>105</sup> 168頁。カッコの中の内容は筆者が補ったものである。

<sup>106</sup> 『登米藩史稿』169頁。

形勢を視察し、会津国境、進軍の地点を定めて復命せり」、すなわち、迂回路である白河方面の偵察をしていた。郡山から白河までの一帯は、すでに会津の領内にあたり、小野の偵察活動は「単身」で、すなわち密偵の類であろう。

## ②京都・江戸・仙台にて情報活動を展開

1868年閏四月以降、情勢が一変した。仙台藩主伊達慶邦は方針を変え、奥羽連盟結成へ議論を進めた。この時、前線より帰還した小野清は、情報収集の対象を会津藩から朝廷・新政府へ変更し、京都・江戸・仙台にて情報活動を展開した。

この時期の小野の活動について、大槻序の記載は特に詳細である。それは、大槻も仙台藩の情報員の一人であったからである。大槻は、この経歴について、以下のように述べている<sup>107</sup>。

此時京都で将軍が大政を朝廷を返上したといふ報知が江戸へ来て、藩の留守居役大童信太夫氏が上京する事となつて、私は其随行を申付けられ、同月下旬早追駕籠で、六昼夜で京都へ上つて、中長者町小川の藩邸に居て殺気肅然たる間奔走したり建白したり、藩の国事に奔走する者の内の最年少者であつた。翌年戊辰の正月三日の伏見鳥羽の戦争に会つて死地に出会ひ、三月奥羽鎮撫使が船で下向するに付て、私も藩の蒸気船で大阪から仙台へ帰り、五月再び船で江戸へ出て潜伏し、藩の探偵を申しけられた。是れは私が江戸言葉であるからであつた。

大槻は、慶応三年(1867)に、仙台藩の重臣である大童信太夫に従つて京都に赴き、翌明治元年に伏見鳥羽の戦いを経験し、三月に仙台へ帰った。そして、入れ替わるように、四月に、会津前線から帰還した小野清が京都へ赴き、情報活動を行った。わずか一ヶ月後、小野が江戸へ戻り、同時に大槻も仙台から江戸へ出た。そのとき、奥羽連盟は既に結ばれ、仙台藩と新政府とは敵対関係となった。小野の一連の移動にはどのような背景があつたかは知り得ないが、おそらく、その情報収集の手練さが評価され、京都で情報を得たのち、再び江戸へ派遣され、大槻と同様、仙台藩の密偵に命じられてたと考えられる。

『福沢諭吉書簡集』の解説によると、上野戦争の際、小野は「慶応四(一八六八)年、奥羽列藩同盟について福沢の意見を聞くため、大童信太夫の添書を持って新銭座を訪れた」<sup>108</sup>。このことは大槻序にも見られる。また、小野に福沢諭吉宛の紹介状を渡したのは、各地で武器買い取りや、情報工作を行っていた大童信太夫であつた。小野も大槻も、大童信太夫の率いる情報チームの構成員であつたかもしれない。

5月24日、上野戦争の中心的人物であり、後に奥羽連盟の盟主となつた輪王寺宮すなわち北白川宮能久親王が江戸を脱出し、長鯨丸に乗つて仙台に向かった。大槻序によると、この際、小野清も同乗していた。大槻は、この時期に自身が江戸に行った秘密活動を「種々用を足し数

<sup>107</sup> 大槻文彦「大槻博士自伝」(『国語と国文学』第5巻第7号、1928年、至文堂、41頁)。

<sup>108</sup> 慶應義塾編、『福沢諭吉書簡集』第二巻(岩波書店、2001年、301頁)。

度難関を切り抜けて」<sup>109</sup>と淡々と括っているが、おそらく、輪王寺宮の逃亡には、小野も大槻も関与していたと考えられる。

仙台に戻った小野は、戦争を止めるよう、執政の坂英力に進言したが、既に連盟が結ばれていた理由で却下された。ちなみに、坂英力は山田民之助の門下で影山流の相伝者の一人であった。地位の差があった小野の進言に耳を傾けたのは、同門の誼があったからであろうか。

しかし、まもなく仙台藩が降伏し、戦争は終わりを迎えた。その後、仙台藩の重臣らは戦争の責任を問われ、和田織部や坂英力は死罪に処され、大童信太夫は福沢諭吉の助力を得て辛うじて死を免れた。伊達筑前も戦争が終わった翌年に、29歳の若さで死去した。『登米藩史稿』によると、筑前は明治二年正月に領地を返納して農業を営むことにしたが、まもなく病に倒れ、5月に死去した<sup>110</sup>。数ヶ月前まで先鋒を務めていた勇猛な青年武士が、戦争責任追求の最中に急死したのは、明治政府にとっても、仙台藩にとっても、都合のいいことであろう。

そして、戊辰戦争で情報工作を働いた小野は、横浜に身を隠し、転々とした後、福沢諭吉をたよりに慶應義塾に入った。ただし、『慶應義塾入社帳』<sup>111</sup>には小野清の名が見られない。昔の仕事を憚って偽名を使ったのか、それとも正式に慶應義塾に入社しなかったのか、他に資料が見られていないため知り難い。

かくして小野は、数年間にわたり蟄伏し、明治八年になって、福沢諭吉の推薦を得て明治政府に出仕する。

### 3、大阪司薬場<sup>112</sup>時代

【高柳解説】明治八年(一八七五)福沢諭吉の推挙により衛生局に出仕し、時の内務卿大久保利通の知遇をうけ東京・横浜・大阪の司薬場(後の衛生試験場)を開設し、とくに大阪司薬場長時代には、その拡充強大に大いに努力した。

この部分は、大槻序の内容を簡略化したものである。



横浜時代の小野清  
『天文彙考』巻首附図

<sup>109</sup> 「大槻博士自伝」41頁。

<sup>110</sup> 182頁を参照。

<sup>111</sup> 福沢研究センター編、慶應義塾、1986年影印本。

<sup>112</sup> 周知の通り、この時期では、「大阪」「大坂」の表記が混在する場合が多い。本研究で検討する「大阪司薬場」においても、明治八年内務省第一回年報では「大坂司薬場」とあるが、明治13年第五次衛生局年報では「大阪司薬場」となっている。また、明治13年、福沢諭吉の小野清宛の手紙(慶應義塾編、『福沢諭吉書簡集』第二巻、岩波書店、2001年、301頁)では、「大阪試薬局」となっている。本研究では、小野が勤務していた明治10年代の衛生局年報の表記である「大阪司薬場」に統一する。

【大槻序】子肅、明治八年、慶應義塾に学びし時、塾主福沢諭吉の推薦にて、内務省衛生局に出仕し、東京衛生試験所事務員となる、子肅、山岡鉄舟と相識あり、一日、談、皇居の衛生の事に及び、御膳水、諸井水の検査を説く、鉄舟領承して試験所をして分析せしむ、水、皆佳良なりき、皇居、始めて此挙あり、時に明治九年なり。

子肅、又、横浜衛生試験所創立委員となり、明治十年、大阪衛生試験所に転任す、時に、試験所は、移転すべき事となり、五代友厚の中島の邸地を相して、勝地なりとして、移譲を請ひしに、友厚肯はず、子肅、乃ち、大坂薬舗の薬品の、関西三十餘国の取引の広き事、全市中の諸井水、関西諸国の鉱泉の夥多なる事に就きて、是等の分析、其他五十万市民の衛生施設の忽にすべからざるを、諄々として説きしかば、友厚、大に覚醒して快諾せり、因て、大坂府知事渡邊昇に告げて、府の土木技師を定めて、己れ、新築の事務を、一切担任して成功し、内務卿大久保利通に賞せらる。

まずは背景として、内務省衛生局衛生試験所(創立時は司薬場)の沿革を踏まえたい。大霞会編『内務省史』には、衛生試験所制度の創立について以下のように述べられている<sup>113</sup>。

国立衛生試験所の創立をさかのぼれば、明治七年の東京司薬場の設置にその源を発する。明治維新は、わが国の諸制度に一大革新をもたらし、社会及び国民生活上に大きな変化を与えたが、新政の体制がようやく安定すると、政府は医療衛生法規の制定に着手するため、明治四年十一月から一年有余にわたって欧米諸国の医薬衛生制度の調査を行ない、六年三月には文部省に医務局を設け、医薬衛生の事務を所管させた。

当時の我が国は、世界に窓を開き、このため欧米の文物が盛んに流入したが、その取締り等の必要が司薬場設置の気運となった。文部省は、このため試験・検査に従事すべき技術者の養成を行なうとともに、外国人教師を雇い、輸入薬品の検査機関を、神奈川・神戸・長崎に設置する計画をたてたが、これにさきだつて、これらの期間運営の中心として、明治七年三月、東京日本橋馬喰町に東京司薬場が開設された。

つづいて、翌八年二月には京都司薬場が、三月には大阪司薬場が、それぞれ設置された。この間、薬制に関する諸法令もしだいに整備されていったが、七年九月には毒薬販売のちおての取締りを布達し、これに基づき司薬場に事務掛一人、試験掛一人からなる薬品巡回員をおき、市内薬舗の立入り検査を実施した。ちなみに、これがその後の薬事監視員制度の起源である。

明治八年六月、衛生関係事務は文部省から内務省へ移管となり、従って三司薬場も内務省に移管された。一方、輸入薬品の量は日に激増したため、九年八月には、京都司薬場を

<sup>113</sup> 大霞会内務省史編集委員会編、『内務省史』第三卷(大霞会、1971年、225～226頁)。

廃し、十年四月及び十一月、新たに横浜及び長崎にそれぞれ司薬場を設けて、これの対策とした。

大槻序でいう「衛生試験所」は後に改められた名称で、創立当時は「司薬場」であった。高柳解説では、小野が「東京・横浜・大阪の司薬場を開設」とされているが、そもそも、東京・大阪司薬場の設置は、それぞれ明治七年三月、明治八年三月であり、その時、所管は内務省ではなく文部省であった。大槻序によると、小野が明治八年に慶應義塾を出た後、勤務していたのは内務省であり、文部省勤務に関する記載はない。大槻は当時、まさに文部省に出仕しており<sup>114</sup>、もし同郷で旧友である小野が、自身の職場である文部省に出仕していたなら、大槻は知らないはずがない。したがって、東京・大阪司薬場の設置と、小野清の内務省勤務とは、時間及び省庁の面において矛盾しており、小野が東京・大阪司薬場の設置に関わったことはないと考えられる。

横浜司薬場についても、先に結論を述べるが、小野がその設立に関与したかもしれないが、小野が設立したとは明らかな誤解である。

明治19年(1886)以降、毎年内閣官報局より、官報の附録として「職員録」を発行されている<sup>115</sup>。それ以前に、内務省では、不定期に職員録を発行されていた。それらの職員録を集成したのは『内務省人事総覧』<sup>116</sup>である。

『内務省人事総覧』の記録において、はじめて事務員まで記載されているのは明治九年「内務省職員録」である。しかし、小野清の名が見られるのは明治11年以降である。以下、『内務省人事総覧』に記載されている小野清の職歴を表に示す。

---

<sup>114</sup> 「大槻文彦博士年譜」参照。

<sup>115</sup> 国立国会図書館ウェブサイト <https://rnavi.ndl.go.jp/politics/entry/JGOV-meibo.php> を参照。

<sup>116</sup> 日本図書センター、1990年。

年月	所属	官等	族籍	住所
明治11年1月	衛生局	七等属	宮城県土族	
明治11年5月	衛生局	七等属	宮城県土族	
明治12年11月	衛生局	六等属	宮城県土族	
明治13年4月	衛生局	五等属	宮城県土族	
明治13年6月	衛生局	五等属	宮城県土族	
明治13年11月	衛生局	五等属	宮城県土族	
明治14年6月	衛生局	五等属	宮城県土族	
明治14年10月	衛生局	五等属	宮城県土族	
明治15年1月	衛生局	五等属	宮城県土族	
明治15年9月	衛生局	五等属	宮城県土族	神田区駿河台南甲賀町八番地
明治16年7月	衛生局	四等属	東京府土族	神田区駿河台南甲賀町八番地
明治17年2月	衛生局	四等属	東京府土族	神田区駿河台南甲賀町八番地
明治17年8月	衛生局	四等属	東京府土族	神田区駿河台南甲賀町八番地
明治18年9月	非職	四等属	東京府土族	神田区駿河台南甲賀町八番地
明治19年6月	総務局	判任官四等	東京府土族	神田区神田錦町一丁目十三番地
明治20年11月	総務局	属四等		
明治21年12月	総務局	属四等		
明治22年12月	総務局	属四等		
明治23年12月	総務局	属三等(下)		

明治10年以前の小野の職歴は公的記録に見られない。大槻序のよると、明治10年、内務省が横浜司薬場を開設した際、小野は創立委員の一人であった。もしそうであれば、明治10年までに、小野は内務省特設の司薬場創立委員会に所属していたため、正式部署の職員しか収録しない職員録に記載されていないのは納得できる。また、明治11年の職員録は、明治10年の人事異動を反映したものであり、小野が明治10年に司薬場創立の仕事を終え、正式部署に配属されたと考えれば、はじめて職員録に記載されることも理にかなっている。

ただし、大槻序によると、小野が明治八年に衛生局に出仕したときには「事務員」であった。また、明治11年職員録に記載されている小野は「七等属」、すなわち部局の長どころか、事務員においても中下層にある。この事実からみると、明治10年の横浜司薬場創立委員会においても、小野が主導的地位にあった可能性は低く、依然として事務員であったのであろう。

衛生局は、内務省に移管された後、明治10年より年報<sup>117</sup>を発行しはじめた。その第一回である、明治10年12月発行の「衛生局報告」には、「同年八月京都司薬場ヲ廢シ更ニ横浜長崎ノ両港ニ設置シ京都司薬場試薬監督ドクトル、ア、イ、セ、ケールツヲ横浜司薬場ニ転シ和蘭人ドクトル、イ、エフ、エークマンヲ長崎司薬場試薬監督ノ事ニ任ス」<sup>118</sup>とある。実際、各司薬場の設立時、長に当たる「試薬監督」はほとんど外国人技師が務めていた<sup>119</sup>。ちなみに、外国人技師の待遇は非常に高く、一例をあげると、明治八年、大阪司薬場の教師に雇われたオランダ人ドワルスには月間250円、すなわち年間3000円の給料が支払われ、住宅も提供された<sup>120</sup>。この年俸は、

<sup>117</sup> 第1-3回は「衛生局報告」で、第4回以降は「衛生局年報」と改称した。

<sup>118</sup> 内務省衛生局「衛生局報告」(明治10年12月、8頁)。

<sup>119</sup> 明治10年「衛生局報告」を参照。

<sup>120</sup> 「大阪司薬場教師雇入ノ儀ニ付御届」(『公文録』第59巻、明治八年三月十七日)。

総理大臣の約三分の一にあたり、日本人技手の最高年俸の30倍以上に達した<sup>121</sup>。このように厚遇されていた外国人技師らを管理することは、小野清のような一介の事務員<sup>122</sup>には不可能である。そもそも、司薬場は全国すべての薬品の製造・販売・輸入などを監督する重要な部門であり、その創立を主導したのは、衛生局長長与専齋ないし内務卿大久保利通であろう。すなわち、小野が横浜司薬場の設置に関わっていたことには間違いなさそうであるが、小野が横浜司薬場を開設したとするのは誤解である。

明治10年4月、横浜司薬場創立の仕事を終えた小野は、すぐさま大阪司薬場に配属された。大槻序では、「明治十年、大阪衛生試験所に転任す」とあり、小野自身も、『大阪城誌』<sup>123</sup>緒言には、「余明治十年ノ夏ヲ以テ此地ニ来リ居ルコト五年」と述べている。また、前掲の表を見ると、明治15年9月には、小野の族籍が「宮城県士族」のまま、住所が「神田区駿河台南甲賀町八番地」となっており、翌16年には、族籍が「東京府士族」となった。小野は、明治15年に東京に居を構え、籍を変えた。すなわち、小野が大阪司薬場に勤務していたのは明治10年～15年のことである。

また、高柳解説が小野を「大阪司薬場長」にするのも誤解である。「衛生局年報」には、大阪司薬場長の名が記されている。

十一年五月、御用掛柴田承桂、場長ニ任ス。初、属官ヲ以テ場長心得ト為シ、屢々更替アリシカ、是ニ至リテ場長ヲ置カル。十二年二月、教師「ベウ、ドワルス」雇期已ニ満チテ約ヲ解ク。三月、場長柴田承桂、疾ヲ以テ職を辞シ、三等試薬師兼御用掛村橋次郎、之カ後任ト為リ、兼テ試薬ノ事ヲ監督ス<sup>124</sup>。

(明治十三年)十二月二日、場長邨橋次郎、鉦泉試験ノ為、但馬国城崎湯嶋村ニ出張シ、十八日ニ至リテ帰阪ス。

明治十四年三月、場長邨橋次郎、第二回内国勸業博覧会審査官トシテ<sup>125</sup>上京シ、五月ニ至リテ帰阪ス<sup>126</sup>。

明治十四年九月、四等試薬師櫻井小平太、当场在勤並場長心得ヲ命セラル<sup>127</sup>。

明治11年、柴田承桂が初代大阪司薬場長に任じられ、翌12年、邨(村)橋次郎に代わり、14四年に櫻井小平太が後任となったことは、公的記録に明記されている。この三人が、小野が大

<sup>121</sup> 明治19年官報によると、内閣総理大臣の年俸は9600円、判任官一等技手(上)の年俸は80円であった。

<sup>122</sup> ちなみに、小野の年俸は、明治19年基準では30円程度である。

<sup>123</sup> 小野清著『大阪城誌』(静修書屋蔵版、1899年)。

<sup>124</sup> 「衛生局年報」(第五次、明治13年、239頁)。以下、「衛生局年報」を引用時、適宜句読点を入れる。

<sup>125</sup> 原文「シテ」は合略仮名。

<sup>126</sup> 「衛生局年報」(第6次、明治14年、529頁)。

<sup>127</sup> 「衛生局年報」(第7次、明治15年、380頁)。

阪司薬場勤務時代の場長であった。また、オランダ人ドワルスを始め、柴田・邨橋・櫻井はみな技師で場長を務めることとなり、事務員が場長になることはなかった。言い換えれば、小野が大坂司薬場長となったのは事実ではない上、制度上にも不可能であった。

大坂司薬場の小野の主な功績は、司薬場移転の斡旋であった。このことは、大槻序にも記されているが、坂本序にはさらに詳しく述べられている。

【坂本序】予は曾て君と同じく職を内務省衛生局に奉したるの故を以て、姑く君の官仕に於ける一斑を述むとす。君の大坂司薬場(後に衛生試験所と改称す)の事務を掌理するや、偶大坂英語学校拡張の議起る、地司薬場に隣接するを以て之を他に移さざるへからず、君大坂市街に就て普く稽查する所あり、中の島五代友厚の別荘



中の島五代邸跡(日本銀行大阪支店・大阪市北区)

2019年7月9日 筆者撮影

(旧島原藩邸)を以て好適地と為し之を本省に具状す、本省之を可とし其買収の商議を君に一任す。五代氏は薩藩の出身にして当時在朝諸卿と肩を比するの勢力あり、大阪実業界に重きを為す、衛生局長長与専齋氏窃に此交渉の調はさらむことを憂慮す、君一日五代氏を鞞の本邸に訪ひ告くるに買地の事を以てす、氏は曰く、拙者は中の島の地を全部を統一し大阪人を指導して更に幾多の事業を興し大に商工業を振作して国家の富強を図らむとするの素志あり心算既に定る遺憾なから貴需に応じ難しと。時恰も西南の戦方に酣にして、虎列拉病大阪市街に蔓延し人々堵に安せず、君乃ち容を正して曰く、司薬場は現に市内四十万戸の飲料水を蒐め、技師全員御雇教師蘭人ドワルス氏と俱に飲用適否の試験中に属す、加わるに全市の飲食品検査の急務あり、又府下薬舗の販売する医薬及び関西北陸諸国の鉍泉鉍物を検査するの任務を負ふ、今後益衛生試験事務を拡張して国民の健康保持に貢献せむことを期す、故に其位置は交通至便にして水陸運漕の連絡に適するの地即ち貴墅の在る処の如きを選ふの要あり、是を以て小官の稟申は大久保内務卿の容認せらるゝ所となり、既に内旨を承く、希くは国家民人の為に枉て割愛せられむことをと、五代氏仔細に聴き了りて沈黙良久し、徐に口を開き懇勸之に答て曰く、既に内務卿の内旨此の如くなる以上拙者の別荘を以て公用に供するを諾すへし此旨大久保卿に復申せられたしと、省議決定の後、君再び五代氏を訪ひ、内務卿は貴諾を得て満足せられたりとの旨を告げ、地代金三千円を交付しければ、氏は之を受けて承知しましたとの外復一語を發せざりしと云ふ。

地は即ち今の日本銀行大阪支店の在処、誰か曾て君の至誠能く五代氏を動かし、僅々三千金を以て購ひ得たるものなるを知らむや。

坂本は、明治12年～17年、内務省衛生局に勤務していた<sup>128</sup>。また、明治18年に滋賀県へ転勤するまでに、東京府神田区駿河台南甲賀町に居住していた<sup>129</sup>。前掲の表で示すとおり、小野は明治15年～18年の間、小野の居所は同じく南甲賀町<sup>130</sup>にあった。二人は数年間において、同僚で隣人であったため、親しい交流があったのであろう。しかし、その後、坂本が「一別四十餘年、予は官跡常に定らす、君は城北根岸に棲遲して鉛槧に従事す、境遇同しからずと雖も、交情旧に異らす、今此需あり誼辞すへからず、乃ち書して以て序と為す」と記しているように、二人の間には交流が少なかった。よって、衛生局特に大阪司薬場時代の小野に関しては、坂本の記述は信頼できると考えられる。ちなみに、坂本序では、小野が大阪司薬場において「事務を掌理する」とされていることから、小野がやはり事務員を務めていたことがわかる。

大阪司薬場移転については、『公文録』第81巻(明治12年)「大阪司薬場新築之儀伺」などに確認されている。当然、五代邸の買取や建物の改築はその前のできことである。また、「西南の戦方に酣にして、虎列拉病大阪市街に蔓延し」ていたことから、小野が五代友厚と交渉していたのは明治10年であったことがわかる<sup>131</sup>。この点は、大槻序の記述とも一致している。

すなわち小野は、明治10年に大阪司薬場に転勤し、司薬場移転の一件において、五代友厚との交渉を担当していた。その結果、小野が弁舌をふるって五代を動かし、三千円という時価を下回る値段で五代邸の買取交渉に成功した。

#### 4、東京勤務時代

【高柳解説】のちに本局に移り、わが国最初の医師開業免許制度を樹立し、医療界に多大の貢献をした。

前節で掲げた表の示すとおり、明治15年、小野は大阪司薬場より東京へ召還され、18年に「非職」となるまで、内務省衛生局本局に勤務することとなった。小野はそれを機に、内務省官舎に近く、官僚の住むことが多かった神田区駿河台南甲賀町に居を構え、族籍を「宮城県士族」より「東京府士族」へ改めた。

この時期の小野の仕事について、大槻序には記されていない<sup>132</sup>。一方、小野の同僚で隣人

<sup>128</sup> 『枢密院高等官履歴』第六巻・昭和ノ二・坂本鈺之助(東京大学出版会、1997年、95～96頁)。

<sup>129</sup> 『内務省人事総覧』320・338・359・379・405頁参照。

<sup>130</sup> ちなみに、この場所は、現在の東京都千代田区神田駿河台二丁目、新御茶ノ水駅前一带に当たる。内務省が位置する大手町一丁目(現在同)からわずか一キロ程度の距離で、明治時代には官僚の住むことが多かったとされている。

<sup>131</sup> 高倉史人(1996)によると、明治時代の大阪において、コレラが大流行したのは10・12・14・15・18・19年とされている。そのうち、司薬場の移転以前の年は明治10年のみであり、西南戦争の勃発の時期と一致している。

<sup>132</sup> 明治10年代は、大槻が勤務先を何度も変えた時期にあたり、おそらく小野との交流も少なくなったと想定され

であった坂本は、本局時代の小野のついて以下のように記している。

【坂本序】君の入りて本局に勤務するや、全国の医師開業免許を内務省に統一するの議あり、新に免状を授与し始て医籍を作り之に登録することとなり、君其主任として鞅掌す、当時全国の医師三万三千餘人を算し、人口三千五百万と称す、是に於て医師と人口の比例を知ることを得たり、事稍小なるか如きも、細緻縝密なる君の性格にして始て能く其任務を全くしたるものと謂ふべく、其功績亦録せざるへからず。

聞く君は明治維新の際、仙台藩の命を帯ひて京師に赴き、諸藩名士の間に出入して国事の応酬に膺れりと、前に述ふる所の吏務の如きは、君に於ては固り末節に属す、只こゝに予の親く知る所のものを叙するのみ。

医師資格試験に関わる制度について、明治政府は、明治元年に着手し始め、七年に「医制」を公布し、九年に文部省の主導で各県それぞれの試験規則が定めさせた。医療事業が文部省から内務省へ移管されたのち、明治12年に全国統一の試験制度が整備され、16年にははじめて、独立した法律としての「医師免許規則」が制定された<sup>133</sup>。坂本は、小野が「本局に勤務するや、全国の医師開業免許を内務省に統一するの議」に参加したとしていることから見れば、小野が関与したのは、16年施行の「医師免許規則」の制定であったと考えられる。

高柳解説では小野が「わが国最初の医師開業免許制度を樹立」したとしているのは、おそらく、坂本序の「其主任として鞅掌す」との記述を根拠としているのであろう。しかし、この時期の小野は昇進したとはいえ、依然として「四等属」であって特に出世したとは言えず、一介の属官で、日本初の全国医師開業免許制度の法制定を仕切っていたとは考えられない。むしろ、やはり衛生局長の主導のもとで、小野清ら事務員たちが法案などを作成したと考えたほうが自然であろう。実際、坂本も、「前に述ふる所の吏務の如きは、君に於ては固り末節に属す」と述べ、戊辰戦争における小野の奔走に比べられないとしている。すなわち、「医師免許規則」の制定において、小野はおそらく事務員を務めていたと推定され、高柳解説の小野がこの法案を創立したと思わせるような表現は誇張あるいは誤解であろう。

小野は長年衛生局に務め、功績を積むと同時に緩やかに昇進していった。しかし、後に起きた近代日本の政治構図の変革が、小野の人生に大きな波乱を及ぼした。

---

る。「大槻文彦博士年譜」参照。

<sup>133</sup> 橋本鉦市《2008》108～109頁を参照。

明治18年、伊藤博文を初代内閣総理大臣とする内閣制度が発足し、かつて日本の内政を仕切っていた内務省は内閣の統率下に位置づけられるようになった。この時期に、内務省に設けられていた各局の構成が激しく変化し、それぞれに属していた属官たちの人事も定まらなかった<sup>134</sup>。この年、小野清が「非職」となり、しばらく所属先をなくした。翌19年、小野は新たに設立された内務省総務局に編入され、住居を官舎にもっと近い神田区神田錦町一丁目十三番地に移した<sup>135</sup>。しかし、これは小野の不遇の始まりに過ぎなかった。

明治24年、総務局が内務省から官房へ移管されることにつれ、局の人事はまた不安定となった。小野はこの年に隠居し、死去まで出仕することはなかった。明治24年に、小野はまだ46歳で、いわゆる楽隠居にはまだ早すぎる歳であった。また、小野はその後、87歳まで長生きしたことから見れば、病気の理由ではなかったのであろう。

大槻序では、「衛生局を辞せし」とされているが、そもそも当時小野が所属していたのは衛生局ではなく総務局であった上、この点においては大槻の記述の信憑性が疑われる。ちなみに、この年、『言海』編纂完成に向けていた大槻であるが、家族五人が流行性感冒に罹り、妻と次女を亡くした<sup>136</sup>。おそらく、旧友小野の進退に構う余裕はなかったのであろう。

かくして小野は仕途に断念し、四十餘年に及ぶ隠居生活を送りつつ、学者へと変身を遂げた。

## 5、隠居時代

【高柳解説】退官後は著述に専念し、本書『徳川制度史料』もその後二十余年の歳月を要した労作で、大正十五年八月、財団法人啓明会の補助を得て公刊するに至ったものである。

著者小野清は、本書のほか、『日本城郭誌』『大阪城誌』『名古屋城誌』『伏見城誌』『開国紀要』『関所総覧』等、幾多の著述があり、とくに天文学については、印度、中国、日本の天文群書を収集して、大正四年『天文要覧』を完成し、天覧に供している。

かくして幾多の功績を残し、昭和七年八月五日、東京都根岸の僑居において歿した。時に年八十七歳、遺骸は多摩共同墓地に葬る。



神田錦町1-13  
2020年3月6日 筆者撮影

<sup>134</sup> 『内務省史』589頁参照。

<sup>135</sup> 現在の千代田区神田錦町1-13にあたる。内務省官舎にはわずか数百メートル。ちなみに、小野と交流していた坂本鉦之助も、この年に内務省を離れ、地方公務員となった。

<sup>136</sup> 「大槻文彦博士年譜」参照。

退職した小野は、根岸に隠居し、学問に没頭していた。

小野の著書について、高柳解説では多くの書名が列举されているが、筆者の調べるかぎり、小野清を著者とする書物には、『大坂城誌』、『天文要覧・天文彙考』、『徳川制度史料』の三種が出版されている。そのほか、明治天皇に献上した未発行の書物が一種存在するとされている。以下、それぞれを紹介する。

### ①『大坂城誌』

明治32年出版。表紙には「静修書屋蔵版」とあり、奥付には「著者兼発行者 小野清」とある。静修とは、小野の号である。坂本序に「君は城北根岸に棲遅して鉛槧に従事す」とあるように、小野が出版に携わり、この書も小野自身が発行したものである。

『大坂城誌』の緒言に、小野は、この書を編纂するのに「二十餘年ノ星霜ヲ閱スルニ至リタリ」と述べている。出版の明治32年からの二十餘年前は、小野が大坂司薬場に勤務していた時期にあたる。

実際、小野が大坂勤務当時、積極的に資料を収集していた。その様子は、福沢諭吉の手紙に伺える。明治13年1月12日、福沢の小野宛の手紙には、以下の内容が見られる<sup>137</sup>。

扱ハ此程大坂城之図面等、御入手相成候旨、態々御為知被下、難有奉存候。若し御序も有之候砌、一覽相願度候。

一方、大槻序には、より詳しい情報が記されている。

【大槻序】子肅の大坂にある時、大坂城の築構の雄大なるを觀て、大いに感ずる所あり、其沿革を記述せむとて、許多の材料を集蒐し、終に、大坂城誌十二卷を成せり、此書は、前大坂府知事西村捨三の贊助を得て、明治三十二年、仁徳天皇の一千五百年祭に當りて、日本城郭誌卷首と共に、刊行せられたり、これに因みて、安土城、伏見城、江戸城、名古屋城、其他に就きて、日本城郭誌、数十卷を編成せしかど、未だ発刊せず。

小野は、大阪に着任した当時から、『大坂城誌』編纂のために資料収集を行っていたが、日



小野清が晩年を過ごした地

根岸 2-16

2020年3月6日 筆者撮影

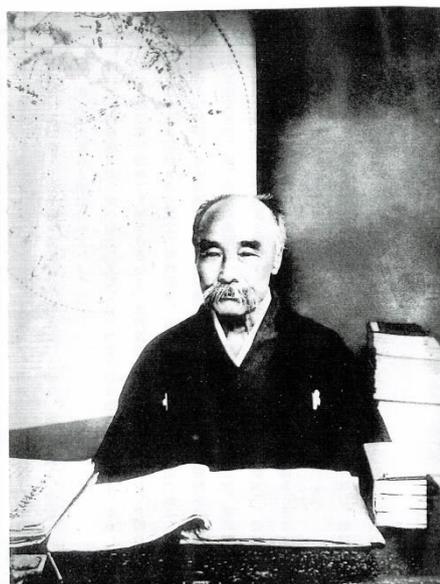
<sup>137</sup> 慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第二卷四二六(岩波書店、2001年、308頁)。

常業務に追われたか、編纂に着手したのは退職したのちのことで、ようやく明治32年に上梓した。また、『大坂城誌』は『日本城郭誌』の一部に過ぎず、他には、『安土城誌』、『伏見城誌』、『江戸城誌』、『名古屋城誌』などの書稿が存在していたとされている。しかし、『大坂城誌』が出版して二十餘年、大槻序が書かれた大正11年になっても、これらの書物は「未だ発刊せず」のままであった。仮に出版されていたとしても、『日本城郭誌』はシリーズ名で、そこには、『大坂城誌』を始め、『安土城誌』、『伏見城誌』、『江戸城誌』、『名古屋城誌』その他が含まれている、という形式になっているはず。高柳解説が『日本城郭誌』・『大阪城誌』・『名古屋城誌』・『伏見城誌』を並列して述べるのは誤りである。

## ②『天文要覧・天文彙考』

大正14年、六合館出版の書物である。『天文要覧』と『天文彙考』とは別の書で、一冊にして出版されている。両者はともに、インド・中国・日本古来の天文学、及び西洋の天文学それぞれの星図を収録して解説を加えたものである。前者は大正六年に公開されたもので<sup>138</sup>、後者は前者の「参考書」として、さらに詳しい論述を並べた書物である<sup>139</sup>。

『天文要覧・天文彙考』は、大正六年に発表された「二十八宿と獣帯との想定及び相伝に就て」をもとに、加筆して完成された書物であり、大正12年、出版社に委ねられた。しかし、その直後、関東大震災において、書稿の原本が焼失された。「天文要覧奥書」には、このことについて詳しく記されている。



隠居時代の小野清  
『天文彙考』巻首附図

前稿天文要覧一卷・天文彙考五卷・金石四禽図譜一卷・曩に某印刷会社に於て印刷中、大正十二年九月一日、大震の時火災に罹り、正副恒星絵図及び諸図表・金石拓本・写真原版・其他一切の諸材料・並に英文天文要覧及び、列宿獣帯論の如きも、亦俱に灰燼に帰せり。是れ実に文園に於ける予が終天の大遺憾なり。嗟乎已矣哉。

後ち沈思数日、謂へらく、斯業再挙して、必ず、素志を貫徹すべしと、是に於て、蹶然奮興、再修に着手し、努力五旬、書遂に成り殆ど旧観に復す。而して前稿に掲載予定の正本恒星絵図写真大震の当時、校正の為に草廬に在り災厄を免れたれば、乃ち是れ巻首に収む。本書天文要覧恒星絵図、即ち是れなり。尚ほ、英文天文要覧は之を本書の後に収載せり。

<sup>138</sup> 小野清「二十八宿と獣帯との想定及び相伝に就て」、「天文月報」1917年6月・7月。

<sup>139</sup> 小野清「天文彙考奥書」による。

……

今、摂政宮殿下、御成婚奉祝の時に当る、是れ、誠に、千載一遇の好機会なり。乃ち、此の恒星絵図・四禽皇極三垣を周匝守護する瑞象に因み、微臣、区区献芹の微衷を寓し、以て、正本を九重の闕下に献上せんと欲し、又、副本は、博物館に寄贈せんと期し、添へて上呈する星象総紀正本副本・装幀・並に、容器の如きも亦皆既に具り、將に現品正副恒星絵図を、某印刷会社より還取せんとせし刹那に於て、何ぞ図らむ、此の劫火に罹り、皆忽ち烏有に帰せんとは。正本彩色図・副本墨図は写真光線感応と、彩色彫刻参考との為に、共に、某印刷会社に遣りしものなり。

……而も、今や、再製作は期すべからず。嗚呼多年辛苦努力の作品、一朝にして火災に罹り、献納の希望亦徒に水泡に帰せり。是に於て觀ずれば、予が半世の事業は、宛も南柯の一夢の如し。

小野は、摂政宮(後の昭和天皇)の成婚を祝うため、『天文要覧・天文彙考』の献上を計画していたが、出版の最中、関東大震災に罹り、書稿及び絵図・写真資料がすべて焼失した。後に文章部分を再度執筆したが、図面などが殆ど失われ、献上の計画も頓挫した。そこで、77歳の小野は、自分の人生を振り返り、「南柯の一夢の如し」と慨嘆した。

### ③『徳川制度史料』

昭和二年、六合館出版の書物である。本書は、「徳川制度史料初輯」と題され、おそらく小野は引き続けて二輯を出版する予定であったと考えられる。

『徳川制度史料』は、徳川幕府の制度・儀式・年中行事などの資料を収めた「柳営行事」、その付録として、山岡鉄舟・勝海舟の逸聞を記した「徳川家承祀」及び「二舟事略」、小野自身の幕末見聞を記した「昨夢瑣事」、さらに、徳川幕府によって全国に設けられていた各関所に関する資料を収めた「関所総覧」から構成されている。

また、すでに触れたように、昭和43年、高柳金芳校注の再版が新人物往来社によって出版されている。再版は初版と比べ、「徳川家承祀」、「二舟事略」、及び「昨夢瑣事」の半分以上占めていた影山流居合術の写真や解説部分が削除されている。ちなみに、校注者高柳氏は、「関所総覧」を本書の一部として収録している同時に、解説では「本書のほかに……『関所総覧』等、幾多の著述があり」と述べているのは不可解である。

### ④明治天皇に献上したとされる書籍

書名は不詳。大槻序には次のように記されている。

【大槻序】明治十三年七月、刑法、新たに発布せられ、十四年十二月、又、陸海軍刑法

の発布あり、子肅、人民の休戚に関する大なるを感じ、乙夜の覽に供せむの志を起こして、従前の新律綱領、改定律令と、新旧を比較し、苦心して、精細緻密なる刑法一覧表を作り、十六年十二月、三表を自写し、鉄舟を介して、御前に献納し、又、活刷して、十九年八月、再び進献し、又、諸人に頒ちぬ、官衙に於て、法令を作り、罰則を附するに当り、其寛嚴を比較するに、頗る裨益せりと云ふ、初め、福沢諭吉にも贈りしに、一見して云ふ、是れは能く売れむ、書誌に託しては如何にと、子肅云ふ、御覽を期しての製なり、発売せむは素志にあらずと。

小野が製作した新旧刑法一覧表である。明治16年に山岡鉄舟を介して明治天皇に献上され、19年に印刷版が配られ、福沢諭吉の称賛を得たが、小野の意向により出版はされなかった。この書物に関する情報は大槻序のみであり、宮内庁書陵部データベース<sup>140</sup>にも見当たらない。

ちなみに、高柳解説には『開国紀要』という書名が見られるが、それがすなわちこの書物か、あるいは高柳氏が『徳川制度史料』より削除した「徳川家承祀」・「二舟事略」か、あるいはほかに別の書物が存在していたか、手がかりを掴んでいないため、しばらく憶測を控えておく。

かくして、数奇なる人生を味わい尽くした小野清は、昭和七年に、87歳でその生涯を閉じた。忠誠を尽くした仙台藩は滅び、苦心して奉仕した明治政府には見放され、数十年の心血を要した著書は震災で灰燼に帰した。優れた才能と、国のために尽力せんとする願望を備わっていたものの、その才能を十分に発揮できず、遺憾を抱きながら長き一生を終えたのである。

本研究で検証した小野清の略年譜は以下のようである。

年号	西暦	年齢	小野の出来事	歴史事件
弘化3	1846	1	仙台北下、100石程度の大番隊士の家に誕生	
安政元	1854	9	仙台藩校養賢堂に入学、影山流居合指南山田民之助に入門	
慶応2	1866	21	江戸へ派遣され、大学頭林学斎・儒官芳野金陵・剣術師桃井左右八郎・千葉道三郎に入門	
明治元	1868	23	伊達筑前の部下で会津討伐に出陣、後に京都・江戸にて情報工作に従事	戊辰戦争

<sup>140</sup> <https://shoryobu.kunaicho.go.jp/>

明治 2	1869	24	横浜などを転々としたのち、慶應義塾に入る	
明治 8	1875	30	福沢諭吉の推薦で内務省衛生局に出仕、横浜司薬場の設立に関与	衛生局の内務省移管
明治 10	1873	28	大阪司薬場勤務、司薬場移転をめぐって五代友厚邸の買取交渉に成功	西南戦争、大阪コレラ大流行
明治 15	1878	33	本局勤務となり、全国医師開業免許制度の設立に関与	医師開業免許制度設立
明治 16	1879	34	新旧刑法一覧表を明治天皇に献上	
明治 18	1881	36	非職となる	内閣制度発足
明治 19	1882	37	内務省総務局に勤務	
明治 24	1891	46	退職して隠居	総務局の内閣官房移管
明治 32	1899	54	『大坂城誌』出版	
大正 12	1923	78	『天文要覧・天文彙考』書稿焼失、再執筆	関東大震災
大正 14	1925	80	『天文要覧・天文彙考』出版	
昭和 2	1927	82	『徳川制度史料』出版	
昭和 7	1932	87	死去	

### 第3節 日本に於ける夷白堂の流伝

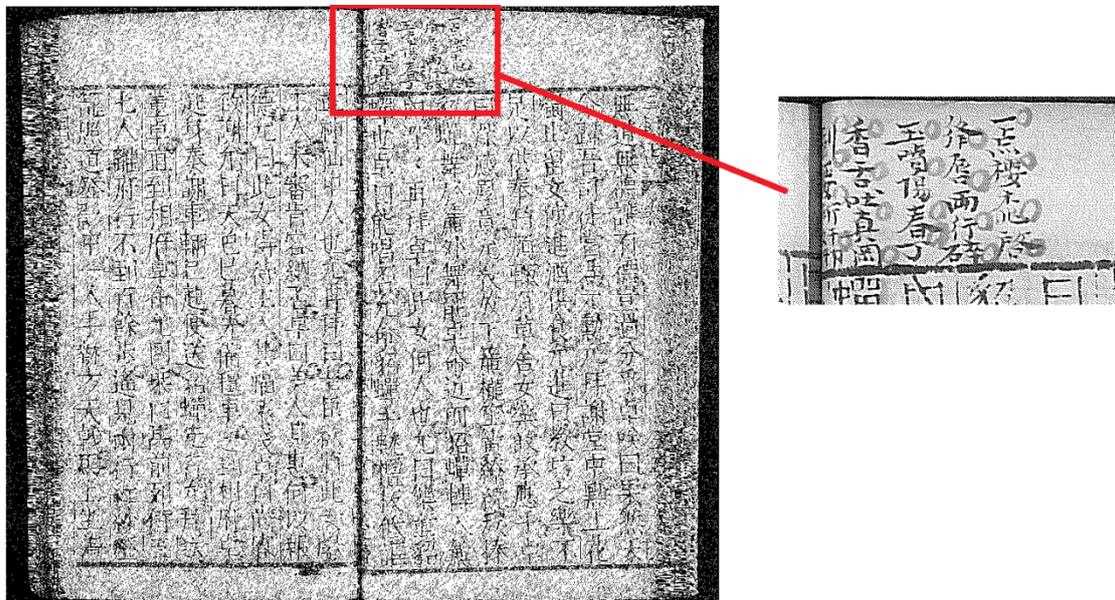
#### 1、三首の詩

夷白堂本の編者は、簡潔さを図り、もともと底本にあったと思われる詩文の大部分を削除している<sup>141</sup>。しかし、慶應義塾蔵本には、その削除されていた詩文のうち、三首の詩が手書きで補われている。おそらく、日本に伝来した後、読者が他の版本を参照して書き込んだものであろう。と

<sup>141</sup> 例えば、「諸葛亮智説周瑜」の則においては、諸葛亮が周瑜の真意を確かめるため、改竄された「銅雀台賦」を周瑜に聞かせる場面があるが、夷白堂本には、この「銅雀台賦」が省略されているため、周瑜がそれを聞いてなぜ怒ったかはさっぱりわからない。すなわち、夷白堂本の底本には、もともと(諸葛亮が改竄した)「銅雀台賦」の全文が引用されているが、夷白堂本の段階で削除されたとしか考えられない。このように、夷白堂本の編者は多くの詩文を削除し、紙面を省いたが、それがために話の筋が不明確になってしまうケースもしばしば見られる。

なると、ここに詩を補入した人(以下、「書込者」)は、どの版本を参照したのか。本節では、この補入された詩を分析することによって、日本における夷白堂本の流伝に関わる手がかりを探りたい。

【詩A】「司徒王允説貂蟬」の則、卷二35葉裏の上部の空白に書き込まれている。



まず、三系統それぞれの代表として、葉逢春本、劉龍田本、嘉靖本のテキストを【詩A】と比較すると、以下のようになる。

系統	版本	テキスト
?	【詩A】	一点櫻桃啓絳唇、兩行碎玉噴陽春。 丁香舌吐真岡劍、要斫奸邪乱国臣 <sup>142</sup> 。
二十繁	葉逢春本	一點櫻桃啓絳唇、兩行碎玉嚼陽春。 丁香舌吐衝剛劍、要斬姦邪乱國臣。
二十簡	劉龍田本	一點櫻桃啓絳唇、兩行碎玉嚼陽春。 丁香舌吐 <sup>143</sup> 衝剛劍、要斬姦邪乱國臣。
二十四	嘉靖本	一點櫻桃啓絳唇、兩行碎玉噴陽春。 丁香舌吐衝剛劍、要斬姦邪乱國臣。

上の表で示すとおり、【詩A】は、葉逢春本、劉龍田本、嘉靖本のいずれにも一致しない。さらに、比較の範囲を27種<sup>144</sup>に拡大しても、完全に一致するテキストを発見できなかった。ただし、

<sup>142</sup> 掲示の写真には、左の一行が写っていない。慶應義塾蔵原本を参照して補完した。また、活字を起こす際、できる限り原文と一致する字形を用いるが、入力できない2個の異体字を以下に示す。「桃」は、上に「木」、下に「兆」。「吐」は、右上に点あり。

<sup>143</sup> 「吐」は、右上に点あり。

<sup>144</sup> 周文業編『『三国演義』版本数字化研究』データベース(北京圖本、二酉堂本、黃正甫本、嘉靖本、李漁本、

以下のように条件を緩和すれば、【詩 A】に比較的に近いテキストをいくつか発見できる。

- (1) 第二句第五字は「噴」。
- (2) 第三句第六字は「岡」に近似する。
- (3) 第四句第二字は「斫」。

この条件で絞れば、以下の3つの版本が浮かび上がる。

系統	版本	テキスト
?	【詩 A】	一点櫻桃啓絳唇、兩行碎玉噴陽春。 丁香舌吐真岡劍、要斫奸邪乱国臣 <sup>145</sup> 。
二十簡	劉榮吾本	一點櫻桃啟絳唇、兩行碎玉噴陽春。 丁香舌吐衝剛劍、要斫奸邪乱國臣。
	英雄譜本	一理櫻桃啟絳唇、兩行碎玉噴陽春。 丁香舌吐衝剛劍、要斫姦邪乱国臣。
	魏某本	一點櫻桃啓絳唇、兩行碎玉噴陽春。 丁香舌吐術剛劍、要斫奸邪乱国臣。

これらのテキストを更に分析すると、以下のことがわかる。

- (1) 第一句第二字は「點」または「点」である。英雄譜本の「理」は「點」の誤りである。
- (2) 第三句第五字について、劉榮吾本の「衝」(zhūn)は、康熙字典では「真也、正也、不雜也」<sup>146</sup>とされており、【詩 A】の「真」と字形、字音ともに似ており、意味も近い。一方、英雄譜本の「衝」、魏某本の「術」は、意味不明であるが、字形では「衝」と似ていることから見ると、おそらく「衝」の誤りであろう。
- (3) 第三句第六字、【詩 A】の「岡」は、おそらく「剛」の誤りであると考えられる。魏某本の「剛」は「剛」の簡体字であるが、「岡」には似ていない。

【詩 A】は、劉榮吾本、英雄譜本、魏某本のうち、特に劉榮吾本に近い。しかし、現在知られる劉榮吾本は大英博物館蔵本のみであり<sup>147</sup>、日本へ伝来した記録はない。

一方、劉榮吾本、英雄譜本、魏某本はいずれも、二十卷簡本系の分枝である「英雄志傳」小系統に属している<sup>148</sup>。同じ小系統に属する版本で、日本に現存しているものは、大谷大学蔵楊美生本である。楊美生本のテキストは以下である。

李卓吾本、劉龍田本、劉榮吾本、毛宗崗本、湯賓尹本、魏某本、夏振宇本、熊佛貴本、熊清波本、楊閩齋本、葉逢春本、英雄譜本、余象斗評林本、余象斗本、聯輝堂本、鐘伯敬本、周曰校丙本、朱鼎臣本の計24種)に加え、韓国蔵周曰校朝鮮本、大谷大学蔵楊美生本、東北大学蔵費守齋本といった、計27種を参照した。

<sup>145</sup> 掲示の写真には、左の一行が写っていない。慶應義塾蔵原本を参照して補完した。また、活字を起こす際、できる限り原文と一致する字形を用いるが、入力できない2つの異体字を以下に示す。「桃」は、上に「木」、下に「兆」。「吐」は、右上に点あり。

<sup>146</sup> 吉川弘文館1905年影印本、1149頁。

<sup>147</sup> 中川諭《1998》30頁。

<sup>148</sup> 中川諭《1998》、魏安《1996》を参照。

一點櫻桃啓絳唇，兩行碎玉噴陽春。  
丁香舌吐衝剛劍，要斫奸邪乱国臣。

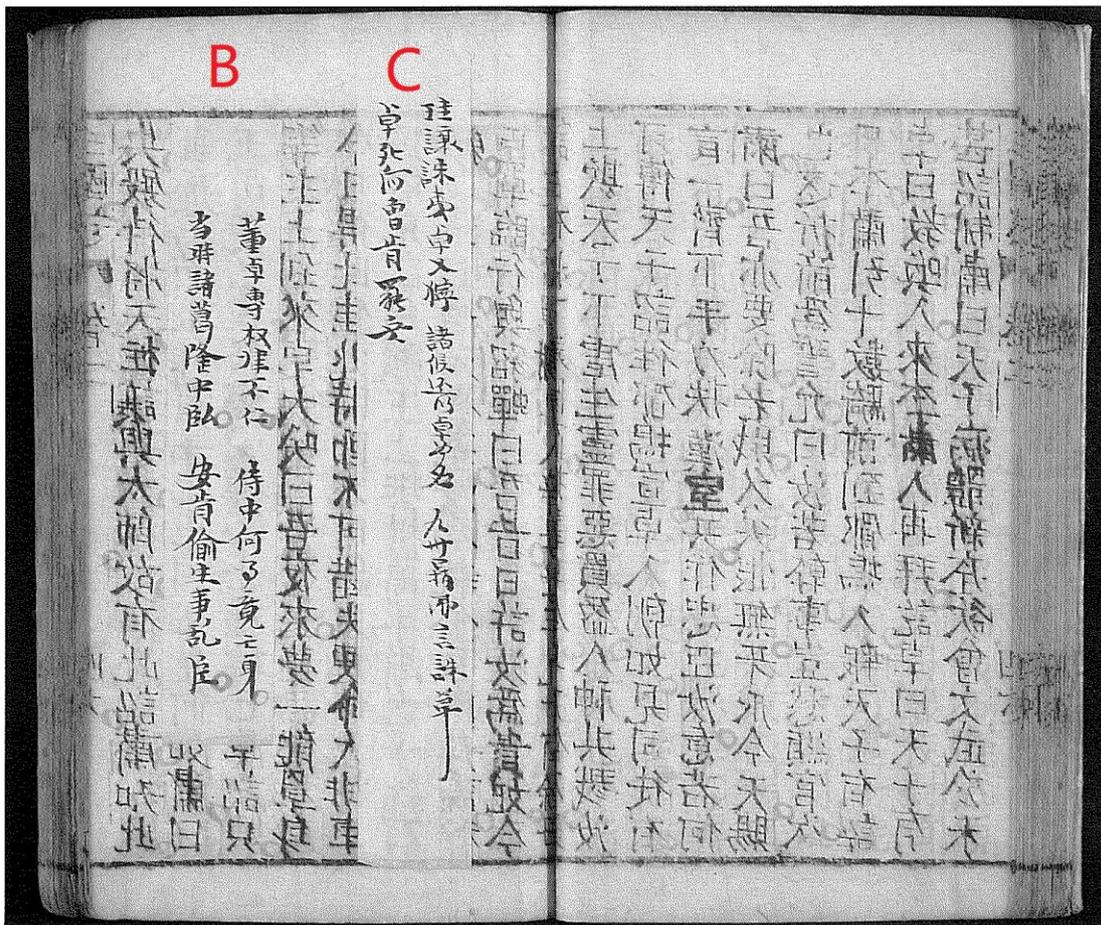
楊美生本と【詩 A】を比較すると、以下のことがわかる。

- (1) 第二句第一字は、【詩 A】と同じく「兩」に作る。
- (2) 第四句第六字は、【詩 A】と同じく「国」に作る。
- (3) 第三句第六字は簡体字の「剛」に作り、前にも触れたように、【詩 A】の「岡」のもとにはなり得ない。

【詩 A】の底本は、「英雄志傳」小系統に属する版本であり、とりわけ楊美生本に最も近い版本であるが、楊美生本ではない。

【詩 B】【詩 C】

「李権郭汜乱長安」の則、紙切れに書かれ、卷二に挟んである。



【詩 B】を劉榮吾本、英雄譜本、魏某本、楊美生本と比較すると、以下のようになる。

版本	テキスト
【詩 B】	董卓專权肆 <sup>149</sup> 不仁、侍中何事竟亡身。 当時諸葛隆 <sup>150</sup> 中臥 <sup>151</sup> 、安肯偷生事乱臣。
劉榮吾本	董卓專權肆不仁、侍中何自竟亡身。 當時諸葛隆 <sup>152</sup> 中卧、安肯偷生事乱臣。
英雄譜本	董卓專權肆不仁、侍中何自竟亡身。 當時諸葛隆中卧、安肯偷生事乱臣。
魏某本	董卓專權肆不仁、侍中何自竟亡身。 當時諸葛隆中卧、安肯偷生事乱臣。
楊美生本	董卓專权肆不仁、侍中何自竟亡身。 当時諸葛隆中卧、安肯偷生事乱臣。

第二句第四字について、表で示す版本に限らず、前述した27種の版本において、「事」に作るテキストはない。しかし、「侍中何事竟亡身」(侍中は、何の理由をもって、身を滅ぼしたのか)という表現は意味が通じているが、「事」と「自」の字形は似ていない<sup>153</sup>。すなわち、【詩 B】において、「自」が「事」になるのは、書き間違いではなく、意図的に改変されたものである可能性が高い。その改変は、書込者が参照した底本の段階ですでにあったのか、また書込者が自身の判断で改変したのか。底本がわからないため、それを判断するのは難しい。

第一句第四字が、【詩 B】と同じように簡体字の「权」に作るのは、楊美生本のみである。

それ以外の字句は、【詩 B】と「英雄志傳」小系統諸本に一致している。

### 【詩 C】

版本	テキスト
【詩 C】	珪讓誅夷卓又獐、諸侯还以卓為名。 九州鼎沸言誅卓、卓死何曾肯罷兵。
劉榮吾本	珪讓誅夷卓又獐、諸侯還以卓為名。 九州鼎沸言誅卓、卓死何曾肯罷兵。
英雄譜本	珪讓誅夷卓又獐、諸侯還以卓為名。 九州鼎沸言誅卓、卓死何曾肯罷兵。

<sup>149</sup> 「鼎」の左の部分に「聿」。曾良、陳敏編著『明清小説俗字典』(廣陵書社, 2017年, 582-583頁)によると、「肆」の俗字である。

<sup>150</sup> 右下は「止」。

<sup>151</sup> 右は「ム」。

<sup>152</sup> 右下は「止」。

<sup>153</sup> 「事」と「自」は、発音は近いが、江戸～明治時代の日本人にしては、漢文を訓読で読むのは一般的であったことから、発音の相似性による書き間違いには考えにくい。

魏某本	珪讓誅夷卓又獐、諸侯還以卓為名。 九州鼎沸言誅卓、卓死何曾肯罷兵。
楊美生本	珪讓誅夷卓又獐、諸侯還以卓為名。 九州鼎沸言誅卓、卓死曾誰肯罷兵。

第二句第二字は、【詩 C】では「侯」に作るが、それは明らかに「侯」の誤りである。

第二句第三字が【詩 C】と同じように簡体字の「还」に作るのは、楊美生本のみである。

第四句第三・四字は、楊美生本のみ「曾誰」に作る以外、諸本が【詩 C】に一致している

以上、補入された三首の詩を分析した。その結果、書込者が参照した底本は、二十卷簡本系の分枝である「英雄志傳」小系統に属している版本で、そのうち楊美生本に近い版本であるが、楊美生本ではない、ということがわかる。

## 2、朱筆修正

この書込者は、他のところにも修正の痕跡を残している。そのうち、夷白堂本第二十二卷第六葉表には、以下の文がある。

【夷】桀作旋室象廊、紂為傾宮鹿臺、以喪其社稷。楚靈以築草華而身受其禍。

この文に対して、書込者は朱筆で以下のように修正している。その修正した字を標記する。

【修】桀作旋室象箸、紂為傾宮鹿臺、以喪其社稷。楚靈以築章臺而身受其禍。

すなわち、書込者はA「廊」を「箸」に、B「草」を「章」に、C「華」を「臺」にと、三ヶ所の文字を変えた。まずは、この修正は果たして正確であろうか。

この文は、贅沢を尽くした魏の明帝・曹叡に対して、少傅の楊阜が呈した上奏文である。『三国志』卷二十五「魏書楊阜伝」には原文が記されている。

【志】桀作璇室象廊、紂為傾宮鹿臺、以喪其社稷。楚靈以築章華而身受其禍。

比較すると、三ヶ所において、Bのみが誤った字を修正したもので、AとCでは却って正しかった字を誤字にした、ということは一目瞭然である。

次は、前節と同じように、『三国志演義』諸本において、二十四卷系・二十卷繁本系・二十卷簡本系からそれぞれ代表的な版本のテキストを比較する。

系統	版本	テキスト
二十四	夷白堂本	桀作璇室象廊、紂為傾宮鹿臺、以喪其社稷。楚靈以築草華而身受其禍。
?	朱筆	桀作璇室象箸、紂為傾宮鹿臺、以喪其社稷。楚靈以築章臺而身受其禍。
二十四	嘉靖本	桀作璇室象廊、紂為傾宮鹿臺、以喪其社稷。楚靈以築章華而身受其禍。
二十繁	葉逢春本	桀作璇室象廊、紂作傾宮鹿臺、以喪其国。楚築靈章華而身受禍。
二十簡	劉龍田本	桀作璇室象廊、紂作傾宮鹿臺、以喪其国。楚靈築章華而身受其禍。
二十簡	楊美生本	桀作璇室象箸、紂作离宮鹿臺、以喪其国。楚靈築章臺而身受其伐。

上の表が示すように、諸本において、テキストの内容が千差万別で、分類すら難しいほどである。しかし、少なくとも、朱筆の三文字に限っては、正しいかどうかに関わらず、楊美生本とすべて一致している。

前節「三首の詩」の検証で述べたように、書込者が参照した版本は、二十卷簡本系の「英雄志傳」小系統に属している版本である可能性が高い。さらに、「英雄志傳」小系統諸本のテキストを比較すると、以下のようになる<sup>154</sup>。

版本	テキスト
朱筆	桀作璇室象箸、紂為傾宮鹿臺、以喪其社稷。楚靈以築章臺而身受其禍。
劉榮吾本	桀作璇室象箸、紂作離宮鹿臺、以喪其国。楚靈築章臺而身受其伐。
英雄譜本	桀作璇室象廊、紂為瓊宮鹿臺、以喪其社稷。楚靈築章華而身受其禍。
楊美生本	桀作璇室象箸、紂作离宮鹿臺、以喪其国。楚靈築章臺而身受其伐。

まず、英雄譜本には、朱筆の A と C と一致しないため、修正の底本ではないと推定される。一方、劉榮吾本と楊美生本は、A～C のいずれも朱筆と一致する。しかし、「紂作離宮鹿臺、以喪其国」の一句は、夷白堂本と大きく異なっている。書込者が、A と C において、もともと正しかった

<sup>154</sup> 魏某本は、闕卷のため省略する。

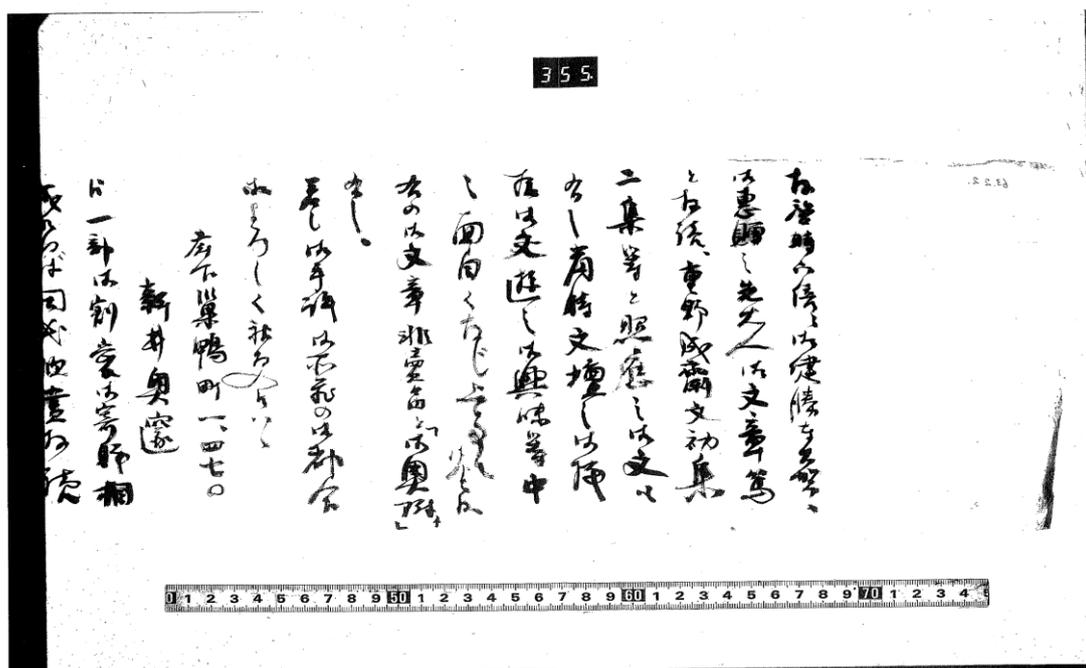
文字を誤字に変えたことから、自ら判断せず、底本のみを信じるという姿勢が伺える。とすれば、「紂作離宮鹿臺、以喪其国」の一句も、底本に従って夷白堂本の文字を変えるのが自然であるが、その痕跡は見られない。すなわち、劉榮吾本も楊美生本も、書込者が参照した底本に近い関係にあるが、その底本ではないと考えられる。

以上、検証した結果、第二十二巻に見られる朱筆修正は、「三首の詩」と同様、二十巻簡本系の分枝である「英雄志傳」小系統に属し、特に楊美生本に近い版本を参照して施されたものである。このことは、日本にはかつて、現在知られている諸本とはまた異なる『三国志演義』が存在していたことを証明している。その版本はすでに散逸したのか、または未発見なのかは判断できないが、それが江戸～明治時代の知識人層にある程度読まれていたことは確かであろう。

### 3、小野清の筆跡との比較

この書込者は、夷白堂本の旧蔵者の小野清であろうか。この問題に関する手がかりが少なく、判断しにくいですが、筆跡を比較することで、多少のヒントは得られるのであろう<sup>155</sup>。

東京都立中央図書館には、小野清の岡百世宛の手紙が収蔵されている。



<sup>155</sup> 朱筆修正は、三文字しかなく、加えて元の字と重なっているため、筆跡の比較はしにくい。従って、ここでは、三首の詩を検証する。



とであるため<sup>156</sup>、小野のこの手紙もその時期のものであろう。すでに論じたように、小野は明治23年に内務省から退官し、死去まで隠居生活を続け、学問に励んでいた。この時期において手元にあった夷白堂本『三国志演義』の校勘作業を行っても不思議ではない。

しかし、書込者と小野の筆跡を比較した結果、同一人物の手によるものとは考えにくい。まず、書込者の筆跡は丁寧であるが、俗字が多く使われている。三首の詩、計84字のうち、【詩 A】には「両」「奸」「乱」「国」、【詩 B】には「权」「肆<sup>157</sup>」「当」「乱」、【詩 C】には「还」と、9つの俗字が見られる。一方、小野の手紙は、いかに字をくずしても、俗字を使うことは見られない。

また、両者における同じ字を比較すると、その相違性は一目瞭然である。

 <p>【詩 A】「一」</p>	
 <p>【詩 B】「当時」</p>	
 <p>【詩 B】「中」</p>	
 <p>【詩 B】「安」</p>	

この筆跡の不一致を証拠に、書込者は小野清ではないと断言するまではできないが、少なくともその可能性は薄まるのであろう。もし書込者は小野清ではないとすれば、小野の手に入る時点で、三首の詩はすでに書き込まれていた。となると、この夷白堂本は、かつて複数の知識人の手に渡り、愛読されていたことが推測できるのであろう。

<sup>156</sup> 工藤正三監修『奥遼先生資料集』第六巻付き「新井奥遼略年譜」(大空社、1993年)参照。

<sup>157</sup> 「帰」の左の部分に「肆」。

#### 第4節 二十四巻系における夷白堂本の位置づけ

##### 1、統計データの分析

夷白堂本と周日校諸本との相互関係について、前掲中川論(2011a)は、「夷白堂本はやはり周日校乙本・丙本に近い版本であるが、しかしながら周日校刊本を底本としたものではない」と説く。氏のこの結論に異を唱える余地はほとんどないが、夷白堂本と二十四巻系の他の諸本とはどのような関係にあるのであろうか。本節では、中川氏の論考を踏まえ、嘉靖本・夏振宇本・周日校朝鮮本・周日校蓬左本を代表とする二十四巻系諸本における夷白堂本の位置づけを検証する。

まずは、夷白堂本に見られる誤字・脱字・衍字などの誤りをすべて見出し、嘉靖本・夏振宇本・周日校朝鮮本・周日校蓬左本における同じ箇所と比較し、一覧表を作った(付表参照)。その結果にさらなる統計を施し、以下の表に掲示する。

	嘉靖本	夏振宇本	周朝本	周蓬本
○同じく誤	105 (13.0%)	107 (13.3%)	154 (19.1%)	199 (24.7%)
△誤にして不一致	6 (0.7%)	7 (0.9%)	11 (1.4%)	3 (0.4%)
×比較不可	32 (4.0%)	7 (0.9%)	12 (1.5%)	5 (0.6%)

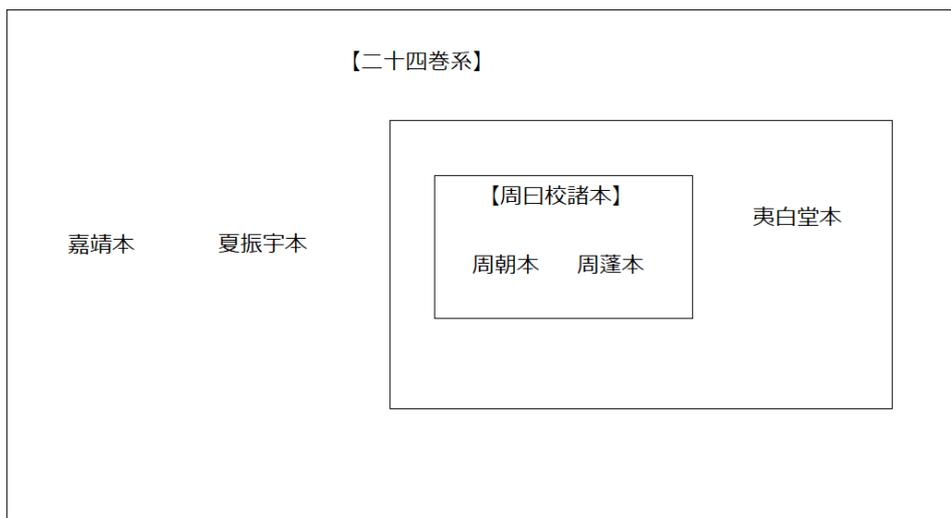
序章で述べたように、二つの版本の間に、同じ誤りの数(表では○記号)が多ければ多いほど、版本関係が近いと推測される。比較対象の四つの版本のうち、嘉靖本と夏振宇本の「○」の比率は比較的到低く、約13%を占めている。一方周日校諸本を見ると、周朝本は19.1%、周蓬本は24.7%と、嘉靖本・夏振宇本を大幅に上回る。四つの版本のうち、夷白堂本に最も近い版本は周蓬本で、その次は周朝本、嘉靖本と夏振宇本は比較的に遠い関係にあると推測される<sup>158</sup>。

また、「×比較不可」、すなわち、比較対象のテキストが改変され、夷白堂本の同箇所が見当たらないというケースを見てみたい。夏振宇本・周朝本・周蓬本の「×」の数は少なく、互いの間にも大差が見られない。しかし、嘉靖本の「×」の比率は非常に高く、諸本の2~4倍に相当する。これはすなわち、夷白堂本を含む二十四巻系諸本に比べ、嘉靖本のテキストには独自の書き換えがもっとも多いと推測される<sup>159</sup>。

統計データの分析によって、二十四巻系諸本における夷白堂本の位置づけについて、ここに以下の仮説を提起する。

<sup>158</sup> この結果は、中川論(2011)の論考に一致している。

<sup>159</sup> 魏安《1996》及び中川論《1998》では、「二十四巻系における嘉靖本の独立」という現象が詳しく論じられている。また、井口千雪《2016》では、嘉靖本のテキストに対する書き換えに関する論考がある。



次に、具体例を分析することによって、上図の示す仮説を検証する。

## 2、夷白堂本と周蓬本の近縁関係

すでに述べたように、夷白堂本と周蓬本との間、同じ誤りの数が最も多く、夷白堂本の誤りの四分の一を占めている。さらに、このデータを更に絞り、「周蓬本のみ、夷白堂本と同じく誤」という条件に限定すれば、以下の表で示す45項となる。ちなみに、同じ条件で統計すると、嘉靖本は7項<sup>160</sup>、夏振宇本は8項<sup>161</sup>、周朝本は1項<sup>162</sup>しか見られない。この数値において、周蓬本は諸本を大幅に上回っている。この事実は、周蓬本と夷白堂本の近縁関係を示している。

	則	則題	卷	葉	行	誤	正	嘉	夏	甲	丙
47			2	63b	8	毗	緄	△昆	△昆	△昆	○
54			4	15a	7	違	?				○
86			4	54a	2	雖	須				○
166			6	52a	3	在	尽				○
189	63	袁譚袁尚爭冀州	7	22a	7	親■矢	冒				○
192			7	23a	7	動	治				○
199			7	36b	9	寧	陵				○
223			8	16a	1	孔子	孟子				○
251			9	35a	8	嗽	傲				○
282			10	42a	7	俸	捧				○

<sup>160</sup> 付表 No.98, 170, 217, 255, 351, 380, 713。

<sup>161</sup> 付表 No.67, 172, 221, 292, 325, 429, 598, 607。

<sup>162</sup> 付表 No.312。

290			10	50a	4	於	放					○
362			14	26b	1	綾	凌					○
394			14	67b	7	翼德■ ■	許多					○
423			15	44a	2	咸	感					○
425			15	44b	3	襯	襯					○
426			15	45a	3	襯	襯					○
427			15	45a	4	襯	襯					○
428			15	46a	9	襯	襯					○
430			15	47a	8	襯	襯					○
431			15	48a	1	襯	襯					○
480			16	36a	4	笑	等					○
487			16	43a	8	忘	亡				△急	○
495			17	7a	6	馬	地					○
535	173	孔明興兵征孟獲	18	24b	5	萬	方					○
571			19	27a	8	招	昭					○
591	187	孔明大破鐵車兵	19	69b	5	撤	徹					○
611			20	30b	3	真	要					○
619	199	諸葛亮四出祁山	20	82b	3	夜■■■	魏延					○
624			21	14a	6	行	件					○
626			21	15b	3	咨	各					○
627	203	諸葛亮六出祁山	21	18a	9	神	仰					○
628			21	18b	1	間	人					○
629			21	18b	6	旨	告					○
630			21	19b	1	力	有					○
632	204	孔明造木牛流馬	21	31a	5	日古	曰吾					○
637	206	孔明秋夜祭北斗	21	52a	4	仍	乃					○
656			22	16b	2	不	任					○
663	213	司馬懿父子秉政	22	27b	9	司	同					○
664			22	28a	4	背	曹					○
665	214	姜維大戰牛頭山	22	41b	1	拆	折					○
668	215	戰徐塘吳魏交兵	22	48a	3	陽■	平					○
669			22	49a	4	屯	上				△中	○
674	216	孫峻謀殺諸葛恪	22	54b	5	明	胡					○

675			22	54b	6	發	登					○
703			23	16b	6	牙	乘					○

次に、典型的な例をいくつか紹介する。

【例2-1】No.47 第20則 曹操興兵報父仇

青州で台頭しつつある曹操のもとに、名軍師・荀彧が訪れる。

夷	濟南荀毗之子姓荀名彧字文若
朝	○○○昆○○○○○○○○○○
蓬	○○○○○○○○○○○○○○○○
夏	○○○昆○○○○○○○○○○
嘉	○○○昆○○○○○○○○○○

荀彧の父の名は、正確には「荀緄」である<sup>163</sup>。『演義』の段階では、「緄」から糸へんが脱落して「昆」となり、字形の似ている「毘」を経て、最終的に「毗」となった。すなわち、「緄→昆→毘→毗」の順である。夷白堂本と周蓬本は第四段階の「毗」となっており、他の版本はすべて第二段階の「昆」となっている。夷白堂本と周蓬本のテキストは互いに近い関係にあり、他の諸本に遅れるものである。

【例2-2】No.535 第173則 孔明興兵征孟獲

蜀の後主・劉禅の時代。建寧太守の雍闓が蜀に対して反旗を翻す。そこで、雍闓の出自が紹介されている。

夷	所有建寧太守雍闓乃漢朝雍齒之後先祖曾為什萬侯
朝	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○方○
蓬	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○万○
夏	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○方○
嘉	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○方○

雍齒は、漢の高祖・劉邦に仕えて「什方侯」に封ぜられた人物で<sup>164</sup>、三国物語に登場する雍闓の先祖とされている<sup>165</sup>。「什方侯」は正しいテキストで、「方」が字形の近い「万」誤刻され、さらに異体字である「萬」となった。言い換えれば、この字は「方→万→萬」という順に変化したものであり、夷白堂本は諸本の内、周蓬本にもっとも近いと考えられる。

<sup>163</sup> 『三国志』卷十「魏書荀彧伝」:彧父緄、濟南相。

<sup>164</sup> 『史記』卷55「留侯世家」:于是上乃置酒、封雍齒为什方侯、而急趣丞相御史定功行封。

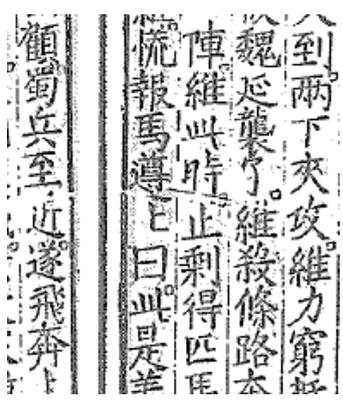
<sup>165</sup> 『三国志』卷43「蜀書呂凱伝」によると、呂凱が雍闓に寄せた手紙に「曩者將軍先君雍侯、造怨而封」との文句があり、それはすなわち雍齒のことを指している。

【例2-3】No.586 第 185 則 孔明以智伏姜維

第一次北伐に向かう孔明は、姜維を降伏させるため、離間の計を用いる。その計にかかった馬遵は、姜維が蜀に降ったと信じ込む。

夷	城上軍見是姜維慌報馬遵止曰此是姜維來賺我城門也
朝	○○○○○○○○○○○○○○○遵○○○○○○○○○○○○○○○
蓬	○○○○○○○○○○○○○○○ヒ○○○○○○○○○○○○○○○
夏	○○○○○○○○○○○○○○○遵○○○○○○○○○○○○○○○
嘉	○○○○○○○○○○○○○○○遵○○○○○○○○○○○○○○○

句読点を入れると、「城上軍見是姜維、慌報馬遵。遵曰、此是姜維來賺我城門也」となる。周蓬本では、二つ目の「遵」を重文号「ヒ」にされているが、夷白堂本では、それを漢字の「止」にした。ちなみに、朴在淵氏は周蓬本のテキストを「止」と判読しているが<sup>166</sup>、右の図で示すとおり、蓬左文庫にある原本を見るかぎり、やはり重文号「ヒ」であろう。



上の例と同じように、「遵→ヒ→止」の順に変化するもので、夷白堂本と周蓬本の近縁関係を示す例である。

【例2-4】No.619 第 199 則 諸葛亮四出祁山

諸葛亮の率いる蜀軍が四度目ほ北伐に出征する途中、魏延は鄧芝の諫めに耳を貸さず、陳式とともに箕谷へ進軍することに決める。

夷	芝再三阻當不肯教行是夜××要與孔明爭氣激着陳式式自引五千兵出箕谷
朝	○○○○○○○○○○○○○○○魏延○○○○○○○○○○○○○○○
蓬	○○○○○○○○○○○○○○○××○○○○○○○○○○○○○○○
夏	○○○○○○○○○○○○○○○魏延○○○○○○○○○○○○○○○
嘉	○○○○○○○○○○○○○○○魏延○○○○○○○○○○○○○○○

句読点を入れると、「芝再三阻當、不肯教行。是夜、(魏延)要與孔明爭氣、激着陳式。式自引五千兵、出箕谷」となる。鄧芝は、再三に魏延らを制止して行かせなかった。しかし、魏延は意地を張って、陳式を箕谷に進軍させた。夷白堂本と周蓬本では、「魏延」が脱落し、「要與孔明爭氣、激着陳式」の主語が阻止する立場にあったはずの鄧芝となり、意味不明となった。他の諸本には、主語「魏延」があり、意味が通っている。この脱字は、夷白堂本と周蓬本のみ見られるため、両版本の近縁関係を示している。

【例2-5】No.675 第 216 則 孫峻謀殺諸葛恪

<sup>166</sup> 周朝本影印本下巻 514 頁、注 945。

呉の将・諸葛恪が魏の新城へ攻める場面である。

夷	却説諸葛恪連月攻打新城不下立斬數將衆皆奮力發城
朝	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○登○
蓬	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○發○
夏	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○登○
嘉	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○登○

嘉靖本・周朝本・夏振宇本は正しい「登」に作る。一方周蓬本は「發」、夷白堂本は「發」となっている。ここでは、まずは正しい「登」は字形の似ている「發」となり、さらに「發」となった。すなわち「登→發→發」という変化が見られる。周蓬本の「發」は第二段階、夷白堂本の「發」は第三段階、それ以外の諸本は第一段階にある。すなわち、夷白堂本と周蓬本とは近い関係にある。

以上、夷白堂本と周蓬本との近縁関係を論じた。夷白堂本に見られる誤りは周蓬本との相似性が非常に高いという事実が改めて確認された。また、誤りの段階的発生過程において、夷白堂本・周蓬本はしばしば、諸本より遅れる段階にあり、夷白堂本が更に周蓬本に遅れる例も確認される。

ただし、夷白堂本は周蓬本に非常に近い関係にあるものの、周蓬本から派生した版本ではない。それは、夷白堂本には、周曰校諸本に見られない独自の特徴もあるからである。次節では、この点について検証する。

### 3、夷白堂本の独自の特徴

夷白堂本には、現存諸本のいずれにも見られない特徴がいくつか存在している。これらの特徴は、おそらく夷白堂本の段階に改変されたものではなく、夷白堂本の底本ですでに書き換えられたものであると推測される。以下、この現象を詳しく検証する。

#### 【例2-6】No.125 第50則 雲長策馬刺顔良

関羽を降伏させることに成功した曹操は、関羽の本心を探るため、張遼を遣わした。

夷	遼曰某存兄在丞相處不曾落後乎
朝	○○○薦○○○○○○○○○○
蓬	○○○薦○○○○○○○○○○
夏	○○○薦○○○○○○○○○○
嘉	○○○薦○○○○○○○○○○

夷白堂本の「存」は「荐」の誤りである。それ以外の諸本は、全て「薦」に作る。「薦」は「荐」の異体字であるが、「存」は「荐」に似ており、「薦」に似ていない。すなわち、夷白堂本の底本はおそらく「薦」ではなく「荐」であろう。言い換えれば、夷白堂本の底本は現存諸本のいずれではな

いと推測される。

【例2-7】No.135 第 51 則 雲長延津誅文醜

場面は官渡の戦い。白馬で敗北を喫し袁紹は、復讐のために文醜を遣わした。その情報がすぐさま曹操にもとに届く。

夷	袁紹又使大将文醜渡黄河已據利益之也
朝	○○○○○○○○○○○○○○○○延津之上
蓬	○○○○○○○○○○○○○○○○延津之上
夏	○○○○○○○○○○○○○○○○延津之上
嘉	○○○○○○○○○○○○○○○○延津之上

夷白堂本の「利益之也」は、おそらく「利益之地」の誤りであろう。それ以外の諸本はすべて「延津之上」に作る。延津とは、黄河の渡場の一つであり<sup>167</sup>、官渡の戦いの戦場<sup>168</sup>となっていた。また、二十卷繁本系の余象斗本や、二十卷簡本系の劉龍田本などの他系統の版本も、「延津之上」となっていることから、本来「延津之上」となっていたと推測される。すなわち、「利益之地」は夷白堂本の底本の編者が独自に改変したもので、夷白堂本では誤って「利益之地」と翻刻したと考えられる。

【例2-8】No.238 第 76 則 孫權跨江破黃祖

孫策の死後、呉の統治者となった孫權は、父の仇である黄祖を討つため出兵する。そこで、甘寧は戦場で黄祖を救出したが、黄祖は以前と同じように、甘寧を見下している。

夷	祖到夏口待甘如初
朝	○○○○○寧○○
蓬	○○○○○寧○○
夏	○○○○○寧○○
嘉	○○○○○寧○○

「甘」も「寧」も、甘寧のことを指すに違いないが、『三国志演義』の世界では、登場人物を呼称する際に、名か字で呼ぶのは一般的であり、姓で呼ぶ用例は、管見の限り見当たらない。もちろん、甘寧のことを「甘」と呼ぶこと自体は誤りではない。しかし、この呼称は『演義』にほとんど使われないもので、語感の面でも非常に不自然である<sup>169</sup>。また、この段落に、「寧為吏、舉計據」、「黄祖曰、寧是劫江之賊、不可重用」などの表現があることから見ると、「寧」という呼称をわざと避け

<sup>167</sup> 『水経注』卷五「河水」：河水自武德縣……東至酸棗縣西、濮水東出焉……河水又東北通、謂之延津。

<sup>168</sup> 『三国志』卷六「魏書袁紹伝」：紹渡河、壁延津南、使劉備、文醜挑戰。太祖擊破之、斬醜。

<sup>169</sup> そもそも、登場人物を名で呼称するのは、正史における一般的な書き方であり、歴史小説である『演義』もその口調を採用している。一方、姓で呼称する例は、『聊齋志異』などの文言志怪小説に多く見られるが、歴史小説の雰囲気には合わないと考えられる。

る理由も特にない。

ここでは、問題箇所の前後の文章を以下に抄録し、甘寧を指す言葉を標記する。

祖已大敗、却得甘寧之力救得。祖到夏口、待甘如初。他經今數年、有祖手下都督蘇飛累薦甘寧。黃祖曰、寧是劫江之賊、不可重用。因此讐恨。

問題の「甘」の直前と直後は、いずれ「甘寧」となっている。そこで、夷白堂本の底本では、この一句においてすべて「甘寧」に統一され、夷白堂本では「寧」の一文字が脱落している、という可能性が考えられる。

原因はどうか、夷白堂本では不自然な「甘」になっていることは事実であり、それはおそらく夷白堂本またはその底本の編者が独自に書き換えたものであると考えられる。

【例2-9】No.320 第 106 則 孫仲謀合肥大戰

合肥の戦いに臨む孫権は、太史慈の提案を採用し、合肥の奇襲を命じる。

夷	遂史太史慈引兵五千去為外應
朝	○令○○○○○○○○○○○○○○
蓬	○令○○○○○○○○○○○○○○
夏	○令○○○○○○○○○○○○○○
嘉	○令○○○○○○○○○○○○○○

「史」は、「使」の誤りで、「使」は「令」の同義語である。序章で述べたように、『演義』諸本の成立過程で、底本の助詞や助動詞などを同義語に書き換えることは普遍的に存在し、必ずしも版本関係の手がかりになるものではない。ただし、この例では、「令」から「使」へ書き換えられたのは夷白堂本の底本で、「使」が誤って「史」にしたのは夷白堂本である。この点では、夷白堂本及びその底本の独自の書き換えが認められる。

【例2-10】No.384 第 136 則 魏王宮左慈擲杯

道士の左慈は、術で曹操をからかい、金盆から珍味の紫芽薑を取り出す。

夷	慈於袖中簇簇取出須臾得紫芽薑滿金盆
朝	○○○○○○然×○○○○○○○○○○
蓬	○○○○○○然×○○○○○○○○○○
夏	○○○○○○然×○○○○○○○○○○
嘉	○○○○○○然×○○○○○○○○○○

「取」は「取」の誤りである。他の諸本はすべて「慈於袖中簇簇然」（左慈は、袖の中でひそひそと）となっているが、この表現は、動詞が欠けているため、非常に不自然に感じられる。夷白堂

本の底本は、「取出」という動詞を加えることによって、その不自然さを解消した。それが夷白堂本の段階で、「取」を誤って「敢」に改変された。

【例2-11】No.371 第135則 甘寧百騎劫魏營

濡須の戦いで、呉の將軍・陳武は魏の龐徳に敗れ、討ち死にした。『演義』では、陳武を讃える詩が引用されている。

夷	右廟讚陳武詩曰
朝	石○○○○○○
蓬	又○○○○○○
夏	又○○○○○○
嘉	又○○○○○○

「又」は正しい字で、夷白堂本では同音の「右」になっている。また、周朝本では、「右」に似ている「石」となっている。「又→右→石」という順で変化したものである。

ここで注目したいのは、周蓬本が正しい「又」に作ることである。周蓬本は、周日校丙本の一つであり、周日校甲本の翻刻である周朝本より遅れるはずであるが、ここでは逆に、周朝本は第三段階の「石」、周蓬本は第一段階の「又」となっている。

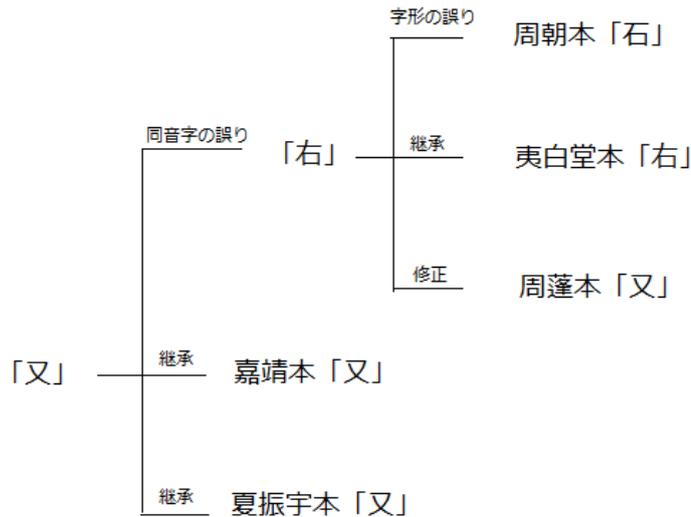
この問題を解決するために、まずは以下のいくつかの事実を確認しておく。

- ①「右」は「又」の誤りで、「石」は「右」の誤りである。
- ②「又」から直接「石」に誤ることはありえない。必ず「右」という中間段階を経なければならない。
- ③編者は、他の版本を参照せずに、「石」を見て、正しい字は「又」であると気づくことはありえない。
- ④編者は、他の版本を参照しなくても、「右」を見て、正しい字は「又」であると気づくことはありえる。

また、前掲先行研究、及び本研究のこれまでの検証を踏まえ、以下の条件を追加する。

- ⑤丙本である周蓬本は、甲本である周朝本の底本ではない。
- ⑥嘉靖本・夏振宇本・周日校本は、互いに並行関係にある。
- ⑦周日校諸本は、同一祖本によるものである。

以上の条件をすべて満たすように、諸本を並ぶと、下図の示す関係になる。



二十四巻系の祖本は、正しい「又」に作る。嘉靖本及び夏振宇本は、それぞれ正しい字を継承する。一方、周日校諸本及び夷白堂本の祖本は、誤って同音の「右」にした。その「右」をさらに字形の近い「石」にしたのは周朝本、「右」をそのまま継承したのは夷白堂本、「右」は「又」の誤りであることに気がつき、修正したのは周蓬本である。

この図は、上記①～⑦の条件をすべて満たす唯一の解釈である。もしそれを是とすれば、夷白堂本は、周日校諸本と同じ祖本から派生した版本であるが、周日校諸本のいずれかを底本としたものではないと考えられる。これは、中川論(2011)の結論にも一致している。

以上、本節では、二十四巻系諸本における夷白堂本の位置づけを検証した。夷白堂本は、二十四巻系のうち、周日校諸本と同じ祖本を持ち、特に周蓬本に近い関係にある。一方、夷白堂本は、嘉靖本・夏振宇本・周日校諸本のいずれかを底本とするものではなく、周日校諸本に近いテキストにさらに独自に加工を施した版本である。

夷白堂本は、周日校刊本ではないものの、周日校諸本と同じ祖本を持つ。その祖本は、嘉靖本・夏振宇本の祖本とはまた異なるものである。言い換えれば、二十四巻系のうち、周日校諸本と夷白堂本は一つの小系統を成している。本研究では、それを「周日校小系統」と呼称する。

付表1 夷白堂本正誤表

○「同じく誤」:対照本の同箇所は夷白堂本と同じように誤る。

△「誤にして不一致」:対照本の同箇所は誤るが、夷白堂本とは異なる誤り。

×「比較不可」:対照本のテキストが改変されたため、同箇所は見当たらない。

	則	則題	卷	葉	行	誤	正	嘉	夏	朝	蓬
1	11	董卓火燒長樂宮	2	1b	8	瓘 2	催				
2			2	1b	9	瓘	催				
3			2	2a	6	瓘	催				
4			2	3a	5	黃	王				
5			2	4a	8	瓘	催				
6	12	袁紹孫堅奪玉璽	2	8b	8	稍	鑲	○	○	○	○
7			2	11b	5	范	苑	○	○	○	○
8			2	12b	5	英	異	○	○	○	○
9			2	12b	7	我	來				
10			2	13a	3	上馬	馬上			○	○
11	13	趙子龍盤河大戰	2	14a	7	伐	代				
12			2	15a	4	祖	沮				
13	14	孫堅跨江擊劉表	2	22a	9	蓋	祖				
14			2	24b	8	桑	柔				
15			2	27a	9	火	/			○	○
16	15	司徒王允說貂蟬	2	29b	9	蒿	嵩				
17			2	34a	2	反	及				
18			2	36a	6	奏	奉				
19	16	鳳儀亭布戲貂蟬	2	37b	1	頁	負				
20			2	38a	1	頃	頃				
21			2	38a	5	面	而				
22			2	39a	4	與	欲				
23	17	王允定計誅董卓	2	44a	8	王	下				
24			2	45b	3	琉	琬				
25			2	46b	1	柱	?				
26			2	48b	2	大?	十				

27			2	50a	6	卓	軍				
28	18	李傕郭汜寇長安	2	51a	9	皆	喈				
29			2	54b	8	反	及				
30			2	55a	5	弩	努				
31			2	56a	8	原	蒙		○	○	○
32	19	李傕郭汜殺樊稠	2	57b	2	騰	騰				
33			2	58b	6	騰	騰				
34			2	58b	3	入	人				
35			2	59a	3	騰	騰				
36			2	59a	6	合	令				
37			2	59a	4	騰	騰				
38			2	59b	5	騰	騰				
39			2	59b	5	搶	擒				
40			2	60a	7	騰	騰				
41			2	60b	4	瑰	理				
42			2	60b	7	騰	騰				
43			2	60b	9	騰	騰				
44			2	61a	2	騰	騰				
45			2	61b	3	騰	騰				
46	20	曹操興兵報父仇	2	63a	1	楊	揚		○	○	○
47			2	63b	8	毗	緄	△昆	△昆	△昆	○
48			2	65a	4	字	音				
49			2	65b	3	點	典	○	○	○	○
50			2	68a	4	(上山下 來)	嵩				
51			2	68a	4	廝	厠				
52	31	呂奉先轅門射戟	4	7b	9	未	/		○	○	○
53	32	曹操興兵擊張繡	4	15a	1	槍	搶				
54			4	15a	7	違	?				○
55			4	18a	1	致	秩	○	○	○	○
56	33	袁術七路下徐州	4	20b	7	庭	廷				
57			4	22a	6	將	漢				
58	34	曹操會兵擊袁術	4	26a	8	二	一				
59			4	27a	8	土	上				

60			4	28a	6	欲	亦				
61			4	31b	8	上	土				
62	35	決勝負賈詡談兵	4	33a	7	特	突				
63	36	夏侯惇拔矢啖睛	4	36b	4	(上田下 衣)	界				
64			4	37a	7	大	不				
65			4	37a	9	糶	料				
66			4	37b	8	兆	也				
67			4	40a	3	先	孝		○		
68			4	40b	4	九?	也				
69			4	43a	6	下邳	小沛		○	○	○
70			4	44a	1	打	?				
71			4	44b	2	(左木右 尽)	儘				
72			4	44b	3	惇	惇				
73	37	呂布敗走下邳城	4	48a	1	使	便				
74			4	48a	7	市	布				
75			4	48b	7	官	宮				
76			4	48b	9	官	宮				
77			4	49a	6	官	宮				
78			4	49b	4	官	宮				
79			4	50a	4	止	正				
80			4	51a	1	昔	若				
81			4	51a	4	官	宜				
82	38	白門樓曹操斬呂布	4	52b	5	汝	我				
83			4	52b	8	官	宮				
84			4	52b	9	官	宮				
85			4	53a	2	磅	破				
86			4	54a	2	雖	須				○
87			4	54a	7	也	地				
88			4	55a	9	聞	間				
89			4	56a	2	軍	不				
90			4	56b	3	馬堯	赤兔				
91			4	57b	7	或	彘				

92			4	58b	7	潛地	潛然	○		○	○
93			4	60b	1	披	被				
94			4	60b	2	唱	喝				
95	39	曹孟德許田射鹿	4	63b	1	其遼	遼之			○	○
96			4	64a	4	胃	胄				
97	40	董承密受衣帶詔	4	70a	9	廁	側				
98			4	70b	2	填	鎮	○			
99			4	74b	7	長	是				
100	41	青梅煮酒論英雄	5	3b	7	知■■變	龍之		○	○	○
101			5	5b	8	(左耳右力)	筋				
102			5	7a	1	去	故				
103			5	8b	2	加	嘉				
104			5	8b	7	加	嘉				
105	42	關雲長襲斬車胄	5	9b	8	加	嘉				
106			5	10a	5	加	嘉				
107			5	10a	7	加	嘉				
108	43	曹公分兵拒袁紹	5	15b	7	組	沮				
109			5	17a	9	孔	北				
110			5	17b	7	洽	郤				
111	45	禰衡裸體罵曹操	5	25a	6	未必	必來				
112			5	26b	5	皆	？				
113			5	27b	1	加	嘉	×			
114			5	27b	4	典	虔				
115	46	曹孟德三勸吉平	5	33a	2	比	北				
116			5	33a	9	從	徒	○		○	○
117			5	36a	6	於	與？	○		○	○
118			5	37b	9	比	此				
119	47	曹操勒死董貴妃	5	41a	6	合	令				
120			5	41b	9	祖	沮				
121	48	玄德匹馬奔冀州	5	44b	4	胃	胄	×			
122	49	張遼義說關雲長	5	48a	5	胃	胄				
123			5	48b	8	與■侯	夏				
124			5	48b	8	合■	悼	○	○	○	○

125	50	雲長策馬刺顏良	5	57b	6	存	荐				
126			5	59b	7	祖	沮				
127			5	59b	8	(左方右 東)	族				
128			5	59b	2	祖	沮				
129			5	61b	9	在	布				
130			5	62a	8	中	去				
131			5	63b	5	祖	沮				
132	51	雲長延津誅文醜	5	64a	5	祖	沮				
133			5	64b	3	祖	沮				
134			5	64b	7	祖	沮				
135			5	65b	1	也？	地	×	×	×	×
136			5	66a	9	壯	北				
137	54	關雲長五關斬將	6	19b	2	是■意	好				
138			6	23b	9	往	住				
139	55	雲長擂鼓斬蔡陽	6	25a	8	原	元				
140			6	26b	9	也？	他				
141			6	29a	8	超	紹				
142			6	29b	5	超	紹				
143			6	30a	3	超	紹				
144			6	30a	9	超	紹				
145			6	30b	1	超	紹				
146			6	31b	1	超	紹				
147			6	31b	2	超	紹				
148			6	31b	6	超	紹				
149			6	31b	7	超	紹				
150			6	32b	5	到	倒				
151			6	34a	7	勝	騰	○		○	○
152	56	劉玄德古城聚義	6	35a	2	元	玄				
153			6	36b	6	超	紹				
154			6	37a	4	上	主				
155			6	38a	6	紹	召				
156			6	39a	6	拾■行	起				
157			6	39a	9	超	紹				

158			6	39b	1	超	紹				
159			6	40a	7	超	紹				
160	57	孫策怒斬于神仙	6	42a	2	計	討				
161			6	42b	9	持	特				
162			6	43a	1	許	討				
163			6	46a	1	久	八				
164	58	孫權領衆據江東	6	51a	3	輪	輻				
165			6	52a	1	坡	披				
166			6	52a	3	在	尽				○
167			6	52a	4	間	明				
168			6	54a	1	乃	方				
169			6	56a	5	?	半				
170			6	56b	3	代	伐	○			
171	59	曹操官渡戰袁紹	6	60b	2	士	土				
172			6	62a	9	榮	榮		○		
173			6	63b	2	郎	郤				
174			6	65a	7	鞠	鞠	○		○	○
175			6	65a	9	汝■曹	與			○	○
176			6	65b	1	準	軍				
177	60	曹操烏巢燒糧草	6	70b	7	燕	趙	○	△韓	○	○
178			6	71a	5	下	于				
179			6	71b	5	北	比				
180			6	72b	9	郟?	郤				
181			6	72b	2	祖	沮				
182	61	曹操倉亭破袁紹	6	74b	4	祖	沮				
183			7	1a	7	祖	沮				
184			7	2b	9	祖	沮				
185			7	4a	5	祖	沮				
186	62	劉玄德敗走荊州	7	11b	2	上	土				
187			7	12a	7	捧	棒	×	○	○	○
188			7	13b	6	項	頂				
189	63	袁譚袁尚爭冀州	7	22a	7	親■矢	冒				○
190			7	22b	2	力	刀				
191			7	22b	5	木	本				

192			7	23a	7	動	治					○
193			7	24b	3	救求	求救					
194	64	曹操決水滄冀州	7	27a	7	祖 2	沮					
195			7	28a	1	祖	沮					
196			7	30b	3	寨	/					
197			7	31b	1	下	望					
198	65	曹操引兵取壺關	7	35a	1	下	曰					
199			7	36b	9	寧	陵					○
200			7	39a	1	王	主					
201			7	39a	9	開	門					
202			7	41a	1	張	焦					
203	66	郭嘉遺計定遼東	7	43a	1	上潞	上洛	△路上	○	△上路	○	
204			7	44a	3	馬	地					
205			7	44b	1	兩	岡					
206			7	45b	5	目	且					
207			7	45b	7	池	地					
208			7	47b	5	揚	易					
209			7	48a	3	揚 2	易					
210	67	劉玄德襄陽赴會	7	49b	1	王	玉					
211			7	49b	6	王	玉					
212			7	52a	2	俠	仗					
213			7	52a	6	(左文右且)	姐					
214			7	52a	6	天	夫					
215			7	52b	6	見	兄					
216	70	玄德新野遇徐庶	7	71b	9	不行	行不				○	○
217			7	72a	1	數餘	?	○				
218	71	徐庶定計取樊城	7	76b	7	君	軍					
219			7	77a	7	北	此					
220	72	徐庶走薦諸葛亮	8	6a	3	預	豫					
221	73	劉玄德三顧茅廬	8	8a	9	胃	胄		○			
222			8	10b	2	但	但					
223			8	16a	1	孔子	孟子					○

224			8	16a	2	孔子	孟子	○	○	○	○
225	74	玄德風雪訪孔明	8	18b	7	首	兮				
226			8	21b	5	昌	冒				
227			8	22a	6	何承	阿承			△阿家	
228	75	定三分諸葛出茅廬	8	22b	8	蘆	盧				
229			8	23a	1	蘆	盧				
230			8	26b	8	克■	紹				
231			8	28a	9	蘆	盧				
232			8	28b	9	蘆	盧				
233			8	29a	5	蘆	盧				
234	76	孫權跨江破黃祖	8	30a	2	陽	南	○	○	○	○
235			8	30a	7	吳	吾		○	○	○
236			8	30b	1	陽	南	○	○	○	○
237			8	35b	7	比	北				
238			8	36b	6	甘■	寧				
239			8	36b	6	經今	今經				
240	77	孔明遺計救劉琦	8	41a	2	夏	東				
241			8	41a	7	王	黃				
242			8	43b	2	合	令				
243	78	諸葛亮博望燒屯	8	52a	7	土	踏	○		○	○
244	79	獻荊州縶說劉琮	8	61b	1	梯	梯				
245			8	64b	4	英	異				
246	80	諸葛亮火燒新野	8	70a	8	成	仁				
247	81	劉玄德敗走江陵	9	1a	8	符	筏				
248	82	長坂坡趙雲救主	9	12b	2	仕	任				
249			9	17b	3	鎧	(左豈右頁)	○		○	○
250	85	諸葛亮舌戰群儒智激孫權	9	35a	3	北	此				
251			9	35a	8	嗽	傲				○
252			9	38b	3	授	綬				
253			9	39b	5	(左イ右斬)	慚				

254			9	41a	9	治	治				
255			9	41b	3	揚	揚	○			
256			9	42a	2	(左耳右 目)	?	△昧		△昧	△ 昧
257			9	42b	8	齊	濟				
258	86	諸葛亮智激孫權	9	45a	2	暴	慕				
259	87	諸葛亮智說周瑜	9	50b	7	報	報				
260	88	周瑜定計破曹操	9	54b	3	漳	璋				
261			9	59a	1	三	二				
262	89	周瑜三江戰曹操	9	61a	9	出	山				
263			9	62a	3	北	皆				
264	90	群英會瑜智蔣幹	10	3b	8	非	作				
265			10	5a	4	(左昔右 安)	鞍				
266			10	5a	8	?	酈				
267			10	7b	5	百	打				
268	91	諸葛亮計伏周瑜	10	8b	6	不	小				
269			10	12a	9	北	比				
270			10	13a	6	軍門	奇門	△軍 情		○	○
271			10	13b	7	拆	折	○		○	○
272	92	黃蓋獻計破曹操	10	14b	5	拆	折	○		○	○
273	93	關澤密獻詐降書	10	23b	6	念	全				
274	94	龐統進獻連環計	10	26a	4	搨	榻				
275	95	曹孟德橫槊賦詩	10	33a	9	寨	塞				
276	96	曹操三江調水軍	10	36a	3	何	用				
277			10	38b	9	拆	折			○	○
278			10	39a	2	拆	折			○	○
279	97	七星壇諸葛祭風	10	41a	2	不	下				
280			10	41a	6	耶	助				
281			10	41b	3	於	與				
282			10	42a	7	俸	捧				○
283			10	44a	7	人■■■ 用	一百人		○	○	○

284			10	44b	4	東南■	風起				
285			10	46a	1	百	不				
286			10	46a	5	若不	不若		○	○	○
287	98	周公瑾赤壁慶兵	10	48a	9	牧	收				
288			10	48b	4	門	間				
289			10	48b	6	郡	那				
290			10	50a	4	於	放				○
291			10	51b	7	到	倒			○	○
292	99	曹操敗走華容道	10	54b	4	公義	義公		○		
293			10	55a	6	(左耳右 專)	聘				
294			10	55b	3	叫	斜				
295			10	56b	8	警	驚				
296			10	57a	3	色	操				
297			10	58a	4	拆	折				
298			10	59a	8	今	令				
299			10	59a	9	色	已				
300	100	關雲長義釋曹操	10	59b	7	平	半				
301			10	60b	5	皆	軍				
302			10	61b	7	須	操				
303			10	62b	6	北	比				
304	101	周瑜南郡戰曹仁	11	3a	1	堂	掌				
305			11	4a	2	合	会		○	○	○
306			11	5a	6	減	喊				
307			11	7b	6	北	比				
308	102	諸葛亮一氣周瑜	11	9b	4	促	捉				
309			11	11a	8	夫	夭				
310			11	11b	3	北	比				
311			11	11b	8	苦	並	○	○	○	○
312	105	黃忠魏延獻長沙	11	28a	2	予	矛			○	
313			11	29a	9	若	苦				
314			11	29b	6	黃■	忠				
315			11	32a	3	間	開				
316			11	32a	3	茲	弦				

317			11	32a	5	思	忠				
318	106	孫仲謀合肥大戰	11	35a	9	加	如				
319			11	37a	1	兌	見				
320			11	38a	1	史	使	×	×	×	×
321	107	周瑜定計取荊州	11	40b	3	棄■	世				
322			11	40b	6	公子有言 皇叔	皇叔有言 公子				
323			11	44b	4	未	來				
324	108	劉玄德娶孫夫人	11	47b	8	快快	快快				
325			11	48b	1	大	/		○		
326			11	52b	5	段	斷				
327			11	53b	6	揚	揚				
328	109	錦囊計趙雲救主	11	56a	8	袋	囊				
329			11	59a	7	早	走				
330	110	諸葛亮二氣周瑜	11	61b	4	益	蓋				
331			11	61b	6	人	又	×	×	×	×
332			11	62b	9	自■	思				
333			11	66a	1	的	射				
334	111	曹操大宴銅雀台	11	67b	1	教■	休				
335			11	74b	4	(左石右 月)	硯				
336			11	75a	1	失	矢	×			
337	112	諸葛亮三氣周瑜	11	75b	3	問	聞				
338			11	75b	8	總■	領				
339			11	77a	7	吾■■	主人				
340			11	81b	4	人	入				
341	131	關雲長單刀赴會	14	6a	4	侯	候				
342			14	8b	1	東	覓				
343	132	曹操杖殺伏皇后	14	9a	1	敗	欺				
344			14	9b	3	軍	征				
345			14	9b	3	此	北				
346			14	10a	7	音	奇				
347			14	10b	3	意	箇				
348			14	12a	6	々	官	×			

349			14	14b	2	治	活				
350			14	14b	2	旱	甲				
351			14	15b	5	官	宮	○			
352	133	曹操漢中破張魯	14	16b	5	北	比				
353			14	17a	1	郤	郤				
354			14	17a	4	仁	任				
355			14	17a	6	計	許				
356			14	18b	5	住	往			×	
357			14	18b	7	包	褒	○	○	○	○
358			14	19b	3	包	褒	○	○	○	○
359			14	24b	3	諸	謁	×	×	○	○
360	134	張遼大戰逍遙津	14	25b	5	秣	秣				
361			14	25b	5	仍	乃				
362			14	26b	1	綾	凌				○
363			14	27b	3	練	鏈	○	○	○	○
364			14	29b	8	比	北				
365			14	32a	4	岩當	宕	○	○	○	○
366	135	甘寧百騎劫曹營	14	33b	5	折	插				
367			14	34b	9	？	興				
368			14	35a	8	催？	膛				
369			14	37b	4	人	入				
370			14	38b	2	伯	霸				
371			14	39a	4	右	又			△石	
372	136	魏王宮左慈擲杯	14	40b	8	聞	問		○	○	○
373			14	41a	2	抵	坻	△低	△低	△低	△低
374			14	42a	6	成	承	○		○	○
375			14	42a	6	無■	事				
376			14	42b	6	且	且				
377			14	43a	1	沃	山				
378			14	43a	9	礼	社	○	○	○	○
379			14	44a	7	銀	根	○		○	○
380			14	44b	1	皖	宛	○	△(左白 右宛)		

381			14	45b	5	贊	替				
382			14	46b	2	數餘日	?		○	○	○
383			14	48a	7	鈞	鈞				
384			14	48b	4	敢	取	×	×	×	×
385	137	曹操試神十管輅	14	50a	7	十	卜				
386			14	51a	8	入	八				
387			14	54a	8	十	卜				
388			14	56a	7	十	卜				
389			14	57b	9	十	卜				
390	138	耿紀韋晃討曹操	14	58b	7	候	侯				
391			14	63b	5	死■	悼	○	○	○	○
392			14	65b	3	十	卜				
393	139	瓦口張飛戰張郃	14	67a	1	次	吹				
394			14	67b	7	翼德■	許多				○
395			14	67b	7	來	德				
396			14	68a	1	出	山				
397			14	68a	4	且	且				
398	140	黃忠嚴顏雙立功	14	77a	2	北	比			(缺)	
399			14	77a	4	寫?	馬			(缺)	
400	142	趙子龍漢水大戰	15	16b	4	岩	宕	○	○	○	○
401	143	劉玄德智取漢中	15	17b	9	黃	王				
402			15	20a	1	榮	營				
403			15	23a	2	區	驅				
404			15	23a	6	群	郡				
405			15	23a	9	比	北				
406	144	曹孟德忌殺楊修	15	24b	7	夏侯惇■ ■	帳中		○	○	○
407			15	25a	9	慰	尉				
408			15	25b	3	廣	曠				
409			15	26a	3	垂	睡				
410			15	26b	5	誤	吳				
411			15	26b	5	贊	質	○	○	○	○
412			15	26b	6	贊	質	○	○	○	○
413			15	26b	8	贊2	質	○	○	○	○

414	145	劉備進位漢中王	15	30a	5	尋	尊				
415			15	32a	1	公	功				
416	146	關雲長威震華夏	15	36a	3	谷	廓				
417			15	36a	6	孟	孟				
418			15	36b	2	視	親				
419			15	38a	1	人	仁				
420			15	38a	2	夥	顛				
421	147	龐德擡櫬戰關公	15	43a	5	圓	員				
422			15	43a	6	起	超		○	○	○
423			15	44a	2	咸	感				○
424			15	44a	3	胸	腦				
425			15	44b	3	襯	襯				○
426			15	45a	3	襯	襯				○
427			15	45a	4	襯	襯				○
428			15	46a	9	襯	襯				○
429			15	47a	2	隋	隨		○		
430			15	47a	8	襯	襯				○
431			15	48a	1	襯	襯				○
432			15	48a	5	君	君				
433	148	關雲長水淹七軍	15	52a	5	遺	移				
434			15	52a	8	而	/				
435			15	52b	6	北	比				
436	150	呂子明智取荊州	15	64b	6	折	拆				
437			15	64b	9	蜜	密				
438			15	64b	4	皓	皎				
439			15	65b	1	皓	皎				
440			15	65b	6	俟	侯				
441			15	66a	8	知	如				
442			15	68a	7	伯	百				
443			15	68b	2	恨說	？	○		○	○
444	151	關雲長大戰徐晃	15	71a	2	蒙	冢				
445			15	72a	5	與	山				
446			15	73b	3	北	比				
447			15	74b	5	扮	扮				

448			15	74b	5	服	伏				
449	152	關雲長夜走麥城	16	0	6	令	今				
450			16	1b	3	群	郡				
451			16	1b	3	十	卜				
452			16	1b	4	問	/		○	○	○
453			16	1b	7	耶	即				
454			16	2a	1	安	按				
455			16	8b	9	鯁■	直				
456	153	玉泉山關公顯聖	16	10b	7	復	伏				
457			16	11a	6	下	山	○		○	○
458			16	10b	7	陽	楊	○	○	○	○
459			16	14a	7	鎮國■	寺		○	○	○
460			16	14b	6	某	其				
461			16	15a	2	日	是				
462	154	漢中王痛哭關公	16	16a	6	三	二				
463			16	17b	6	潺	孱	○	○	○	○
464			16	20b	1	塾	墩				
465			16	21a	7	靜	靖				
466			16	21b	7	靜	靖				
467			16	22a	1	靜	靖				
468	155	曹操殺神醫華佗	16	22b	9	疑	宜				
469			16	23a	5	(左彡右房)	淚				
470			16	27a	1	放	枚				
471			16	28a	9	回	吳				
472			16	28b	1	之	了			○	○
473			16	30a	6	林	休		○	○	○
474			16	32b	3	沮	淄				
475	156	魏太子曹丕秉政	16	33b	8	德	得				
476			16	33b	8	冀州■	牧				
477			16	34a	1	小	/				
478	157	曹子建七步成章	16	35b	9	人	火				
479			16	36a	1	沮	淄				
480			16	36a	4	笑	等				○

481			16	36a	7	義	禮				
482			16	37a	4	仗	伏				
483			16	37a	8	块	決				
484			16	38a	6	山	然?				
485			16	40a	2	慰	尉				
486	158	漢中王怒殺劉封	16	41a	4	王■	欲			○	○
487			16	43a	8	忘	亡			△急	○
488	159	廢獻帝曹丕篡漢	16	51a	7	楷	階		○	○	○
489			16	52a	4	可	謹?	×		○	○
490			16	52b	2	飲	歆				
491			16	52b	7	楷	階			○	○
492	160	漢中王成都稱帝	16	60b	1	尚	向		○	○	○
493			16	60b	8	陳	諫				
494	161	范疆張達刺張飛	17	6a	2	士	止				
495			17	7a	6	馬	地				○
496	162	劉先主興兵伐吳	17	11a	8	與	興				
497	163	吳臣趙咨說曹丕	17	12b	5	府	對	×			
498			17	14b	6	肯■	留				
499			17	16b	9	波	渡				
500	164	關興斬將救張苞	17	21b	2	典	興				
501			17	26b	9	北	此				
502	165	劉先主猊亭大戰	17	34b	1	以?	都				
503	166	陸遜定計破蜀兵	17	41a	4	北	比	×			
504			17	41a	6	開	關				
505			17	41b	7	直	宜				
506			17	42a	1	不	出				
507	167	先主夜走白帝城	17	44a	4	開	關				
508			17	44a	6	垂	睡				
509			17	44a	9	徂	但				
510			17	45b	6	來	夾				
511			17	46a	1	比	北				
512			17	46a	3	百■	里			○	○
513			17	46b	9	背	皆				
514			17	47b	1	復	腹				

515			17	47b	2	復	腹				
516			17	48a	6	富	當				
517			17	48b	3	摩沙柯	沙摩柯	×		×	×
518			17	49a	4	？	裝				
519			17	49a	6	藏	藏				
520			17	49a	9	書	晝				
521			17	51b	9	(左ノ右 亥)	滾				
522	168	八陣圖石伏陸遜	17	54a	1	到	倒				
523			17	54a	3	起	氣				
524			17	54a	5	況	沉				
525			17	56a	6	濡	洞				
526	169	白帝城先主托孤	17	57b	2	為	死				
527			17	57b	7	賣	賈				
528	170	曹丕五路下西川	18	1b	5	藩	潘	×		○	○
529			18	2a	1	兩	西				
530			18	2b	7	官	宮				
531			18	7b	6	願	怨	○		○	○
532	171	難張溫秦宓論天	18	14a	3	上	士				
533	172	泛龍舟魏主伐吳	18	20a	4	則	與				
534			18	23a	3	又	入				
535	173	孔明興兵征孟獲	18	24b	5	萬	方				○
536			18	27a	1	往	住			×	
537			18	29a	1	白	曰				
538			18	29a	2	楊	揚				
539			18	29a	6	人	入				
540	174	諸葛亮一擒孟獲	18	35a	2	異	翼				
541			18	35b	7	入	大				
542			18	36a	2	三紹	？				
543			18	36a	5	維	結				
544			18	36b	6	望	/				
545			18	38a	9	終	絡				
546			18	39b	2	竭	端				
547	175	諸葛亮二擒孟獲	18	43a	3	士	士				

548			18	45a	9	昔	肯				
549			18	46b	8	投	殺				
550			18	46b	8	湏	洞				
551			18	46b	9	昔	苦				
552	176	諸葛亮三擒孟獲	18	51b	2	測	側				
553			18	53a	3	剖	倒				
554	177	諸葛亮四擒孟獲	18	57b	8	騎	驅				
555	178	諸葛亮五擒孟獲	18	60b	8	？	窄				
556			18	62b	1	不■	可				
557			18	64a	8	洽	冷				
558			18	64b	6	姓	死				
559			18	66b	7	路	跼				
560			18	68a	1	進	運				
561			18	69a	5	至■	半				
562			18	69a	5	多	少				
563	179	諸葛亮六擒孟獲	19	1b	3	拜	併				
564	180	諸葛亮七擒孟獲	19	11b	1	木	水				
565			19	11b	3	花	葉				
566			19	11b	6	花	葉				
567	181	孔明秋夜祭瀘水	19	23a	1	昔	音	×	×	(缺)	
568			19	25b	3	會	令			(缺)	
569			19	26a	3	夫	天	×		(缺)	
570			19	26b	8	況	沉				
571			19	27a	8	招	昭				○
572	182	孔明初上出師表	19	28b	3	設	殺				
573			19	28b	3	其	/		○	○	○
574			19	30b	6	計	既				
575			19	34a	7	官	宮				
576			19	35a	8	(上卅下馬)	篤				
577			19	35b	2	聞	閏			△ (門內王)	

578			19	38a	1	敬	敵				
579	183	趙子龍大破魏兵	19	45a	2	勝	性				
580	184	諸葛亮智取三郡	19	45a	4	軍一軍	魏軍一				
581			19	47a	8	定	安				
582			19	49b	4	得	排				
583	185	孔明以智伏姜維	19	56b	7	處	取				
584			19	58a	4	礼	理		○	○	○
585			19	58b	2	冀	翼				
586			19	58b	7	止	匕				
587	186	孔明祁山破曹真	19	65a	4	禮	理		○	○	○
588			19	65b	1	軒	斬				
589			19	67a	3	技	枝				
590			19	68a	2	惟	堆				
591	187	孔明大破鐵車兵	19	69b	5	撤	徹				○
592			19	71a	7	元	先				
593			19	71b	9	元	越				
594	188	司馬懿智擒孟達	19	78b	9	大	一				
595			19	82a	5	出狀	狀出				
596	189	司馬懿計取街亭	20	1a	7	釣	鈞	×			
597			20	8b	9	弩	努				
598			20	9a	4	戍	戍		○		
599	191	孔明揮淚斬馬謖	20	22b	9	罪	暗				
600			20	22b	9	餓?	漢				
601			20	23a	1	間	聞				
602			20	23a	6	將	蔣				
603			20	23b	5	經	輕				
604			20	23b	8	目	自				
605			20	24a	1	承	丞				
606	192	陸遜石亭破曹休	20	26b	8	霸	號		○	○	○
607			20	27a	2	楊	揚		○		
608			20	28b	5	唐	塘				
609			20	28b	6	唐	塘				
610			20	29b	8	製	掣				
611			20	30b	3	真	要				○

612			20	30b	3	背	臂	○	○	○	○
613	193	孔明再上出師表	20	35b	4	誅	就				
614			20	39a	9	各	告				
615			20	40b	2	祚	祥				
616			20	41b	4	椎	推				△拒
617			20	45a	8	約	納				
618	196	諸葛亮三出祁山	20	57a	7	將婉	蔣琬		×		
619	199	諸葛亮四出祁山	20	82b	3	夜■	魏延				○
620	201	諸葛亮五出祁山	21	3b	8	日	西				
621			21	5a	2	中間	合關				
622			21	10b	7	如	此				
623	202	木門門道弩射張郃	21	11b	1	說	諸				
624			21	14a	6	行	件				○
625			21	14b	1	汝■	只			○	○
626			21	15b	3	咨	各				○
627	203	諸葛亮六出祁山	21	18a	9	神	仰				○
628			21	18b	1	問	人				○
629			21	18b	6	旨	告				○
630			21	19b	1	力	有				○
631			21	25a	2	揚	揚	△陽	△陽	△陽	△陽
632	204	孔明造木牛流馬	21	31a	5	日古	曰吾				○
633	205	孔明火燒木柵寨	21	36b	6	悄悄	悄悄	×	○	○	○
634			21	37a	6	報	被	×		○	○
635			21	38b	7	雖	須	×		○	○
636			21	39a	8	人	入				
637	206	孔明秋夜祭北斗	21	52a	4	仍	乃				○
638	207	孔明秋風五丈原	21	53a	7	授	受				
639			21	53b	4	人	入				
640			21	55a	1	盲	盲	○	○		
641	208	死諸葛走生仲達	21	63a	7	遂	隨				
642	209	武侯遺計斬魏延	21	65b	3	問	開				
643			21	67a	2	人	入				
644			21	69a	1	死	屍	×			

645			21	69b	2	百	兩				
646			21	70a	7	縱	從			○	○
647	210	魏拆長安承露盤	22	1b	1	日每	每日	○	○	○	○
648			22	4a	8	右	左				
649			22	6a	5	草	章				
650			22	7b	8	生■	口			○	○
651			22	7b	9	贈	贖				
652			22	10b	7	官	宮				
653	211	司馬懿破公孫淵	22	12a	2	大	犬			○	○
654			22	12b	4	孫	掠				
655			22	12b	7	部	步				
656			22	16b	2	不	任				○
657	212	司馬懿謀殺曹爽	22	19b	3	拜	併				
658			22	20b	5	上	土				
659			22	22b	4	文	又			○	○
660			22	23b	2	日每	每日	○		○	○
661			22	25b	1	張	曹				
662			22	27a	6	背	輩				
663	213	司馬懿父子秉政	22	27b	9	司	同				○
664			22	28a	4	背	曹				○
665	214	姜維大戰牛頭山	22	41b	1	拆	折				○
666			22	43b	2	隋	墮				
667			22	44a	2	成	城				
668	215	戰徐塘吳魏交兵	22	48a	3	陽■	平				○
669			22	49a	4	屯	上			△中	○
670			22	50b	3	母	毋				
671			22	51a	1	兵	丘				
672			22	51a	2	淮	進				
673			22	51b	3	散	救				
674	216	孫峻謀殺諸葛恪	22	54b	5	明	胡				○
675			22	54b	6	發	登				○
676			22	59a	6	董	薰			○	○
677			22	59b	5	俗	恪				
678			22	60a	9	計	訃				

679	217	姜維計困司馬昭	22	61a	4	體	禮				
680			22	63a	2	官	窄				
681			22	63a	3	昌	冒				
682	218	司馬師廢主立君	22	67a	6	坐	挫				
683			22	70a	7	妄	妾				
684	219	文鴛單騎退雄兵	22	75a	8	知	先				
685	221	鄧艾段谷破姜維	23	2a	1	祈	祁		△歧		
686			23	2a	5	祈	祁				
687	222	司馬昭破諸葛誕	23	9b	2	間	閭				
688			23	9b	3	掘	握				
689			23	10a	5	鈞	鈞				
690			23	12a	2	徒	從				
691			23	12a	2	琳	琳	○		○	○
692			23	12a	4	琳	琳	○		○	○
693			23	12a	5	琳	琳	○		○	○
694			23	12a	5	琳	琳	○		○	○
695			23	13b	2	袞	兗				
696	223	忠義士于詮死節	23	14a	3	坡	破			○	○
697			23	15a	9	琳	琳	○		○	○
698			23	15b	2	千	于				
699			23	16a	5	琳	琳	○		○	○
700			23	16a	8	琳	琳	○		○	○
701			23	16b	1	琳	琳	○		○	○
702			23	16b	4	琳	琳	○		○	○
703			23	16b	6	牙	乘				○
704			23	20a	3	基	祚		○	○	○
705			23	20a	4	琳	琳	○		○	○
706	224	姜維長城戰鄧艾	23	20b	9	琳	琳	○	○	○	○
707			23	22b	1	製	掣				
708			23	23b	3	母茲	弓弦				
709			23	24b	8	琳	琳	○	○	○	○
710	225	孫琳廢吳主孫亮	23	25b	1	琳	琳	○	○	○	○
711			23	25b	2	琳	琳	○	○	○	○
712			23	25b	4	琳	琳	○	○	○	○

713			23	25b	9	潔	累	○			
714			23	26a	1	刀	刁				
715			23	26a	6	琳	琳	○	○	○	○
716			23	26a	7	琳	琳	○	○	○	○
717			23	27a	9	琳	琳	○	○	○	○
718			23	26b	2	琳	琳	○	○	○	○
719			23	26b	2	琳	琳	○	○	○	○
720			23	26b	6	琳	琳	○	○	○	○
721			23	26b	8	琳	琳	○	○	○	○
722			23	27a	2	琳	琳	○	○	○	○
723			23	28a	3	琳	琳	○	○	○	○
724			23	29a	6	琳	琳	○	○	○	○
725			23	27b	2	琳	琳	○	○	○	○
726			23	27b	8	琳	琳	○	○	○	○
727			23	28a	5	琳	琳	○	○	○	○
728			23	28b	4	休	琳		△琳		
729			23	28b	7	琳	琳	○	○	○	○
730			23	28b	9	琳	琳	○	○	○	○
731			23	29a	1	琳	琳	○	○	○	○
732			23	30a	3	琳	琳	○	○	○	○
733			23	31a	4	琳	琳	○	○	○	○
734			23	32a	8	琳	琳	○	○	○	○
735			23	29b	3	琳	琳	○	○	○	○
736			23	29b	8	琳	琳	○	○	○	○
737			23	30a	2	命	明				
738			23	30a	3	琳	琳	○	○	○	○
739			23	30a	6	琳	琳	○	○	○	○
740			23	31a	8	琳	琳	○	○	○	○
741			23	32a	9	琳	琳	○	○	○	○
742			23	30b	1	隱	穩				
743			23	30b	3	琳	琳	○	○	○	○
744			23	30b	4	琳	琳	○	○	○	○
745			23	30b	6	琳	琳	○	○	○	○
746			23	30b	8	琳	琳	○	○	○	○

747			23	30b	9	琳	琳	○	○	○	○
748			23	31a	2	琳	琳	○	○	○	○
749	226	姜維祁山戰鄧艾	23	32a	6	黃貴	貴黃				
750			23	37b	6	姓	性				
751	227	司馬昭南闕弑曹髦	23	39a	1	死	至				
752			23	40a	8	屋	居	○		○	○
753			23	41a	5	黃	王				
754			23	43a	3	黃	王				
755			23	44a	2	於	族				
756			23	44a	9	尉	慰				
757			23	44b	6	蒲	滿				
758	228	姜伯約棄車大戰	23	45a	8	召	明	○	○	○	○
759			23	48a	6	家	人				
760			23	48b	9	尚	倘				
761	229	姜伯約洮陽大戰	23	52a	6	怒	勃				
762			23	55b	1	慕	纂				
763			23	55b	5	曰	引				
764			23	57a	7	北	此				
765	230	姜維避禍屯田計	23	57b	1	王	黃				
766			23	58b	9	郡■	三者				
767			23	60a	1	後	授				
768	231	鐘會鄧艾取漢中	23	65b	9	邦	拜				
769			23	66a	2	緩	爰	○	○	○	○
770			23	67b	5	甲	申				
771	232	姜維大戰劍門關	24	4b	9	守	牢				
772			24	5a	7	公	兮				
773			24	7b	6	將	寨	○		○	○
774	233	鑿山嶺鄧艾襲川	24	12b	8	之	進				
775	234	諸葛瞻大戰鄧艾	24	18b	1	城	成				
776			24	22b	9	纂	寨				
777			24	25a	2	重	衆	○		○	○
778	235	蜀後主輿櫬出降	24	26b	5	朗	郎				
779			24	28b	5	官	宮				
780	236	鐘會鄧艾大爭功	24	35b	6	咎	各				

781			24	37b	8	奪	奮				
782			24	40b	1	紬	維袖				
783	237	姜維一計害三賢	24	47a	8	犢	續	○	○	○	○
784			24	48a	9	犢	續	○	○	○	○
785			24	47b	1	犢	續	○	○	○	○
786			24	47b	3	犢	續	○	○	○	○
787	238	司馬復奪受禪台	24	49b	6	戈	弋	×	○	○	○
788			24	49b	8	戈	弋	×	○	○	○
789			24	50a	3	戈	弋	×	○	○	○
790			24	51a	5	戈	弋	×	○	○	○
791			24	50b	1	戈	弋	×	○	○	○
792			24	50b	3	戈	弋	×	○	○	○
793			24	53a	6	銀	根	○		○	○
794			24	53b	9	北	比				
795	239	羊祜病中薦杜預	24	58b	4	覬	凱	×			
796			24	60a	4	石	召	×			
797			24	63b	6	伐	代	×			
798			24	64b	2	皆	背				
799			24	65a	9	險	陵				
800			24	65b	9	知	如				
801			24	68b	1	付	副				
802	240	王濬計取石頭城	24	69b	9	凌	陵				
803			24	72a	2	上	土				
804			24	73a	2	斬	軒	×			
805			24	77a	4	贊	瓚	○		○	○

付表2 夷白堂本頁数一覧表

「頁」は、2017年調査した当時に入手した夷白堂本の写真資料のコマ数で、「R」は右半葉、「L」は左半葉を示す。

	卷	葉	15R	2	11b	29L	2	26a
1R	2		15L	2	12a	30R	2	26b
1L	2		16R	2	12b	30L	2	27a
2R	2		16L	2	13a	31R	2	27b
2L	2		17R	2	13b	31L	2	28a
3R	2		17L	2	14a	32R	2	28b
3L	2		18R	2	14b	32L	2	29a
4R	2		18L	2	15a	33R	2	29b
4L	2	1a	19R	2	15b	33L	2	30a
5R	2	1b	19L	2	16a	34R	2	30b
5L	2	2a	20R	2	16b	34L	2	31a
6R	2	2b	20L	2	17a	35R	2	31b
6L	2	3a	21R	2	17b	35L	2	32a
7R	2	3b	21L	2	18a	36R	2	32b
7L	2	4a	22R	2	18b	36L	2	33a
8R	2	4b	22L	2	19a	37R	2	33b
8L	2	5a	23R	2	19b	37L	2	34a
9R	2	5b	23L	2	20a	38R	2	34b
9L	2	6a	24R	2	20b	38L	2	35a
10R	2	6b	24L	2	21a	39R	2	35b
10L	2	7a	25R	2	21b	39L	2	36a
11R	2	7b	25L	2	22a	40R	2	36b
11L	2	8a	26R	2	22b	40L	2	37a
12R	2	8b	26L	2	23a	41R	2	37b
12L	2	9a	27R	2	23b	41L	2	38a
13R	2	9b	27L	2	24a	42R	2	38b
13L	2	10a	28R	2	24b	42L	2	39a
14R	2	10b	28L	2	25a	43R	2	39b
14L	2	11a	29R	2	25b	43L	2	40a

44R	2	40b
44L	2	41a
45R	2	41b
45L	2	42a
46R	2	42b
46L	2	43a
47R	2	43b
47L	2	44a
48R	2	44b
48L	2	45a
49R	2	45b
49L	2	46a
50R	2	
50L	2	
51R	2	46b
51L	2	47a
52R	2	47b
52L	2	48a
53R	2	48b
53L	2	49a
54R	2	49b
54L	2	50a
55R	2	50b
55L	2	51a
56R	2	51b
56L	2	52a
57R	2	52b
57L	2	53a
58R	2	53b
58L	2	54a
59R	2	54b
59L	2	55a
60R	2	55b
60L	2	56a

61R	2	56b
61L	2	57a
62R	2	57b
62L	2	58a
63R	2	58b
63L	2	59a
64R	2	59b
64L	2	60a
65R	2	60b
65L	2	61a
66R	2	61b
66L	2	62a
67R	2	62b
67L	2	63a
68R	2	63b
68L	2	64a
69R	2	64b
69L	2	65a
70R	2	65b
70L	2	66a
71R	2	66b
71L	2	67a
72R	2	67b
72L	2	68a
73R	2	68b
73L	2	69a
74R	2	69b
74L	2	70a
75R	2	70b
75L	2	71a
76R	2	
76L	2	
77R	2	
77L	2	

78R	4	
78L	4	乙 a
79R	4	乙 b
79L	4	又乙 a
80R	4	又乙 b
80L	4	2a
81R	4	2b
81L	4	3a
82R	4	3b
82L	4	4a
83R	4	4b
83L	4	5a
84R	4	5b
84L	4	6a
85R	4	6b
85L	4	7a
86R	4	7b
86L	4	8a
87R	4	8b
87L	4	9a
88R	4	9b
88L	4	10a
89R	4	10b
89L	4	11a
90R	4	11b
90L	4	12a
91R	4	12b
91L	4	13a
92R	4	13b
92L	4	14a
93R	4	14b
93L	4	15a
94R	4	15b
94L	4	16a

95R	4	16b
95L	4	17a
96R	4	17b
96L	4	18a
97R	4	18b
97L	4	19a
98R	4	19b
98L	4	20a
99R	4	20b
99L	4	21a
100R	4	21b
100L	4	22a
101R	4	22b
101L	4	23a
102R	4	23b
102L	4	24a
103R	4	24b
103L	4	25a
104R	4	25b
104L	4	26a
105R	4	26b
105L	4	27a
106R	4	27b
106L	4	28a
107R	4	28b
107L	4	29a
108R	4	29b
108L	4	30a
109R	4	30b
109L	4	31a
110R	4	31b
110L	4	32a
111R	4	32b
111L	4	33a

112R	4	33b
112L	4	34a
113R	4	34b
113L	4	35a
114R	4	35b
114L	4	36a
115R	4	36b
115L	4	37a
116R	4	37b
116L	4	38a
117R	4	38b
117L	4	39a
118R	4	39b
118L	4	40a
119R	4	40b
119L	4	41a
120R	4	41b
120L	4	42a
121R	4	42b
121L	4	43a
122R	4	43b
122L	4	44a
123R	4	44b
123L	4	45a
124R	4	45b
124L	4	46a
125R	4	46b
125L	4	47a
126R	4	47b
126L	4	48a
127R	4	48b
127L	4	49a
128R	4	49b
128L	4	50a

129R	4	50b
129L	4	51a
130R	4	51b
130L	4	52a
131R	4	52b
131L	4	53a
132R	4	53b
132L	4	54a
133R	4	54b
133L	4	55a
134R	4	55b
134L	4	56a
135R	4	56b
135L	4	57a
136R	4	57b
136L	4	58a
137R	4	58b
137L	4	59a
138R	4	59b
138L	4	60a
139R	4	60b
139L	4	61a
140R	4	61b
140L	4	62a
141R	4	62b
141L	4	63a
142R	4	63b
142L	4	64a
143R	4	64b
143L	4	65a
144R	4	65b
144L	4	66a
145R	4	66b
145L	4	67a

146R	4	67b
146L	4	68a
147R	4	68b
147L	4	69a
148R	4	69b
148L	4	70a
149R	4	70b
149L	4	71a
150R	4	71b
150L	4	72a
151R	4	72b
151L	4	73a
152R	4	73b
152L	4	74a
153R	4	74b
153L	4	75a
154R	4	
154L	4	
155R	4	
155L	4	
156R	4	
156L	4	
157R	5	
157L	5	
158R	5	
158L	5	1a
159R	5	1b
159L	5	2a
160R	5	2b
160L	5	3a
161R	5	3b
161L	5	4a
162R	5	4b
162L	5	5a

163R	5	5b
163L	5	6a
164R	5	6b
164L	5	7a
165R	5	7b
165L	5	8a
166R	5	8b
166L	5	9a
167R	5	9b
167L	5	10a
168R	5	10b
168L	5	11a
169R	5	11b
169L	5	12a
170R	5	12b
170L	5	13a
171R	5	13b
171L	5	14a
172R	5	14b
172L	5	15a
173R	5	15b
173L	5	16a
174R	5	16b
174L	5	17a
175R	5	17b
175L	5	18a
176R	5	18b
176L	5	19a
177R	5	19b
177L	5	20a
178R	5	20b
178L	5	21a
179R	5	21b
179L	5	22a

180R	5	22b
180L	5	23a
181R	5	23b
181L	5	24a
182R	5	24b
182L	5	25a
183R	5	25b
183L	5	26a
184R	5	26b
184L	5	27a
185R	5	27b
185L	5	28a
186R	5	28b
186L	5	29a
187R	5	29b
187L	5	30a
188R	5	29b
188L	5	30a
189R	5	30b
189L	5	31a
190R	5	31b
190L	5	32a
191R	5	32b
191L	5	33a
192R	5	33b
192L	5	34a
193R	5	34b
193L	5	35a
194R	5	35b
194L	5	36a
195R	5	36b
195L	5	37a
196R	5	37b
196L	5	38a

197R	5	38b
197L	5	39a
198R	5	39b
198L	5	40a
199R	5	40b
199L	5	41a
200R	5	41b
200L	5	42a
201R	5	42b
201L	5	43a
202R	5	43b
202L	5	44a
203R	5	44b
203L	5	45a
204R	5	45b
204L	5	46a
205R	5	46b
205L	5	47a
206R	5	47b
206L	5	48a
207R	5	48b
207L	5	49a
208R	5	49b
208L	5	50a
209R	5	50b
209L	5	51a
210R	5	51b
210L	5	52a
211R	5	52b
211L	5	53a
212R	5	53b
212L	5	54a
213R	5	54b
213L	5	55a

214R	5	55b
214L	5	56a
215R	5	56b
215L	5	57a
216R	5	57b
216L	5	58a
217R	5	58b
217L	5	59a
218R	5	59b
218L	5	60a
219R	5	60b
219L	5	61a
220R	5	61b
220L	5	62a
221R	5	62b
221L	5	63a
222R	5	63b
222L	5	64a
223R	5	64b
223L	5	65a
224R	5	65b
224L	5	66a
225R	5	66b
225L	5	67a
226R	5	67b
226L	5	68a
227R	5	68b
227L	5	69a
228R	5	69b
228L	5	70a
229R	5	70b
229L	5	
230R	5	
230L	5	

231R	6	
231L	6	13a
232R	6	13b
232L	6	14a
233R	6	14b
233L	6	15a
234R	6	15b
234L	6	16a
235R	6	16b
235L	6	17a
236R	6	17b
236L	6	18a
237R	6	18b
237L	6	19a
238R	6	19b
238L	6	20a
239R	6	20b
239L	6	21a
240R	6	21b
240L	6	22a
241R	6	22b
241L	6	23a
242R	6	23b
242L	6	24a
243R	6	24b
243L	6	26a
244R	6	26b
244L	6	25a
245R	6	25b
245L	6	27a
246R	6	27b
246L	6	28a
247R	6	28b
247L	6	29a

248R	6	29b
248L	6	30a
249R	6	30b
249L	6	31a
250R	6	31b
250L	6	32a
251R	6	32b
251L	6	33a
252R	6	33b
252L	6	34a
253R	6	34b
253L	6	35a
254R	6	35b
254L	6	36a
255R	6	36b
255L	6	37a
256R	6	37b
256L	6	38a
257R	6	38b
257L	6	39a
258R	6	39b
258L	6	40a
259R	6	40b
259L	6	41a
260R	6	41b
260L	6	42a
261R	6	42b
261L	6	44a
262R	6	44b
262L	6	43a
263R	6	43b
263L	6	45a
264R	6	45b
264L	6	46a

265R	6	46b
265L	6	47a
266R	6	47b
266L	6	48a
267R	6	48b
267L	6	49a
268R	6	49b
268L	6	50a
269R	6	50b
269L	6	51a
270R	6	51b
270L	6	52a
271R	6	52b
271L	6	53a
272R	6	53b
272L	6	54a
273R	6	54b
273L	6	55a
274R	6	55b
274L	6	56a
275R	6	56b
275L	6	57a
276R	6	57b
276L	6	58a
277R	6	58b
277L	6	59a
278R	6	59b
278L	6	60a
279R	6	60b
279L	6	61a
280R	6	61b
280L	6	62a
281R	6	62b
281L	6	63a

282R	6	63b
282L	6	64a
283R	6	64b
283L	6	65a
284R	6	65b
284L	6	66a
285R	6	66b
285L	6	67a
286R	6	67b
286L	6	68a
287R	6	68b
287L	6	69a
288R	6	69b
288L	6	70a
289R	6	70b
289L	6	71a
290R	6	71b
290L	6	72a
291R	6	72b
291L	6	73a
292R	6	73b
292L	6	74a
293R	6	74b
293L	6	75a
294R	6	75b
294L	6	
295R	6	
295L	6	
296R	6	
296L	6	
297R	7	
297L	7	
298R	7	
298L	7	

299R	7	
299L	7	
300R	7	
300L	7	1a
301R	7	1b
301L	7	2a
302R	7	2b
302L	7	3a
303R	7	3b
303L	7	4a
304R	7	4b
304L	7	5a
305R	7	5b
305L	7	6a
306R	7	6b
306L	7	7a
307R	7	7b
307L	7	8a
308R	7	8b
308L	7	9a
309R	7	9b
309L	7	10a
310R	7	10b
310L	7	11a
311R	7	11b
311L	7	12a
312R	7	12b
312L	7	13a
313R	7	13b
313L	7	14a
314R	7	14b
314L	7	15a
315R	7	15b
315L	7	16a

316R	7	16b
316L	7	17a
317R	7	17b
317L	7	18a
318R	7	18b
318L	7	19a
319R	7	19b
319L	7	20a
320R	7	20b
320L	7	21a
321R	7	21b
321L	7	22a
322R	7	22b
322L	7	23a
323R	7	23b
323L	7	24a
324R	7	24b
324L	7	25a
325R	7	25b
325L	7	26a
326R	7	26b
326L	7	27a
327R	7	27b
327L	7	28a
328R	7	28b
328L	7	29a
329R	7	29b
329L	7	30a
330R	7	30b
330L	7	31a
331R	7	31b
331L	7	32a
332R	7	32b
332L	7	33a

333R	7	33b
333L	7	34a
334R	7	34b
334L	7	35a
335R	7	35b
335L	7	36a
336R	7	36b
336L	7	37a
337R	7	37b
337L	7	38a
338R	7	38b
338L	7	39a
339R	7	39b
339L	7	40a
340R	7	40b
340L	7	41a
341R	7	41b
341L	7	42a
342R	7	42b
342L	7	43a
343R	7	43b
343L	7	44a
344R	7	44b
344L	7	45a
345R	7	45b
345L	7	46a
346R	7	46b
346L	7	47a
347R	7	47b
347L	7	48a
348R	7	48b
348L	7	49a
349R	7	49b
349L	7	50a

350R	7	50b
350L	7	51a
351R	7	51b
351L	7	52a
352R	7	52b
352L	7	53a
353R	7	53b
353L	7	54a
354R	7	54b
354L	7	55a
355R	7	55b
355L	7	56a
356R	7	56b
356L	7	57a
357R	7	57b
357L	7	58a
358R	7	58b
358L	7	59a
359R	7	59b
359L	7	60a
360R	7	60b
360L	7	61a
361R	7	61b
361L	7	62a
362R	7	62b
362L	7	63a
363R	7	63b
363L	7	64a
364R	7	64b
364L	7	65a
365R	7	65b
365L	7	66a
366R	7	66b
366L	7	67a

367R	7	67b
367L	7	68a
368R	7	68b
368L	7	69a
369R	7	69b
369L	7	70a
370R	7	70b
370L	7	71a
371R	7	71b
371L	7	72a
372R	7	72b
372L	7	73a
373R	7	73b
373L	7	74a
374R	7	74b
374L	7	75a
375R	7	75b
375L	7	76a
376R	7	76b
376L	7	77a
377R	7	77b
377L	7	78a
378R	7	78b
378L	7	
379R	7	
379L	7	
380R	7	
380L	7	
381R	8	
381L	8	
382R	8	
382L	8	1a
383R	8	1b
383L	8	2a

384R	8	2b
384L	8	3a
385R	8	3b
385L	8	4a
386R	8	4b
386L	8	5a
387R	8	5b
387L	8	6a
388R	8	6b
388L	8	7a
389R	8	7b
389L	8	8a
390R	8	8b
390L	8	9a
391R	8	9b
391L	8	10a
392R	8	10b
392L	8	11a
393R	8	11b
393L	8	12a
394R	8	12b
394L	8	13a
395R	8	13b
395L	8	14a
396R	8	14b
396L	8	15a
397R	8	15b
397L	8	16a
398R	8	16b
398L	8	17a
399R	8	17b
399L	8	18a
400R	8	18b
400L	8	19a

401R	8	19b
401L	8	20a
402R	8	20b
402L	8	21a
403R	8	21b
403L	8	22a
404R	8	22b
404L	8	23a
405R	8	23b
405L	8	24a
406R	8	24b
406L	8	25a
407R	8	25b
407L	8	26a
408R	8	26b
408L	8	27a
409R	8	27b
409L	8	28a
410R	8	28b
410L	8	29a
411R	8	29b
411L	8	30a
412R	8	30b
412L	8	31a
413R	8	31b
413L	8	32a
414R	8	32b
414L	8	33a
415R	8	33b
415L	8	34a
416R	8	34b
416L	8	35a
417R	8	35b
417L	8	36a

418R	8	36b
418L	8	37a
419R	8	37b
419L	8	38a
420R	8	38b
420L	8	39a
421R	8	39b
421L	8	40a
422R	8	40b
422L	8	41a
423R	8	41b
423L	8	42a
424R	8	42b
424L	8	43a
425R	8	43b
425L	8	44a
426R	8	44b
426L	8	45a
427R	8	45b
427L	8	46a
428R	8	46b
428L	8	47a
429R	8	47b
429L	8	48a
430R	8	48b
430L	8	49a
431R	8	49b
431L	8	50a
432R	8	50b
432L	8	51a
433R	8	51b
433L	8	52a
434R	8	52b
434L	8	53a

435R	8	53b
435L	8	54a
436R	8	54b
436L	8	55a
437R	8	55b
437L	8	56a
438R	8	56b
438L	8	57a
439R	8	57b
439L	8	58a
440R	8	58b
440L	8	59a
441R	8	59b
441L	8	60a
442R	8	60b
442L	8	61a
443R	8	61b
443L	8	62a
444R	8	62b
444L	8	63a
445R	8	63b
445L	8	64a
446R	8	64b
446L	8	65a
447R	8	65b
447L	8	66a
448R	8	66b
448L	8	67a
449R	8	67b
449L	8	68a
450R	8	68b
450L	8	69a
451R	8	69b
451L	8	70a

452R	8	70b
452L	8	71a
453R	8	71b
453L	8	
454R	8	
454L	8	
455R	8	
455L	8	
456R	8	
456L	8	
457R	9	
457L	9	
458R	9	
458L	14	80a
459R	14	80b
459L	9	1a
460R	9	1b
460L	9	2a
461R	9	2b
461L	9	3a
462R	9	3b
462L	9	4a
463R	9	4b
463L	9	5a
464R	9	5b
464L	9	6a
465R	9	6b
465L	9	7a
466R	9	7b
466L	9	8a
467R	9	8b
467L	9	9a
468R	9	9b
468L	9	10a

469R	9	10b
469L	9	11a
470R	9	11b
470L	9	12a
471R	9	12b
471L	9	13a
472R	9	13b
472L	9	14a
473R	9	14b
473L	9	15a
474R	9	15b
474L	9	16a
475R	9	16b
475L	9	17a
476R	9	17b
476L	9	18a
477R	9	18b
477L	9	19a
478R	9	19b
478L	9	20a
479R	9	20b
479L	9	21a
480R	9	21b
480L	9	22a
481R	9	22b
481L	9	23a
482R	9	23b
482L	9	24a
483R	9	24b
483L	9	25a
484R	9	25b
484L	9	26a
485R	9	26b
485L	9	27a

486R	9	27b
486L	9	28a
487R	9	28b
487L	9	29a
488R	9	29b
488L	9	30a
489R	9	30b
489L	9	31a
490R	9	31b
490L	9	32a
491R	9	32b
491L	9	33a
492R	9	33b
492L	9	34a
493R	9	34b
493L	9	35a
494R	9	35b
494L	9	36a
495R	9	36b
495L	9	37a
496R	9	37b
496L	9	38a
497R	9	38b
497L	9	39a
498R	9	39b
498L	9	40a
499R	9	40b
499L	9	41a
500R	9	41b
500L	9	42a
501R	9	42b
501L	9	43a
502R	9	43b
502L	9	44a

503R	9	44b
503L	9	45a
504R	9	45b
504L	9	46a
505R	9	46b
505L	9	47a
506R	9	47b
506L	9	48a
507R	9	48b
507L	9	49a
508R	9	49b
508L	9	50a
509R	9	50b
509L	9	51a
510R	9	51b
510L	9	52a
511R	9	52b
511L	9	53a
512R	9	53b
512L	9	54a
513R	9	54b
513L	9	55a
514R	9	55b
514L	9	56a
515R	9	56b
515L	9	57a
516R	9	57b
516L	9	58a
517R	9	58b
517L	9	59a
518R	9	59b
518L	9	60a
519R	9	60b
519L	9	61a

520R	9	61b
520L	9	62a
521R	9	62b
521L	9	63a
522R	9	63b
522L	9	64a
523R	9	64b
523L	9	65a
524R	9	65b
524L	9	66a
525R	9	66b
525L	9	67a
526R	9	67b
526L	9	68a
527R	9	68b
527L	9	69a
528R	9	
528L	9	
529R	10	
529L	10	1a
530R	10	1b
530L	10	2a
531R	10	2b
531L	10	3a
532R	10	3b
532L	10	4a
533R	10	4b
533L	10	5a
534R	10	5b
534L	10	6a
535R	10	6b
535L	10	7a
536R	10	7b
536L	10	8a

537R	10	8b
537L	10	9a
538R	10	9b
538L	10	10a
539R	10	10b
539L	10	11a
540R	10	11b
540L	10	12a
541R	10	12b
541L	10	13a
542R	10	13b
542L	10	14a
543R	10	14b
543L	10	15a
544R	10	15b
544L	10	16a
545R	10	16b
545L	10	17a
546R	10	17b
546L	10	18a
547R	10	18b
547L	10	19a
548R	10	19b
548L	10	20a
549R	10	20b
549L	10	21a
550R	10	21b
550L	10	22a
551R	10	22b
551L	10	23a
552R	10	23b
552L	10	24a
553R	10	24b
553L	10	25a

554R	10	25b
554L	10	26a
555R	10	26b
555L	10	27a
556R	10	27b
556L	10	28a
557R	10	28b
557L	10	29a
558R	10	29b
558L	10	30a
559R	10	30b
559L	10	31a
560R	10	31b
560L	10	32a
561R	10	32b
561L	10	33a
562R	10	33b
562L	10	34a
563R	10	34b
563L	10	35a
564R	10	35b
564L	10	36a
565R	10	36b
565L	10	37a
566R	10	37b
566L	10	38a
567R	10	38b
567L	10	39a
568R	10	39b
568L	10	40a
569R	10	40b
569L	10	41a
570R	10	41b
570L	10	42a

571R	10	42b
571L	10	43a
572R	10	43b
572L	10	44a
573R	10	44b
573L	10	45a
574R	10	45b
574L	10	46a
575R	10	46b
575L	10	47a
576R	10	47b
576L	10	48a
577R	10	48b
577L	10	49a
578R	10	49b
578L	10	50a
579R	10	50b
579L	10	51a
580R	10	51b
580L	10	52a
581R	10	52b
581L	10	53a
582R	10	53b
582L	10	54a
583R	10	54b
583L	10	55a
584R	10	55b
584L	10	56a
585R	10	56b
585L	10	57a
586R	10	57b
586L	10	58a
587R	10	58b
587L	10	59a

588R	10	59b
588L	10	60a
589R	10	60b
589L	10	61a
590R	10	61b
590L	10	62a
591R	10	62b
591L	10	63a
592R	10	63b
592L	10	64a
593R	10	64b
593L	10	65a
594R	10	
594L	10	
595R	10	
595L	10	
596R	10	
596L	10	
597R	11	
597L	11	
598R	11	
598L	11	1a
599R	11	1b
599L	11	2a
600R	11	2b
600L	11	3a
601R	11	3b
601L	11	4a
602R	11	4b
602L	11	5a
603R	11	5b
603L	11	6a
604R	11	6b
604L	11	7a

605R	11	7b
605L	11	8a
606R	11	8b
606L	11	9a
607R	11	9b
607L	11	10a
608R	11	10b
608L	11	11a
609R	11	11b
609L	11	12a
610R	11	12b
610L	11	13a
611R	11	13b
611L	11	14a
612R	11	14b
612L	11	15a
613R	11	15b
613L	11	16a
614R	11	16b
614L	11	17a
615R	11	17b
615L	11	18a
616R	11	18b
616L	11	19a
617R	11	19b
617L	11	20a
618R	11	20b
618L	11	21a
619R	11	21b
619L	11	22a
620R	11	22b
620L	11	23a
621R	11	23b
621L	11	24a

622R	11	24b
622L	11	25a
623R	11	25b
623L	11	26a
624R	11	26b
624L	11	27a
625R	11	27b
625L	11	28a
626R	11	28b
626L	11	29a
627R	11	29b
627L	11	30a
628R	11	30b
628L	11	31a
629R	11	31b
629L	11	32a
630R	11	32b
630L	11	33a
631R	11	33b
631L	11	34a
632R	11	34b
632L	11	35a
633R	11	35b
633L	11	36a
634R	11	36b
634L	11	37a
635R	11	37b
635L	11	38a
636R	11	38b
636L	11	39a
637R	11	39b
637L	11	40a
638R	11	40b
638L	11	41a

639R	11	41b
639L	11	42a
640R	11	42b
640L	11	43a
641R	11	43b
641L	11	44a
642R	11	44b
642L	11	45a
643R	11	45b
643L	11	46a
644R	11	46b
644L	11	47a
645R	11	47b
645L	11	48a
646R	11	48b
646L	11	49a
647R	11	49b
647L	11	50a
648R	11	50b
648L	11	51a
649R	11	51b
649L	11	52a
650R	11	52b
650L	11	53a
651R	11	53b
651L	11	54a
652R	11	54b
652L	11	55a
653R	11	55b
653L	11	56a
654R	11	56b
654L	11	57a
655R	11	57b
655L	11	58a

656R	11	58b
656L	11	59a
657R	11	59b
657L	11	60a
658R	11	60b
658L	11	61a
659R	11	61b
659L	11	62a
660R	11	62b
660L	11	64a
661R	11	64b
661L	11	65a
662R	11	65b
662L	11	66a
663R	11	66b
663L	11	67a
664R	11	67b
664L	11	68a
665R	11	68b
665L	11	69a
666R	11	69b
666L	11	70a
667R	11	70b
667L	11	71a
668R	11	71b
668L	11	72a
669R	11	72b
669L	11	73a
670R	11	73b
670L	11	74a
671R	11	74b
671L	11	75a
672R	11	75b
672L	11	76a

673R	11	76b
673L	11	77a
674R	11	77b
674L	11	79a
675R	11	79b
675L	11	78a
676R	11	78b
676L	11	80a
677R	11	80b
677L	11	81a
678R	11	81b
678L	11	82a
679R	11	
679L	11	
680R	14	
680L	14	
681R	14	1b
681L	14	2a
682R	14	2b
682L	14	3a
683R	14	3b
683L	14	4a
684R	14	4b
684L	14	5a
685R	14	5b
685L	14	6a
686R	14	6b
686L	14	7a
687R	14	7b
687L	14	8a
688R	14	8b
688L	14	9a
689R	14	9b
689L	14	10a

690R	14	10b
690L	14	11a
691R	14	11b
691L	14	12a
692R	14	12b
692L	14	13a
693R	14	13b
693L	14	14a
694R	14	14b
694L	14	15a
695R	14	15b
695L	14	16a
696R	14	16b
696L	14	17a
697R	14	17b
697L	14	18a
698R	14	18b
698L	14	19a
699R	14	19b
699L	14	20a
700R	14	20b
700L	14	21a
701R	14	21b
701L	14	22a
702R	14	22b
702L	14	23a
703R	14	23b
703L	14	24a
704R	14	24b
704L	14	25a
705R	14	25b
705L	14	26a
706R	14	26b
706L	14	27a

707R	14	27b
707L	14	28a
708R	14	28b
708L	14	29a
709R	14	29b
709L	14	30a
710R	14	30b
710L	14	31a
711R	14	31b
711L	14	32a
712R	14	32b
712L	14	33a
713R	14	33b
713L	14	34a
714R	14	34b
714L	14	35a
715R	14	35b
715L	14	36a
716R	14	36b
716L	14	37a
717R	14	37b
717L	14	38a
718R	14	38b
718L	14	39a
719R	14	39b
719L	14	40a
720R	14	40b
720L	14	41a
721R	14	41b
721L	14	42a
722R	14	42b
722L	14	43a
723R	14	43b
723L	14	44a

724R	14	44b
724L	14	45a
725R	14	45b
725L	14	46a
726R	14	46b
726L	14	47a
727R	14	47b
727L	14	48a
728R	14	48b
728L	14	49a
729R	14	49b
729L	14	50a
730R	14	50b
730L	14	51a
731R	14	51b
731L	14	52a
732R	14	52b
732L	14	53a
733R	14	53b
733L	14	54a
734R	14	54b
734L	14	55a
735R	14	55b
735L	14	56a
736R	14	56b
736L	14	57a
737R	14	57b
737L	14	58a
738R	14	58b
738L	14	59a
739R	14	59b
739L	14	60a
740R	14	60b
740L	14	61a

741R	14	61b
741L	14	62a
742R	14	62b
742L	14	63a
743R	14	63b
743L	14	64a
744R	14	64b
744L	14	65a
745R	14	65b
745L	14	66a
746R	14	66b
746L	14	67a
747R	14	67b
747L	14	68a
748R	14	68b
748L	14	69a
749R	14	69b
749L	14	70a
750R	14	70b
750L	14	71a
751R	14	71b
751L	14	72a
752R	14	72b
752L	14	73a
753R	14	73b
753L	14	74a
754R	14	74b
754L	14	75a
755R	14	75b
755L	14	76a
756R	14	76b
756L	14	77a
757R	14	77b
757L	14	79a

758R	14	79b
758L	14	
759R	14	
759L	14	
760R	15	
760L	15	
761R	15	
761L	15	15a
762R	15	15b
762L	15	16a
763R	15	16b
763L	15	17a
764R	15	17b
764L	15	18a
765R	15	18b
765L	15	19a
766R	15	19b
766L	15	20a
767R	15	20b
767L	15	21a
768R	15	21b
768L	15	22a
769R	15	22b
769L	15	23a
770R	15	23b
770L	15	24a
771R	15	24b
771L	15	25a
772R	15	25b
772L	15	26a
773R	15	26b
773L	15	27a
774R	15	27b
774L	15	28a

775R	15	28b
775L	15	29a
776R	15	29b
776L	15	30a
777R	15	30b
777L	15	31a
778R	15	31b
778L	15	32a
779R	15	32b
779L	15	33a
780R	15	33b
780L	15	34a
781R	15	34b
781L	15	35a
782R	15	35b
782L	15	36a
783R	15	36b
783L	15	37a
784R	15	37b
784L	15	38a
785R	15	38b
785L	15	39a
786R	15	39b
786L	15	40a
787R	15	40b
787L	15	41a
788R	15	41b
788L	15	42a
789R	15	42b
789L	15	43a
790R	15	43b
790L	15	44a
791R	15	44b
791L	15	45a

792R	15	45b
792L	15	46a
793R	15	46b
793L	15	47a
794R	15	47b
794L	15	48a
795R	15	48b
795L	15	49a
796R	15	49b
796L	15	50a
797R	15	50b
797L	15	51a
798R	15	51b
798L	15	52a
799R	15	52b
799L	15	53a
800R	15	53b
800L	15	54a
801R	15	54b
801L	15	55a
802R	15	55b
802L	15	56a
803R	15	56b
803L	15	57a
804R	15	57b
804L	15	58a
805R	15	58b
805L	15	59a
806R	15	59b
806L	15	60a
807R	15	60b
807L	15	61a
808R	15	61b
808L	15	62a

809R	15	62b
809L	15	63a
810R	15	63b
810L	15	64a
811R	15	64b
811L	15	65a
812R	15	65b
812L	15	66a
813R	15	66b
813L	15	67a
814R	15	67b
814L	15	68a
815R	15	68b
815L	15	69a
816R	15	69b
816L	15	70a
817R	15	70b
817L	15	71a
818R	15	71b
818L	15	72a
819R	15	72b
819L	15	73a
820R	15	73b
820L	15	74a
821R	15	74b
821L	15	75a
822R	15	
822L	15	
823R	15	
823L	15	
824R	16	
824L	16	
825R	16	
825L	16	1a

826R	16	1b
826L	16	2a
827R	16	2b
827L	16	3a
828R	16	3b
828L	16	4a
829R	16	4b
829L	16	5a
830R	16	5b
830L	16	6a
831R	16	6b
831L	16	7a
832R	16	7b
832L	16	8a
833R	16	8b
833L	16	9a
834R	16	9b
834L	16	10a
835R	16	10b
835L	16	11a
836R	16	11b
836L	16	12a
837R	16	12b
837L	16	13a
838R	16	13b
838L	16	14a
839R	16	14b
839L	16	15a
840R	16	15b
840L	16	16a
841R	16	16b
841L	16	17a
842R	16	17b
842L	16	18a

843R	16	18b
843L	16	19a
844R	16	19b
844L	16	20a
845R	16	20b
845L	16	21a
846R	16	21b
846L	16	22a
847R	16	22b
847L	16	23a
848R	16	23b
848L	16	24a
849R	16	24b
849L	16	25a
850R	16	25b
850L	16	26a
851R	16	26b
851L	16	27a
852R	16	27b
852L	16	28a
853R	16	28b
853L	16	29a
854R	16	29b
854L	16	30a
855R	16	30b
855L	16	31a
856R	16	31b
856L	16	32a
857R	16	32b
857L	16	33a
858R	16	33b
858L	16	34a
859R	16	34b
859L	16	35a

860R	16	35b
860L	16	36a
861R	16	36b
861L	16	37a
862R	16	37b
862L	16	38a
863R	16	38b
863L	16	39a
864R	16	39b
864L	16	40a
865R	16	40b
865L	16	41a
866R	16	41b
866L	16	42a
867R	16	42b
867L	16	43a
868R	16	43b
868L	16	44a
869R	16	44b
869L	16	45a
870R	16	45b
870L	16	46a
871R	16	46b
871L	16	47a
872R	16	47b
872L	16	48a
873R	16	48b
873L	16	49a
874R	16	49b
874L	16	50a
875R	16	50b
875L	16	51a
876R	16	51b
876L	16	52a

877R	16	52b
877L	16	53a
878R	16	53b
878L	16	54a
879R	16	54b
879L	16	55a
880R	16	55b
880L	16	56a
881R	16	56b
881L	16	57a
882R	16	57b
882L	16	58a
883R	16	58b
883L	16	59a
884R	16	59b
884L	16	60a
885R	16	60b
885L	16	61a
886R	16	61b
886L	16	62a
887R	16	62b
887L	16	
888R	16	
888L	16	
889R	16	
889L	16	
890R	16	
890L	16	
891R	16	
891L	16	
892R	17	
892L	17	
893R	17	
893L	17	

894R	17	
894L	17	
895R	17	
895L	17	1a
896R	17	1b
896L	17	2a
897R	17	2b
897L	17	3a
898R	17	3b
898L	17	4a
899R	17	4b
899L	17	5a
900R	17	5b
900L	17	6a
901R	17	6b
901L	17	7a
902R	17	7b
902L	17	8a
903R	17	8b
903L	17	9a
904R	17	9b
904L	17	10a
905R	17	10b
905L	17	11a
906R	17	11b
906L	17	12a
907R	17	12b
907L	17	13a
908R	17	13b
908L	17	14a
909R	17	14b
909L	17	15a
910R	17	15b
910L	17	16a

911R	17	
911L	17	
912R	17	16b
912L	17	17a
913R	17	17b
913L	17	18a
914R	17	18b
914L	17	19a
915R	17	19b
915L	17	20a
916R	17	20b
916L	17	21a
917R	17	21b
917L	17	22a
918R	17	22b
918L	17	23a
919R	17	23b
919L	17	24a
920R	17	24b
920L	17	25a
921R	17	25b
921L	17	26a
922R	17	26b
922L	17	27a
923R	17	27b
923L	17	28a
924R	17	28b
924L	17	29a
925R	17	29b
925L	17	30a
926R	17	30b
926L	17	31a
927R	17	31b
927L	17	32a

928R	17	32b
928L	17	33a
929R	17	33b
929L	17	34a
930R	17	34b
930L	17	35a
931R	17	35b
931L	17	36a
932R	17	36b
932L	17	37a
933R	17	37b
933L	17	38a
934R	17	38b
934L	17	39a
935R	17	39b
935L	17	40a
936R	17	40b
936L	17	41a
937R	17	41b
937L	17	42a
938R	17	42b
938L	17	43a
939R	17	43b
939L	17	44a
940R	17	44b
940L	17	45a
941R	17	45b
941L	17	46a
942R	17	46b
942L	17	47a
943R	17	47b
943L	17	48a
944R	17	48b
944L	17	49a

945R	17	49b
945L	17	50a
946R	17	50b
946L	17	51a
947R	17	51b
947L	17	52a
948R	17	52b
948L	17	53a
949R	17	53b
949L	17	54a
950R	17	54b
950L	17	55a
951R	17	55b
951L	17	56a
952R	17	56b
952L	17	57a
953R	17	57b
953L	17	58a
954R	17	58b
954L	17	59a
955R	17	59b
955L	17	60a
956R	17	60b
956L	17	61a
957R	17	61b
957L	17	62a
958R	17	62b
958L	17	63a
959R	17	63b
959L	17	64a
960R	17	64b
960L	17	65a
961R	17	65b
961L	17	

962R	18	
962L	18	
963R	18	
963L	18	1a
964R	18	1b
964L	18	2a
965R	18	2b
965L	18	3a
966R	18	3b
966L	18	4a
967R	18	4b
967L	18	5a
968R	18	5b
968L	18	6a
969R	18	6b
969L	18	7a
970R	18	7b
970L	18	8a
971R	18	8b
971L	18	9a
972R	18	9b
972L	18	10a
973R	18	10b
973L	18	11a
974R	18	11b
974L	18	12a
975R	18	12b
975L	18	13a
976R	18	13b
976L	18	14a
977R	18	14b
977L	18	15a
978R	18	15b
978L	18	16a

979R	18	16b
979L	18	17a
980R	18	17b
980L	18	18a
981R	18	18b
981L	18	19a
982R	18	19b
982L	18	20a
983R	18	20b
983L	18	21a
984R	18	21b
984L	18	22a
985R	18	22b
985L	18	23a
986R	18	23b
986L	18	24a
987R	18	24b
987L	18	25a
988R	18	25b
988L	18	26a
989R	18	26b
989L	18	27a
990R	18	27b
990L	18	28a
991R	18	28b
991L	18	29a
992R	18	29b
992L	18	30a
993R	18	30b
993L	18	31a
994R	18	31b
994L	18	32a
995R	18	32b
995L	18	33a

996R	18	33b
996L	18	34a
997R	18	34b
997L	18	35a
998R	18	35b
998L	18	36a
999R	18	36b
999L	18	37a
1000R	18	37b
1000L	18	38a
1001R	18	38b
1001L	18	39a
1002R	18	39b
1002L	18	40a
1003R	18	40b
1003L	18	41a
1004R	18	41b
1004L	18	42a
1005R	18	42b
1005L	18	43a
1006R	18	43b
1006L	18	44a
1007R	18	44b
1007L	18	45a
1008R	18	45b
1008L	18	46a
1009R	18	46b
1009L	18	47a
1010R	18	47b
1010L	18	48a
1011R	18	48b
1011L	18	49a
1012R	18	49b
1012L	18	50a

1013R	18	50b
1013L	18	51a
1014R	18	51b
1014L	18	52a
1015R	18	52b
1015L	18	53a
1016R	18	53b
1016L	18	54a
1017R	18	54b
1017L	18	55a
1018R	18	55b
1018L	18	56a
1019R	18	56b
1019L	18	57a
1020R	18	57b
1020L	18	58a
1021R	18	58b
1021L	18	59a
1022R	18	59b
1022L	18	60a
1023R	18	60b
1023L	18	61a
1024R	18	61b
1024L	18	62a
1025R	18	62b
1025L	18	63a
1026R	18	63b
1026L	18	64a
1027R	18	64b
1027L	18	65a
1028R	18	65b
1028L	18	66a
1029R	18	66b
1029L	18	67a

1030R	18	67b
1030L	18	68a
1031R	18	68b
1031L	18	69a
1032R	18	69b
1032L	18	70a
1033R	18	70b
1033L	18	
1034R	18	
1034L	18	
1035R	19	
1035L	19	
1036R	19	
1036L	19	1a
1037R	19	1b
1037L	19	2a
1038R	19	2b
1038L	19	3a
1039R	19	3b
1039L	19	4a
1040R	19	4b
1040L	19	5a
1041R	19	5b
1041L	19	6a
1042R	19	6b
1042L	19	7a
1043R	19	7b
1043L	19	8a
1044R	19	8b
1044L	19	9a
1045R	19	9b
1045L	19	10a
1046R	19	10b
1046L	19	11a

1047R	19	11b
1047L	19	12a
1048R	19	12b
1048L	19	13a
1049R	19	13b
1049L	19	14a
1050R	19	14b
1050L	19	15a
1051R	19	15b
1051L	19	16a
1052R	19	16b
1052L	19	17a
1053R	19	17b
1053L	19	18a
1054R	19	18b
1054L	19	19a
1055R	19	19b
1055L	19	20a
1056R	19	20b
1056L	19	21a
1057R	19	21b
1057L	19	22a
1058R	19	22b
1058L	19	23a
1059R	19	23b
1059L	19	24a
1060R	19	24b
1060L	19	25a
1061R	19	25b
1061L	19	26a
1062R	19	26b
1062L	19	27a
1063R	19	27b
1063L	19	28a

1064R	19	28b
1064L	19	29a
1065R	19	29b
1065L	19	30a
1066R	19	30b
1066L	19	31a
1067R	19	31b
1067L	19	32a
1068R	19	32b
1068L	19	33a
1069R	19	33b
1069L	19	34a
1070R	19	34b
1070L	19	35a
1071R	19	35b
1071L	19	36a
1072R	19	36b
1072L	19	37a
1073R	19	37b
1073L	19	38a
1074R	19	38b
1074L	19	39a
1075R	19	39b
1075L	19	40a
1076R	19	40b
1076L	19	41a
1077R	19	41b
1077L	19	42a
1078R	19	42b
1078L	19	43a
1079R	19	43b
1079L	19	44a
1080R	19	44b
1080L	19	45a

1081R	19	45b
1081L	19	46a
1082R	19	46b
1082L	19	47a
1083R	19	47b
1083L	19	48a
1084R	19	48b
1084L	19	49a
1085R	19	49b
1085L	19	50a
1086R	19	50b
1086L	19	51a
1087R	19	51b
1087L	19	52a
1088R	19	52b
1088L	19	53a
1089R	19	53b
1089L	19	54a
1090R	19	54b
1090L	19	55a
1091R	19	55b
1091L	19	56a
1092R	19	56b
1092L	19	57a
1093R	19	57b
1093L	19	58a
1094R	19	58b
1094L	19	59a
1095R	19	59b
1095L	19	60a
1096R	19	60b
1096L	19	61a
1097R	19	61b
1097L	19	62a

1098R	19	62b
1098L	19	63a
1099R	19	63b
1099L	19	64a
1100R	19	64b
1100L	19	65a
1101R	19	65b
1101L	19	66a
1102R	19	66b
1102L	19	67a
1103R	19	67b
1103L	19	68a
1104R	19	68b
1104L	19	69a
1105R	19	69b
1105L	19	70a
1106R	19	70b
1106L	19	71a
1107R	19	71b
1107L	19	72a
1108R	19	72b
1108L	19	73a
1109R	19	73b
1109L	19	74a
1110R	19	74b
1110L	19	75a
1111R	19	75b
1111L	19	76a
1112R	19	76b
1112L	19	77a
1113R	19	77b
1113L	19	78a
1114R	19	78b
1114L	19	79a

1115R	19	79b
1115L	19	80a
1116R	19	80b
1116L	19	81a
1117R	19	81b
1117L	19	82a
1118R	19	82b
1118L	19	83a
1119R	19	83b
1119L	19	84a
1120R	19	84b
1120L	19	85a
1121R	19	85b
1121L	20	1a
1122R	20	1b
1122L	20	2a
1123R	20	2b
1123L	20	3a
1124R	20	3b
1124L	20	4a
1125R	20	4b
1125L	20	5a
1126R	20	5b
1126L	20	6a
1127R	20	6b
1127L	20	7a
1128R	20	7b
1128L	20	8a
1129R	20	8b
1129L	20	9a
1130R	20	9b
1130L	20	10a
1131R	20	10b
1131L	20	11a

1132R	20	11b
1132L	20	12a
1133R	20	12b
1133L	20	13a
1134R	20	13b
1134L	20	14a
1135R	20	14b
1135L	20	15a
1136R	20	15b
1136L	20	16a
1137R	20	16b
1137L	20	17a
1138R	20	17b
1138L	20	18a
1139R	20	18b
1139L	20	19a
1140R	20	19b
1140L	20	20a
1141R	20	20b
1141L	20	21a
1142R	20	21b
1142L	20	22a
1143R	20	22b
1143L	20	23a
1144R	20	23b
1144L	20	24a
1145R	20	24b
1145L	20	25a
1146R	20	25b
1146L	20	26a
1147R	20	26b
1147L	20	27a
1148R	20	27b
1148L	20	28a

1149R	20	28b
1149L	20	29a
1150R	20	29b
1150L	20	30a
1151R	20	30b
1151L	20	31a
1152R	20	31b
1152L	20	32a
1153R	20	32b
1153L	20	33a
1154R	20	33b
1154L	20	34a
1155R	20	34b
1155L	20	35a
1156R	20	35b
1156L	20	36a
1157R	20	36b
1157L	20	37a
1158R	20	37b
1158L	20	38a
1159R	20	38b
1159L	20	39a
1160R	20	39b
1160L	20	40a
1161R	20	40b
1161L	20	41a
1162R	20	41b
1162L	20	42a
1163R	20	42b
1163L	20	43a
1164R	20	43b
1164L	20	44a
1165R	20	44b
1165L	20	45a

1166R	20	45b
1166L	20	46a
1167R	20	46b
1167L	20	47a
1168R	20	47b
1168L	20	48a
1169R	20	48b
1169L	20	49a
1170R	20	49b
1170L	20	50a
1171R	20	50b
1171L	20	51a
1172R	20	51b
1172L	20	52a
1173R	20	52b
1173L	20	53a
1174R	20	53b
1174L	20	54a
1175R	20	54b
1175L	20	55a
1176R	20	55b
1176L	20	56a
1177R	20	56b
1177L	20	57a
1178R	20	57b
1178L	20	58a
1179R	20	58b
1179L	20	59a
1180R	20	59b
1180L	20	60a
1181R	20	60b
1181L	20	61a
1182R	20	61b
1182L	20	62a

1183R	20	62b
1183L	20	63a
1184R	20	63b
1184L	20	64a
1185R	20	64b
1185L	20	65a
1186R	20	65b
1186L	20	66a
1187R	20	66b
1187L	20	67a
1188R	20	67b
1188L	20	68a
1189R	20	68b
1189L	20	69a
1190R	20	69b
1190L	20	70a
1191R	20	70b
1191L	20	71a
1192R	20	71b
1192L	20	72a
1193R	20	72b
1193L	20	73a
1194R	20	73b
1194L	20	74a
1195R	20	74b
1195L	20	75a
1196R	20	75b
1196L	20	76a
1197R	20	76b
1197L	20	77a
1198R	20	77b
1198L	20	78a
1199R	20	78b
1199L	20	79a

1200R	20	79b
1200L	20	80a
1201R	20	80b
1201L	20	81a
1202R	20	81b
1202L	20	82a
1203R	20	82b
1203L	20	83a
1204R	20	83b
1204L	20	84a
1205R	20	84b
1205L	20	85a
1206R	20	85b
1206L	20	86a
1207R	20	86b
1207L	20	
1208R	20	
1208L	20	
1209R	21	
1209L	21	
1210R	21	
1210L	21	1a
1211R	21	1b
1211L	21	2a
1212R	21	2b
1212L	21	3a
1213R	21	3b
1213L	21	4a
1214R	21	4b
1214L	21	5a
1215R	21	5b
1215L	21	6a
1216R	21	6b
1216L	21	7a

1217R	21	7b
1217L	21	8a
1218R	21	8b
1218L	21	9a
1219R	21	9b
1219L	21	10a
1220R	21	10b
1220L	21	11a
1221R	21	11b
1221L	21	12a
1222R	21	12b
1222L	21	13a
1223R	21	13b
1223L	21	14a
1224R	21	14b
1224L	21	15a
1225R	21	15b
1225L	21	16a
1226R	21	16b
1226L	21	17a
1227R	21	17b
1227L	21	18a
1228R	21	18b
1228L	21	19a
1229R	21	19b
1229L	21	20a
1230R	21	20b
1230L	21	21a
1231R	21	21b
1231L	21	22a
1232R	21	22b
1232L	21	23a
1233R	21	23b
1233L	21	24a

1234R	21	24b
1234L	21	25a
1235R	21	25b
1235L	21	26a
1236R	21	26b
1236L	21	27a
1237R	21	27b
1237L	21	28a
1238R	21	28b
1238L	21	29a
1239R	21	29b
1239L	21	30a
1240R	21	30b
1240L	21	31a
1241R	21	31b
1241L	21	32a
1242R	21	32b
1242L	21	33a
1243R	21	33b
1243L	21	34a
1244R	21	34b
1244L	21	35a
1245R	21	35b
1245L	21	36a
1246R	21	36b
1246L	21	37a
1247R	21	37b
1247L	21	38a
1248R	21	38b
1248L	21	39a
1249R	21	39b
1249L	21	40a
1250R	21	40b
1250L	21	41a

1251R	21	41b
1251L	21	42a
1252R	21	42b
1252L	21	43a
1253R	21	43b
1253L	21	44a
1254R	21	44b
1254L	21	45a
1255R	21	45b
1255L	21	46a
1256R	21	46b
1256L	21	47a
1257R	21	47b
1257L	21	48a
1258R	21	48b
1258L	21	49a
1259R	21	49b
1259L	21	50a
1260R	21	50b
1260L	21	51a
1261R	21	51b
1261L	21	52a
1262R	21	52b
1262L	21	53a
1263R	21	53b
1263L	21	54a
1264R	21	54b
1264L	21	55a
1265R	21	55b
1265L	21	56a
1266R	21	56b
1266L	21	57a
1267R	21	57b
1267L	21	58a

1268R	21	58b
1268L	21	59a
1269R	21	59b
1269L	21	60a
1270R	21	60b
1270L	21	61a
1271R	21	61b
1271L	21	62a
1272R	21	62b
1272L	21	63a
1273R	21	63b
1273L	21	64a
1274R	21	64b
1274L	21	65a
1275R	21	65b
1275L	21	66a
1276R	21	66b
1276L	21	67a
1277R	21	67b
1277L	21	68a
1278R	21	68b
1278L	21	69a
1279R	21	69b
1279L	21	70a
1280R	21	70b
1280L	21	71a
1281R	21	71b
1281L	21	73a
1282R	21	
1282L	21	72b
1283R	21	
1283L	22	1a
1284R	22	1b
1284L	22	2a

1285R	22	2b
1285L	22	3a
1286R	22	3b
1286L	22	4a
1287R	22	4b
1287L	22	5a
1288R	22	5b
1288L	22	6a
1289R	22	6b
1289L	22	7a
1290R	22	7b
1290L	22	8a
1291R	22	8b
1291L	22	9a
1292R	22	9b
1292L	22	10a
1293R	22	10b
1293L	22	11a
1294R	22	11b
1294L	22	12a
1295R	22	12b
1295L	22	13a
1296R	22	13b
1296L	22	14a
1297R	22	14b
1297L	22	15a
1298R	22	15b
1298L	22	16a
1299R	22	16b
1299L	22	17a
1300R	22	17b
1300L	22	18a
1301R	22	18b
1301L	22	19a

1302R	22	19b
1302L	22	20a
1303R	22	20b
1303L	22	21a
1304R	22	21b
1304L	22	22a
1305R	22	22b
1305L	22	23a
1306R	22	23b
1306L	22	24a
1307R	22	24b
1307L	22	25a
1308R	22	25b
1308L	22	26a
1309R	22	26b
1309L	22	27a
1310R	22	27b
1310L	22	28a
1311R	22	28b
1311L	22	29a
1312R	22	29b
1312L	22	30a
1313R	22	30b
1313L	22	31a
1314R	22	31b
1314L	22	32a
1315R	22	32b
1315L	22	33a
1316R	22	33b
1316L	22	34a
1317R	22	34b
1317L	22	35a
1318R	22	35b
1318L	22	40a

1319R	22	40b
1319L	22	41a
1320R	22	41b
1320L	22	42a
1321R	22	42b
1321L	22	43a
1322R	22	43b
1322L	22	44a
1323R	22	44b
1323L	22	45a
1324R	22	45b
1324L	22	46a
1325R	22	46b
1325L	22	47a
1326R	22	47b
1326L	22	48a
1327R	22	48b
1327L	22	49a
1328R	22	49b
1328L	22	50a
1329R	22	50b
1329L	22	51a
1330R	22	51b
1330L	22	52a
1331R	22	52b
1331L	22	53a
1332R	22	53b
1332L	22	54a
1333R	22	54b
1333L	22	55a
1334R	22	55b
1334L	22	56a
1335R	22	56b
1335L	22	57a

1336R	22	57b
1336L	22	58a
1337R	22	58b
1337L	22	59a
1338R	22	59b
1338L	22	60a
1339R	22	60b
1339L	22	61a
1340R	22	61b
1340L	22	62a
1341R	22	62b
1341L	22	63a
1342R	22	63b
1342L	22	64a
1343R	22	64b
1343L	22	65a
1344R	22	65b
1344L	22	66a
1345R	22	66b
1345L	22	67a
1346R	22	67b
1346L	22	68a
1347R	22	68b
1347L	22	69a
1348R	22	69b
1348L	22	70a
1349R	22	70b
1349L	22	71a
1350R	22	71b
1350L	22	72a
1351R	22	72b
1351L	22	73a
1352R	22	73b
1352L	22	74a

1353R	22	74b
1353L	22	75a
1354R	22	75b
1354L	22	76a
1355R	22	76b
1355L	22	77a
1356R	22	77b
1356L	22	78a
1357R	22	78b
1357L	22	79a
1358R	22	79b
1358L	22	80a
1359R	22	80b
1359L	22	81a
1360R	22	81b
1360L	22	82a
1361R	22	82b
1361L	22	83a
1362R	22	83b
1362L	22	84a
1363R	22	84b
1363L	22	
1364R	22	
1364L	22	
1365R	23	
1365L	23	
1366R	23	
1366L	23	
1367R	23	
1367L	23	
1368R	23	
1368L	23	
1369R	23	
1369L	23	1a

1370R	23	1b
1370L	23	2a
1371R	23	2b
1371L	23	3a
1372R	23	3b
1372L	23	4a
1373R	23	4b
1373L	23	5a
1374R	23	5b
1374L	23	6a
1375R	23	6b
1375L	23	7a
1375L	23	7b
1375L	23	8a
1376R	23	8b
1376L	23	9a
1377R	23	9b
1377L	23	10a
1378R	23	10b
1378L	23	11a
1379R	23	11b
1379L	23	12a
1380R	23	12b
1380L	23	13a
1381R	23	13b
1381L	23	14a
1382R	23	14b
1382L	23	15a
1383R	23	15b
1383L	23	16a
1384R	23	16b
1384L	23	17a
1385R	23	17b
1385L	23	18a

1386R	23	18b
1386L	23	19a
1387R	23	19b
1387L	23	20a
1388R	23	20b
1388L	23	21a
1389R	23	21b
1389L	23	22a
1390R	23	22b
1390L	23	23a
1391R	23	23b
1391L	23	24a
1392R	23	24b
1392L	23	25a
1393R	23	25b
1393L	23	26a
1394R	23	26b
1394L	23	27a
1395R	23	27b
1395L	23	28a
1396R	23	28b
1396L	23	29a
1397R	23	29b
1397L	23	30a
1398R	23	30b
1398L	23	31a
1399R	23	31b
1399L	23	32a
1400R	23	32b
1400L	23	33a
1401R	23	33b
1401L	23	34a
1402R	23	34b
1402L	23	35a

1403R	23	35b
1403L	23	36a
1404R	23	36b
1404L	23	37a
1405R	23	37b
1405L	23	38a
1406R	23	38b
1406L	23	39a
1407R	23	39b
1407L	23	40a
1408R	23	40b
1408L	23	41a
1409R	23	41b
1409L	23	42a
1410R	23	42b
1410L	23	43a
1411R	23	43b
1411L	23	44a
1412R	23	44b
1412L	23	45a
1413R	23	45b
1413L	23	46a
1414R	23	46b
1414L	23	47a
1415R	23	47b
1415L	23	48a
1416R	23	48b
1416L	23	49a
1417R	23	49b
1417L	23	50a
1418R	23	50b
1418L	23	51a
1419R	23	51b
1419L	23	52a

1420R	23	52b
1420L	23	53a
1421R	23	53b
1421L	23	54a
1422R	23	54b
1422L	23	55a
1423R	23	55b
1423L	23	56a
1424R	23	56b
1424L	23	57a
1425R	23	57b
1425L	23	58a
1426R	23	58b
1426L	23	59a
1427R	23	59b
1427L	23	60a
1428R	23	60b
1428L	23	61a
1429R	23	61b
1429L	23	64a
1430R	23	64b
1430L	23	65a
1431R	23	65b
1431L	23	66a
1432R	23	66b
1432L	23	67a
1433R	23	67b
1433L	23	68a
1434R	23	68b
1434L	23	
1435R	23	
1435L	23	1a
1436R	24	1b
1436L	24	2a

1437R	24	2b
1437L	24	3a
1438R	24	3b
1438L	24	4a
1439R	24	4b
1439L	24	5a
1440R	24	5b
1440L	24	6a
1441R	24	6b
1441L	24	7a
1442R	24	7b
1442L	24	8a
1443R	24	8b
1443L	24	9a
1444R	24	9b
1444L	24	10a
1445R	24	10b
1445L	24	11a
1446R	24	11b
1446L	24	12a
1447R	24	12b
1447L	24	13a
1448R	24	13b
1448L	24	14a
1449R	24	14b
1449L	24	15a
1450R	24	15b
1450L	24	16a
1451R	24	16b
1451L	24	17a
1452R	24	17b
1452L	24	18a
1453R	24	18b
1453L	24	19a

1454R	24	19b
1454L	24	20a
1455R	24	20b
1455L	24	21a
1456R	24	21b
1456L	24	22a
1457R	24	22b
1457L	24	23a
1458R	24	23b
1458L	24	24a
1459R	24	24b
1459L	24	25a
1460R	24	25b
1460L	24	26a
1461R	24	26b
1461L	24	27a
1462R	24	27b
1462L	24	28a
1463R	24	28b
1463L	24	29a
1464R	24	29b
1464L	24	30a
1465R	24	30b
1465L	24	31a
1466R	24	31b
1466L	24	32a
1467R	24	32b
1467L	24	33a
1468R	24	33b
1468L	24	34a
1469R	24	34b
1469L	24	35a
1470R	24	35b
1470L	24	36a

1471R	24	36b
1471L	24	37a
1472R	24	37b
1472L	24	38a
1473R	24	38b
1473L	24	39a
1474R	24	39b
1474L	24	40a
1475R	24	40b
1475L	24	41a
1476R	24	41b
1476L	24	42a
1477R	24	42b
1477L	24	43a
1478R	24	43b
1478L	24	44a
1479R	24	44b
1479L	24	45a
1480R	24	45b
1480L	24	46a
1481R	24	46b
1481L	24	47a
1482R	24	47b
1482L	24	48a
1483R	24	48b
1483L	24	49a
1484R	24	49b
1484L	24	50a
1485R	24	50b
1485L	24	51a
1486R	24	51b
1486L	24	52a
1487R	24	52b
1487L	24	53a

1488R	24	53b
1488L	24	54a
1489R	24	54b
1489L	24	55a
1490R	24	55b
1490L	24	56a
1491R	24	56b
1491L	24	57a
1492R	24	57b
1492L	24	58a
1493R	24	58b
1493L	24	59a
1494R	24	59b
1494L	24	60a
1495R	24	60b
1495L	24	61a
1496R	24	61b
1496L	24	62a
1497R	24	62b
1497L	24	63a
1498R	24	63b
1498L	24	64a
1499R	24	64b
1499L	24	65a
1500R	24	65b
1500L	24	66a
1501R	24	66b
1501L	24	67a
1502R	24	67b
1502L	24	68a
1503R	24	68b
1503L	24	69a
1504R	24	69b
1504L	24	70a

1505R	24	70b
1505L	24	71a
1506R	24	71b
1506L	24	72a
1507R	24	72b
1507L	24	73a
1508R	24	73b
1508L	24	74a
1509R	24	74b
1509L	24	75a
1510R	24	75b
1510L	24	76a
1511R	24	76b
1511L	24	77a
1512R	24	77a
1512L	24	77a
1513R	24	77a
1513L	24	
1514R	24	
1514L	24	

## 第三章 朝鮮銅活字本

近年、新たに発見された版本が次々と紹介されている。例えば、二十四卷系には、朝鮮翻刻周日校本『三国志傳通俗演義』<sup>170</sup>や、九州大学蔵『李卓吾先生批評三国志』<sup>171</sup>があり、また二十卷簡本系には、同大蔵朱鼎臣刊『考訂按鑑通俗演義三国志傳』<sup>172</sup>がある。これらの版本の発見は、既存の諸問題を解決するための手がかりを提供する一方、新たな問題をもたらしている。朝鮮銅活字本もまたその一例である。

### 第1節 基本状況

朝鮮刊銅活字本『三國志通俗演義』残本一冊は、上下巻に分かれ、現存しているのは上巻36～44、46～56葉、下巻1～47葉の計67葉のみである。下巻巻首に「三國志通俗演義卷之八下」とあることから、現存しているのは第八巻であることがわかる。また、現存部分の内容について、上巻は第147則「龐德擡榷戰關公」の途中から、第150則「呂子明智取荊州」まで、下巻は第151則「關雲長大戰徐晃」から第159「廢獻帝曹丕篡漢」の途中までの部分にあたる。すなわち、第八巻の上は150則で終わり、下は151則から始まる。この事実から逆算すると、銅活字本は一卷にあたり二十則、全十二巻から構成されている、すなわち二十四巻系に属することがわかる。

この本で使われた銅活字は、丙子字と呼ばれ、1516年に朝鮮半島で作られ、そして1592年の豊臣秀吉の朝鮮出兵、いわゆる「壬辰倭乱」で失われた。すなわち、この『三國志通俗演義』は、1516～1592年の間に出版されたものであることは確定できるであろう<sup>173</sup>。また、朝鮮半島の文献を手がかりに、その成立時期の範囲をさらに絞る研究が行われている<sup>174</sup>。

さて、この銅活字本は、どの版本を底本として成立したのか。この問題について、朴在淵(2010)は、「朝鮮活字本的底本是周日校甲本(嘉靖三十一年、一五五二)和嘉靖壬午本(嘉靖元年、一五二二)」、「本人認為、它是以周日校甲本為底本、參照嘉靖壬午本作了進一步校勘的版本」<sup>175</sup>と論じている。

<sup>170</sup> 影印本には、朴在淵・金敏智校注『新刊校正古本大字音釋三国志傳通俗演義』(学古房、2008年)がある。周日校朝鮮本に関する研究には、劉世徳(2002)、中川諭(2011b)、同氏(2012)、上原究一(2011)などがある。

<sup>171</sup> 中川諭(2013b)、及び同氏(2016)参照。

<sup>172</sup> 中川諭(2013b)、程國賦・鄭子龍(2019)、周文業(2019)参照。

<sup>173</sup> 『三國志通俗演義』(銅活字本)提要(前掲上海古籍出版社影印本所収)を参照。

<sup>174</sup> 『朝鮮王朝実録』によると、1569年、奇大昇が宣宗に対して、「三國志衍義」などの書物は人心を乱すものである、という旨の進言があった。ここでの「三國志衍義」はすなわち朝鮮銅活字本であるか、また奇大昇の進言によって朝鮮銅活字本の成立時期を推定できるか、という問題について、朴在淵(2010)、劉世徳・夏薇(2011)、金文京(2012)などの論考があったが、いずれも定説に至っていない。

<sup>175</sup> ちなみに、朴氏は周日校甲本に見られる「嘉靖壬子序」を根拠に、周日校甲本の成立時期を嘉靖壬子(三十一年、1552)としているらしいが、この序文ははたして嘉靖壬子年の作であるかどうかという問題が定かでない以上、朴氏の判断には従い難い。

一方、劉世徳・夏薇(2011)は、「我們認為、朝鮮銅活字本的底本既不是嘉靖壬午本、也不是周日校甲本、而可能是一個和嘉靖壬午本・周日校甲本屬同一系統、大約和嘉靖壬午本・周日校甲本同時或更早的某個版本」と反論している。

また、金文京(2012)も、「銅活字本『三国志通俗演義』残卷は、その分巻形式、また嘉靖本系統と福建本系統の双方にまたがる文字の異同など、従来知られる『三国志演義』にはない特徴がある。しかもその底本は、現存最古のテキストである嘉靖本(一五一二)より早い可能性が高く、『三国志演義』のテキストの系統と形成を研究するうえで貴重な資料である」と、朴氏と異なる説を提起している。

以上の説は、結論が分かれているものの、共通している部分もある。すなわち、朝鮮銅活字本は周朝本、嘉靖本と同じ系統、いわゆる「二十四巻系」に属していること、そして、朝鮮銅活字本は、周朝本に校勘を施された版本であれ、他のまだ知られていない版本の翻刻であれ、少なくとも、周朝本あるいは嘉靖本をそのまま覆刻したものではないこと、という二点である。

この二点については、ほぼ疑う余地がないと考えられる。しかし、周朝本、嘉靖本と同じ系統、つまり二十四巻系には、他にもいくつかの版本が存在している。現存の版本のみを取り上げても、周日校刊本には複数の版本が存在しており、その他には夏振宇本と夷白堂本、更にこれら諸本の後継本である百二十回系諸本(複数種類の李卓吾本、及び李漁本・鐘伯敬本・毛宗崗本など)がある。朝鮮銅活字本は、二十四巻系の他の版本とはどのような関係にあるのか。また、朝鮮銅活字本は、これらの版本を底本として成立した可能性はあるのか——これが本研究で注目したい主な問題点である。

そこで、本研究では、前章と同じく、誤り混入の経緯を手がかりに版本関係を推定する、という方法論を試み、この問題を解決の糸口を探りたい。

## 第2節 朝鮮銅活字本の誤りの全体像

ここで、現存の朝鮮銅活字本残本の全文を点検し、そこに混入されている誤字・脱字・脱文・衍字・衍文をすべて取り出す<sup>176</sup>。さらに、これらの誤りは他の諸本に存在しているか否かを確認する。比較の対象に、二十四巻系の嘉靖本・周朝本・周蓬本・夏振宇本・夷白堂本・李卓吾本<sup>177</sup>を選び、さらに参考として、「二十巻繁本系」の葉逢春本と、「二十巻簡本系」の劉龍田本をも比較の対象とする。以上の点検・比較の結果は付表に示す。

点検によって、朝鮮銅活字本の現存部分から、33箇所(33箇所)の誤りを発見した。これらの誤りと諸本のテキストとの比較結果を統計し、下の表に示す。

<sup>176</sup> 周知の通り、『三国志演義』には、通仮字・異体字・俗字などが多く使用されている。これらの字と誤字との境目が曖昧なものであるため、誤字であるかどうかを判断しにくい場合もある。「正誤表」を作成する際には、諸橋轍次著『大漢和辞典』(大修館書店、1960年)、『漢語大詞典』(電子アプリ版)、曾良・陳敏編著『明清小説俗字』(廣陵書社、2018年)を参考するが、個人的な判断による部分もある。

<sup>177</sup> 中川諭(2016)には、一五種類の「李卓吾本」を取り上げ、これらを「甲本A・甲本B・乙本・丙本・丁本」の五つのグループに分類している。本研究では、「甲本B」に属する蓬左文庫蔵本を参照する。

	同じく誤	誤にして不一致	比較不可
嘉靖本	2	0	0
周日校朝鮮本	9	1	1
周日校蓬左本	9	1	0
夷白堂本	6	0	7
夏振宇本	3	1	0
李卓吾本	2	0	0
葉逢春本	7	0	7
劉龍田本	4	0	19

「比較不可」: 対照本のテキストが改変されたため、同箇所は見当たらない。

「誤にして不一致」: 対照本の同箇所は誤るが、銅活字本とは異なる誤り。

「同じく誤」: 対照本の同箇所は銅活字本と同じように誤る。

まず注目したいのは、「比較不可」、すなわち比較対象のテキストが改変されており、銅活字本と同じ箇所が見つからないケースである。二十四巻系諸本においては、更に簡略化された夷白堂本を除き、「比較不可」の箇所は周朝本に一箇所のみである。一方、二十巻繁本系の葉逢春本は七箇所、二十巻簡本系の劉龍田本は19箇所見られる。この結果は、銅活字本のテキストが二十四巻系に近く、二十巻系とはある程度の距離があることを示している。前述した通り、銅活字本は二十四巻系に属していることはすでに証明されている。今回の点検で明らかになったことは、先行研究の証明結果をさらに確固たるものにする傍証となろう。

しかし、その一方で、解釈に悩む結果も出ている。それは「同じく誤」の項目である。通常の場合には、二つの版本の間に共通する誤字が多ければ多いほど、版本関係が近いはずである。しかしながら、銅活字本には、同系統の嘉靖本や夏振宇本との「同じく誤」の数が少なく、逆に系統が異なる葉逢春本との「同じく誤」の数が二番目に多い七箇所となっている。葉逢春本はそもそも朝鮮銅活字本と系統を異にするテキストである。したがって、テキスト中の文字にも相当の差異があり、両者の関係には隔たりがあるはずである。では、朝鮮銅活字本と葉逢春の間で「同じく誤」の数が多いいのはどのように解釈すればいいのであろうか。

まずは、これらの「同じく誤」の内訳を詳しく見ることにしよう。計七箇所のうち、「四冢寨」を「四家寨」にするもの<sup>178</sup>が五箇所、「鎮國寺」を「鎮國」にするもの<sup>179</sup>が一箇所、「咎犯」を「呉起」にするもの<sup>180</sup>が一箇所含まれている。

それうち、「鎮國」の例については、付表の No.19 で示すとおり、銅活字本と葉逢春だけでは

<sup>178</sup> 付表 No.5~No.9。

<sup>179</sup> 付表 No.19。

<sup>180</sup> 付表 No.29。

く、周朝本・周蓬本・夷白堂本・夏振宇本・李卓吾本も「同じく誤」となっている。この誤りは、系統をまたがった諸本に広く存在しているもので、おそらく相当早い段階、すなわち諸本の共通の祖本にすでに存在していたものと考えられる。

一方、「四家寨」と「呉起」は、二十四巻系諸本にはほとんど見当たらず二十巻系諸本に見られるものである。次節以降、この二つの例について具体的に検証したい。

### 第3節 「四家寨」と「呉起」の検証

まずは、「四家寨」の例を検証したい。場面は、第151則「關雲長大戦徐晃」に、樊城の援軍に馳せ参じた魏の徐晃が、蜀の関平と交戦するシーンである。双方の交戦の場所は、「四家寨」または「四冢寨」と表記されている。この地名は、銅活字本には六回見られる。

ア) 廖化屯兵在四冢<sub>地名</sub>

イ) 平不敢戀戰、殺條大路、逕奔四家寨來。

ウ) 手將曰、四家寨鹿角十重、雖飛鳥亦不能入、何慮賊兵能入？

エ) 於是關平廖化盡起四家寨精兵、奔至第一屯駐扎。

オ) 平同廖化支持不住、棄了第一屯、逕投四家寨來。

カ) 操重賞三軍、到四家寨遍觀徐晃所戰之地。

銅活字本には、「冢」に作るアの一箇所、「家」に作るイ～カの五箇所が見られる。ちなみに、「四冢」に作るアでは「寨」の一文字がなく、イ～カでは「四家寨」で統一している。その原因としては、銅活字本の編者が、「四冢」と「四家寨」とは別の地名であると誤解していた、という可能性が考えられるが、他に手がかりがない限り判断しにくい。しかし、少なくとも、六箇所のうち五箇所が「家」に作るという事実から、銅活字本の編者がこの地名が「四家寨」であると思い込んでいたことが推測される。

この地名はについて、正史『三国志』卷十七「魏書・徐晃傳」には以下の記述がある。

賊圍頭有屯、又別屯四冢。晃揚聲當攻圍頭屯、而密攻四冢。羽見四冢欲壞、自將步騎五千出戰、晃擊之、退走。

この地名は、正確には「四冢寨」であり、「四家寨」は銅活字本の誤りであることがわかる。銅活字本の編者にこのような誤った印象を与えたのは、おそらく銅活字本の底本であり、「家」という誤りは底本の段階ではすでに発生していた可能性が高い。

では、この誤りは他の版本には存在しているのか。銅活字本では「家」に作るイ～カの箇所は、付表の No.5～No.9の部分に当たる。表の示すとおり、二十四巻系諸本は、周朝本に一箇所の

み「家」になっている以外、すべて正しい「冢」になっている。一方葉逢で春本は5箇所全て誤りの「家」になっており、劉龍田本では一箇所が「比較不可」、四箇所が誤った「家」となっている。

すなわち、二十四卷系は正しい「冢」、二十卷系は誤りの「家」、という傾向が見られる。したがって、少なくともこのケースにおいては、二十四卷系に属している朝鮮銅活字本には、二十卷系の特徴を持つ誤字が見られる。

続いて、「呉起」の例を検証したい。場面は、第158則「漢中王怒殺劉封」に、関羽の死後、劉備のもとを離れ、魏へ亡命する孟達が劉備に送った書状の文句である。まずは銅活字本のテキストを示す。

臣聞、范蠡識微、浮於五湖、呉起謝罪、逡巡於河上。夫際會之間、請命乞身、何則。欲潔去就之分也<sup>181</sup>。

この手紙は実在のものである。正史『三国志』卷四十「蜀書・劉封傳」の裴松之注にはその全文が掲載されている。同じ部分を左に抄録する。

臣聞、范蠡識微、浮於五湖、咎犯謝罪、逡巡於河上。夫際會之間、請命乞身、何則。欲潔去就之分也。

正史によると、孟達は「咎犯」の典故使っていたはずであるが、『三国志演義』銅活字本では「呉起」となっている。もちろん、『三国志演義』は小説である以上、必ずしも正史の文章を忠実に引用する必要がない。おそらく、小説の作者あるいは改編者によって、何らかの理由で改変されたと考えられる。では、そもそも「咎犯」と「呉起」とはどのような典故であろうか。

「咎犯」とは人名で、春秋時代の晋の文公に仕えた狐偃のことを指す。『史記』卷三九「晋世家」では「狐偃咎犯、文公舅也」と記されており、文公の舅父(母方のおじ)に当たる。「咎犯謝罪」と「河上」に因んだ典故は、同じく『史記』卷三九「晋世家」に見られる。

文公元年春、秦送重耳至河。咎犯曰、「臣從君周旋天下、過亦多矣。臣猶知之、況於君乎。請從此去矣」。重耳曰、「若反國、所不與子犯共者、河伯視之」。乃投璧河中、以與子犯盟。

文公は長い亡命の旅を終え、やっと国へ帰れるようになった。そこで、狐偃は文公に、自身が流浪の途中に犯した過ちに対する憂慮を述べ、離れようとしていたが、文公はその罪を許し、狐

---

<sup>181</sup> 影印本 120 頁、第二行～第三行。適宜に標点と傍線を入れる。

偃を引き止めた。「咎犯謝罪、逡巡於河上」は、前の句の「范蠡」の典故と同じく、主君が成功した暁に、尽力してきた臣下は自身の過ちを省察し、自ら去るべきという意味を表している。孟達は、長い間劉備に仕え、劉備を漢中王の座に押し上げた功労者の一人であったが、関羽の死によって劉備の不信を買い、身を守るためにやむを得ず亡命の道を選んだ。「咎犯」の典故は、言い訳であれ、本音であれ、このときの孟達の心情を表すにはふさわしい典故である。

一方、「呉起」「河上」に因んだ典故を調べると、以下の二つが見られる。

A)『史記』卷六五「孫子呉起列傳」

魏文侯既卒、起事其子武侯。武侯浮西河而下、中流、顧而謂呉起曰、「美哉乎山河之固、此魏國之寶也」。起對曰、「在德不在險。昔三苗氏左洞庭、右彭蠡、德義不修、禹滅之。夏桀之居、左河濟、右泰華、伊闕在其南、羊腸在其北、修政不仁、湯放之。殷紂之國、左孟門、右太行、常山在其北、大河經其南、修政不德、武王殺之。由此觀之、在德不在險。若君不修德、舟中之人盡為敵國也」。武侯曰、「善」。

B)『呂氏春秋』卷第一「長見」

呉起治西河之外、王錯譖之于魏武侯、武侯使人召之。呉起至於岸門、止車而往西河、泣數行而下。其僕謂呉起曰、「竊觀公之意、視釋天下若釋躡。今去西河而泣、何也」。呉起振泣而應之曰、「子不識。君知我而使我、畢能西河可以王。今君聽讒人之議、而不知我、西河之為秦取不久矣、魏從此削矣」。呉起果去魏入楚。有間、西河畢入秦、秦日益大。此呉起之所先見而泣也。

呉起が讒言によって魏の武侯に疑われ、治めていた西河を離れる前に、涙を流し、魏の弱体化を予言した。ちなみに、この故事は、『韓非子』では「呉起泣於岸門、痛西河之為秦、卒枝解於楚」<sup>182</sup>と、『三国志』卷四六「孫破虜討逆傳」の裴松之注では「大勛垂捷而軍糧不繼、此呉起所以歎泣於西河、樂毅所以遺恨於垂成也」と、広く引用されている。

では、「呉起謝罪、逡巡於河上」は、どの典故を用いたものであろうか。ここでは、孟達の手紙から「謝罪」「逡巡」「際會之間」「請命乞身」の四つのキーワードを抽出し、それぞれの典故との一致度を分析する。また、「咎犯」の典故をも併記する。

	呉起 A	呉起 B	咎犯
謝罪	×	△	○
逡巡	×	○	○
河上	○	○	○

<sup>182</sup>王先慎撰・鐘哲点校『韓非子集解』卷第一「難言第三」(中華書局、1998年、23頁)。本文のみ引用。

際會之間	○	×	○
請命乞身	×	○	○

Aは、呉起が魏の武侯に信頼されていた時期の出来事であるため、「際會之間」であるが、「謝罪」「逡巡」「請命乞身」には当てはまらない。Bは、武侯に疑われた呉起が亡命する前の場面であるため、「逡巡」「請命乞身」に当てはまるが、「際會之間」ではない。また、ここにおいて、呉起は魏の国に対して遺憾を抱いていたことには違いないが、誰かに「謝罪」する記述はない。

一方、正史通りの「咎犯」の典故について、場面は、重耳が国に帰って国君になる直前にあり、狐偃に対してはまさに「際會之間」である。狐偃は、黄河の岸で「逡巡」し、自身が流浪の旅に犯した罪を重耳に「謝罪」し、「請命乞身」をした。すなわち、「咎犯」の典故はすべてのキーワードに当てはまり、二つの「呉起」の典故は、いずれも当てはまらない部分がある。そのため、「呉起」より、やはり正史通りの「咎犯」のほうが文脈につながるものであり、小説化の段階でも、「咎犯」をわざわざ「呉起」に改変する必要は特に感じられない。

しかし、呉起は、魏の文侯・武侯に仕え、魏のために尽力したが、やがて主君に疑われて亡命をせざるを得なかった。その境遇は孟達とよく似ていた。『三国志演義』の編者<sup>183</sup>は、呉起と孟達の相似性を念頭に、正史『三国志』を参照せずに、「呉起」こそが正しい典故であると誤解した、という可能性が考えられる。

「咎犯」から「呉起」へと改変された原因はどうであれ、「咎犯」が正史通りの記述であり、「呉起」より文脈が自然であることは確実である。その意味では、「呉起」は誤りであると判断してもよいのであろう。

「呉起」は誤りであるという点を確認したうえで、比較諸本のテキストを見ることとしよう。付表No.29は「呉起」に関する諸本の比較結果である。夷白堂本と劉龍田本では孟達の手紙が省略されているため、「比較不可」となっている。それ以外、二十四卷系では正史と一致する「咎犯」、葉逢春本では「呉起」となっている。すなわち、この箇所において、銅活字本のテキストには系統が異なる葉逢春本と同じ誤りが見られる。

以上、銅活字本に見られる「四家寨」と「呉起」の二種類、計六箇所の誤りを分析した。その結果、これらの誤りは銅活字本と同系統の二十四卷系諸本には見られなく、かえって系統を異にする葉逢春本で見られる<sup>184</sup>。この現象は、銅活字本の成立過程を推測するための手がかりとなる。

#### 第4節 銅活字本の成立過程

前述したとおり、二十四卷系の属する銅活字本には、二十卷系の特徴を持つ誤りが6箇所存

<sup>183</sup> 「咎犯」を「呉起」へ改変したのは、はたして原作者なのか、または後の出版業者なのかは不明である。

<sup>184</sup> この現象については、金(2012)では文字の比較が詳しく行われている。

在している。では、これらの誤りは、銅活字本の成立時に発生したものか、あるいは銅活字本の底本にはすでに存在していたものか。この問題を解決することによって、銅活字本の底本を考察するための手がかりが得られるのであろう。

まずは、誤りの発生が銅活字本の成立過程にある、という可能性を分析したい。それはすなわち、銅活字本は現存の二十四卷系諸本に近いテキストを持つ版本を底本にして成立した。前述した六箇所誤りは、底本には存在しておらず、銅活字本の編者が何らかの理由で、もともと正しいテキストを誤ったものにした。また、「四家寨」は複数回出現しているものであり、「呉起」は典故に関わる固有名詞であるため、これらの誤りの発生は偶発的なものとは考えにくく、おそらく、銅活字本の編者が二十四卷系の版本を底本にしなが、葉逢春本に近い版本を参照して文字を改変したと考えられる。

しかし、この解釈はあまりにも不自然なものである。そもそも、『三国志演義』は娯楽を目的とする通俗文学作品であり、知識人層に特に重視されていなかったはずである。朝鮮では、儒学者の奇大昇が『三国志演義』を荒唐無稽で学問を害する書物であると酷評していることは、先行研究によって広く討論されている。このような書物に、わざわざ複数のテキストを参照して校勘作業を行う必要があったのであろうか。

本研究の冒頭で紹介したとおり、朴(2010)は、銅活字本は周朝本を底本に、嘉靖本を参照して成立したものであるとしている。この説に対して、劉・夏(2011)は、

我們認為、這種可能性是不大的。那時的出版者印書的主要目的是為了牟利。對他們來說，最簡便的翻印辦法便是照著葫蘆畫瓢。時間、精力、興趣、成本，在限制著他們的思想和行為。他們不可能費九牛二虎之力、用兩個不同的底本進行校勘、來出版一部暢銷的小說。《三國志演義》朝鮮翻刻本以周日校刊本甲本為底本正是一個有普遍意義的事例。

としている。また、金文京(2012)も、

次に活字本の文字は、これも朴在淵氏が指摘されたように、周日校甲本(その朝鮮翻刻本)と概ね一致するが、詳しく比較すると、嘉靖本や周日校甲本とは異なり、かえって福建系統の葉逢春本と一致する場合もあり、きわめて複雑である。ただし葉逢春本と一致する部分は、みな内容には関係のない些細な文字であって、活字本が葉逢春本を参照して校訂したとは考えられない。当時の朝鮮に葉逢春本など福建系統のテキストがあったかどうか不明である<sup>185</sup>。

と述べ、銅活字本の編者が葉逢春本を参照した可能性を否定している。先行研究の指摘して

---

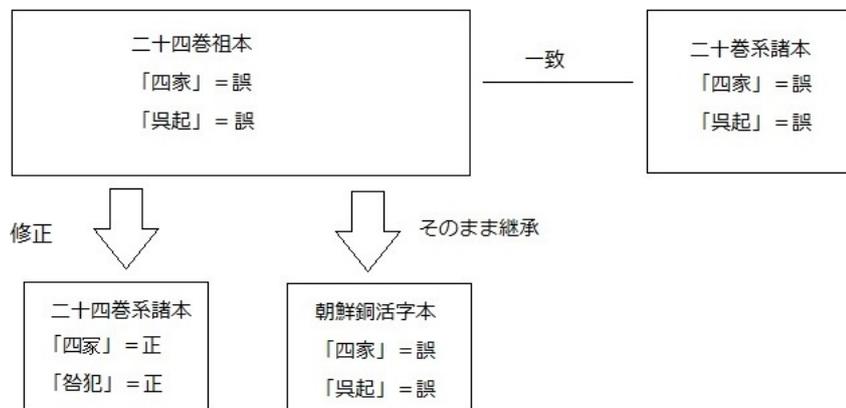
<sup>185</sup> ちなみに、ここでの「福建系統」は、福建で出版された諸本のことであり、おおむね二十卷系に相当する。

いるとおり、当時の出版業者にとって、わざわざ労力を費やして、ストーリーとの関係性が低い些細な箇所に対して校勘を行う必要性は感じられない。それに加え、本研究で問題とした六箇所はそもそも誤りであり、銅活字本の編者がわざわざ他のテキストを参照し、正確だった文字を誤ったものにしたとは、なおさら考えられない。したがって、この六箇所の誤りが銅活字本の成立時に発生したものである可能性は低いと考えられる。

では、もう一つの解釈、すなわち、六箇所の誤りは銅活字本の底本にも存在している。この底本は、現存の二十四巻系諸本より、葉逢春本を代表とする二十巻系に近いテキストを持っていると考えられる。したがって、銅活字本の底本は二十四巻系と二十巻系の間段階の性質を持つものであり、現存諸本より、二十四巻系の祖本に近いテキストを持つ版本である可能性がある。

そして、六箇所の誤りは、二十四巻系の祖本にも存在していた。それをそのまま継承したのは銅活字本であり、編者が誤りに気が付き、修正したのは銅活字本以外の二十四巻系諸本である。この解釈は、前述の複数底本説の問題点を解消し、銅活字本に見られる二十巻系の特徴を矛盾なく説明することができる。

以上の検証を通して、銅活字本の成立過程について、本研究において導き出せる、最も蓋然性の高い考え方は以下ようになる。



以上、本章では、『三国志演義』朝鮮銅活字本に見られる誤りを検証し、二十四巻系に属する銅活字本には二十巻系の特徴を持つ誤りが存在していることを指摘した。その代表的な例として、「四家寨」と「呉起」の二種類、計六箇所の誤りを手がかりに、銅活字本の底本及びその成立過程について仮説を提起した。

銅活字本の底本は、嘉靖本・周日校諸本・夏振宇本・夷白堂本・李卓吾本のいずれでもなく、

おそらく上記諸本よりもっと古く、二十四卷系祖本に近い版本である可能性が高い。この仮設は、前掲劉・夏(2011)の判断に一致する。

以上の点は、銅活字本が二十四卷系に属しながら、自ら一つの独立した分枝となっている、という可能性を強く示唆している。また、銅活字本の底本は、現存二十四卷系諸本のいずれよりも古いものであり、遅くでも万暦中期以前にはすでに朝鮮半島に伝わり、翻印されていた。そうすると、『三国志演義』二十四卷の系譜図は今までの推測より更に複雑なものとなるかもしれない。この意味では、朝鮮銅活字本は『三国志演義』版本研究の新たな地平を開くものであり、替えがたい重要な価値を持っていると考えられる。

付表 朝鮮銅活字本正誤表

「頁」は、上海古籍出版社影印本のページ数を示す。

朝鮮銅活字本の誤りを「誤」として記し、他の版本を参照し、最も意味が通ると考えられるテキストを「正」として記す。また、「正」を決めることが難しい場合、「？」で記入する。

○＝「同じく誤」 △＝「誤にして不一致」 ×＝「比較不可」

No.	則	則題	頁	行	誤	正	嘉	朝	丙	夷	夏	李	葉	劉
1	147	龐惠擡檣戰關公	1	1	起	超		○	○	○	○	○		
2	148	關雲長水滄七軍	15	4	般	船							×	×
3	150	呂子明智取荊州	33	8	丞	承		○	○	×			×	
4			41	2	說	？	○	○	○	○			×	×
5	151	關雲長大戰徐晃	47	2	家	冢							○	○
6			47	8	家	冢							○	○
7			47	10	家	冢							○	×
8			48	4	家	冢							○	○
9			52	7	家	冢		○					○	○
10	152	關雲長夜走麥城	56	2	欄	攔							×	×
11	153	玉泉山關公顯聖	67	6	出	山山								
12			67	7	衆	舉		△去						×
13			67	10	皆	背								
14			68	1	弓末	引諸								×
15			68	3	末	棄								
16			71	3	末入	夢見								
17			71	6	夜	麥								×
18			71	9	泥	汜								×
19			71	9	鎮國□	鎮國寺		○	○	○	○	○	○	
20			72	6	日	是			○	○				×
21			73	8	折	拆		○		×	○			×
22	154	漢中王痛哭關公	80	1	禁	桀	○	○	○	×	△兇		×	×
23	155	曹操殺神醫華佗	91	5	華佗	周泰								
24			96	2	神	身				×			×	×
25	156	魏太子曹丕秉政	99	10	全	金								

No.	則	則題	頁	行	誤	正	嘉	朝	丙	夷	夏	李	葉	劉
26			102	2	畫	畫			△書	×				×
27			106	5	變	奕		○	○	×				×
28	157	曹子建七步成章	112	8	上	下								×
29	158	漢中王怒殺劉封	120	2	吳起	咎犯				×			○	×
30			121	10	漢中王□殺臣	要/欲		○	○	○				×
31			121	11	來	未								×
32			125	1	忘	亡		×	○	○				
33			125	1	陞	陞							×	×

## 第四章 いわゆる嘉靖壬午本の成立時期に関する疑問点

一般的に「嘉靖壬午本」「嘉靖本」<sup>186</sup>と称されている版本について、鄭振鐸(1934)以来、嘉靖元年(1522)に成立したものと見なされてきた。現在に至って、嘉靖元年成立説を覆すほどの論証はないが、『演義』版本の研究の発展につれ、再検討の余地があると考えられる。

嘉靖元年成立説の主な根拠は、嘉靖本の巻首に収録されている「嘉靖壬午(元年、1522)孟夏 関中修髯子書於居易草亭」との落款がある序文のみである。しかし、周知の通り、周日校諸本及び夏振宇本にも、同じ序文が収録されており、落款は「嘉靖壬午」ではなく「嘉靖壬子」(三十一年、1552)となっている。すなわち、この序文は果たして1522年のものか、または1552年のものかわからない以上、「嘉靖壬午」という年号は論拠として成立しにくい。

鄭振鐸(1934)は、嘉靖本は『演義』諸本の総祖本と説き、広く受け入れられていたため、周・夏諸本の編者が嘉靖本を翻刻する際、「壬午」を誤って「壬子」にしたと一般的に認識されてきた。しかし、20世紀90年代以降、『演義』版本の研究の発展につれ、前述魏安《1996》、中川論《1998》を始めとする諸論考によって、嘉靖本の総祖本としての位置づけは見直され、周・夏諸本と並行関係に認識されるようになってきている。したがって、「壬子」は、必ずしも「壬午」の誤りではないと考えられ、どちらが正しいかという問題についても再考の余地が生じている<sup>187</sup>。

嘉靖壬午序を除けば、嘉靖元年成立説は成立しにくくなる。また、その説を支持しない証拠がいくつか見られる。本章では、この点について、いくつかの疑問点を呈示し、「万曆以降説」という仮説を提起する。

### 第1節 嘉靖本の独自修正

嘉靖本には、ほかの二十四卷系諸本に見られない特徴がいくつか確認され、独立した版本であることは、魏安《1996》によってすでに指摘されている。本節では、魏氏の検証に基づき、嘉靖本の編者がほかの諸本に見られる誤りに対する修正、または修正しきれない痕跡をいくつか指摘し、嘉靖本のテキストが諸本に遅れる可能性を提示する。

#### 【例4-1】第16則 鳳儀亭布戲貂蟬

呂布は、董卓の不在を機に、すでに董卓の妾となっていた貂蟬に会う。そこで、貂蟬は王允の仕掛けた計略に従い、呂布の心を動揺させる。

<sup>186</sup> 本研究は、在来の嘉靖元年成立説に疑問を呈するもので、本来であれば「嘉靖」の年号を使うべきではない。しかし、長きに渡って、「嘉靖本」「嘉靖壬午本」「嘉靖壬午序本」などの呼称は広く浸透しており、それを除いては、この版本の特徴を鮮明に反映できる呼称はない。本研究では、混乱を回避するため、最も広く使われている「嘉靖本」を採る。ただし、この呼称を採用しても、嘉靖元年成立説に支持するものではない。

<sup>187</sup> 例えば、井口千雪《2016》は、「周日校本・夏振宇本が嘉靖壬午序本から修髯子序を剽窃した可能性もあれば、嘉靖壬午序本が周日校本・夏振宇本から序を剽窃した可能性もある。現存しない版本に付されていたものを、嘉靖壬午序本・周日校本・夏振宇本それぞれが剽窃した可能性も考えられる。修髯子序の問題と、現存の嘉靖壬午序本の刊行者、刊行年、刊行経緯は、やはり別に考える必要がある」としている(12頁)。

嘉	今見將軍只可表妾誠心
朝	○×○○××○○○○
蓬	○×○○××○○○○
夏	○幸○○至此妾表○○
夷	○×○○××○○○○

周日校小系統に属する周朝本・周蓬本・夷白堂本は、「今將軍表妾誠心」(今、將軍さま、わたくしの真心をお表してください)に統一している。しかし、この一句の意味はよくわからない。そもそもこの場面は、貂蟬が呂布に対して(本物かはさておき)恋心を打ち明けるはずなのに、主語が「將軍」=呂布となったため、誰が誰に真心を表明するかは混乱している。

そこで、嘉靖本は、「見」と「只可」を補い、「今見將軍、只可表妾誠心」(今將軍さまに会って、わたくしの真心を表さなければなりません)とすることで、主語を貂蟬に統一し、違和感を解消した。一方、夏振宇本は、「幸」と「至此」を補い、「表妾」を「妾表」にし、「今幸將軍至此、妾表誠心」(今、幸いに將軍さまがいらっしゃいました。わたくしは真心を表します)と、前半の主語を呂布に、後半の主語を貂蟬にした。

嘉靖本と夏振宇本の編者は、いずれも修正に成功したのであるが、それぞれの理解の方向性は根本的に異なっている。したがって、この一句においては、周日校小系統の誤ったテキストに対し、嘉靖本と夏振宇本は各自に修正を施したと考えられる。すなわち、少なくともこの例においては、嘉靖本と夏振宇本のテキストは周日校小系統に遅れると推定される。

#### 【例4-2】第31則 呂奉先轅門射戟

呂布は、袁術と姻戚を結ぼうとするが、陳珪はそれを阻止すべく、呂布に進言する。

術來求親、其中欲公女為質、隨後便來取玄德首級、未必來求借錢糧、或求協助。公必允之。早晚造反、公乃反賊親屬也。

陳珪が説く理由は以下のようなものである。姻戚を結べば、袁術は必ず呂布の娘を人質とし、呂布を下手に動けないようにし、呂布の盟友である劉備を攻めに来る。そのときになると、袁術が呂布に物資や援助を求めたら、呂布は応じざるを得なくなる。後に袁術は必ず漢王朝に対して反旗を翻す。その時になると、呂布は逆賊の親戚となり、諸侯の輿蹙を買うこととなる。

その論理で考えると、「未必來求借錢糧」との一句は理解しにくい。袁術が劉備を攻めに来たら、「必ずしも物資や援助を求めない」としたら、呂布が「応じなければならない」内容は何であろうか。むしろ、「必來求借錢糧、或求協助」にしなければ、この文章は理解できない。以上の理由で、「未」は衍字であると判定できる<sup>188</sup>。

<sup>188</sup> ちなみに、毛宗崗本は、「今忽來求親、其意蓋欲以公女為質、隨後就來攻玄德而取小沛。小沛亡、徐州危

この事実を確認した上で、二十四卷系諸本を比較する。

嘉	否必來求借錢糧或求協助
朝	未○○○○○○○○○○
蓬	未○○○○○○○○○○
夏	未○○○○○○○○○○
夷	未○○○○○○○○○○

嘉靖本を除く諸本のいずれにも、衍字の「未」が含まれている。すなわち、この衍字は、二十四卷系の祖本に存在しており、諸本に忠実に継承されている。一方、嘉靖本では、「否、必來求借錢糧、或求協助」にしている。この一句は、意味としてはなんとなく成立するものの、語感の面では非常に不自然で読みにくい。嘉靖本の編者は、強引に「未」を「否」に書き換え、修正を試みたが、その修正は不十分で、違和感が残されている。

正確かどうかに関わらず、「未」は本来の文字で、「否」は嘉靖本独自の修正である。この例は、嘉靖本のテキストが諸本に遅れることを示している。

【例4-3】第66則 郭嘉遺計定遼東

袁紹の甥である高幹は、曹操に敗れ、匈奴に出奔するが追いつかれ、劉表のもとへ向かう途中、地方役人に殺される。

嘉	行至路上 被都尉王琰殺之
朝	○○上路 <sub>地名</sub> ○○○○○○○○
蓬	○○上潞 <sub>地名</sub> ○○○○○○○○
夏	○○上潞 <sub>地名</sub> ○○○○○○○○
夷	○○上潞 ○○○○○○○○

ここで、二十卷繁本系の余象斗本と二十卷簡本系の朱鼎臣本のテキストを併記する。

余	○○上落○○○○○○○○
朱	○○上落○○○○○○○○

史実によると、高幹が殺された地は「上洛」であり<sup>189</sup>、「上路」「上潞」「上落」はみな「上洛」の誤りであると考えられる。そこで、嘉靖本では「路上」に修正されている。筆者の調べる限り、『演義』諸本においては、「路上」に作るのは嘉靖本のみであり、おそらく独自の修正であろう。したがって、この例においては、嘉靖本のテキストは諸本に遅れると考えられる。

矣。且彼或來借糧、或來借兵。公若應之、是疲於奔命、而又結怨於人。若其不允、是棄親而啟兵端也。況聞袁術有稱帝之意、是造反也。彼若造反、則公乃反賊親屬矣。得無為天下所不容乎」と、大幅に内容を増やしたが、意味としてはやはり「必來求借錢糧、或求協助」に一致している。すなわち、毛宗崗本も「未」が衍字であると判断していたと推測される。

<sup>189</sup> 『三国志』卷六「魏書袁紹伝」：「十一年、太祖征幹。幹乃留其將夏昭、鄧升守城、自詣匈奴單于求救、不得、獨與數騎亡、欲南奔荊州、上洛都尉捕斬之」。ちなみに、『後漢書』志第一九「郡国志一」によると、上洛(雒)は京兆尹に属していた。





司馬懿が曹真に知らせたのは、①と②のどちらであろうか。①の場合、蜀軍は五千人で出陣し、四・五百人で帰還した。それはすなわち、魏軍が「殺蜀兵四千五百首級」となる。また、魏軍を指揮した司馬懿が、自身の戦果を曹真に知らせるのも、現実味がある。②の場合、秦良の部下は、大半生きのまま蜀に降したため、蜀兵にとって「殺魏兵四千五百首級」とは事実ではない。また、秦良は曹真の部下で、曹真の命令で進軍したにも関わらず、その消息は却って遠くにいるはずの司馬懿が曹真に知らせる、ということも考えにくい。したがって、司馬懿が曹真に知らせたのは①であり、嘉靖本のテキストが正しいもので、他の諸本は誤りである。

嘉靖本は二十四巻系の総祖本である可能性は、中川諭《1998》・魏安《1996》を始め、本研究を含める検証にすでに否定されている以上、残された解釈は一つである。それはすなわち、誤った祖本を忠実に継承する諸本に対して、嘉靖本が独自に修正した、という解釈である。とすれば、嘉靖本のテキストは、諸本に遅れるものとなる。

## 第2節 関羽信仰をめぐる問題点

嘉靖本の成立時期を探るもう一つの手がかりは、「関羽避諱」という現象である。周知のとおり、関羽信仰は南北朝時代に発端し、南宋に著しい発展を遂げ、明清に頂点に達した<sup>191</sup>。『演義』は、明代中後期に盛んに出版された関羽故事を扱う文学作品の一つとして、作中における関羽に対する避諱現象も時代に影響されていたと考えられる。

劉世徳・夏薇(2011)は、『演義』朝鮮銅活字本を考証する際、第153～155則、すなわち関羽が呉の捕虜となり、殺害されるエピソードにおいて、関羽父子の死、またはその首に関する避諱現象を取り上げ、朝鮮銅活字本の避諱の程度が嘉靖本より低いことを指摘し、朝鮮銅活字本の成立時期は嘉靖本(またはその底本)より古いと主張している。

この研究方法は、朝鮮銅活字本に限らず、『演義』諸本の相互関係の検証に啓発的である。ここでは、劉・夏両氏の研究方法を借り、嘉靖本の成立時期を検証する。

まず、嘉靖本の第153則「玉泉山關公顯聖」、第154則「漢中王痛哭關公」、第155則「曹操殺神醫華佗」において、関羽父子の死、または首に関わる表現を以下に抄録する。

- A) 是歲十月中旬、關公於臨沮并其子關平同時歸神。
- B) 自關公父子歸神之後、坐下赤兔馬被馬忠所獲。
- C) 吳兵在城下將君侯父子刀馬前來招安。
- D) 自關公歸神之後、孫權盡收荊襄之兵、將公父子信息招安各處人民。
- E) 若二處連兵、則東吳有壘卵之危也。不如先遣人將關公父子英靈送與曹操、明教劉備知是操之所使、必痛恨於操也。
- F) 却說關公顯聖追了呂蒙。孫權懼其神威、將英靈恭敬、不敢怠慢、令使星夜送與曹操。

<sup>191</sup> 蔡東洲・文廷海《2001》、胡小偉《2009》参照。

- G) 時操從摩陂班師回洛陽。忽報東吳差使齋關公英靈至。
- H) 操大喜曰、關公已仙、孤無憂也。
- I) 今東吳圖了關公、懼其復讐。故將英靈獻與王上、使備知是王上所使、不去攻吳、却來攻魏。
- J) 王上可將關公英靈、刻以香木之軀、葬以大臣之禮、使人皆知。則劉張必深恨於孫權、而盡力南征矣。
- K) 未及天明、一連數次報說、關公夜走臨沮、為吳將潘璋部將馬忠所困、義不屈節、父子歸神。
- L) 人報東吳恐其報讐、將關公英靈獻與曹操、操以王侯之禮祭葬之。

次に、諸本の同箇所に使われる表現を以下の表に示す。参考には、二十卷系繁本系の葉逢春本と、二十卷系簡本系の劉龍田本も併記する。また、避諱に当たる表現を標記する。

	嘉	周朝	周蓬	夏	夷	朝銅	葉	劉
A①	×	亡	亡	亡	亡	亡	亡	天壽合終
A②	歸神	遇害	遇害	遇害	遇害	遇害	遇害	死
B	歸神	歸神	歸神	歸神	歸神	歸神	歸神	×
C	刀馬	首級	首級	首級	首級	首級	首級	首級
D①	歸神	歸神	歸神	歸神	歸神	歸神	歸天	歸天
D②	信息	信息	信息	信息	信息	信息	首級	首級
E	英靈	首級	首級	首級	首級	首級	首級	首級
F	英靈	公神	公神	公神	公神	公神	首級	首級
G	英靈	首級	首級	首級	首級	英靈	首級	首級
H	仙	仙	仙	仙	仙	仙	亡	死
I	英靈	首級	首級	首級	首級	英靈	首級	首級
J	英靈	英靈	英靈	英靈	英靈	英靈	首	首級
K	歸神	歸神	歸神	歸神	歸神	歸神	皆亡	俱亡
L	英靈	英靈	英靈	英靈	英靈	英靈	首	首級
避諱	14/14	8/14	8/14	8/14	8/14	10/14	2/14	3/14

嘉靖本では、関羽の死またはその首を指す言葉はすべて書き換えられている。この現象は、朝鮮銅活字本には10箇所、他の二十四卷系諸本は8箇所見られる。一方、葉逢春本や劉龍田本には、このような現象は極めて少なく、意識的な避諱というより、むしろ単に言葉の綾という印象を受ける。

『演義』における関羽避諱現象は、関羽信仰の発展に伴うものとすれば、当然ながら、時代が遅れば遅れるほど、関羽避諱がより鮮明になるものである。嘉靖本の編者が関羽の死に関わ

る言葉を極力に避けるのは、関羽を敬う気持ちの表れであろう。

それだけではなく、嘉靖本において、関羽の名を「羽」と呼称する用例は、関羽の初登場以降見当たらないという点は、竹内真彦(2001)によってすでに指摘されている。この点もまた、嘉靖本独自の特徴で、他の諸本はそれに当てはまらない。

すでに述べたように、嘉靖本の編者は、地名などの固有名詞の考証には特に力を入れなかった。しかし、関羽については、細心の注意を払い、個々の単語まで書き換えた。その背景には、そうせざるを得ない理由があったと考えられる。

前掲蔡東洲・文廷海《2001》の検証によると、関羽信仰が大いに発展した時期は、南宋の高宗時代と、明の万暦にある。この二つの時期は、いずれも対外戦争が大いに勃発する時期である。関羽は、南宋朝廷によって「義勇武安王」の称号に封ぜられ、金の侵攻に対して南宋の正統性を示す一環となった。

明代には、朝廷が本格的に関羽の宗教的地位に祭り上げたのは、万暦中後期のことである。淮河の治理を務めた潘季馴は、水害を鎮めたのはみな関羽の加護があったからと万暦帝に上奏し、万暦帝は関羽の称号を「協天護国忠義大帝」とし、初めて「帝」の尊号を与えた<sup>192</sup>。また、万暦四十二年に、更に「三界伏魔大帝、神威神威遠鎮天尊、関聖帝君」という称号が与えられ、「関聖帝君」または「関帝」信仰は本格的に成立した。

また、崇禎時期になると、女真の侵攻や、李自成を始めとする反乱の勃発によって、「伏魔大帝」としての関羽は、再び正統を示すシンボルとなった。一方、やがて明を滅ぼした女真(清)も、関羽を自身の信仰システムに取り入れ、釈迦如来・観音菩薩と並列する立場に祭り上げた<sup>193</sup>。

前節では、嘉靖本には周日校小系統または夏振宇本のテキストをさらに修正した痕跡があることを指摘した。その事実と、関羽避諱の問題をあわせて考えると、嘉靖本は諸本より一段と遅れる時期に成立した可能性が浮かび上がる。

周日校諸本の成立は万暦一〇～二〇年代<sup>194</sup>、夏振宇本の成立は万暦21年以降<sup>195</sup>、夷白堂本の成立は万暦三〇年代頃<sup>196</sup>にあることはすでに論じられている。そうすると、嘉靖本の成立は万暦中期以降となり、ちょうど明代関羽信仰が頂点に達した時期に一致する。

以上、本章では、いわゆる嘉靖本に関するいくつかの疑問点を提示した。嘉靖本には、二十四卷系のテキストを更に書き換えた痕跡が多く見られ、万暦中後期に成立した諸本に遅れる可能性がある。また、典故や歴史考証に疎い嘉靖本の編者は、関羽に関する箇所だけに細心の注意を払って修正したことから考えても、やはり関羽信仰が円熟した万暦後期以降の時代特徴を反映している。そのため、嘉靖本は、周日校諸本・夏振宇本・夷白堂本より遅く、万暦後期以降に成立した可能性があると考えられる。

<sup>192</sup>朝山明彦(2008)には詳しい検証がある。

<sup>193</sup>井上以智為(1941)(1950)参照。

<sup>194</sup>中川諭(2011b)、(2012)参照。

<sup>195</sup>本研究第一章、または拙稿(2017)参照。

<sup>196</sup>中川諭(1995)参照。

## 結論

本研究は、『三国志演義』二十四巻系諸本において、注目されることが比較的少ない「夏振宇本」「夷白堂本」「朝鮮銅活字本」という三つの版本を研究対象とし、これら諸本の版本学上の価値を確認し、二十四巻系諸本の相互関係に関する説を提起した。

版本関係を検証するにあたって、本研究は主にテキスト比較の研究方法を採用。特に、諸本に見られる誤字・脱字・衍字、または典故や引用文の誤用などに注目し、「誤りが生じた経緯」を分析し、それによって諸本の成立の時系列または親縁関係を推定した。

また、本研究の研究対象のうち、夏振宇本と夷白堂本は明刊本でありながら、前者は名古屋市蓬左文庫、後者は慶應義塾大学にのみ所蔵されており、「天下の孤本」である。本研究では、それぞれの旧蔵者および日本における流伝の経緯についても検証を行った。

第一章では、夏振宇本について検証した。名古屋市蓬左文庫蔵夏振宇刊『新刻校正古本大字音釋三國志通俗演義』は、尾張徳川家の旧蔵で、その出版時期について、『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』では、「万曆中」とされているが、それを裏付ける証拠が見られない。一方、夏振宇本の本文には、万曆二十一年(1593)序刊の『事物原始』という書名が見られるため、夏振宇本の成立が1593年以降であることが確認される。

夏振宇本には、「吉家氏蔵」「張府内庫図書」「蓬左文庫」の三つの蔵書印が捺されている。「吉家氏蔵」は、安土桃山時代から江戸時代初期の医者・漢学者である吉田宗恂(1558～1610)及びその一族の蔵書印であり、そのうち特に宗恂本人の蔵書に捺されることが多い。もし夏振宇本が吉田宗恂の旧蔵であれば、その成立は宗恂の没年である1610年(慶長15、万曆38)までと推定できる。これは、『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』の「万曆中」の記述と一致している。一方、「張府内庫図書」は、尾張藩二代目藩主徳川光友(1625～1700)以降の尾張藩主の蔵書印で、「蓬左文庫」は明治維新以降、尾張徳川家蔵書を中心とした図書館である蓬左文庫の蔵書印である。すなわち、夏振宇本は吉田宗恂またはその一族の旧蔵で、江戸時代に尾張徳川家に譲渡され、後に尾張徳川家の蔵書として蓬左文庫に収められることとなったのである。

二十四巻系における夏振宇本の位置づけについては、特に周日校本との関係が多く取り上げられ、周日校本の翻刻説(孫楷第《1982》)、平行説(上田望《1990》、中川諭《1998》)、夏振宇本先行説(魏安《1998》)、周日校甲本の改訂説(中川諭《2013a》)などの説がある。本研究では、夏振宇本に見られる誤字を460箇所統計し、それぞれが生じた経緯を分析し、夏振宇本には、周日校甲本(周朝本)に見られない、別系統である二十巻系の特徴に一致する文字が見られることを指摘した。さらにそれに基づき、夏振宇本は周日校甲本から派生した版本ではなく、周日校甲本より古い版本を底本にして成立した可能性があるという、前述した平行説と夏振宇本先行説を統合した説を提起した。

第二章では、夷白堂本について検証した。慶應義塾大学蔵夷白堂刊『新鐫通俗演義三国志伝』全24巻、現存20巻、10冊に再装丁されている。巻1・3・12・13は現存しておらず、第1冊は巻2と4で、第5冊は巻11と14となっていることから、残本のまま再装丁されたと推測される。また、現存部分についても、激しい損傷や、再装丁時に生じた乱丁などの状況が多く見られる。

夷白堂本の中表紙には、大正5年小野清寄贈と記されている。小野清(1846~1932)は、元仙台藩士で、明治維新後に内務省に勤務し、退職後には歴史資料などの編纂に従事した。小野の伝記に相当するものには、1968年再版の『史料徳川幕府の制度』巻首に付されている、高柳金芳氏による解説があるが、高柳解説には、不明確な記述や、過大表現ないし誤解などの部分が多く見られる。本研究では、幕末・明治時代の資料を整理し、高柳解説に対し補充・修正を行った。

夷白堂本には、二種類の書き込みが見られる。元の文字に対する朱筆での書き換と、他の版本を参照して補入した、夷白堂本には省略された詩である。これらの書き込みの筆跡を、東京都立中央図書館蔵小野清の手紙と比較した結果、小野清によるものである可能性は低いと判断される。また、書き込みの内容を検証すると、大谷大学蔵(神田喜一郎旧蔵)の楊美生本に最も近いが、楊美生本そのものを参照したものではないことが判明される。この事実によって、夷白堂本が小野清に収蔵されるまでに、これらの書き込みはすでになされたものであることが推定される。

夷白堂本の版本学上の位置づけについて、中川論(2011)は、「夷白堂本はやはり周日校乙本・丙本に近い版本であるが、しかしながら周日校刊本を底本としたものではない」と説く。本研究では、誤りを手がかりとして、夷白堂本と嘉靖本・夏振宇本・周日校本(朝鮮本及び丙本)との親縁関係を検証し、中川氏の結論を確認した。また、夷白堂本と周日校諸本との特に近い関係によって、二十四巻系における「周日校小系統」という概念を提起した。

第三章では、朝鮮銅活字本について検証した。韓国個人蔵朝鮮刊銅活字本『三國志通俗演義』残本は、一冊、計67葉のみ現存している。その印刷に使われた「丙子字」は、朝鮮中宗十一年丙子(明正徳十一、1516)に鑄造され、豊臣秀吉朝鮮征伐(明万暦二十、1592)に散逸したものであり、朝鮮銅活字本の成立時期もその間に推定される。また、朝鮮『宣宗実録』には、儒学者の奇大昇の、左今世間に出回っている『三国志』などの書物は一読に値しないとの旨の発言が見られるが、奇大昇が言う『三国志』はすなわちこの銅活字本かどうかはまだ定かではない。

朝鮮銅活字本の版本学上の位置づけについて、朴在淵(2010)は、「它是以周日校甲本為底本，參照嘉靖壬午本作進一步校勘的版本」としているが、劉世徳・夏薇(2011)は、「我們認為，朝鮮銅活字本的底本既不是嘉靖壬午本，也不是周日校甲本，而可能是一個和嘉靖壬

午本、周日校甲本屬同一系統、大約和嘉靖壬午本、周日校甲本同時或更早的某個版本」と反論している。また、金文京(2012)も、「その底本は、現存最古のテキストである嘉靖本(一五一二)より早い可能性が高く、『三国志演義』のテキストの系統と形成を研究するうえで貴重な資料である」と論じている。

本研究では、朝鮮銅活字本に見られる固有名詞や典故の誤用を手がかりに、諸本と比較した上、その誤用が生じた経緯を推定し、それによって朝鮮銅活字本の成立について検証した。その結論として、朝鮮銅活字本の底本は、現存二十四卷系諸本のいずれでもなく、おそらく諸本よりもっと二十四卷系祖本に近い版本である可能性が高く、朝鮮銅活字本は二十四卷系に属しながら、自ら一つの独立した分枝となっていると説いた。

第四章では、嘉靖本の「嘉靖元年成立説」に対して、いくつかの疑問点を提起した。いわゆる「嘉靖壬午本」・「嘉靖本」は、巻首に付されている「嘉靖壬午」と記されている序文を根拠に、嘉靖壬午年(元年、1522)刊と見なされてきた。しかし、周日校本や夏振宇本などにも、同じ内容の序文が存在し、「嘉靖壬子」(31年、1552)としていることは周知の事実である。すなわち、この序文が作られたのは、果たして嘉靖壬午年か壬子年かは断言できない。しかし、現在に至って、嘉靖元年説を覆すほどの論拠は見られないため、疑問を残しつつ嘉靖元年説を採る研究が多い。本研究では、嘉靖元年説を支持しない論拠をいくつか提示した。

嘉靖本には、二十四卷系諸本に共通している誤りを修正した痕跡が多く見られる。これらの誤りは、二十四卷系に限らず、二十卷本にも見られる場合もある。先行研究によって、嘉靖本が二十卷系を含む『演義』諸本の総祖本である可能性が否定されている以上、上述の現象は、誤った祖本を忠実に継承する諸本に対して、嘉靖本が独自に修正したとしか考えられない。したがって、嘉靖本のテキストは、諸本に遅れる可能性が浮かびあがる。

また、劉世徳・夏薇(2011)は、朝鮮銅活字本を検証した際、嘉靖本などに見られる関羽の死またはその首を他の言葉に書き換える現象を指摘し、明代の関羽信仰との関連性を説く。さらに、嘉靖本には関羽のことを「羽」と呼称するケースが極めて少ない現象は、竹内真彦(2001)によって確認されている。しかし、上述の現象は、周日校本・夏振宇本・夷白堂本には見られない。すなわち、嘉靖本に見られる関羽を敬うような言い回しは、後に書き換えられたもので、したがって嘉靖本の文字は周日校本・夏振宇本・夷白堂本より遅れる可能性が認められる。周知の通り、明代において、関羽信仰が飛躍的に発展したのは万暦中後期のことであり、民間にその影響が広く反映されるのは早くても万暦後期または天啓年間になってからのことであろう。関羽の名前、またはその死に関する表現を回避する行為は、むしろこの時期の風潮に一致している。

夏振宇本は、周日校刊本(甲・乙・丙)と同時期か、あるいは遅れて成立した版本であるものの、周日校本から派生したものではなく、むしろより忠実に二十四卷系祖本の特徴を反映してい

ると考えられる。夷白堂本は、現存二十四卷諸本において最も周日校本に近い版本であり、周日校本より遅れて成立したものである。しかし、夷白堂本はやはり周日校本から派生したものではない。朝鮮銅活字本は、厳密に言うと明刊本ではないが、現存諸本のいずれよりも古い版本を底本として成立したと考えられるため、二十四卷系において、最も祖本の内容に近い版本であるかもしれない。嘉靖本については、嘉靖元年成立説を覆せないものの、少なくとも万曆以降に成立した可能性も十分に考えられる。この点は、嘉靖本の位置づけの再考にあたっては新たな突破口となりうる。

以上の検証によって、本研究では、『三国志演義』二十四系諸本に系譜図について、以下の説を提示する。



最後に、次なる課題を以下に述べる。

(1) 四種類の周日校本について、現在では一般的に、「甲本＝朝鮮本→乙本→丙本」と認識されているが、夷白堂本を校勘した際、甲本である周朝本が夷白堂本と一致し、丙本である周蓬本が異なる文となっている例は、極稀であるが確認されている<sup>197</sup>。すなわち、周日校諸本は、一直線の継承関係ではない可能性も考えられる。この問題を究明するは、周日校甲本の原本(中国社会科学院蔵残本)及び乙本(イエール大学蔵本)を視野に入れなければならない。

(2) 本研究は、周日校諸本及び夷白堂本が「周日校小系統」として、二十四卷系の一つの分支となっていることを指摘している。しかし、嘉靖本・夏振宇本・朝鮮銅活字本は分類されていない。一方、先行研究では、二十四卷系の後継型である百二十回系諸本が夏振宇本に近い関係にあること、または嘉靖本が周日校諸本に近い関係にあることがそれぞれ言及されている<sup>198</sup>。二十四卷系には「夏振宇小系統」は存在しているのか、嘉靖本・朝鮮銅活字本はどのように分類されるのか、これらの問題は、二十四卷系を系譜図を究明することにあたっては、重要な意味を持

<sup>197</sup> 例えば、第225則の則題について、周朝本・夷白堂本では正しい「孫琳廢吳主孫亮」に作り、周蓬本は却って嘉靖本と同じく、誤った「孫琳廢吳主孫休」となっている。一方、夏振宇本では「孫琳廢主立孫休」に修正されている。

<sup>198</sup> 上田望(1990)、魏安(1996)など。

つ。

(3) 嘉靖本について、本研究では「万曆以降成立説」という仮説を提起しているが、嘉靖本自体に対する検証がまだ不十分で、仮説の段階にとどまっている。この問題を解決するには、二十四巻系における嘉靖本の位置づけの再検証が必要とされている。

二十四巻系は、『三国志演義』三系統において、印刷の質が最も高く、文章が洗練されており、詩文なども多く引用されている。そのため、書坊の数や出版部数は福建本である二十巻系に及ばないものの、知識人層を始めとする読者に愛読され、明代末期～清代には次第に福建本を圧倒し始めた<sup>199</sup>。明末清初に流行していた李卓吾本や、現在の通行本である毛宗崗本、近年新出の新校諸本は、いずれも二十四巻系のルーツを辿っている。その意味では、二十四巻系は『演義』の代表格であり、その系譜図を解明することは、『演義』版本の研究において、重要な意義を持つ。

---

<sup>199</sup> 金文京《1993》、塗秀虹《2017》参照。

## 参考文献

### 【二十四史】(時代順)

1. [漢]司馬遷 撰 『史記』(中華書局、2013年排印本)。
2. [晋]陳寿 撰、[南朝宋]裴松之 注 『三国志』(中華書局、1982年排印本)。
3. [南朝宋]范曄 撰 『後漢書』(中華書局、1965年排印本)。
4. [清]張廷玉等 撰 『明史』(中華書局、1974年排印本)。

### 【古籍】(時代順)

5. [魏]王弼 注、樓宇烈 校釈 『老子』(中華書局、2008年排印本)。
6. [北魏]酈道元 撰、[清]王先謙 校『水經注』(中華書局、2009年排印本)。
7. [宋]高承 撰、[明]李果 訂 『事物紀原』(中華書局、1985年排印本)。
8. [南宋]陳振孫 撰、徐小蠻、顧美華 点校『直齋書錄解題』(上海古籍出版社、2015年排印本)。
9. [明]徐炬 輯 『新鐫古今事物原始全書』(『四庫全書存目全書』子224所収、莊嚴文化事業有限公司、1995年影印本)
10. [清]紀昀等 編 『欽定四庫全書總目』(中華書局、1997年排印本)。
11. [清]王先慎 編、鐘哲 点校『韓非子集解』(中華書局、1998年排印本)。

### 【目錄・図録】(出版年順)

12. 渋江抽斎・森立之 著 『経籍訪古誌』(日本書誌学会、1935年)。
13. 『京都帝国大学富士川本目録』(京都帝国大学附属図書館、1942年)。
14. 『天理図書館稀書目録』和漢書之部第三(天理図書館、1960年)。
15. 『改訂増補内閣文庫蔵書印譜』(国立公文書館、1969年)。
16. 『改訂内閣文庫漢籍分類目録』(内閣文庫、1971年)。
17. 『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』(名古屋市教育委員会、1975年)。
18. 『改定増補国立国会図書館支部上野図書館所蔵本草関係図書目録』(つかさ書房、1976年)。
19. 『杏雨書屋蔵書目録』(武田科学振興財団、1982年)。
20. 名古屋市蓬左文庫 編 『蓬左文庫図録』(名古屋市教育委員会、1989年)。
21. 『国立国会図書館所蔵古活字版図録』(汲古書院、1989年)。
22. 『お茶の水図書館蔵新修成篋堂文庫善本書目』(お茶の水図書館、1992年)。
23. 渡辺守邦、後藤憲二 編 『日本書誌学大系103-2 増訂新編蔵書印譜(中)』(青裳堂書店、2014年)。

【辞書・事典】(出版年順)

24. 『康熙字典』(吉川弘文館、1905年影印本)。
25. 菊田定郷 編 『仙台人名大辞書』(仙台人名大辞書刊行会、1933年)。
26. 諸橋轍次 著 『大漢和辞典』(大修館書店、1960年)。
27. 『角川日本姓氏歴史人物大辞典4 宮城県姓氏家系大辞典』(角川書店、1994年)。
28. 竹内誠、深井雅海 編 『日本近世人名辞典』(吉川弘文館、2005年)。
29. 秦郁彦 編 『日本近現代人物履歴事典』(東京大学出版会、2013年)。
30. 曾良・陳敏編 著 『明清小説俗字典』(廣陵書社、2018年)。

【小野清関連資料】(出版年順)

31. 小野清 著 『徳川制度史料』(六合館、1927年)
32. 小野清 著 『大阪城誌』(静修書屋蔵版、1899年)。
33. 小野清 著 『天文彙考』(六合館、1925年)。
34. 小野清 著、高柳金芳 校注 『史料徳川幕府の制度』(人物往来社、1968年)。
  
35. 「大槻文彦博士年譜」(『国語と国文学』第5巻第7号、1928年、至文堂)
36. 「大槻博士自伝」(『国語と国文学』第5巻第7号、1928年、至文堂)
37. 登米町史編纂委員会 編 『登米藩史稿』(登米町、1963年)。
38. 大霞会内務省史編集委員会 編 『内務省史』(大霞会、1971年)。
39. 平重道・斎藤鋭雄 編集 『仙台藩史料大成之二 伊達世臣家譜続編』(宝文堂、1978年影印本)。
40. 福沢研究センター 編 『慶應義塾入社帳』(慶應義塾、1986年影印本)。
41. 『内務省人事総覧』(日本図書センター、1990年)。
42. 工藤正三 監修 『奥邃先生資料集』(大空社、1993年)。
43. 『枢密院高等官履歴』(東京大学出版会、1997年影印本)。
44. 林述斎 原編、高柳光寿・岡谷泰四・斎木一馬 編集顧問 『新訂寛政重修諸家譜』(続群書会要完成会、1996年)。
45. 慶應義塾 編『福沢諭吉書簡集』(岩波書店、2001年)。
46. 橋本鉦市 『専門職養成の政策過程—戦後日本の医師数をめぐって—』(学術出版会、2008年)。

【電子資料】

47. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/>
48. 国立国会図書館ウェブサイト <https://rnavi.ndl.go.jp/politics/entry/JGOV-meibo.php>

49. 宮内庁書陵部データベース <https://shoryobu.kunaicho.go.jp/>
50. 周文業 編 『三国演義』版本数字化研究データベース
51. 『漢語大詞典』電子アプリ

【論著】(著者名五十音順)

52. 井上泰山・大木康・金文京・氷上正・古屋昭弘《1989》『花関索伝の研究』(汲古書院)。
53. 井口千雪《2016》『三国志演義成立史の研究』(汲古書院)。
54. 金文京《1993》『三国志演義の世界』(東方書店)。
55. 魏安(A. West)《1996》『三国演義版本考』(上海古籍出版社)。
56. 胡小偉《2009》『關公崇拜溯源』(北嶽文藝出版社)。
57. 蔡東洲・文廷海《2001》『關羽崇拜研究』(巴蜀書社)。
58. 下浦康邦《1999》(『吉田・角倉家の研究』、近畿和算セミナー)。
59. 孫楷第《1982》『中国通俗小説書目(重訂版)』(人民文学出版社)。
60. 塗秀虹《2017》『明代建陽書坊之小説刊刻』(人民出版社)。
61. 中川諭《1998》『『三国志演義』版本の研究』(汲古書院)。
62. 劉世徳《2010》『三國志演義作者與版本考論』(中華書局)。

【論文】(著者名五十音順)

63. 朝山明彦《2008》「明末に於ける關羽の治河顯靈」(『東方宗教』111号)。
64. 井上以智為《1941》「關羽祠廟の由来並に變遷(1)(2)」(『史林』26-1, 2)。
65. 井上以智為《1950》「清朝宮廷薩滿教祠殿に就いて」(『羽田博士頌壽記念東洋史論叢』、東洋史研究会)。
66. 上田望《1990》『『三国志演義』版本試論—通俗小説の流伝に関する一考察—』(『東洋文化』71)。
67. 上原究一《2011》「唐氏世徳堂と周曰校万卷楼仁寿堂の章回小説刊本の覆刻及び後印の事例について」(『中国古典小説研究』第一六号)。
68. 大塚秀高《2014》「白話小説の版面をめぐる二、三のことども」(『集刊東洋学』第111号)
69. 小川環樹《1964》「関索の伝説そのほか」(岩波文庫『三国志』第8冊付録所収)。
70. 金文京《1989》『『花関索伝の研究』解説編』(井上泰山・大木康・金文京・氷上正・古屋昭弘『花関索伝の研究』、汲古書院)。
71. 金文京《2012》「新発見の朝鮮銅活字本『三国志通俗演義』について」(『林田慎之助博士傘壽記念三国志論集』、汲古書院)。
72. 金文京《2020》「慶應義塾大学所藏、明夷白堂刊『三國演義便覽』について」(日本中国学会第七十二回大会、2020年10月11日)。

73. 周紹良〈1967〉「関索考」(『周叔弢先生六十生日記念論文集』、龍門書店、『学林漫録』第二集、1981年所収)。
74. 周文業〈2019〉「日本九州大學藏朱鼎臣本和『三國演義』簡本志傳小系列演化」(中国古典小説研究会2019年度大会、2019年8月29日、於九州大学)。
75. 高倉史人〈1996〉「明治期における大阪府の伝染病——〇年代のコレラの流行を中心に——」(大阪公文書館『大阪あーかいぶす』第19号)。
76. 竹内真彦〈2001〉「『三國志演義』における關羽の呼稱 —『演義』成立をめぐって—」(『日本中国学会報』53)。
77. 陳駿千〈2017〉「關於蓬左文庫藏夏振宇本『三國志演義』——江戸日本的漢籍傳播之一例」(復旦大學日本研究中心『日本研究集林』2017年下半年刊)。
78. 程國賦・鄭子龍〈2019〉「日本九州大學藏『考訂按鑑通俗演義三國志傳』考」(『文献』2019年5月第3期)。
79. 鄭振鐸〈1934〉「三國志演義的演化」(『小説月報』20卷10号、『中国文学論集』(開明書店、1947年)所収)。
80. 中川諭〈1995〉「慶応義塾大学所蔵『新鐫通俗演義三國志伝』について」(『集刊東洋学』第七三号)。
81. 中川諭〈2012〉「周日校刊『三國志演義』の甲本・乙本・丙本」(『林田慎之助博士傘寿記念三國志論集』、汲古書院)。
82. 中川諭〈2011b〉「周日校刊『三國志演義』について」(『東北大学中国語学中国文学論集』第一六号)。
83. 中川諭〈2011a〉「『三國志演義』の夷白堂本と周日校本」(『三國志研究』第6号)。
84. 中川諭〈2013a〉「夏振宇本『三國志傳通俗演義』について」(『三國志研究』第8号)。
85. 中川諭〈2013b〉「關於九州大學所蔵『三國志演義』兩種」(『第十二屆中國古代小説、戲曲文獻暨數字化國際學術研討會論文集』、2013年8月23日、於復旦大學)。
86. 中川諭〈2016〉「『李卓吾先生批評三國志』について」(『三國志研究』第11号)。
87. 朴在淵〈2010〉「關於新發現的朝鮮活字本『三國志通俗演義』」(『南京大學學報(哲學・人文科學・社會科學)』2010年第3期)。
88. 劉世徳〈2002〉「『三國志演義』周日校刊本四種試論」(『文學遺產』2002年第五期、『三國志演義作者與版本考論』(中華書局2010年)所収)。
89. 劉世徳・夏薇〈2011〉「『三國演義』朝鮮銅活字本殘本試論」(『文學遺產』2011年第1期)。
90. 柳存仁〈1976〉「羅貫中講史小説之真偽性質」(香港中文大學『中国文化研究所學報』第8卷第1期、劉世徳編『中国古代小説研究:台湾香港論文選集』上海古籍出版社、1983年所収)。

## 初出一覧

### 第一章 第2～3節、付考、付表1

(中文)「關於蓬左文庫藏夏振宇本『三國志演義』——江戸日本的漢籍傳播之一例」(復旦大學日本研究中心『日本研究集林』2017年下半年刊)。

(日文)「蓬左文庫藏夏振宇本『三國志演義』について」(『中国古典小説研究』第22号、2019年)。

### 第一章 第4節、付表2

(日文)「『三國志演義』の成立史に関する考察～二十四卷系諸本に於ける「夏振宇本」の位置づけをめぐって～」(『関西大学中国文学会紀要』第40号、2019年)。

### 第二章 第2節

(中文)「舊士族小野清生平考」(復旦大學日本研究中心『日本研究集林』2020年下半年刊、掲載予定)。

### 第三章

(日文)「朝鮮銅活字本『三國志演義』の成立について」(『関西大学中国文学会紀要』第42号、2021年、審査中)。